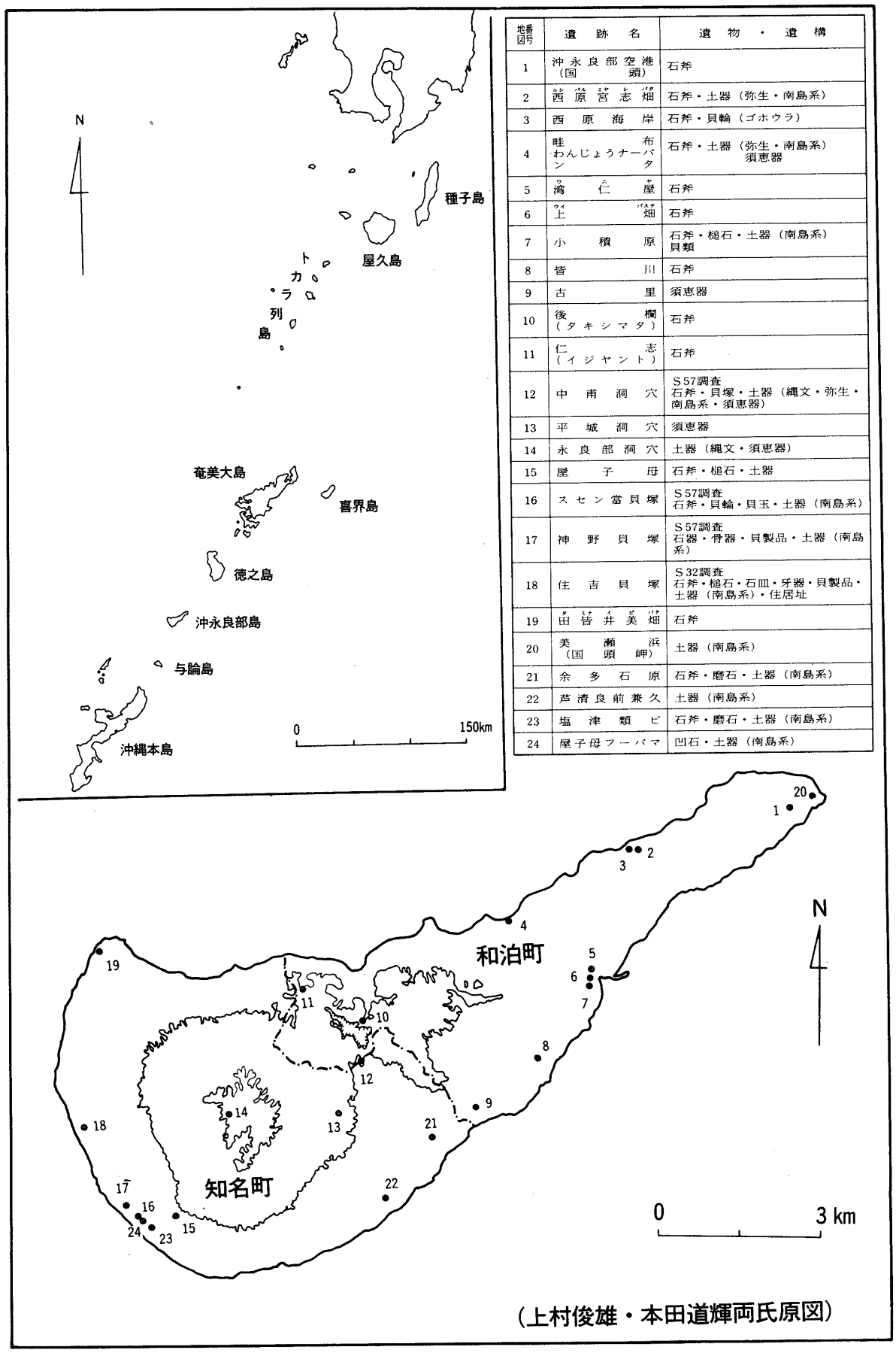


地番図号	遺跡名	遺物・遺構
1	沖永良部空港（国頭）	石斧
2	西原宮志畑	石斧・土器（弥生・南島系）
3	西原海岸	石斧・貝輪（ゴホウラ）
4	畦布（わんじょうナーバンタ）	石斧・土器（弥生・南島系）須恵器
5	湾仁屋	石斧
6	上畑	石斧
7	小積原	石斧・槌石・土器（南島系）貝類
8	皆川	石斧
9	古里	須恵器
10	後欄（タキシマタ）	石斧
11	仁志（イジヤント）	石斧
12	中甫洞穴	S57調査 石斧・貝塚・土器（縄文・弥生・南島系・須恵器）
13	平城洞穴	須恵器
14	永良部洞穴	土器（縄文・須恵器）
15	屋子母	石斧・槌石・土器
16	スセン當貝塚	S57調査 石斧・貝輪・貝玉・土器（南島系）
17	神野貝塚	S57調査 石器・骨器・貝製品・土器（南島系）
18	住吉貝塚	S32調査 石斧・槌石・石皿・牙器・貝製品・土器（南島系）・住居址
19	田皆井美畑	石斧
20	美瀬浜（国頭岬）	土器（南島系）
21	余多石原	石斧・磨石・土器（南島系）
22	芦清良前兼久	土器（南島系）
23	塩津類ビ	石斧・磨石・土器（南島系）
24	屋子母フーバマ	凹石・土器（南島系）

（上村俊雄・本田道輝両氏原図）

第１図　沖永良部島の位置と遺跡分布図

沖国大考古第９号　正誤表

ページ	欄	行	誤	正
8	左	22	…破枠面が残る。	…破砕面が残る。
18	右	31	東江千江子	東江千栄子
27	左	9	上下の側縁部とも…	左右の側縁部とも…
79	右	5	…伊波式に類似)。	。を削除

神野貝塚Ａ－２区調査概要

Ⅰ　はじめに

本報告は文部省の科学研究費の補助を受けて、1982年と翌83年の両年度にわたって実施した沖永良部島神野貝塚における発掘調査の第３次報告書である。本調査は鹿児島大学文学部考古学研究室との共同で行った。

神野貝塚は本誌第７号でも紹介したように沖縄国際大学南島文化研究所による沖永良部島学術調査の際、発見されたもので、発見の端緒となったのは当時進行中だった海岸部におけるサイクリング道路の建設工事である。同工事によって本貝塚の後方部が数10メートルにわたって破壊され、遺跡地と確認されたわけだが、それと同時に良好な遺物包含層が存在することも判明した。

ところで、沖永良部島における考古学上の発掘調査は従来きわめて少なく、今次の神野貝塚以前においては昭和32年の九学会連合による知名町住吉貝塚の調査が唯一であった。この九学会連合の調査によって同島における縄文後晩期の一端が知られるようになったが、両期の前後の時代については資料がなく不明の状態であった。神野貝塚の表採資料には室川下層式土器の破片も一点含まれ、縄文前期に遡る可能性を秘めていた。沖永良部島の先史土器文化の上限を知る上で本貝塚の存在は大きな意義をもつものと考えられた。しかも遺物包含層は損壊断面で観察する限り攪乱の様子は全くなく、同島の縄文後期以前の状況を捉えるのに最適の遺跡と考えられた。これが今次調査の主たる目的である。

発掘調査は損壊部断面の観察および遺跡における樹木の密生の状況等から、試掘調査に最も適した地点を２箇所選定し、Ａ・Ｂの２トレンチを設けた。Ａトレンチは２×６ｍ、Ｂトレンチは２×10ｍで、各トレンチを２ｍ四方の小試掘坑に区分し、両トレンチとも南側よりそれぞれ１～３、１～５の番号を付した。両トレンチの位置や区分等の詳細は第２図の通りである。

調査初年度の1982年には発掘要員や調査日数との関係からＡ－２区およびＢ－４区の試掘調査を保留した。しかし、遺物包含層が予想以上に深く、当初の予定では初年度に前記各試掘区を完了、翌年に未発掘区のＡ－２、Ｂ－４の両区を終え、調査を終了する予定であったが、まず初年度で当初の計画が狂ってしまった。したがって、第２次調査では前記各区の残部の調査から始めねばならなくなったが、包含層の予想以上の厚さに前年度分を完了するのが精一杯であった。

ところで、第２次調査では調査要員に若干の余裕が生じたので、Ａ－２区を新たに試掘することにした。本貝塚は砂丘地に形成されているためトレンチの側壁は崩壊しやすく、前回同様、作業は困難をきわめ、本区も他の試掘区同様、中途で調査を断念せざるを得なくなった。したがって、Ａ－２区も未発掘部分を残す結果となった。

本貝塚については1985年の３月にＡトレンチの調査概要を、そして同年の10月にはＢトレンチの調査成果について概要の報告を行った。今回はＡトレンチの中央区、すなわちＡ－

2区について調査の大要をまとめることにする。

報告書を作成するに当たり、土器の胎土混入物および石器を琉球大学の木崎甲子郎教授に、骨角器の素材を早稲田大学の金子浩昌先生に、人骨については長崎大学の松下孝幸教授、貝製品の貝種については真和志高校の知念盛俊先生に同定をお願いした。また、写真の撮影は本学の非常勤講師で北谷町教育委員会の中村愿氏の手を煩わした。以上、明記して感謝を申し上げる次第である。

なお、調査期間中、現地においては知名町長日吉得蔵氏をはじめ、田中実前教育長、平良清義現教育長、東條達雄中央公民館長、教育委員会の大当吉之助、大山倭諸氏のほか多くの方々から物心両面にわたるご援助をいただき、調査現地では鹿児島県考古学会長河口貞徳氏や北九州市立考古資料館長小田富士雄氏からいろいろご教示をいただいた。また、調査期間中、日吉センター（日吉西則氏）と知名米穀店にもお世話になった。以上の方々にも心からお礼を申し上げたい。

報告書の作成（実測図・執筆の分担等）は従来の方式にしたがった。

第2次発掘調査の参加者は次の通りである。

調査責任者　高宮廣衛

実習生

下地　傑・玉城安明（以上4年）、安里和美・大城広江・金城寿久・新里敏明・仲村ゆりか・山内盛尚（以上3年）、古堅宗明・仲宗根　求・宮里信勇（以上2年）

特別参加

岸本義彦・盛本勲・島袋聖子・上地千賀子（以上本学のＯＢ）

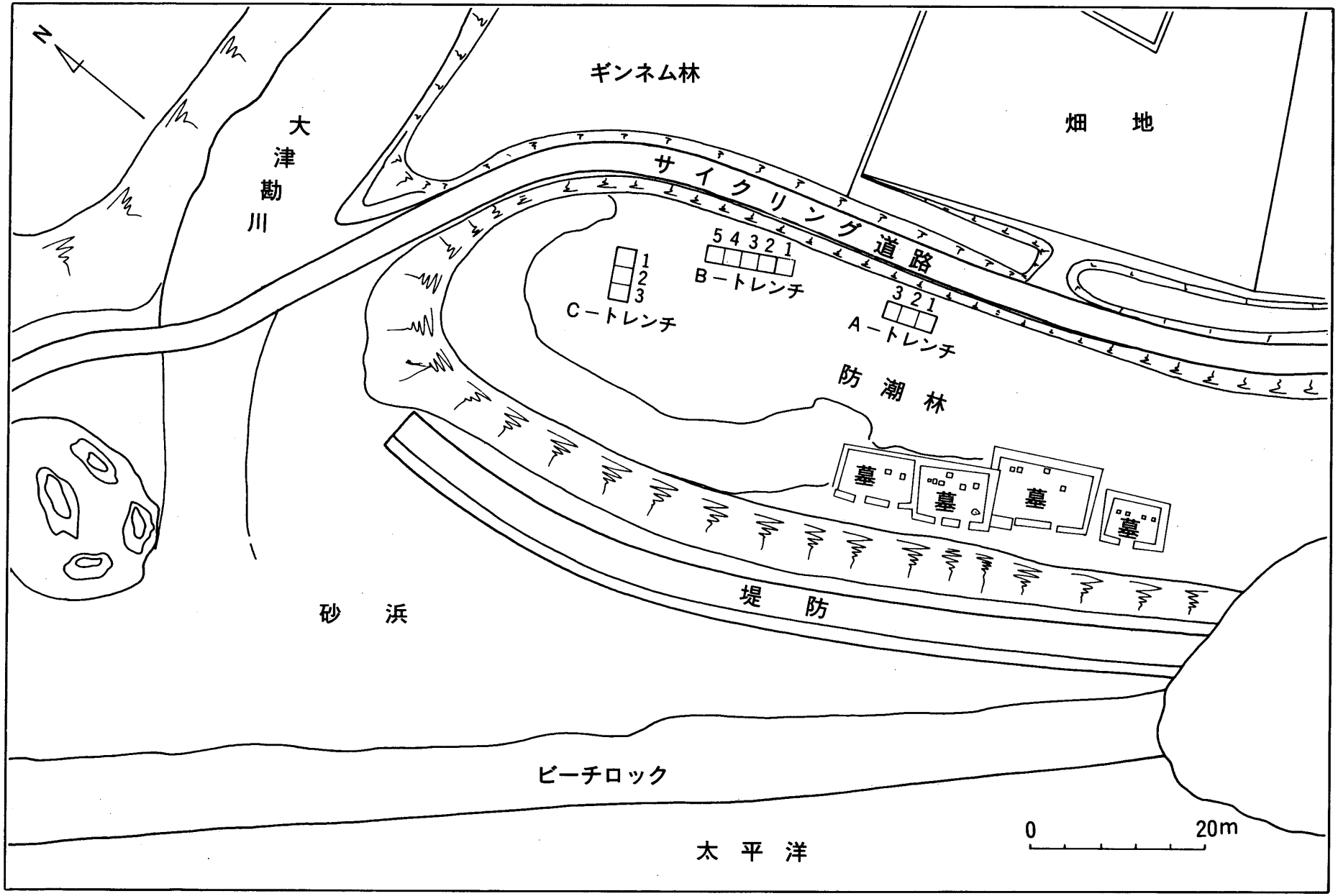
II　調査経過

調査は1982年と翌83年の2回にわたって実施した。

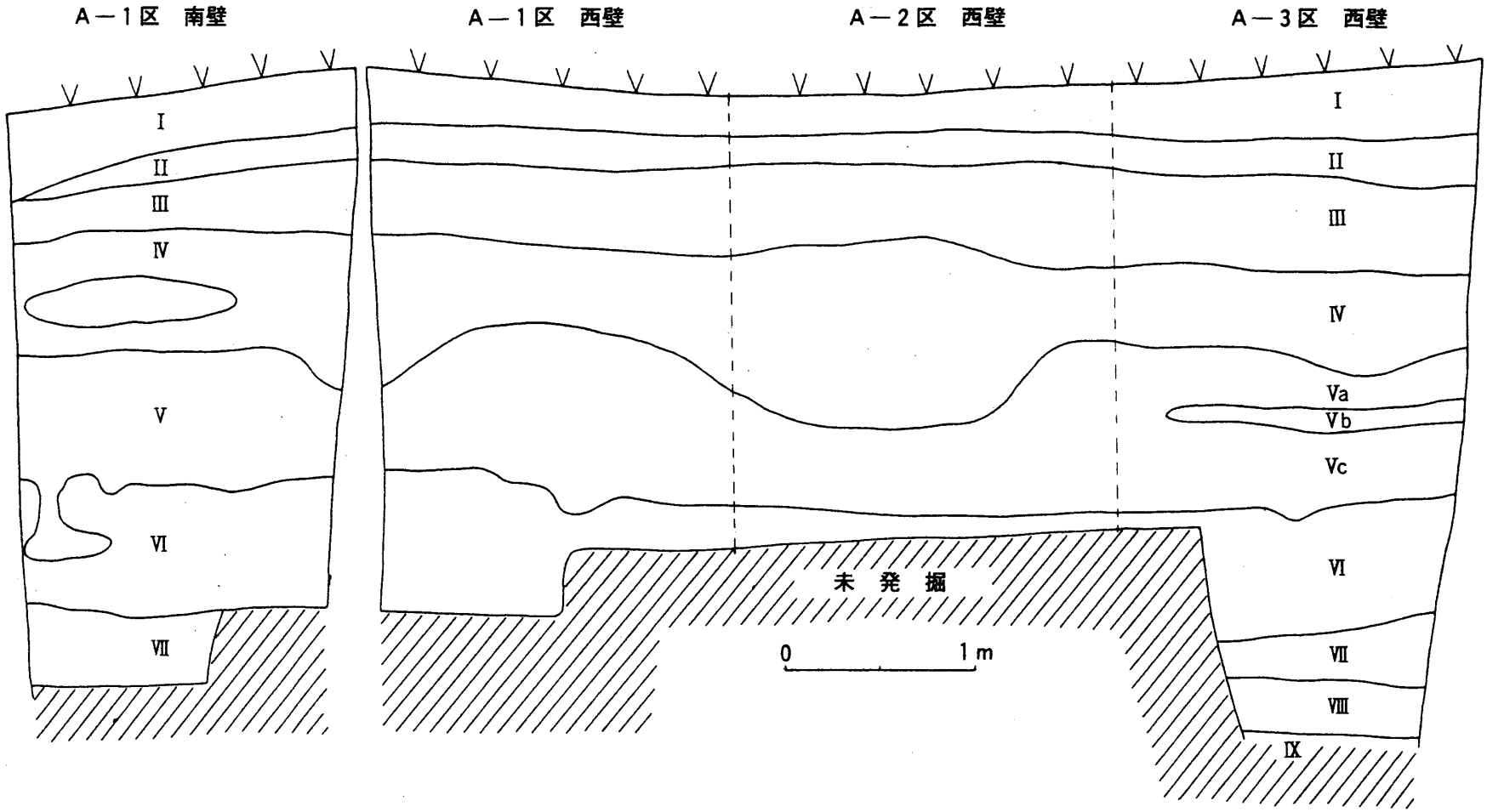
まず、調査を実施するにあたり、道路開削時に損壊を受けた砂丘後方の黒砂層露頭部の検討からはじめた。黒砂層（遺物包含層）は北で厚く、南へ次第に薄くなり、遺物の散布量も北ほど多い。また、先述の室川下層式の破片も北端部で得たものである。以上の2点から北側が有望とみられ、トレンチを同部へ設定することにした。

トレンチは比較的樹木の少い箇所を選び、道路にそって2ヶ所に設定した。第2図に示すＡ・Ｂの両トレンチで、Ａは2×6m、Ｂは2×10mである。両トレンチともそれぞれ南側より1～3および1～5の番号を付した。しかし、発掘要員および調査日数との関係から、第1次調査ではＡ－2区およびＢ－4区の試掘調査を保留した。

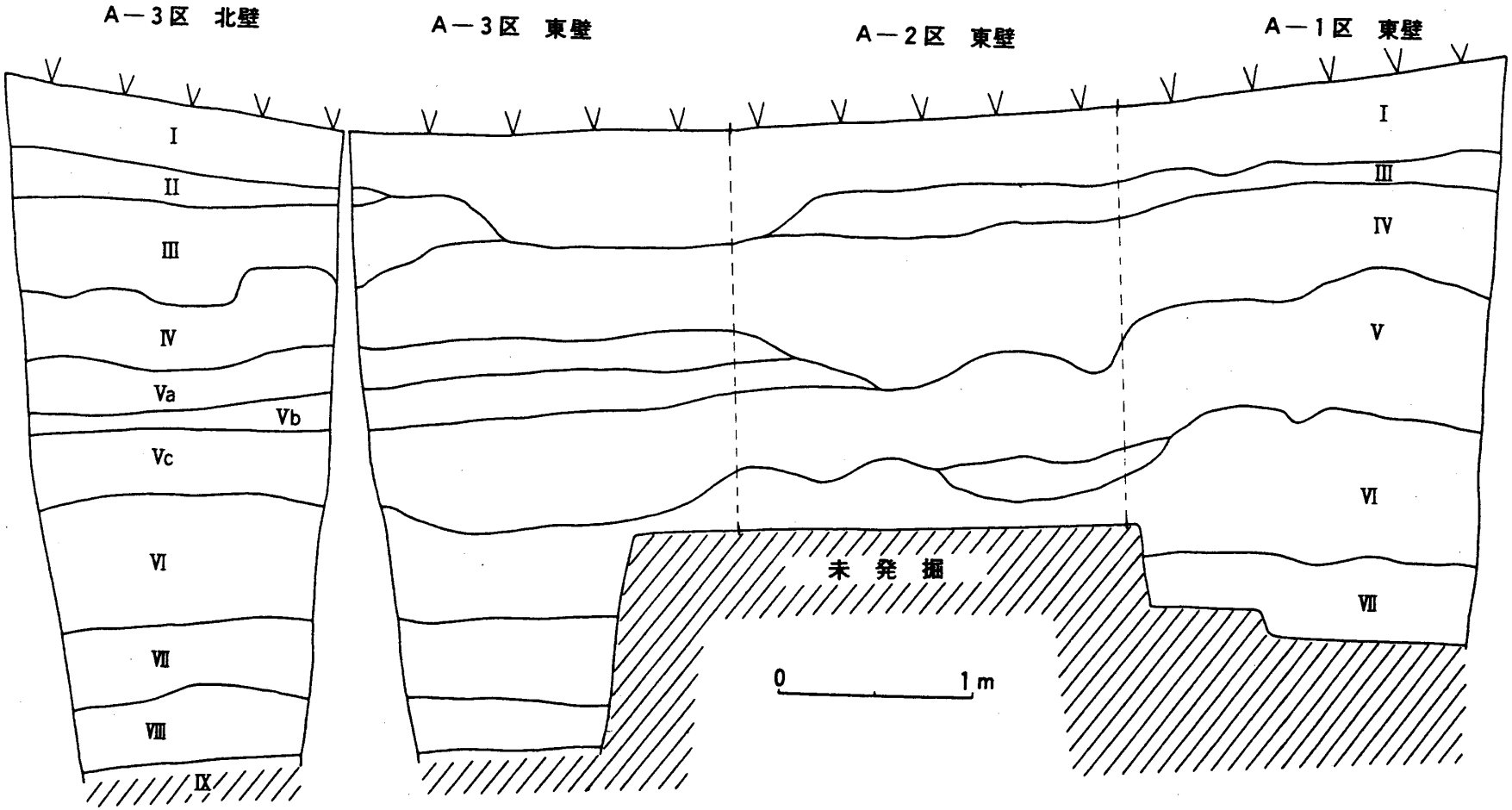
第1次調査は1982年8月5日より開始したが、後半、特に8月9日以降は台風11号の接近・通過により、発掘作業は予定より大幅におくれてしまった。そのため予定の10日間で完了することができず、再三延期して、一応のメドをつけたのが同月の18日であった。今回の調査で、Ａトレンチ　ではⅤ層、Ｂトレンチ　ではⅥ層まで確認したが、時間の都合上、同層以下における文化層の存在を確かめることができなかった。



第２図　神野貝塚付近の地形図


A－1区　南壁
A－1区　西壁
A－2区　西壁
A－3区　西壁
I
II
III
IV
V
VI
VII
Va
Vb
Vc
VIII
IX
未発掘
0
1m

第3図　壁　面　実　測　図


A－3区　北壁
A－3区　東壁
A－2区　東壁
A－1区　東壁
I
II
III
IV
Va
Vb
Vc
VI
VII
VIII
IX
未発掘
0
1m

第4図　壁　面　実　測　図

第２次調査は1983年８月２日より同月16日までの15日間実施した。初日はトレンチの設定および昨年埋め戻した部分の露出作業を行ったが、この作業は側壁などを損傷しないよう細心の注意を払いながら進めたため翌３日までかかり、実際に調査を開始したのは２日後の４日からである。

今回の調査により、Ａ・Ｂ両トレンチとも昨年掘り残した白砂層の下方にさらに文化層のあることを突き止めた。そこで、今次の調査は新たにトレンチを広げることなく、昨年の発掘抗を地山まで掘り下げることにした。その結果、Ｂトレンチの第３区ではXI層、同第５区ではXII層を認めることができた。Ｂ－１・２の両区は本年も時間がなく第III層で中止せざるを得なかった。この両区については次回の調査で終了させたいと思う。

他方、Ａトレンチでは第１区でVII層、第２区でVI層、第３区でVIII層まで確認したが、側壁の崩壊が甚しく、きわめて危険な状態にあったので、崩壊部の遺物すら完全に収集できぬまま埋戻す結果となってしまった。したがって、上記の層以下の状況をおさえることができず、その点大変残念に思っている。

III　層　　序

Ａトレンチは前回報告のように側壁崩壊のため下部を完掘できず、未発掘の部分を残してしまったが、1982年、翌83年の２回の試掘調査で確認できた層序は８枚である。しかし、まだ地山に達したわけではなく、Ｂ区の層序からすると、本区でも第VIII層以下にさらに文化層の存することが考えられる。

Ａトレンチの第Ｉ層は黄褐色砂層の表土で25～50cm、全体的に緩やかに東方に傾斜する。先史遺物が僅かに検出されたが、本来、生活層とは無縁とみてよい。Ａ－３区の南東部からＡ－２区の北東隅にかけては本層堆積後、大型獣（牛か馬で現在鑑定中）を１匹葬っており、部分的な攪乱を受け、そのため同部では第II・III層は欠如し、第Ｉ層の下面は第IV層に接している。第Ｉ層は第３区西壁で最も厚く、60cm余を測る。

第II層は暗黄色の砂層で、厚さ20～25cmとほぼ一定しているが、Ａ－１区南壁側では東壁部へ薄くなり、やがて消滅する。また、Ａ－３区南東部およびＡ－２区北東部では前述の表層からの掘り込みにより、同層は欠如している。先史遺物が数10点出土し、後世の瓦の破片も２点検出された。

第III層は黄褐色の砂層で、西壁側で厚く、最厚部は50cmほどあり、東壁側へ薄くなる。Ａ－３区東南部およびＡ－２区の北東隅は前述のように獣骨を埋めるために後世に掘り込まれており、同部には第III層は存せず、第Ｉ層は直に第IV層に接する。無文口縁の破片が１点検出されたが、本来、無遺物層とみてよい。

第IV層は黒色砂層で、Ａ－１区では60～70cmの厚さを有するが、Ａ－３区では若干薄く30～50cmである。Ａ－２区の西壁面では緩やかに落ち込んでおり、同部では１ｍほどの厚さを測る。東壁側でも同区が最も厚い。遺物包含層で、縄文後期に比定される。

第Ｖ層は上層よりやや色が浅く、暗褐色を呈する層で、Ａ－３区では中央部に白砂層が

介在し、同層を上下に二分する。したがって同区では第Ⅴ層をａ～ｃの３層に細分した。この白砂層はＡ－２区で消え、同部以南では１枚の層となる。遺物を包含し、縄文後期に比定される。

第Ⅵ層は黄白色砂層で厚さは40～70cm。無遺物層である。ただし、Ａ－２区の同層では一部に焼けた箇所があり、その近くから神野Ｂ式類似の口縁破片が１点検出された。しかし、前述のように側壁が崩壊し、時間的都合もあって、同区ではそれ以下の発掘を断念せざるを得なかった。

第Ⅶ層は紅白色砂層で、Ａ－１区では南半部を約40cm掘り下げたが、側壁が何度も大きく崩壊し危険な状態にあったので、それ以下の発掘を見合わせた。他方、Ａ－３区では側壁の崩壊がＡ－１区ほどではなかったので、同層を掘り下げることができたが、側壁部の発掘は崩壊を誘発するので、側壁側をさけて試掘を行った。Ａ－１区では轟様式の破片が１点出土しており、縄文前期に比定される。

第Ⅷ層は淡黒色の砂層でＡ－３区で試掘を試みたが、側壁崩壊の危険が生じたため部分的な調査に終った。室川下層式の層で、Ｂトレンチの下部に相当する。

以上がＡトレンチの層相であるが、今回報告のＡ－２区は先述のように側壁部の崩壊が著しく、第Ⅵ層で調査を中止せざるを得なかった。同層以下は未発掘であり、次の機会を待ちたい。

Ⅳ　出土遺物

本区の出土遺物は自然遺物と人工遺物に分けられ、出土量は前者が圧倒的に多い。自然遺物についてみると、獣魚骨や陸産・海産の貝類など食料残滓が主体で、貝類の中ではエラブマイマイ・オキナワウスカワマイマイを中心とする陸産貝が支配的である。他に石材片なども僅かながら出土しているが、自然遺物はほとんどが未同定のため、詳細は次回にゆずることにする。また、本区の第Ⅴ層上部でヒトの歯（写真図版４－19）が１点検出されており、長崎大学医学部の松下孝幸教授の同定によると、上顎左側第２小臼歯だろうとのことである。現在のところ、性別・年齢は不詳。同層は前章で述べたように縄文後期に比定される層である。

人工遺物は土器、石器、骨製品、貝製品などで、出土量は土器が圧倒的に多く、次いで貝製品、骨製品、石器の順である。

以下、石器、骨製品、貝製品、土器の順に記述する。

Ａ　石　器

石器は第Ⅳ層および第Ⅴ層より９点得られ、機能上、実用品と装飾品に分けられる。実用品は８点で、その内訳は石斧３点、凹石、円形石器、砥石、石皿、スクレイパーがそれぞれ１点である。装飾品は未製品が１点出土している。いずれも縄文後期の資料である。

以下、実用品、装飾品の順に記述する。

第1表　石器の層位別出土状況

種類＼層	実用品						装飾品	計
	石斧	凹石	円形石器	砥石	石皿	スクレイパー	サンゴ製品	
I								
II								
III								
IV	3	1	1		1			6
V				1		1	1	3
VI								
崩壊								
計	3	1	1	1	1	1	1	9

a）実用品

①石斧

第IV層より3点（第5図1・2、第7図1）出土した。

第5図1はほぼ完形だが、刃縁を欠く。自然礫利用の製品で、上面は自然面、裏面には自然（非人工）の破枠面が残る。したがって、器肌は表面より裏面が粗い。表裏とも縁辺部に調整剥離を加え、表面の刃部のみ研磨を施す。縁辺部の調整剥離は裏面が粗く、表面は若干丁寧である。研磨面に擦痕などは認められない。

本標品は長軸に沿って若干内彎しており、特異な形態を有する。斧というより土掘具の可能性が強い。なお、刃縁の破損部には敲打痕が観察されることから、本標品は本来の機能を失ったあと叩石として再利用されたものであろう。現存長10.4センチ、最大幅4.8センチ、最大厚1.8センチ。重量は138グラムで粗粒玄武岩製。

同図2は刃部を欠くが、重量感があり、斧と認められるものである。整作の方法は剥離調整を行ったあと研磨を施しているが、側面では僅かに敲打調整痕も認められる。研磨は一応全面が対象となっているが、剥離痕も目立ち、平面の一部には敲打による凹部も認められ、凹石の用途にも使用されたものであろう。

刃部はかなり破損しているが、現状から推定すると両刃である。身はやや厚く、横断面は楕円形を呈する。現存長10センチ、最大幅5.3センチ、最大厚3.1センチ。重量は260グラムで粗粒玄武岩製。

第7図1は刃部の小破片で全形は窺えない。刃の形態は両刃に属し、刃縁の平面観は弧状を呈する。未だ鋭い刃を残している。研磨は入念で、一部に斜め方向の擦痕も僅かに認められる。現存部の器面調整からみて比較的精巧な石斧であったと思われる。現存部の重量は6グラムで粗粒玄武岩製。

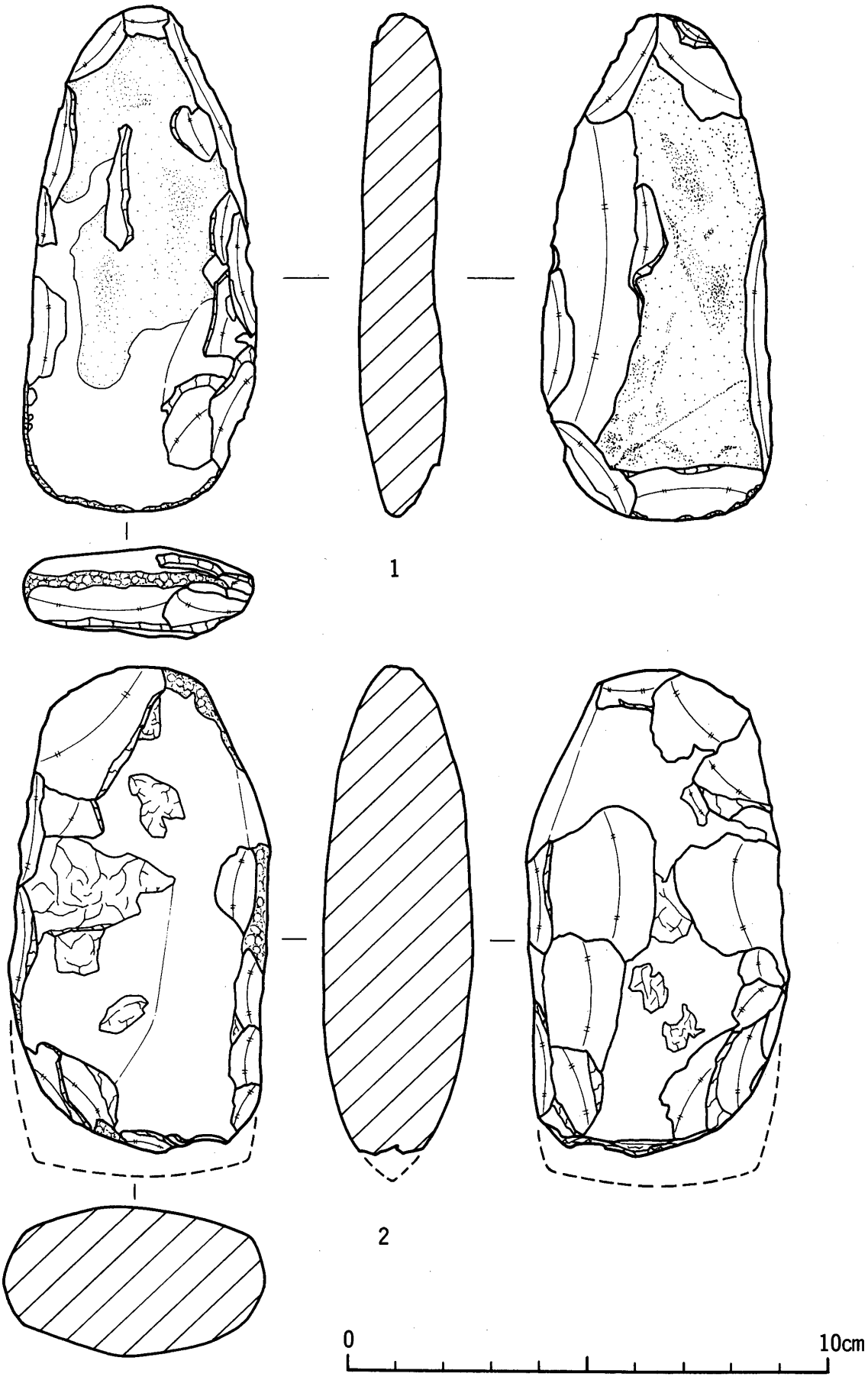
②凹石

完形品が第IV層より1点出土した。第6図1に示すもので、平面形は石鹸状を呈し、均整のとれた形状を有する。表裏両面の中央部には敲打による円形の浅い凹みがあり、大きさは直径2センチ前後である。側面の一部に浅い抉りも認められる。上下両平面は砥磨によって調整されるが、部分的に研磨による光沢も認められる。側面は敲打調整による整形である。なお、敲打痕の状況から長軸の両端は叩きにも利用されたであろう。最大長12.5センチ、最大幅7.7センチ、最大厚4.9センチ。重量740グラムで石英質砂岩製。

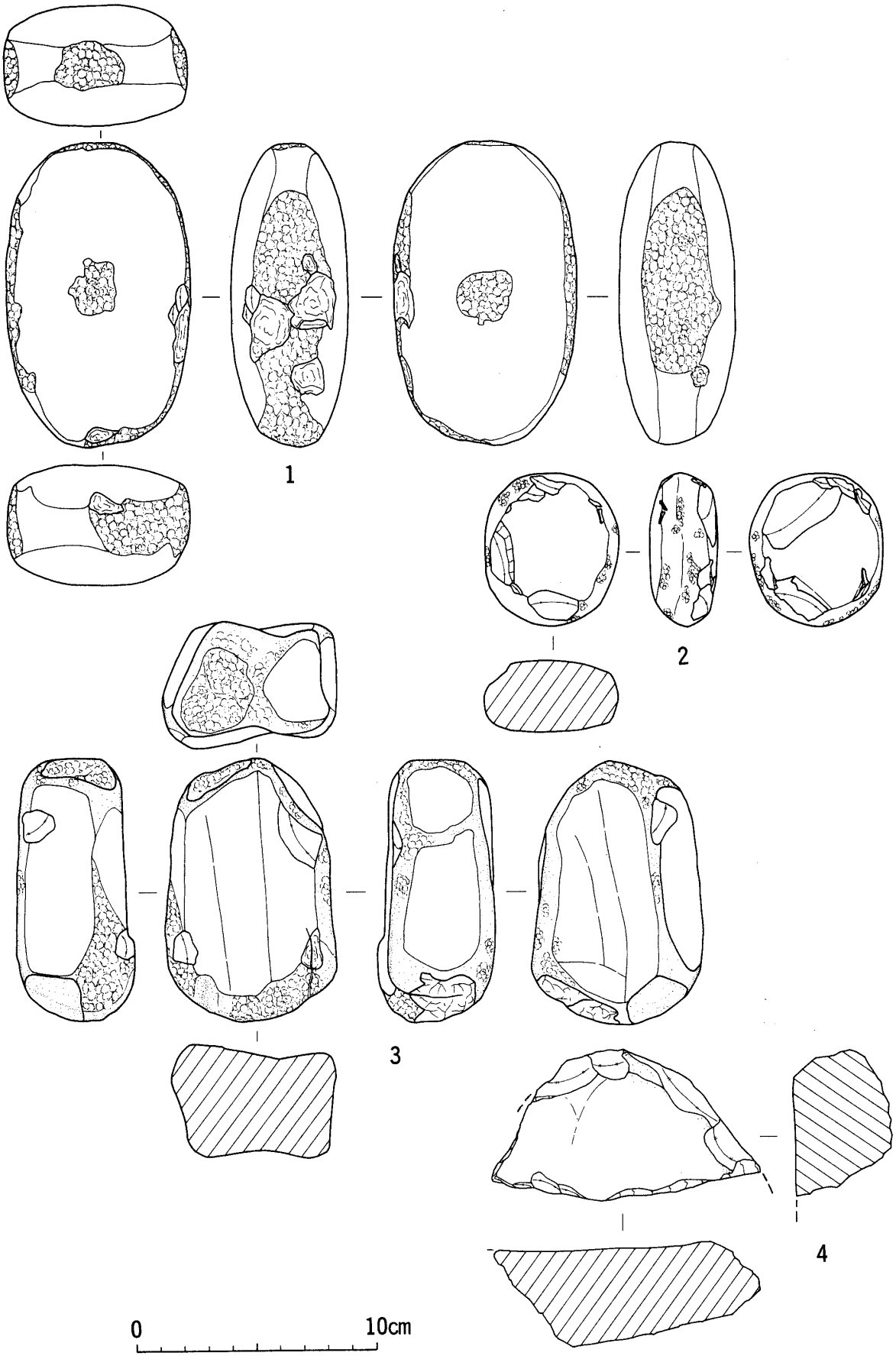
③円形石器

同図2は平面観がほぼ円形をなし、断面が扁平な楕円形を呈する資料で完形品である。

表裏面は滑面で光沢を有し、縁辺部は剥離



第5図　石　　器



第6図　石　　器

調整を加えたあと砥磨を施している。表裏面の研磨の状況から磨製石斧を再加工したものと推察される。

本標品の正確な用途は不明であるが、形状、大きさ、および研磨面を主要使用面と考えれば、土器製作時に使用される当て具の用途も考えられる。最大径6.4センチ、最大厚2.9センチ。重量185グラムで緑色凝灰岩製。第IV層出土。

④砥石

同図3は磨面と敲打面を有するもので、横断面は四角形を呈し、側面は四面ともなめらかな凹面となる。上下二面は砥石として使用されたものであろう。この二面の横断面は「L」の字形の屈曲を示し、特殊の用法が考えられる。この平面上の屈曲は角度のあるものと、やや丸味を帯びた2種のタイプが観察される。

敲打痕は本標品の上下両側面と側縁部にも認められるが、叩石としての用途は二次的なものと考えられる。最大長10.9センチ、最大幅7.1センチ、最大厚4.8センチ。重量は560グラムで石英質砂岩製。第V層の出土。

⑤石皿

同図4は石皿の側縁部を含む破片で、第IV層の出土である。小破片のため原形やサイズなど不明である。表面は磨面で中央部へ薄くなる。裏面は剝離されたままで、したがって本標品は一面のみを使用している。側面も剝離調整によるもので、成形は粗い。石英質砂岩製で現存部の重量は280グラムである。

⑥スクレイパー

第7図2はチャートの縦長剝片をスクレイパーとして使用したもの（註1）で、第V層の下部から出土した。器面は表面の左半部のみ自然面で他は剝離面である。同右半部は側縁部へ緩やかな凹面となる。横断面は三角形で、主要剝離面（裏面）は横軸方向に緩やかな弧を描く。左右の縁辺は鋭く、同部には使用による細かい刃こぼれが部分的に観察されるが、使用によるとみられる擦痕はいずれの面にも認められない。石核は得られていない。

チャート製のスクレイパーは読谷村渡具知東原遺跡（註2）や、嘉手納町野国貝塚（註3）、徳之島伊仙町の犬田布貝塚（註4）などで報告されているが、本標品と類似の形状を示すものは出土していない。長さ5.7センチ、最大幅2.2センチで重量19グラム。

b）装飾品

第7図3はサンゴ片に穿孔を試みたものであるが、貫通しておらず、したがって未製品である。表裏両面から穿孔しており、加工部は表面において1箇所、裏面では隣接して2箇所認められる。表面のものは円錘状を呈し、かなり深いところまで達しているが、裏面のものはいずれも浅く、中途で放棄している。

器面は自然面のままで研磨は施されていない。

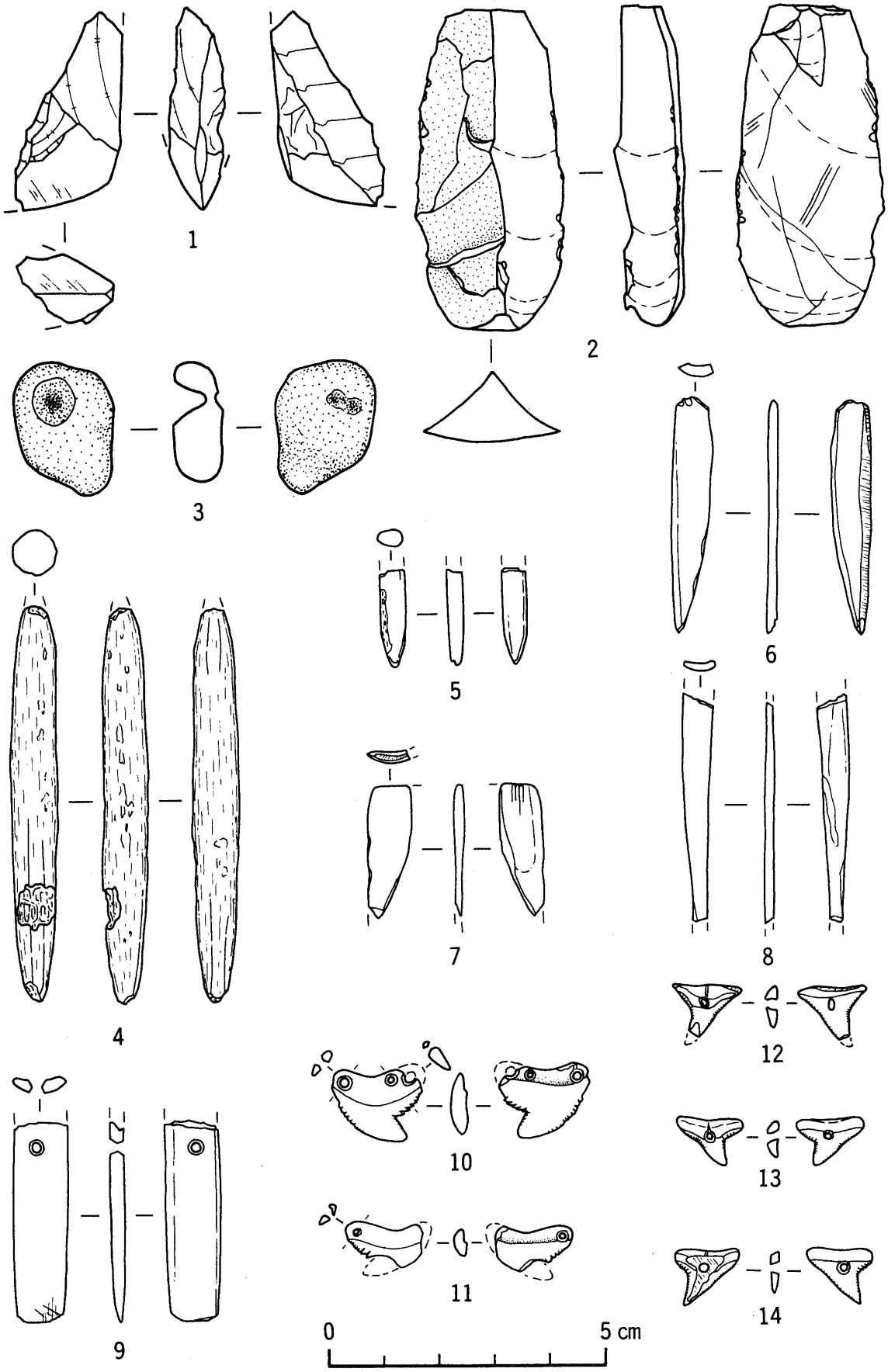
同種の製品が隣接のA－3区で1点検出されており（註5）、本標品は装身具の未製品とみてよい。重量は3.6グラムで、第V層の出土である。

註

1．東北大学の芹沢長介教授の同定による。

2．名嘉真宜勝・古川博恭・大城逸朗・知念勇・高宮廣衛・佐野一・日越国昭　「第1～2次発掘調査報告」『渡具知東原』読谷村文化財調査報告第3集　読谷村教育委員会　1977年3月　60頁第24図

3．岸本義彦・古川博恭・島袋洋・盛本勲・



第７図　石器（１～３）・骨製品（４～14）

加藤祐三・小田一幸・川島由次・村岡誠「野国貝塚群B地点発掘調査報告」『野国』　沖縄県文化財調査報告書第57集　沖縄県教育委員会　1984年3月　124頁第52図1

4．吉永正史・宮田栄二・戸崎勝洋　『犬田布貝塚』　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告（2）　鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会　1984年3月　38頁第19図406

5．高宮廣衛・下地傑・安里和美・大城広江「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その1）　－Aトレンチ－」『沖国大考古　第7号』沖縄国際大学文学部考古学研究室　1985　89頁第38図1

B　骨製品

骨製品は29点得られた。これらは実用品と装飾品に大別されるが、中には用途不明のものもある。層位別の出土状況は第2表の通りである。

第2表　骨製品の層位別出土状況

製品＼層	実用品			装飾品						用途不明			計
	骨銛	骨針	粗製尖頭器	ヘラ状垂飾品	有孔サメ歯製品	サメの椎骨製品	指輪状製品	管状製品	鳥骨製品	ジュゴンの肋骨製品	鳥骨製品	パイプウニ製品	
I													
II													
III													
IV	1				2	6	1	1		1	1	1	14
V		1	3	1	3	5		1	1				15
VI													
崩壊													
計	1	1	3	1	5	11	1	2	1	1	1	1	29

a）実用品

①骨銛

第7図4はジュゴンの肋骨を素材とするもので、器体部の長さは70.5ミリ、僅かに尖端を欠き、他端は茎部への移行部で欠損する。したがって、全長は不明。

器面の保存状態は悪く全体的に摩耗し、軟質部は融解して多孔質となる。横断面は円形を呈し、径の最大は中央部にあって、8.5ミリを測る。なお、先端から17ミリの箇所に幅7ミリ前後の抉りが認められるが、人為的なものか今のところ判断し得ない。

類似の資料は嘉手納貝塚(註1)、浦添貝塚（註2)、シヌグ堂遺跡（註3)、徳之島の犬田布貝塚（註4）でも発見されている。重量3.5グラムで第IV層出土。

②骨針

同図5は骨針とみられるものの尖端部資料で、魚骨を素材とする。尖端は僅かに欠け、全体的に丸味を帯び滑沢を有する。おそらく使用によるものであろう。器面も滑面を呈し、横断面は4.8×3ミリの楕円形をなす。現存長17ミリ、重量0.09グラムで第Ⅴ層の出土である。

③粗製尖頭器

イノシシの四肢骨製1点、鳥骨製2点の計3点で、すべて第Ⅴ層の出土である。

同図6は鳥骨を利用したもので破損品であるが、側縁部の一つは原形をとどめており、同部は内面を研磨加工することによって縁辺部を尖らせる。内面の研磨面には横位の擦痕が無数に残る。他の側縁部は破損時の状況をとどめ、特に加工を施さないが二次的に使用されたため、随所に摩耗痕を残し、尖端ほど著しい。尖端は鋭利である。刺突、錐などの用途に使用されたものか。全長40.2ミリ、最大幅7.2ミリ、最大厚2ミリ、重量0.55グラム。

同図7はイノシシの四肢骨を縦に裂いて加工したもので、頭部と側縁の一部を含む資料である。外面は滑面で光沢を有し、頭端は研磨によって平坦につくられている。また、側縁部も内面を研磨し縁辺部を尖らせる。側縁の破損部は僅かに摩耗しているが、まだ破損時の粗面が残っている。小破片のため全形は不明だが、前項6に類する製品と考えられる。現存長23.2ミリ、最大幅8ミリ、最大厚2ミリ、重量0.32グラム。

同図8は鳥骨を利用したもので側縁の一部を残す破損品である。側縁と内面に研磨を加え、内面はほぼ平坦となり、側縁部は前項6・7と違って断面は丸味を帯びる。破損部では手なれ様の摩耗が僅かに認められるものの、未だ、破損時のシャープさが残る。用途は不明だが、前項6・7に類する機能も考えられる。現存長40.5ミリ、最大幅5.8ミリ、最大厚1.5ミリ、重量は0.29グラム。

b）装飾品

①ヘラ状垂飾品

同図9はイノシシの四肢骨を板状に加工したもので、孔を穿っているが上部欠失のため全形は不明。したがって、孔も1孔だけか、それ以上設けたものか推測しえない。

現存部は幅9.8ミリ、長さ36.8ミリで、孔は表裏両面より穿たれるが、穿孔に際しては主として裏面より加工している。孔径は裏面2.8ミリ、中央部1.5ミリ、表面2.4ミリである。裏面は平坦に整形されるが、両側縁の加工は若干異なっている。つまり、横断面でみると一方は丸味を帯び、他方は刃縁状に鋭くなっており、後者の形状は本図6・7に近似する（但し、裏面に擦痕などは認められない）。とすると、6・7も当初この種の製品であった可能性が強い。

下端は内面を僅かに加工、表面は下端部へ彎曲し、縦断面でみると斧刃状に尖る。同部の表面には縦・斜め方向の傷が10数本認められる。

現在のところ、本標品の用途を推察し得ないが、実用品か装飾品か両者の可能性を有する。重量は1.0グラムで第Ⅴ層の出土。

②有孔サメ歯製品

歯根部に1～3孔を穿つ製品で5点検出された。

イタチザメの歯を利用したものとメジロザメ属の歯を利用したものの2種に分類され、前者は2点（第7図10・11）、後者は3点（同図12～14）である。完形あるいはそれに近い

ものが4点（同図10・12〜14）で、他の1点（同図11）はエナメル質の部分が半欠している。

穿孔の状況についてみると、イタチザメ歯利用の資料（同図10）は歯根部の左端に1孔、右端に2孔の計3孔穿っている。本来は左右にそれぞれ1孔穿っていたものを、右端の孔が破損したため、その内側に補足したのではないかと思われる。3孔とも表裏両面から穿たれており、左端の1孔についてみると裏面で溝状の紐ずれ痕が孔の上方にみられる。

孔を3個穿つ例は沖縄市室川貝塚でイタチザメ歯製が1点報告されている（註5）。

同図11は歯根部の左端に1孔認められ、穿孔は主として裏面から行われている。同部右端は破損のため孔の有無は不明だが、同図10の資料からすると、本標品も左右穿孔の例かと推察される。なお、本標品においては紐ずれの痕跡は認められない。

次にメジロザメ属製の資料についてみると、孔は3点とも1個で歯根部に穿たれるが、裏面では歯冠部上方に貫通する。穿孔の方法は同図13が表裏両側から、12は表面から、14は裏面から行われ、13の場合若干斜めに穿たれている。

穿孔以外の加工が認められるものは14の1点で、歯根部から歯冠部尖端にかけて表面を水平に研磨しており、同部には斜め方向の繊細な擦痕が明瞭に残る。

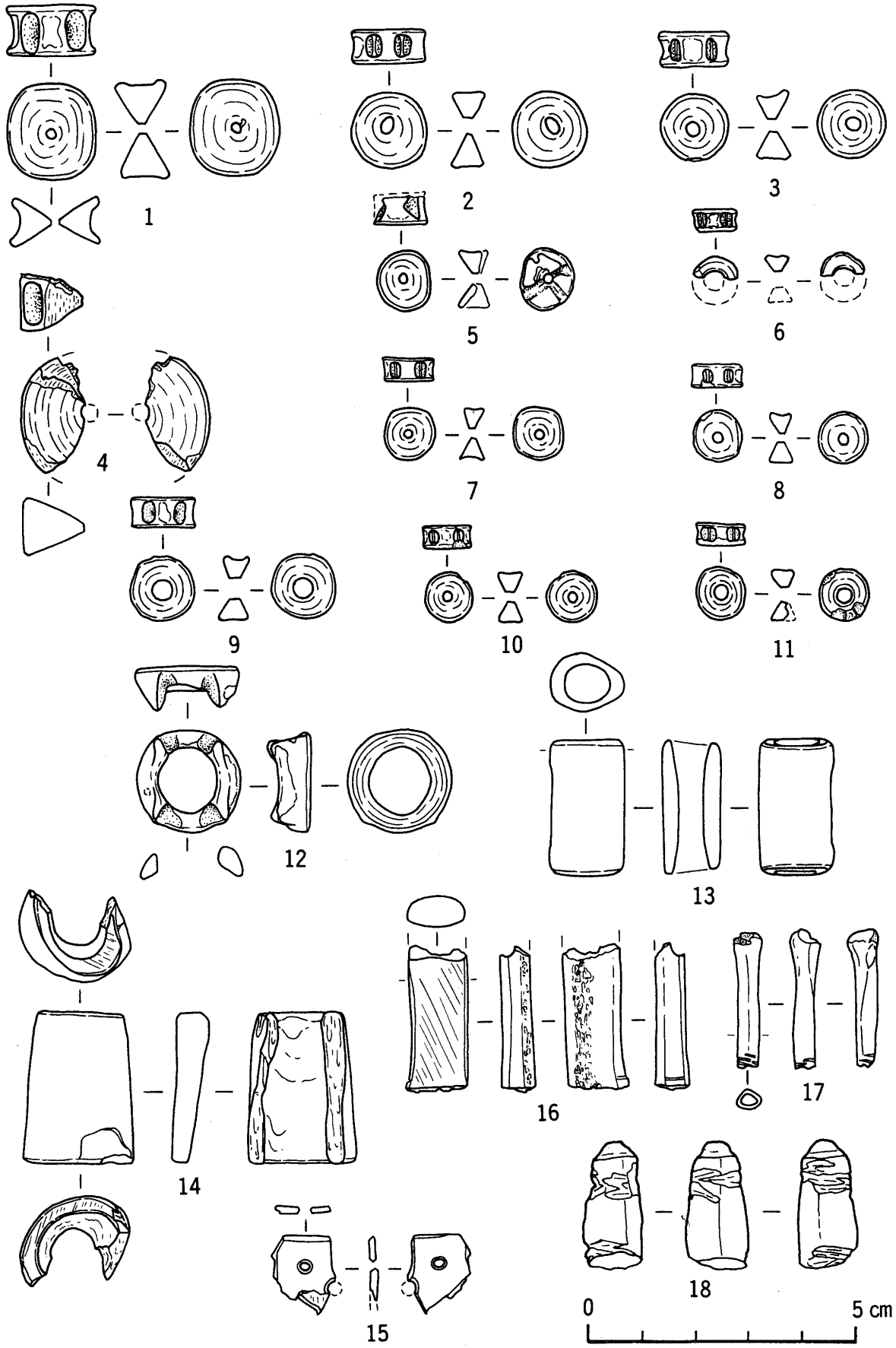
上記3点とも歯冠部の鋸歯を有するものの、13の場合同部の先端や歯根部の縁辺が摩耗し丸味を帯びる。特に歯根部上縁では顕著で、おそらく紐ずれによる摩滅とみられる。

ところで本標品の用途であるが、上記のように紐ずれ痕を有するものがあり、また明確な使用痕が認められないことから、大部分は垂飾品とみなしてよいのではなかろうか。

サイズは第3表の通りである。

第3表　有孔サメ歯製品のサイズ

観察事項／図番号	サメの種類	孔				法量			出土層
		数		外径（ミリ）	内径（ミリ）	（ミリ）	（ミリ）	重量（グラム）	
第7図10	イタチザメ	3	左	2.5	1.8	16	12.7	0.3	V
			中	2.5	1				
			右	2.5	1.8				
11	〃	1		2	1.5	13.4	8.2	0.16	IV
12	メジロザメ属	1		2.5	1.5	11.8	10	0.05	V
13	〃	1		2	1	12.2	8.4	0.04	IV
14	〃	1		1	1	13	9.2	0.04	V



第8図　骨　　製　　品

③サメの椎骨製品

サメの椎骨の臼状凹部に1孔穿つもので、破損品を含め11点（第8図1～11）検出された。完形品は7点である。

ほとんどのものが穿孔以外の加工は認められないが、第8図1のみは側面の2箇所を研磨することによって、方形に近い平面形をつくり出している。また、前記二側面は水平方向に溝状に抉られ凹面を呈する。

穿孔についてみると同図9は他の資料に比べ丁寧で、孔径も3.6ミリと出土資料の中では最大を測る。孔の平面形はほとんどが正円形を呈するが、同図2のようにやや楕円形を呈するものもある。

法量は第4表の通りである。

第4表　サメの椎骨製品の法量

※第8図4の外径、孔径および同図5の厚さは推定値

図番号	出土層	厚さ（ミリ）	外径（ミリ）	孔径（ミリ）	重量（グラム）
第8図1	Ⅳ	9.3	長径19.0 短径16.6	1.5	1.32
2	〃	6.3	14	2.8×2.3	0.73
3	〃	6.4	12.5	2.5	0.52
4	〃	10.6	26	3	0.84
5	〃	5.5	11.0	1.5	0.11
6	〃	4.5	9.0	3.5	0.05
7	Ⅴ	4.5	9.0	2.0	0.12
8	〃	4.5	9.5	1.5	0.13
9	〃	6.0	11.6	3.6	0.45
10	〃	4.0	9.5	1.5	0.15
11	〃	4.6	9.5	2.2	0.13

④指輪状製品

同図12はサメの椎骨を横割りにし、臼状の凹部に径11ミリ前後の孔を穿つもので平面形が指輪状を呈することから指輪状製品と仮称したが、本来の用途は今後の類例を待って検討したい。切断面は図の如く4箇所に突起部を残しており、全体的に摩耗していて加工痕は認められない。サイズは外径約19ミリ、最大厚は突起部の約7ミリで、最も薄い部分は約3ミリである。重量は0.7グラムで第Ⅳ層の出土。

⑤管状骨製品

同図13はジュゴンの肋骨を管状に加工したもので、特に器体表面に装飾加工を施さないが、管状垂飾の一種と考えてよかろう。切断面は研磨を加え、横断面は楕円でも卵形に近い。孔径は約8ミリであるが、中央部へいくにしたがって小さくなる。外面は風化が進行し、本来の器面は縁辺部において僅かに認められるだけである。最大長25ミリ、最大幅15ミリ、重量3.1グラムで第Ⅴ層の出土である。

同図14は本誌第7号で紹介されたもの（註6）であるが、本区出土の破片と接合したので再度記載することにした。

本標品はイノシシの長管骨を切り取り研磨調整を加えたもので、同図13と同様、管状垂飾の一種であろう。器体表面に装飾加工は認められない。切断面は丁寧に研磨され、上下面とも擦痕が明瞭に残る。内面は切断面に近い部分のみ調整され、他は自然面のままである。器体表面に損傷はなく、手触りは滑らかで光沢を有する。横断面は楕円形となり、長径2センチ強、短径は1.5センチ前後と察せられる。長さは2.8センチで残存部の重量は約6グラムである。なお、本標品のうちA－3区出土の部分は火を受けており褐色となっているが、本区出土のものは白色である。本区の破片は第Ⅳ層30～40センチレベルの出土で、A－3区のものは第Ⅴ層cからの出土である。

⑥鳥骨有孔製品

同図15は鳥骨に研磨を施し孔を穿つもので第Ⅴ層から出土した。孔は2箇所に認められるが、うち1個は破損している。孔の大きさは完形のものが外径2.5ミリ、内径1.8ミリで、他の1孔は残存部より推計すると約3ミリである。穿孔の方法は完全のものが主に一方の面から穿たれているのに対し、他の1孔は両面から穿たれ、いずれも丁寧である。研磨は表面および上端部、側面の一部に認められ、上端部は表面の方へ僅かに傾斜する。

破損品の為全形は窺えず、したがって用途も明らかでないが、極めて薄く軽いことや孔が設けられることなどから垂飾品の一種かと考えられる。現存部の最大長は14.5ミリ、最大厚1.3ミリ、重量0.18グラム。

c）用途不明

①ジュゴンの肋骨製品

同図16はジュゴンの肋骨を素材とし、それに加工を施すものであるが、小破片のため用途を明らかにし得ない。器面は研磨が施され、一部に骨髄の露出もみられる。表面では擦痕が明瞭に観察され、同部上端の破損上面には図のように溝状の加工を施しているが、破損のため溝部の形状を知り得ない。また、下端の左方側面部には長さ4ミリ程の沈線が1本見受けられるが、切断時の傷なのか、あるいは意識的に施したものかは今のところ判断しにくい。横断面は扁平の楕円状を呈し現存部の平面形は長方形をなす。現存長26.5ミリ、最大幅11.6ミリ、最大厚6.3ミリで重量は1.46グラムである。第Ⅳ層の出土。

②鳥骨製品

同図17は鳥の撓骨で破損部に接して横方向の沈線を施すもので、部分的に2条認められるが、装飾のための加工とみなすべきか、それとも切断痕とすべきか現時点では判断が困難。残存長は25ミリで重量0.34グラムである。第Ⅳ層の出土。

③パイプウニ製品

同図18はパイプウニの刺を素材とするもので、本標品の上部と下部に横位の刻みが施され、下部は刻みの部分で破損する。本標品の横断面は類三角形に属し、刻みはコーナーの3箇所を深く刻む傾向がある。加工は雑である。現存部の最大長は2.3センチ、重量1.6グラム。第Ⅳ層の出土。

註

1．新田重清・嵩元政秀　「嘉手納貝塚発掘報告書」『文化財要覧』 琉球政府文化財保護委員会　1960年　62頁図版XII15

2．新田重清　「浦添貝塚調査概報」『南島考古』1号　沖縄考古学会　1970年1月　13頁第5図10

3．金武正紀・比嘉春美・金子浩昌　「第1・2・3次発掘調査報告」『シヌグ堂遺跡』沖縄県文化財調査報告書第67集　沖縄県教育委員会　1985　171頁　Fig. 70－B280

4．吉永正史・宮田栄二・戸崎勝洋　『犬田布貝塚』　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告（2）　鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会　1985年3月　44頁第23図436

5．高宮廣衛・湖城清・嘉数卓・東江千江子・玉城初子・阿利直治・玉城朝健　「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」『沖国大考古　第4号』　沖縄国際大学文学部考古学研究室　1980　13頁第9図25

6．高宮廣衛・下地傑・安里和美・大城広江「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（そ

の1）　－Aトレンチ－」『沖国大考古　第7号』　沖縄国際大学文学部考古学研究室　1985　89頁第38図6

C　貝製品

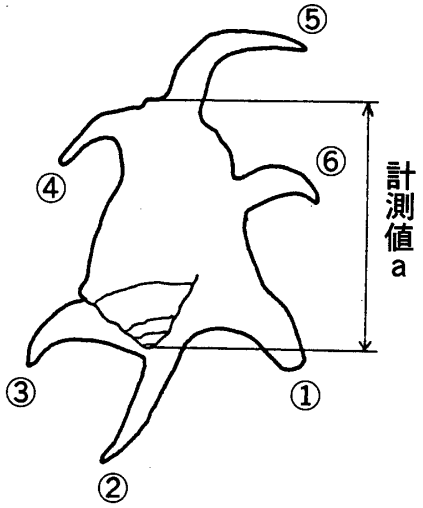
総数252点検出された。これらは用途により実用品と装飾品に大別できるが、中には用途不明のものもある。種類および出土層は第5表の通りである。

a）実用品

①スイジガイ製品

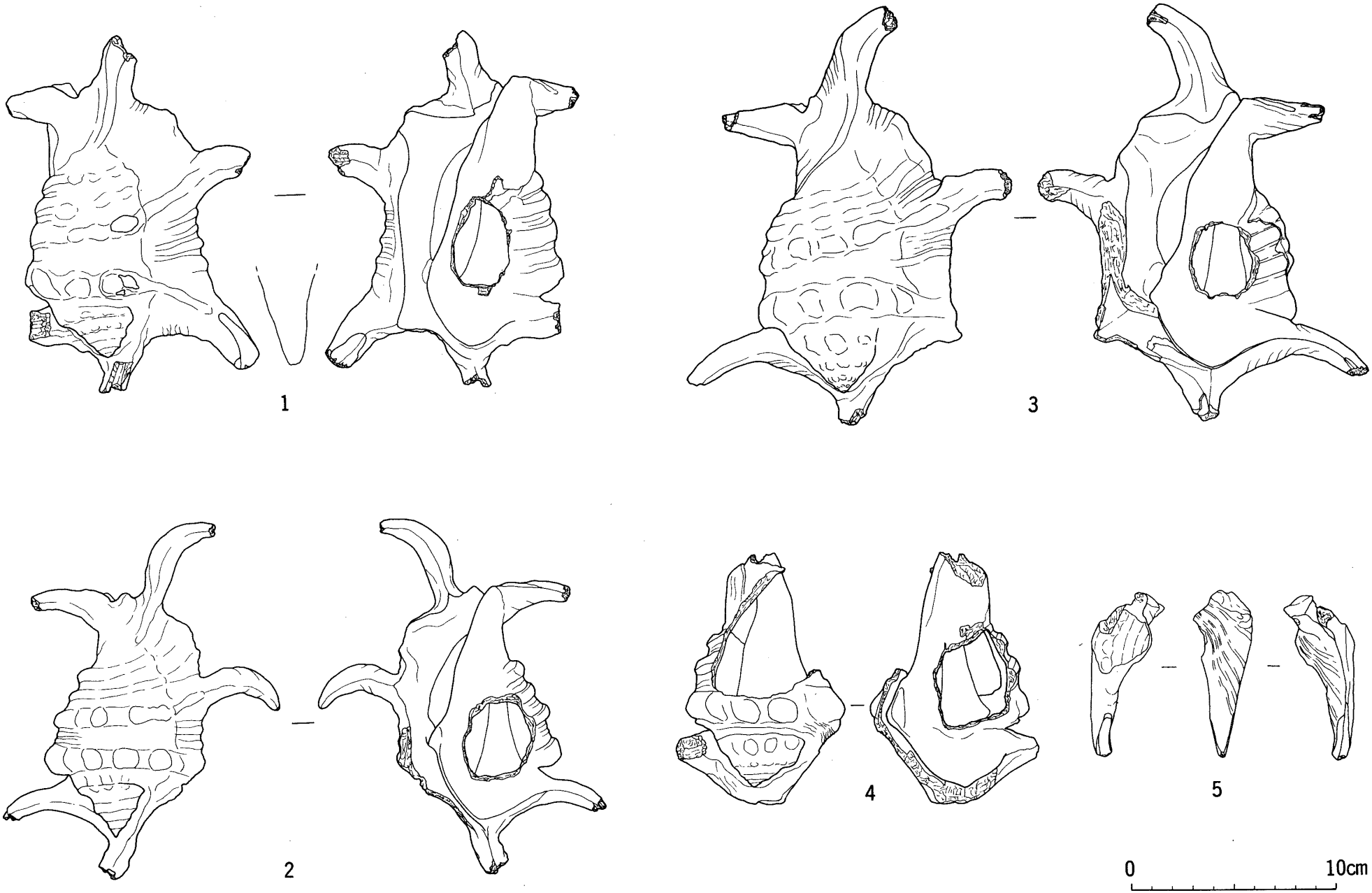
第10図1～5に示したもので、突起番号・計測部位は第9図による。

第9図　突起番号・計測部位



第5表　貝製品の層位別出土状況

種類／層	実用品							装飾品							用途不明				合計
	スイジガイ製品	ヤコウガイ製貝匙	ヤコウガイ蓋製品	二枚貝有孔製品	タカラガイ製品	貝刃	貝鏃	貝輪	体層部有孔の巻貝	巻貝製装飾品	三角形有孔垂飾品	サメ歯を模した貝製品	製ビーズ イモガイ 精巧品	製ビーズ 粗造品	叉状製品	その他の有孔製品	ニシキミナシ製品	その他	
I																			
II										1				6					7
III																			
IV	1			5	1			5	1		3	1	2	54		2		1	76
V	3	2	4		4	2	1	4	1	1	2		7	131	1	1		1	165
VI																			
崩壊	1			1					1								1		4
合計	5	2	4	6	5	2	1	9	3	2	5	1	9	191	1	3	1	2	252
	25							220							7				



第10図　貝　製　品

第10図１は①番突起に刃を設けるもので、刃部は表裏両面より研磨を加え、両刃に作る。刃縁は遺れ、丸味を帯び、表面左側に径５ミリの刃こぼれがある。本突起の長さは約４センチである。他の突起はいずれも破損し、附刃の有無を確め得ない。②番突起の右側先端部表面には研磨痕がわずかに認められ、同部は若干平滑になっている。また、螺塔部の結節瘤にも３箇所研磨痕がわずかながら見受けられる。腹面部の粗孔は長径約４センチ、短径約３センチの楕円形である。計測値ａ（第９図）は約13センチ、重量は540グラムである。崩壊砂からの検出で所属層は不明。

同図２は腹面部に円形状の粗孔を穿つもので、孔は長径3.7センチ、短径３センチである。①番突起は完全に欠失し、②番突起の表面先端部にはわずかながら滑面が認められる。本突起の長さは約２センチである。他の突起は先端を欠くものの、完形に近い。計測値ａは約12センチ、重量253グラム。第Ⅳ層の出土である。

同図３は上記２と同様、①番突起を欠失するもので、他の突起も大なり小なり破損している。②番突起の表面先端にはわずかながら滑面が見受けられる。腹面部に直径約３センチのほぼ円形の孔を穿つ。計測値ａは約14センチ、重量は600グラムである。第Ｖ層の出土。

同図４は全突起を欠き、背面部も大きく欠損する。破損部は打割時の粗雑な割れ面を残すが、②番突起の破損部のみは摩耗し、丸味を帯びる。腹面部には方形に近い孔が設けられており、長径は約４センチ、短径は約3.5センチである。計測値ａは推定12センチ、重量225グラム。第Ｖ層の出土である。

同図５は③番突起のみの資料で先端に附刃する。刃部形態は表裏両面より研磨した両刃で、刃縁は遺れ、裏面には刃こぼれも見受けられる。体層部との接着部（破損部）は摩耗しており、切断後の使用によるものであろう。最大長8.5センチ、重量55グラム。第Ｖ層の出土である。

②ヤコウガイ製貝匙

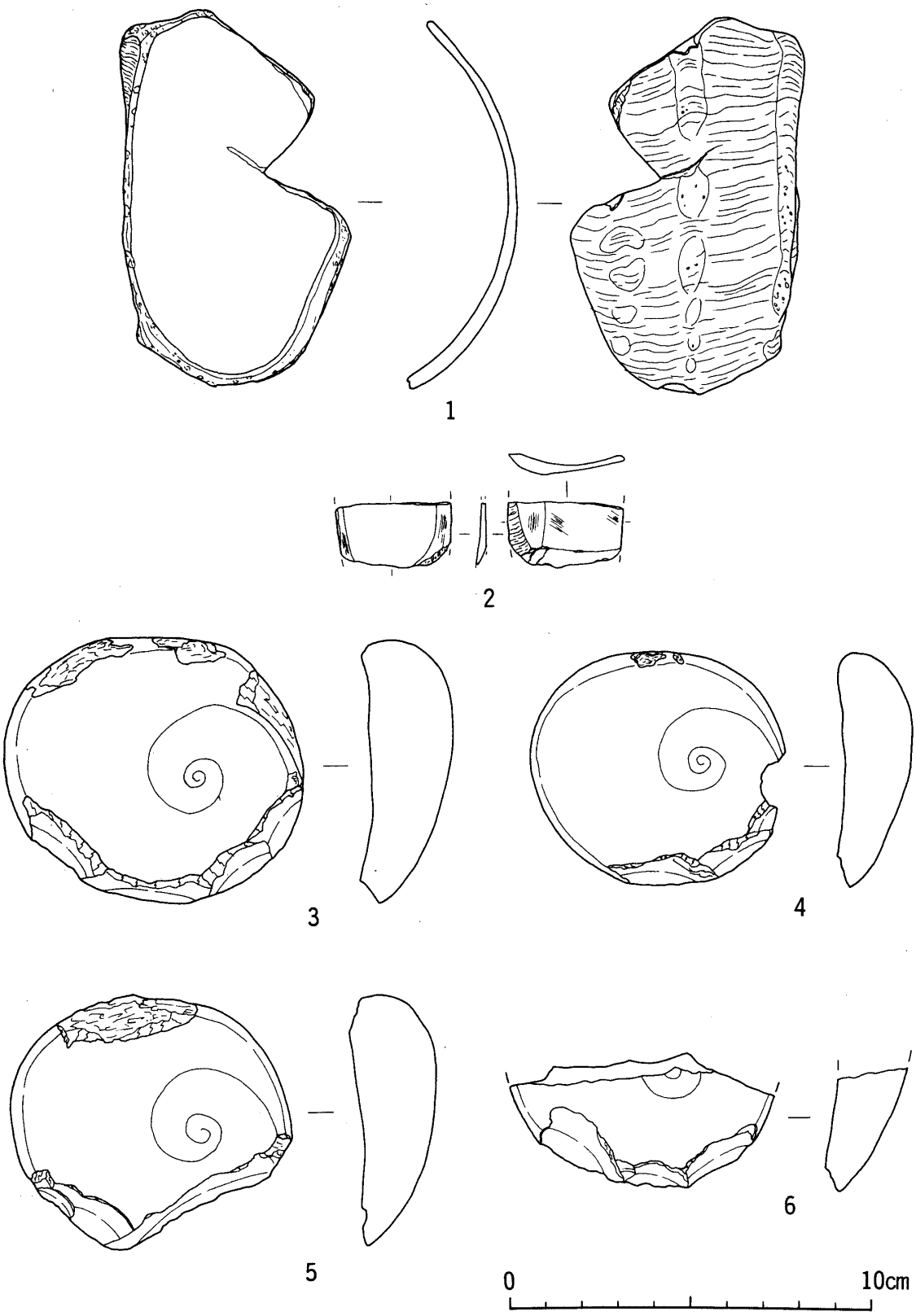
第11図１・２の２点で、ヤコウガイの体層部を利用するものである。同図１は粗造品で、一部破損しているものの大きさはほぼ実測図に示す通りで、周縁の加工部は丸味を帯び、内外面とも自然のままである。重量約90グラム。最大長10.5センチ、最大幅は6.5センチで、第Ｖ層の出土。

同図２は破損の著しい小破片であるが、両側縁を残しており、小型の製品とみてよい。内面の側縁部は研磨が施され、左縁は断面が丸味を帯び、右縁は刃縁状に尖る。外面はほぼ全面に研磨が施されるが、内面の中央部は自然のままである。最大幅3.2センチ、重量は3.4グラム。第Ｖ層の出土である。本標品は一般にいう貝匙よりサイズは小さく、また内面の両側縁に研磨を加えるなど、特殊な加工も認められ、貝匙と断定するわけにはいかないが、一応類似の形態が推定されることから本項で取り扱うことにした。正確な用途については今後の資料を待ちたい。

③ヤコウガイ蓋製品

ヤコウガイの蓋を素材とし、側縁部の一部に打欠手法によって附刃するもので、第11図３～６に示す４点がこれに当たる。

同図３は刃縁の範囲が円周の約$\frac{1}{2}$を占めるもので、刃縁の中央部は若干鈍くわずかに摩耗するが、両端は未だ鋭さを残している。上縁部にも打欠痕が認められる。縦7.2センチ、横8.2センチ、重量178グラム。第Ｖ層の出土である。



第11図　貝　製　品

同図4は刃縁の範囲が比較的狭いもので、円周の約$\frac{1}{3}$を加工する。刃縁は鋭く、右端には指先大の欠損部があり、上縁にも微細な打欠痕が見受けられる。縦6.3センチ、横7.0センチ、重量115グラム。第V層の出土。

同図5は刃縁が円周の約$\frac{1}{2}$に当たるが、下方で大きく欠失する。上縁部にも長さ3.5センチの打欠痕を有する。縦7センチ、横7.7センチ、重量140グラム。第V層の出土である。

同図6は刃部の破損品で、刃縁は円周の約$\frac{1}{3}$を測り、未だ鋭利である。上縁部における加工の有無は不明。第V層の出土。

④二枚貝有孔製品

第12図1～6に示す6点で、貝はいずれもエガイである。背面中央に粗孔を穿ち、割れ口は鋭い。孔は横長の楕円形に近く、長径は2センチ前後のものが多い。穿孔の方法についてみると、孔の断面形はラッパ状に外面に開いており、実験を試みた結果、内面からの打撃による穿孔の断面形と同じ形態であった。法量および出土層は第6表の通りである。

第6表　二枚貝有孔製品の法量および出土量

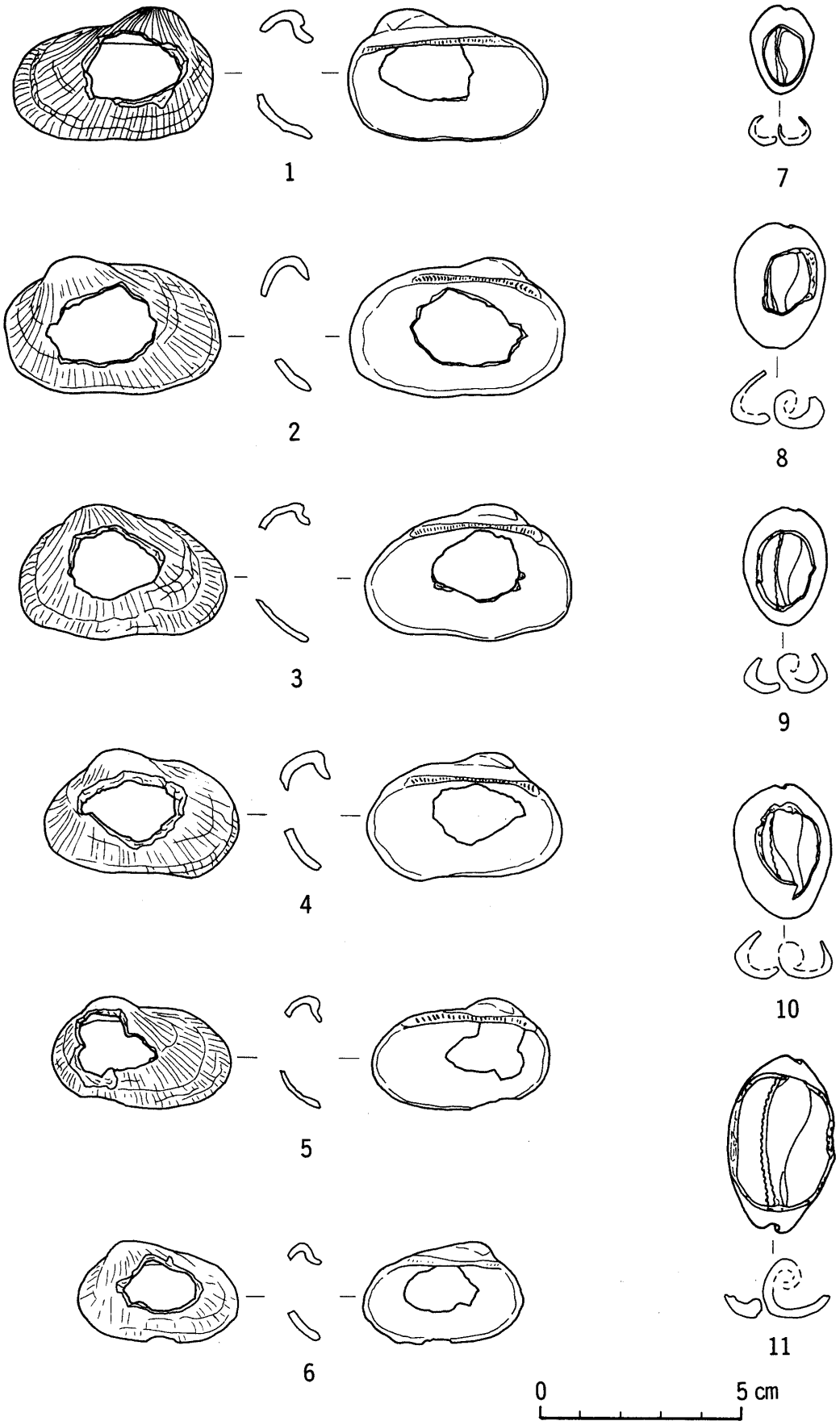
法量・出土層 / 図番号	殻長（cm）	殻高（cm）	孔径（cm） 長径	孔径（cm） 短径	重量（g）	出土層
第12図　1	4.9	3.2	2.3	1.7	9.4	IV
〃　2	5.3	3.3	2.7	1.8	7.2	崩壊砂
〃　3	5.0	3.3	2.2	1.7	8.5	IV
〃　4	4.8	3.1	2.2	1.5	7.7	IV
〃　5	4.3	2.8	1.9	1.5	5.1	IV
〃　6	4.0	2.6	1.6	1.2	4.8	IV

⑤タカラガイ製品

タカラガイの背面中央部を打欠によって除去したもので、第12図7～11に示した5点である。一般に孔の周縁は鋭い。サイズは大小各種あり、一定してない。法量・出土層および観察事項は第7表の通りである。

第7表　タカラガイ製品の法量・出土層および観察事項

法量等 / 図番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	出土層	貝種	観察事項
第12図　7	2.1	1.5	1.8	V	キイロダカラガイ	比較的小型で、孔の周縁は摩耗する。
〃　8	3.0	2.3	6.1	IV	ハナマルユキ	孔はやや右よりで、孔周縁の割れは鋭い。
〃　9	2.8	2.1	4.6	V	ハナマルユキ	孔周縁の割れは鋭い。
〃　10	3.2	2.4	7.2	V	ハナマルユキ	孔周縁の割れは鋭い。
〃　11	4.3	2.6	9.2	V	ホシキヌタガイ	比較的大型で、孔周縁の割れは鋭い。



第12図　貝　　製　　品

⑥貝刃

二枚貝の腹縁部を加工し、刃部を作りだすもので、2点得られた。

第13図1は腹縁部に附刃するもので、加工は同部の約$\frac{1}{2}$にあたる。刃縁は摩耗し鈍い。殻長4.3センチ、殻高4.2センチ、重量11.4グラムである。第V層の出土。

同図2は附刃範囲が比較的長く、殻頂付近まで達するものである。刃縁は摩耗し鈍い。殻長3.9センチ、殻高3.8センチ、重量7.8グラム。第V層の出土。

貝種はいずれもクチベニツキヒガイである。

⑦貝鏃

第13図3は頭部を欠失する貝鏃で、平面形は縦長の三角形に属し、両斜辺とも研磨によって刃を研ぎ出す。左辺は片面より、右辺は両面より研磨を加えている。厚さは薄いが鏃とみなしてよいであろう。破損部には孔の一部が窺え、孔径は約2.5ミリ、両面より穿つ。現存部の最大幅7.5ミリ、最大長21ミリ、厚さ1ミリ前後、重量0.13グラム。素材となった貝はヤコウガイとみられるが、アコヤガイの可能性もある。第V層の出土。

b）装飾品

①貝輪

第13図4～12の9点で、すべて破損品である。腹縁部を切り取り、内外両面のほか切断部や腹縁部を研磨するが、整形は一般に雑である。貝種は同図4～7・9～11がオオツタノハ、同図8はメンガイ類、同図12は不明である。

同図4は半欠品で、研磨は粗く、外面には放射肋が残る。内縁（切断部）は平坦、外縁（腹縁部）は自然形に近く尖る。幅は6～9ミリ、厚さは4ミリ前後あり、重量は5.15グラムである。第IV層の出土。

同図5は厚さ約2ミリ、幅1センチ前後のやや扁平の資料である。研磨は他に比べると良いが、それでも外面には放射肋が残る。内縁（切断部）は丸味を帯び、外縁（腹縁部）は尖り気味である。重量2.53グラム。第V層の出土である。

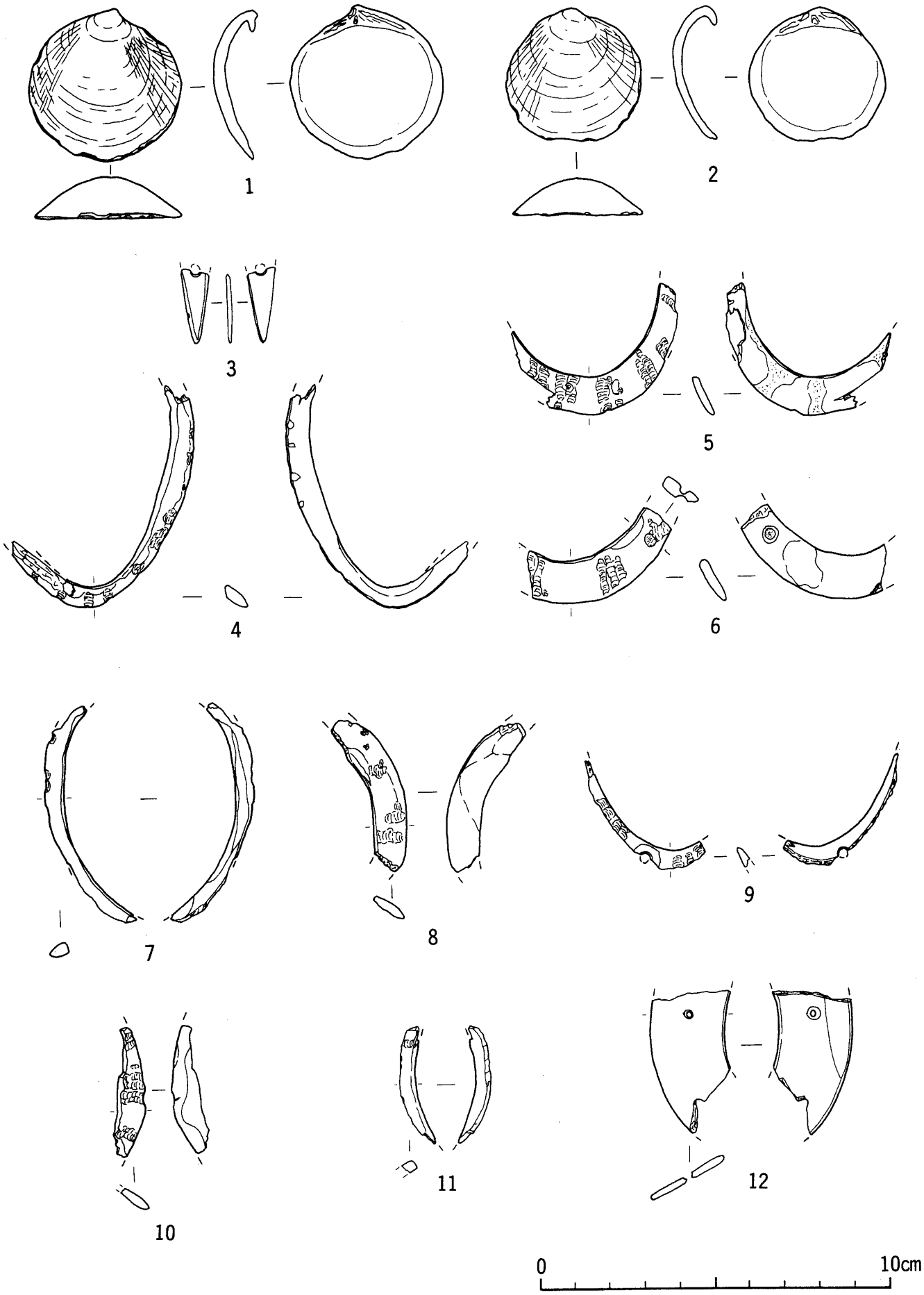
同図6は破片右端部で内外両面より穿孔を試みているが、貫通するにいたらず、途中で放棄している。研磨は良好で全体的に滑沢を有するが、外面には放射肋も残る。幅1.3センチ前後、厚さ約3ミリ、重量4.16グラム。第V層の出土。

同図7は断面形が三角形を呈し、幅6ミリ前後の細型のものである。外面は丁寧な研磨で、放射肋はほとんど残らない。内面も研磨を加え、稜を形成する部分もある。厚さは最大の箇所で3.6ミリを測り、重量は2.1グラム。第IV層の出土。

同図8は殻頂部の一部を含む資料である。研磨はやや良好。しかし、外面には放射肋が部分的に残る。内縁（切断部）はやや丸く、外縁（腹縁部）も若干丸味を帯びる。幅は1センチ前後、厚さは最大の箇所で3.5ミリで、他は2ミリ前後である。重量3.13グラム。第IV層の出土である。

同図9は外縁（腹縁部）を欠失するもので、したがって、幅は不明。研磨は雑で、外面は放射肋が顕著に残り、内縁は研磨を施すものの尖り気味である。腹縁部の破損面には孔の一部が見受けられる。両面からの穿孔であるが、主として外面から行う。現存部の厚さは最大の箇所で2.5ミリ、重量は0.62グラム。第V層の出土である。

同図10は破損が大きく、内縁部を欠く。研磨は表面のごく一部に見られ、大部分は自然面のままであるが、全体に手なれ様の滑沢を



第13図　貝　製　品

有する。厚さは3ミリ前後、重量1.27グラム。第IV層の出土である。

同図11も破損が大きく、外縁部を欠く。内外面とも研磨は比較的丁寧で、特に内縁は平坦に仕上げられている。厚さは3ミリ前後、重量は0.6グラム。第V層の出土である。

同図12は上記の資料と趣きを異にするもので、大型の貝輪とみられるものである。研磨は比較的丁寧で、上下の側縁部とも丸味を帯びる。扁平で、厚さは約3ミリ、幅は2.5センチ前後、破片上方には1孔が認められ、孔径は約2ミリ、両面からの穿孔によるものである。重量は4.07グラム。第IV層の出土である。

②体層部有孔の巻貝

巻貝の体層部に研磨によって孔を設けるもので、3点（第14図1～3）得られた。

同図1は体層部の内唇側に楕円形の1孔を穿つもので、孔は長径9.5ミリ、短径7.5ミリ、研磨による穿孔で、縦断面は凹状を呈する。孔の上方（次体層部）約2センチの位置に直径3ミリ前後の凹みがあるが、人為的なものかどうかは不明。全体的に摩耗している。最大長は8.2センチで、殻頂および外唇部はわずかに欠けている。重量は17.6グラム。崩壊砂より検出のため正確な出土層は不明。貝種はキバタケノコガイである。

同図2は体層部の表裏二面に穿孔するもので、ひとつは殻口（体層）の裏に13.5ミリ×9.5ミリの粗孔を穿ち、加工部を研磨するが、一部破損。他は殻口の上方に7.5ミリ×7ミリ、3.5ミリ×3.5ミリの2孔を設けるもので、加工面は研磨を施している。後者は殻口も数えると3孔となるが、それを意識してのものかどうかは不明。この貝にはまだ原色が残っており、貝種はジュセイラである。最大長3.8センチ、最大幅2.2センチ、重量4.9グラム。第V層の出土である。

同図3は体層部に1.7センチ×1センチ前後の1孔を設けるもので、加工面は研磨を加え、平坦な孔面をつくる。最大長4.2センチ、最大幅2.3センチ、重量6.8グラム。第IV層の出土。貝種はヒメショクコウラである。

③巻貝製装飾品

第14図4はフトコロガイの体層部を両面より研磨し、扁平に加工するもので、前溝部を残す。ペンダントであろう。完形品で、最大長13.5ミリ、最大幅7.5ミリ、厚さ2.5ミリ前後、重量0.11グラム。第V層の出土である。

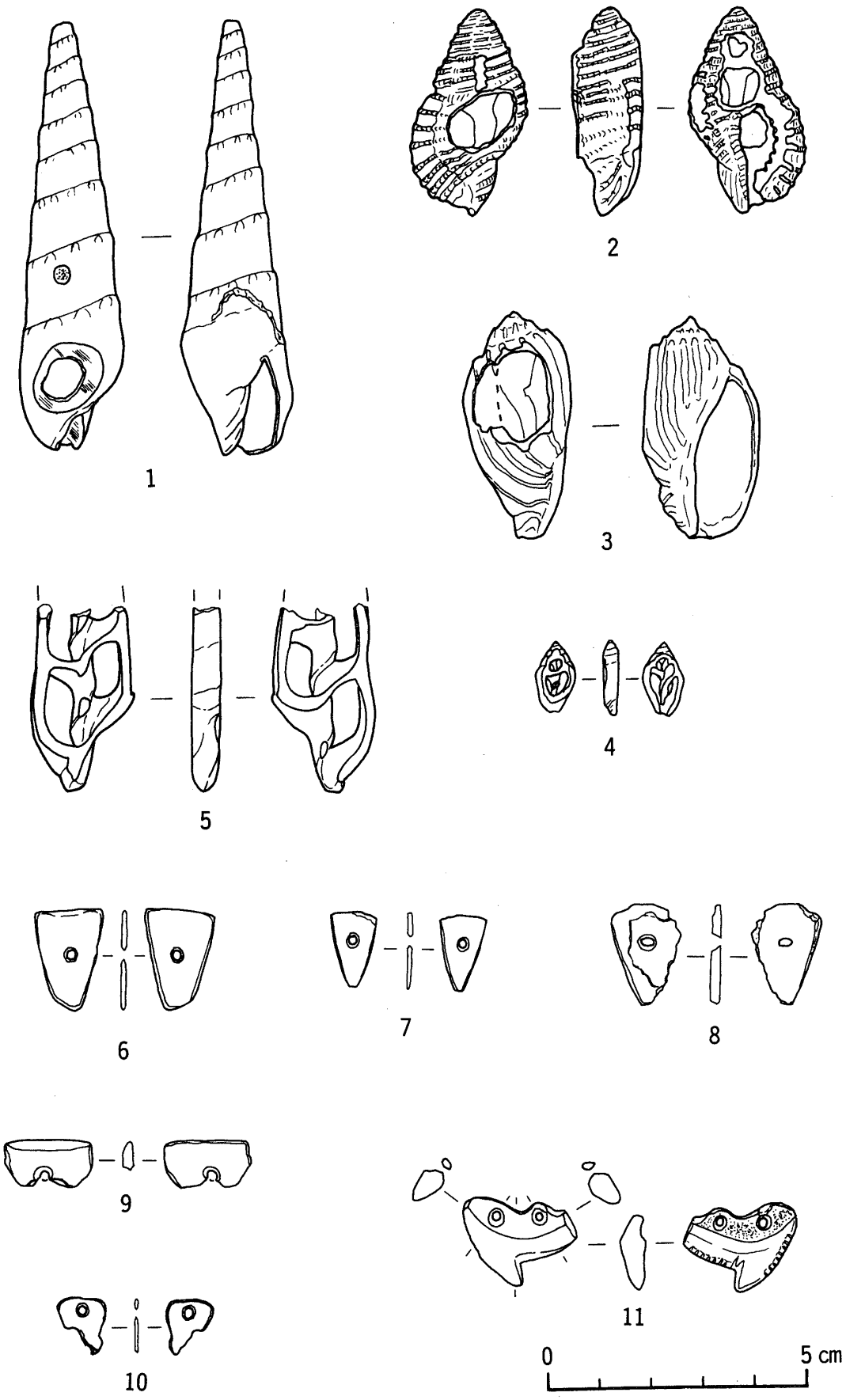
同図5は上記4と同様両面より研磨し、扁平（厚さ5ミリ前後）に仕上げるもので、螺塔部の大半を欠く。研磨は丁寧で、両面とも平坦である。本標品も前溝部を残す。最大長3.5センチ、最大幅2.0センチ、重量2.8グラム。貝種はタケノコガイである。第II層の出土。

④三角形有孔垂飾品

貝（アコヤガイまたはカキの類の可能性がある。）の真珠層を二等辺三角形に整形し、中央に1孔を設けるもので、側縁部に附刃の認められないものを本項にまとめた。

第14図6は先端を欠くが、破損部を再加工、再利用したものであろう。各辺に研磨を加えるが、特に附刃を試みた形跡は見受けられない。孔はほぼ中央に設けられ、両面より穿つ。最大幅1.3センチ、最大長1.95センチ、厚さ1ミリ前後、重量0.33グラム。第V層の出土。

同図7は先端と上辺の一部を欠くが、完形に近い。三辺とも研磨が施され、平坦である。両斜辺は若干弧状を呈する。孔は両面より穿たれ、上辺寄りに位置する。最大長14ミリ、最大幅9ミリ、厚さ0.7ミリ前後、孔径1.5ミリ、重量0.1グラム。第IV層の出土。



第14図　貝　製　品

同図8は上辺と斜辺の一部および先端部を欠く。側縁部の整形は雑で、やや平坦に仕上げられ、附刃は認められない。孔は片面より穿たれ、孔径は約2ミリである。最大長1.9センチ、最大幅1.3センチ、厚さ2ミリ前後、重量0.4グラム。第IV層の出土。

同図9は破損品で、上辺部を残すが斜辺部はほとんど原形をとどめない。上辺部は表面より研磨が施され、刃縁状に尖る。破片下端には孔の一部が見受けられ、穿孔は両面からなされている。厚さは1.5ミリ前後。第V層の出土である。

同図10は破損の著しいもので、形状や大きさは不明だが、三角形のペンダントに属するものであろう。破片上方に孔が設けられ、穿孔は両面から行われている。孔径は1.5ミリ。厚さは0.8ミリ前後。第IV層の出土。

⑤サメ歯を模した貝製品

第14図11に示すもので、完形品である。本区よりサメ歯有孔製品は5点得られており、本標品はイタチザメの歯を模したものである。

全面を研磨する精巧なもので、裏面はほぼ平坦であるが、表面は中央部が盛り上がり、周縁に漸次薄くなる。裏面の上方、つまり、2孔を結ぶラインは凹線状にくぼむ。裏面下端には刻みが施され、サメ歯の雰囲気をかもしだす。2孔を有するタイプで、穿孔は両面から行っている。孔径は左のものが1.5ミリ、右のものが1.2ミリで、裏面の左孔の直上には紐ずれ痕らしき不明瞭な溝が残る。重量1.54グラム。貝種は不明。第IV層の出土。

⑥イモガイ製ビーズ

本製品は精巧なものと粗造なものの2種に大別できる。

第15図1～9の9点は前者で、イモガイの螺塔部を切り取って円盤状に加工するもので、中央に1孔を設け、表裏面および外周の縁部を研磨する。同図9は平面形が楕円状を呈するが、他は円形である。裏面には孔周辺に螺塔部内面の螺旋状隆起が残る。サイズは直径6.5ミリ前後のものが多く、最小は同図1の5.4ミリ、最大は同図8の7.7ミリである。厚さはほとんどのものが一定しているが、中には同図4・7・9のように一定しないものもある。全面摩耗のため貝種はいずれも不明。各標品の法量および出土層を第8表に示した。

第8表　イモガイ製ビーズ(精巧品)の法量および出土層

法量ほか / 図番号	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径(mm)	重量(g)	出土層
第15図 1	5.4	1.5	1.3	0.04	V
〃 2	6.1	1.4	2.0	0.04	V
〃 3	6.3	1.0	2.5	0.03	V
〃 4	6.7	厚 2.0 薄 1.5	4.0	0.02	V
〃 5	6.8	2.2	2.3	0.11	V
〃 6	7.0	2.2	2.2	0.1	IV
〃 7	7.4	厚 2.4 薄 1.6	2.3	0.11	V
〃 8	7.7	2.1	1.9	0.12	V
〃 9	長径 6.4 短径 5.5	厚 2.0 薄 1.3	2.6	0.04	IV

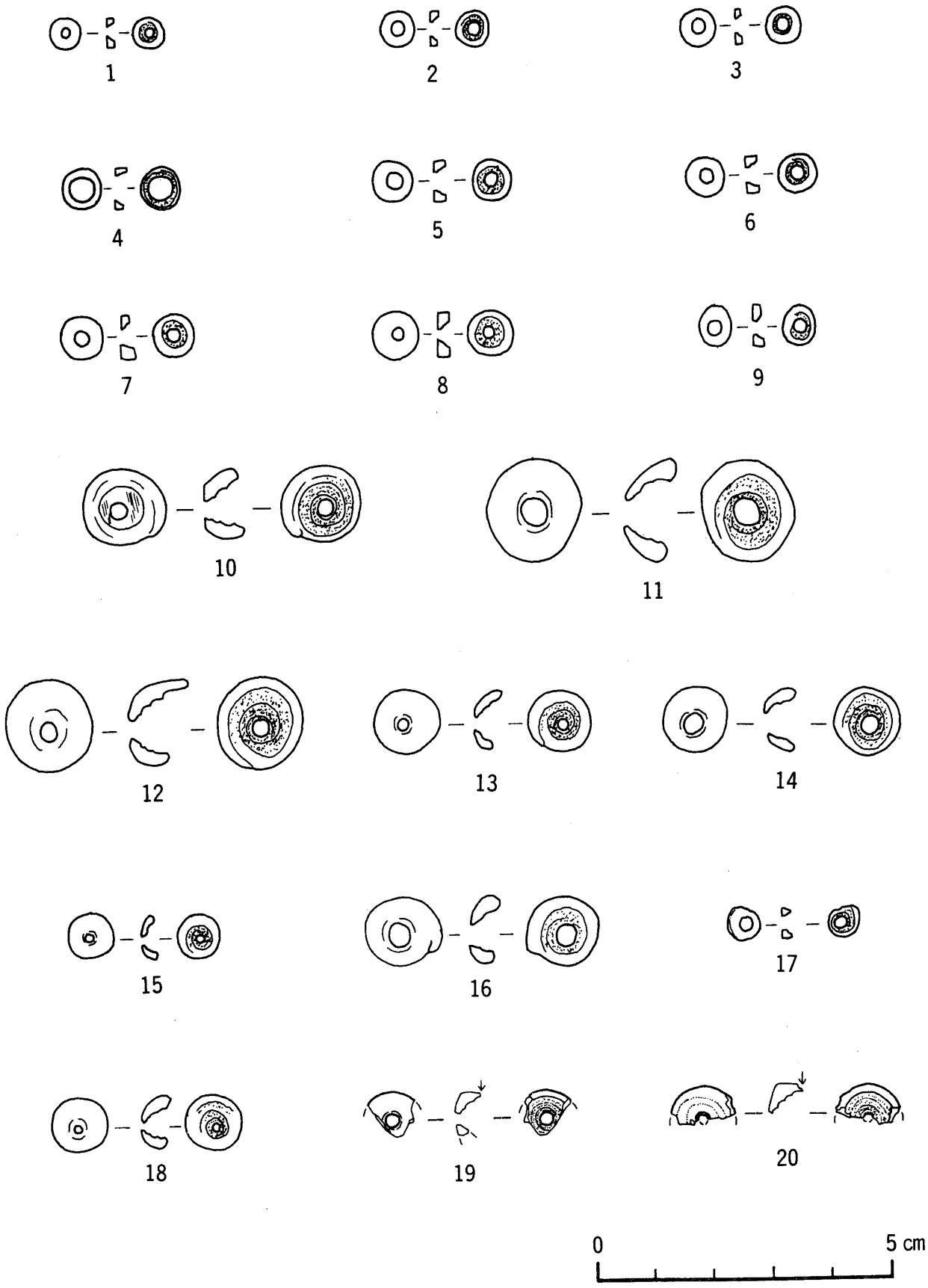
※厚：最も厚い箇所　薄：最も薄い箇所

粗造品は191点検出され、うち11点(第15図10～20)を図示した。

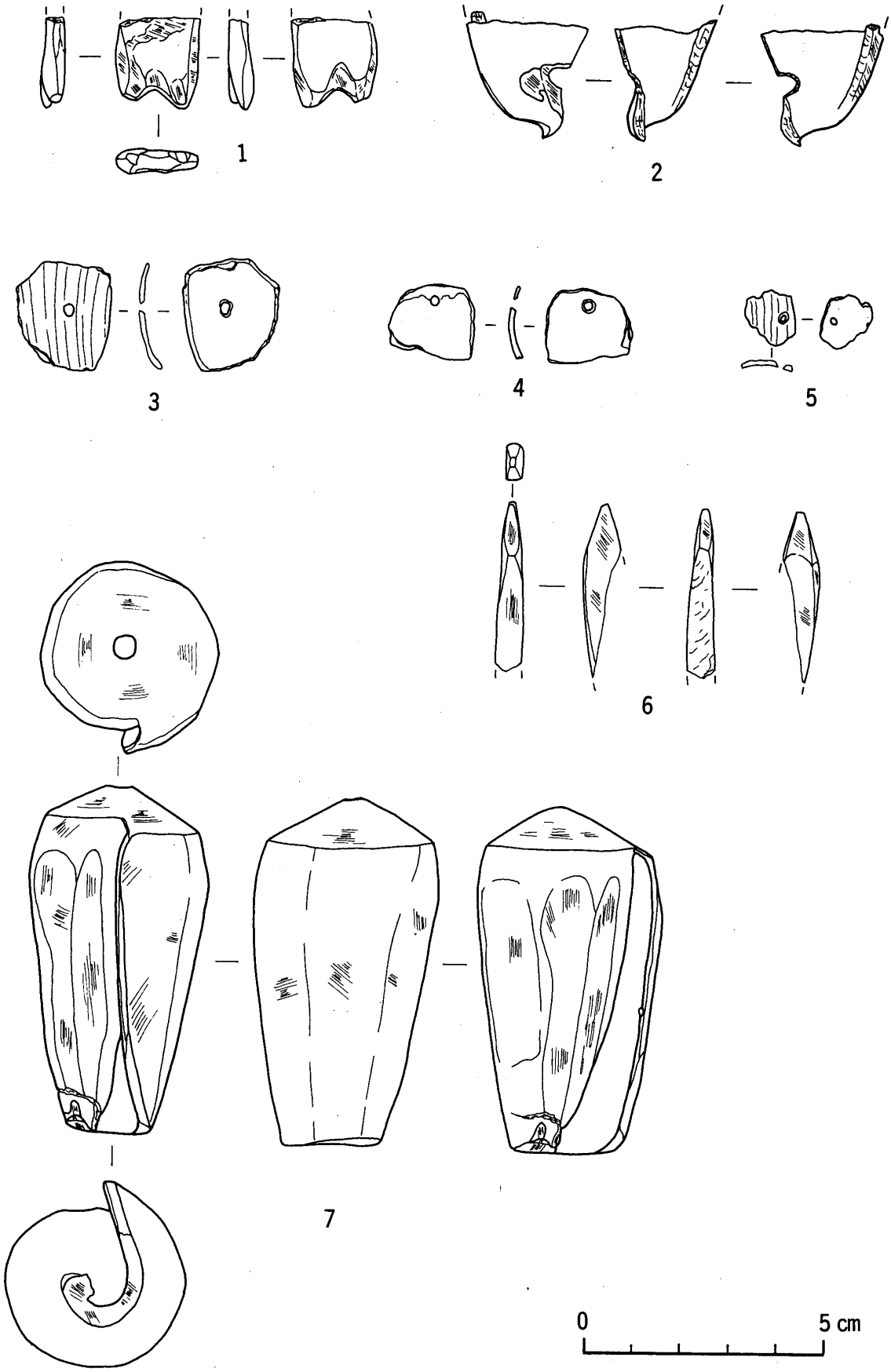
イモガイの螺塔部を利用するもので、表面は研磨され光沢を有するものの、内面には螺旋状隆起が残る。

同図10は殻頂部を外面より平坦に研磨するもので、同部には擦痕も観察できる。

同図19・20は螺塔部を擦り切り手法によって切断したもので、実測図に矢印でもって切断箇所を示した。いずれも破損品で、同図20



第15図　貝　製　品



第16図　貝　製　品

は全面灰色を呈し、火を受けた形跡がある。

同図12～15は第Ⅳ層、他は第Ⅴ層の出土である。

c）用途不明

第16図1～7は用途の判然としないものである。

①叉状製品

第16図1に示すもので、上半部を欠く。下端は叉状に分岐し、一方の長い方（右側）の先端はやや尖り気味で、短かい方（左側）の先端は平坦に整形される。表面と周縁部は種々な角度より研磨が加えられ、大小各種の稜を作る。裏面は自然のままである。貝種は不明で、巻貝であろうとのことである。現存部の最大長1.8センチ、最大幅1.7センチ、重量2.2グラム。第Ⅴ層の出土である。

②その他の有孔製品

第16図3～5に示すもので、破損が著しく、原形を推察し得ない。

同図3は破片中央に1孔を残すもので、穿孔は内面から行っている。本標品は破損が大きく原形や用途は不明。右側縁部はやや摩耗する。現存部の最大長22.5ミリ、最大幅19.5ミリ、厚さ1.2ミリ前後、重量1.0グラム。貝種はチョウセンサザエの可能性がある。第Ⅳ層の出土である。

同図4も内面より穿孔するもので、本標品も破損が著しく、用途や原形は不明。現存部の最大長14.5ミリ、最大幅17.5ミリ、厚さ1.4ミリ前後、重量0.6グラム。貝種はニシキウズ科の可能性有り。第Ⅳ層の出土。

同図5は表面だけから穿孔するもので、本標品も破損が著しく、原形を知り得ない。現存部の最大長11.4ミリ、最大幅は1.1ミリ、厚さは1ミリ前後、重量0.07グラム。貝種は不明。第Ⅴ層の出土。

③ニシキミナシ製品

第16図7はニシキミナシを素材とするもので、体層部および螺塔部全面を研磨し、自然面はほとんど残らない。殻頂部には直径4ミリの孔を穿つ。体層部では研磨面が6面見受けられ、内唇に沿う部分のものが最も研磨は明瞭で、縦位に軽い凹部をつくる。他の面はほぼ平坦になるが、稜は不明瞭である。外唇部も研磨が加えられ、加工面はほぼ平坦となり、前溝部も水平にカットされ、平坦に整形される。全面に研磨痕が残る。最大長7.2センチ、最大幅4.0センチ、重量41.3グラム。用途は不明。崩壊砂より検出。

④その他の製品

第16図2は巻貝の外唇部を含む資料で、全面手なれ様の光沢を有する。外唇部は研磨され、無数の擦痕が残る。前溝部に近く1孔を設け、孔部表面は研磨を施すが、内面には打欠痕が残る。用途は不明。重量2.1グラム。第Ⅳ層の出土である。貝種は不明だが、ソデガイ類に属するものであろう。

同図6は全面入念に研磨された精巧な製品であるが、破損が著しく原形を復元し得ない。したがって用途も不明である。一端は図のように原形をとどめているが、特に尖っているわけではなく、したがって刺突具とするわけにはいかない。横断面は四角形を呈していたようである。現存部の最大長3.5センチ、重量1.3グラム。貝種は不明。第Ⅴ層の出土。

D　土　器

神野貝塚では1982年および翌83年の2次にわたる発掘調査で16型式の在地土器のほか、

わずかながら九州からの搬入とみられる土器も出土をみた。

本区においては総数2,348点の土器片が得られたが、すべて在地土器である。それらは第9表のように13型式に分類され、中には神野B式類似土器（仮称）のような新資料も含まれる。なお、室川下層式、神野A式、面縄西洞式の3型式は得られていない。各型式の層位別出土状況は第9表のとおりである。

第9表　土器の型式別出土状況

型式名／層	神野B式	神野B式類似	具志川式	神野C式	面縄前庭式	面縄前庭式ループの胴部	松山式	面縄東洞式	嘉徳I式A	嘉徳I式B	嘉徳II式	神野D式	神野E式	伊波式	伊波系土器	有文土器(型式不明)	無文口縁	無文胴部	底部	計
I																		2		2
II																		17		17
III																				
IV				2	1	7			5	8	7	3		4	3	56	14	428	13	551
V	1		3	13	2	57	1	1	15	7	8	3	7	6	4	135	35	1,291	32	1,621
VI		1																		1
崩壊	1		2	1		1		1			2		1	3	2	8		127	7	156
計	2	1	5	16	3	65	1	2	20	15	17	6	8	13	9	199	49	1,865	52	2,348

a）神野B式土器

本区より口縁資料が2点（第17図1・2）検出された。いずれも小破片である。同図1は崩壊砂より得られ、出土層の特定は困難。同図2は第V層下部の出土である。

器種は深鉢形で、器形は本誌第7号(註1)の大型資料を参考にすると、胴部は脹らみ、頸部は「く」の字状の屈曲を示し、口縁部は外反する。最大径は胴部にあり、口縁は波状を呈する。

器厚は同図1が8ミリ前後。同図2がやや薄く、7ミリ前後である。焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者を多量に含み、後者は少量である。器色は同図1が暗褐色、同図2が茶褐色である。

器面調整は撫で手法を採用し、比較的丁寧で、擦痕はほとんど残らず、同図1の内面に不明瞭なものが見られるだけである。しかし、A－1区の資料には内面に条痕がかなり明瞭に残るものも見受けられた。

施文部位は口唇部・外面・口縁内面の3箇所である。

同図1は口縁上端に粘土帯を波状に繞して肥厚させるもので、肥厚帯の断面は方形である。肥厚帯には三叉状工具による刻文を密に施すが、工具は二枚貝の腹縁の可能性もある。施文は押し引き手法による。破片下端に沿って刻文が見られるが、おそらく斜行文であろう。現在のところ後者の工具の種類は不明である。口縁内面の上端には叉状工具による刻文が密に施されており、二枚貝の腹縁を工具に使用した可能性もある。口唇部には山形頂

部の左右にシャープな沈線を深く刻む。破損のため沈線の長さは知り得ないが、現標品のものは2センチを測る。

同図2は口縁上端の肥厚帯が小型で、凸帯状を呈し、断面形は丸味を帯びる。

肥厚帯外面の文様は叉状工具による刺突文だが、点が対になる箇所とならない箇所（下方の刺突文が不明瞭）がある。施文は若干深く、密である。口縁内面の文様も同種のもので、外面のものより刺突は深い。施文は密である。口唇部の文様は沈線文で、山形頂部の左右に刻むが、粗く幅のある沈線である。沈線は単箆によるもので、ひとつは長さが約1センチ、他方はそれより長いが、一部欠損のため全長は不明。口頸部の文様は斜行文で、工具は二枚貝の腹縁の可能性が強い。同文様は2.5センチ前後の間隔をおいて破片の左右に見られ、左側では2組、右側では1組認められる。施文は深く、明瞭である。

b）神野B式類似土器

新型式に属するとみられる土器で、本区より1点（第17図3）得られている。本標品は第VI層上面の出土で本トレンチの層位関係からすると室川下層式土器や神野A式土器に後続し、面縄前庭式土器のグループ(具志川式・神野C式・面縄前庭式）に先行する土器とみられる。前項の神野B式土器との前後関係であるが、本区（A－2区）では神野B式土器の下位の層より検出され、神野B式土器に先行する状況が窺えたが、A－1区においては神野B式土器の一部（2点）は室川下層式土器や神野A式土器等の出土する第VII層より得られており、現時点では一概に神野B式土器に先行すると確言はできない。今後の課題である。類例はヤーヤ洞窟遺跡（註2）・具志川島遺跡群東地点（註3）・野国貝塚群B地点（註4）などで検出されている。新型式の土器とみられるが、類例が少なく今回は命名を保留し、「神野B式類似土器」と仮称しておく。

器種は深鉢形で、口縁は軽く外反し、胴部が脹らむ器形で、胴部の最大径は口径（推算19センチ）よりも大きく、面縄前庭式系統の器形に類似する。底部は採集されていないが、前後の型式からして尖底が想定される。口唇部は若干丸味を帯びているが、平坦に近い。口唇部の調整の結果、若干粘土が外面に食み出している。

器厚は破片上方で僅かに厚く9ミリ前後、下方に漸次薄くなり7ミリ前後となる。器色は茶褐色で、胴部外面は煤けて黒味がかる。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者が圧倒的に多く、粒子の粗いものもある。焼成は良好である。

器面調整は条痕を施した後、撫で消す手法を採るが、撫でが弱いため条痕は残る。条痕は外面では右傾のものを主体とするが、部分的に左傾のものもみられる。内面は主に横位の方向で、外面のものに比べると不明瞭である。

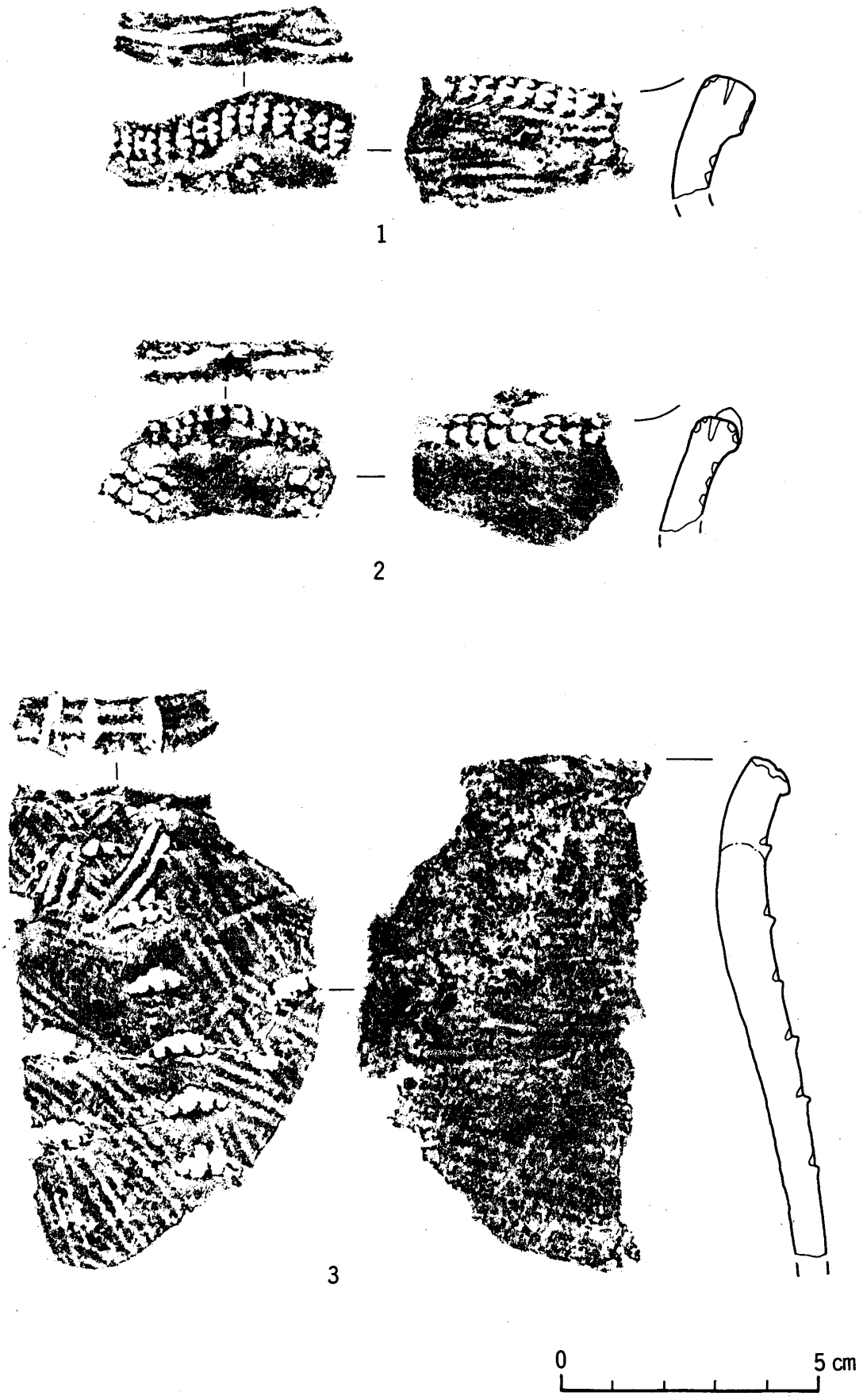
施文部位は口唇部と外面で、口縁内面は無文である。

口縁外面では二枚貝の腹縁による刻文を斜行させ、本標品では3列認められる。施文は深めで、文様は胴下半部に及ぶとみられるが、現在のところ下限は不明である。口唇部の刻文も同種工具によるもので、施文は深く、同部を1センチ前後の間隔で刻む。

c）面縄前庭式土器グループ

本項の土器は文様・器形上の特徴から次の3型式に分けられる。

①具志川式



第17図　神野Ｂ式土器（１・２）・神野Ｂ式類似土器（３）

②神野C式
③面縄前庭式

①は具志川島遺跡群東地点（岩立地区）出土の土器を標式とするもので、さらにA～Cの3タイプに細分される(註5)。②は本遺跡出土のものを標式とし、後述の面縄前庭式に先行する(註6)。③は河口貞徳氏の命名によるもので、面縄第4貝塚前庭部出土の土器を標式とする(註7)。

本区では前記3型式とも得られている。

①具志川式

具志川式は上記のようにA～Cの3タイプを含むが、ここでは一括して取り扱うことにする。

第18図1～5に示した5点で、すべて口縁の小破片である。器種は深鉢形が4点（同図1～4)だが、同図5は口径が推算5.3センチと小さく、壺形の可能性もある。口縁部は直口のものはなく、すべて外反する。前回の報告（註8）によると、具志川A式は外反の度合いが弱く、具志川B式以降外反は強まるようである。同図1は前者で、つまり、外反の弱いタイプであり、後述のように具志川A式の可能性が高い。その他の資料は小破片のため詳細は不明だが、後述のようにB式かC式のいずれかであろう。

器厚は6ミリ前後のものが一般的で、最も厚いものは同図3の約8ミリである。同図4は内面剝離のため不明。器色は茶褐色のものが多いが、同図1は暗褐色を呈する。焼成はすべて良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、一般に混入量は多い。同図4・5にみられる混入物は石英だけである。

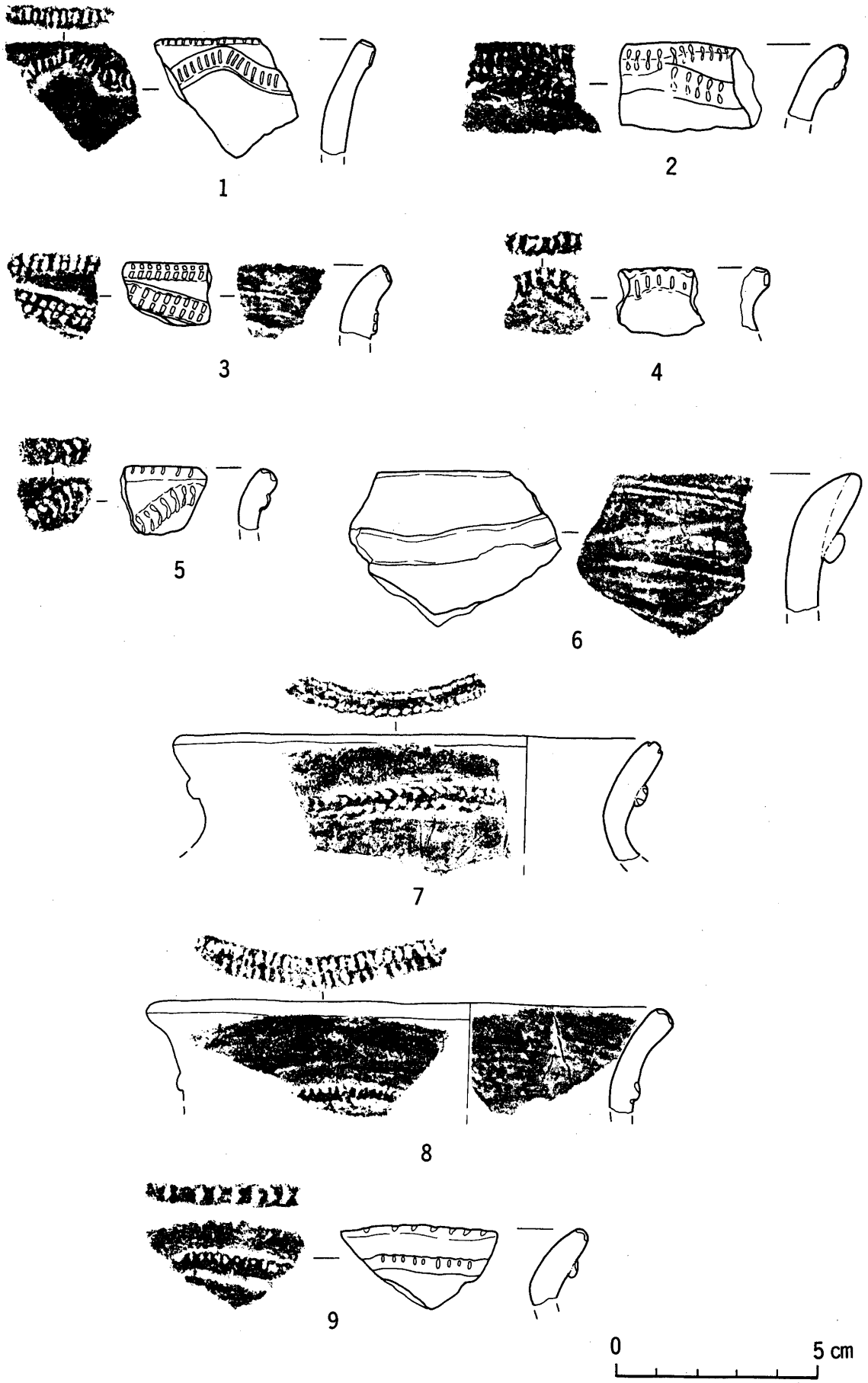
器面調整は撫で手法を用い、比較的丁寧である。同図3は内面に横位の擦痕が残る。

同図1は口縁上部に刻目凸帯を波状に配するもので、波状の頂部は口唇に接する。刻目は幅約4ミリの単篦によるもので、施文は密である。凸帯の幅は5.5ミリ前後、厚さは約1ミリ、断面形は扁平な台形である。外面には刻目凸帯以外の文様は見受けられない。口唇部は平坦に整形され、凸帯と同種の刻文を密に刻む。本標品は器形・文様上の特徴から具志川A式に分類できるかと思う。崩壊砂より得られたため明確な所属層は不明。

同図2は口縁上部に波状凸帯を貼付するもので、波状の彎曲は緩やかである。凸帯には半截竹管状工具による刺突文が密に施されており、断面舌状の口唇にも同種の文様を施文する。口唇部の刺突文は不明瞭で、刺突文が対を成す箇所とそうでない部分がみられる。また、本標品の左側、つまり、凸帯と口唇の接する箇所では口唇の文様は凸帯上に及ぶ。凸帯の幅は7.5ミリ前後、厚さは約2ミリで、断面形は半円状を呈し、扁平で目立たない。凸帯下の頸部に現資料の範囲では文様はみられない。具志川B式かC式のいずれかであろう。第V層の出土である。

同図3は凸帯の断面が方形に近く、凸帯は幅約6ミリ、厚さ約2ミリ、左端では口唇に接する。凸帯および口唇には叉状工具による刺突文が密に施されており、施文はいずれも深く、鮮明である。口唇は平坦である。口径は推算9センチで、小型の部類に属する。崩壊砂よりの採集品。具志川B式かC式の資料であろう。

同図4は内面が剝離したもので、凸帯は波状を呈し、頂部は口唇に接する。凸帯は扁平で、残存部だけみるなら肥厚口縁というイメージである。凸帯には単篦による刻文が深く施文され、口唇部にも同種の刻文を刻む。本標品は単篦を使用しており、具志川Ba式の可能



第18図　具志川式土器（1～5）・神野C式土器（6～9）

性が強い。第Ⅴ層の出土である。

同図5は半截竹管状工具による刺突文を凸帯および口唇部に密に施文するもので、刺突文は連結し、弧状を呈する。凸帯の断面形は扁平な半円状で、幅4ミリ前後、厚さ約1ミリである。凸帯の波状の彎曲は急である。口唇部は丸い。具志川B式かC式のいずれかであろう。第Ⅴ層より検出。

以上、本区出土の具志川式について述べた。いずれも波状凸帯の頂部が口唇部と接する特徴を持つ。凸帯下の胴部文様については良好な資料に恵まれず、言及することはできなかった。

②神野C式

3型式の中では最も多く16点出土した。本型式は口頸部の文様によって5種に細分できるが(註9)、本区ではそのうち第3種の確実な資料は得られてない。

器種はすべて深鉢形に属する。

第1種は1条の貼り付け凸帯を繞らすもので、第18図6～9に示すものである。このグループはaとbの2種に細分され、前者は凸帯が波状に、後者は直線的に展開する。

同図6は口縁部の外反は弱く、口唇は尖り気味である。器厚は約9ミリと厚手で、特に口縁部(凸帯上方)は外面に粘土を貼り付け、そのため厚くなっている。器色は暗褐色で、焼成は良好。多量の石英と微量の黒雲母を含む。器面調整は撫で手法によるが、内面は撫でが弱く、箆状工具による横位の擦痕が残る。外面の文様は緩やかな波状凸帯を頸中央部に貼付するもので、1条貼付する例であろう。第1種aに属する。凸帯の幅は7～8ミリとやや大型で、断面形は半円状を呈す。凸帯上は無文で、外面は凸帯以外の文様は見受けられず、口唇部も無文である。第Ⅴ層の出土。

同図7は口縁が強く外反するもので、頸部下端の屈折の状況から肩の張る器形が想定される。口径は推算12センチ、器厚は約5.5ミリである。器色は茶褐色で、焼成は良好。胎土混入物は石英や黒雲母などで、後者は微量である。器面は丁寧に撫でられ、擦痕は見受けられない。頸部の凸帯は1条で、ほぼ中央に施され、緩やかな波状を呈する。凸帯の幅は5ミリ前後、厚さは約2ミリで、断面形は半円状である。凸帯上には幅4ミリの叉状工具による刺突文が密に施される。凸帯の上下に文様は見受けられない。口唇上には凸帯と同種の刺突文が密に配されており、同部は丸味を帯びる。本標品は第Ⅴ層の出土で、第1種aに分類できる。

第1種bに属するものは同図8・9の2点である。

同図8は口縁部の推定復元を試みたもので、外反する器形である。口径は推算13センチ。器厚は6ミリ前後。器色は茶褐色で、焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者は微細である。器面調整は撫で手法によるが、内面には横位の擦痕が僅かに見受けられる。外面の凸帯は口唇下約2センチの箇所に繞らされ、前記2点と比べるとやや下方に位置する。凸帯は僅かに波状を呈するものの巨視的には水平凸帯に含めてよいであろう。凸帯の幅は4ミリ前後、厚さは約2ミリで、微隆線状を呈し、断面は半円形に属する。凸帯上には叉状工具による刺突文が密に施文され、そのため凸帯の両縁は判別がつかない。同凸帯の上下には文様は見受けられない。口唇部は丸く整形され、幅約5ミリの半截竹管状工具による刻文が密に刻まれている。第Ⅳ層の出土である。

同図9は内面の破片下端に屈曲部が残っており、頸部は「く」の字状に外反する例であ

ろう。器色は淡茶褐色。器厚は約8ミリで、焼成は良好である。胎土の混入物は石英で、粒子は比較的細かい。器面は丁寧に撫でられており、擦痕は見受けられない。外面の文様は水平凸帯を口唇下約1センチの箇所に配する。凸帯は1条認められ、断面は下部に厚くなり、いびつな半円状を呈する。凸帯の幅は4ミリ前後で、厚さは約2ミリである。凸帯には棒状工具による刺突文が施される。口唇は丸く、半截竹管状工具による刻文が5ミリ前後の間隔で施文される。崩壊砂よりの出土。

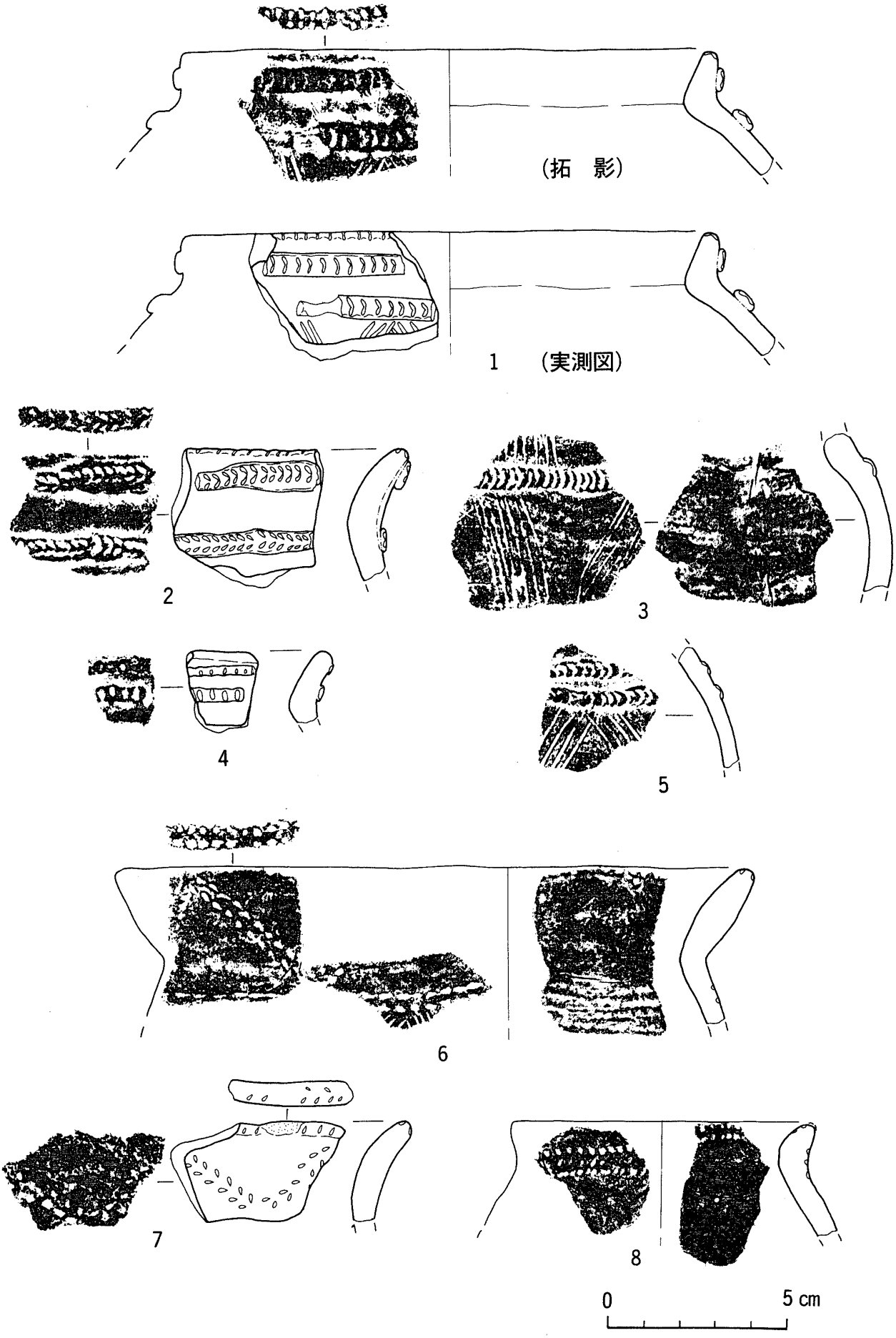
第2種は第19図1～3に示す3点である。貼り付け凸帯を2条配するもので、(a)凸帯上に刻文を施すものと(b)凸帯上無文の2種に分けられるが、本区のものはすべて(a)に属し、(b)は得られてない。

同図1は口縁部が「く」の字状に著しく屈曲するもので、口径は推算15センチ、器厚は6ミリ前後である。焼成は良好。石英を多量に含む。器色は暗褐色を呈し、器面は比較的丁寧に撫でられている。外面の文様は口縁上部と頸胴部の境に水平凸帯を1条ずつ配するもので、上下の凸帯の間隔は約1.5センチあり、頸部は無文である。凸帯の幅は6～7ミリの幅広のタイプに属し、厚さは3ミリ前後で、断面形は丸味を帯びるが、全体的に扁平である。凸帯上には半截竹管状工具による弧文が密に施されている。丸味を帯びた口唇には半截竹管状工具による刻文が刻まれており、施文は密である。下段の凸帯直下には斜沈線が破片の左右に見受けられ、右側のものからすると逆「V」字状に下方に垂下するものであろう。右側のものは3本を単位とした沈線で、左側のものも3本認められる。第V層の出土である。

同図2は口頸部が緩やかに外反するものである。器厚は7ミリで、頸部には粘土が薄く貼られており、やや厚い。器色は茶褐色で、外面は煤けて黒味を帯びる部分もある。焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者は微量である。器面調整は丁寧な撫で仕上げである。文様は断面の扁平な凸帯を口頸部上下に各々1条配するもので、凸帯間の頸部は無文である。凸帯は5～8ミリの幅を有し、厚さは約2ミリである。凸帯上には半截竹管状工具による「ハ」の字状文あるいは弧状の刺突文を密に施す。口唇部は丸く、叉状工具による対の刺突文が施文される。下段の凸帯下に胴上部が僅かに残っており、文様は認められない。第IV層の出土である。

同図3は頸部から胴上部の資料で、口縁部を欠く。最大径は胴上部に位置するタイプとみられ、同部の径は推算18センチである。器厚は約7ミリ。器色は茶褐色で、焼成は良好である。石英を多量に含む。文様は頸部と胴部の境に横位の凸帯を1条繞らし、口縁部も同種の凸帯を有していたであろう。凸帯は半截竹管状工具による刺突文が刻まれており、施文は密で深い。凸帯の幅は約5.5ミリ、厚さは2ミリ前後で、断面形は半円状だが扁平である。凸帯の上下には沈線文が配されており、上部（頸部）のものは縦位で8本認められ、下部（胴部）の沈線群は3箇所に見受けられ、逆「V」字状に垂下する文様であろう。破片中央の沈線文は7本で、右側のものも7本確認できる。また、右側の沈線群の1本は「く」の字状に屈折しており、中途で屈曲する例かと考えられる。器面調整は撫で手法で、内面に横位の擦痕が不明瞭ながら残る。第V層の出土である。

第3種は3条の貼り付け凸帯を有するもので、前述のように本区では確実なものは得られてないが、第19図4・5は本種に属する可能性が高いものである。



第19図　神　野　C　式　土　器

同図4は口頸部が「く」の字状に屈曲するものである。器厚は6ミリ前後、器色は茶褐色で、内面は煤けて、黒味を帯びた箇所も見受けられる。焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者は微細で、混入量も少ない。器面は丁寧に撫でられ、擦痕はほとんど見られない。文様は口縁上部に横位の凸帯が2条貼付され、下方のものは右端でとぎれている。凸帯は上のものは幅約3ミリ、厚さ約1ミリと小型で、下のものは幅約4ミリ、厚さ約1.5ミリである。凸帯の断面形は扁平な方形に近い。上下の凸帯間は7ミリ前後と狭く、同部は無文である。口唇部は丸く、無文である。第V層の出土である。同図5は頸下部から胴上部の資料である。器厚は薄く約4ミリ、器色は茶褐色で、焼成は良好である。胎土混入物は石英で、含有量は比較的少ない。器面調整は撫で手法で、丁寧である。文様は頸胴部の境に2条の横位凸帯を配するもので、凸帯はいずれも微弱な波状を呈し、間隔は狭く8ミリ前後である。凸帯の幅は4～5ミリ、厚さは約1.5ミリで、断面は半円形だが扁平である。凸帯上には半截竹管状工具による弧状の刺突文を密に刻む。凸帯下（胴部）には4条1組の沈線によって逆「V」字文を配する。第V層の出土。

以上の2点は凸帯が2条認められるが、凸帯の位置からして第3種（3条の凸帯を有するもの）と思われるものである。一般に凸帯を2条貼付する（第2種）場合、口縁上端と頸・胴部の境に1条ずつ配し、凸帯間は広くなるのが通例であるが、上記2点の場合、凸帯は口縁上部（同図4）あるいは頸下部（同図5）に集中しており、凸帯間も狭くなっている。このことは第3種の施文手法に類しており、したがって、その可能性の高いものである。

第4種は凸帯の代わりに刻文を施すもので、第19図6～8に示す3点はこれに属する。

同図6は口頸部が「く」の字状に屈曲し、外反するものである。口径は推算18センチ、器厚は6ミリ前後である。器色は茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に微砂粒を混入するが目立たない。叉状工具による点刻文を頸・胴部の境に1条横走させ、上部の口頸部には同種の点刻文によって鋸歯文を描く。点刻文の幅は約4ミリで、伊波式土器にみられる点刻文に比べると小型で、刺突の手法を採用する。口唇部は丸く、同種の点刻文が施されている。点刻文の施文はいずれも深く、明瞭である。横位点刻文の直下（胴部）には斜沈線が僅かに見受けられ、左下がりのものは3本、右下がりのものは4本認められる。逆「V」字文であろう。施文は浅く、不明瞭である。器面調整は撫で手法で、比較的丁寧であるが、頸部内面には横位の擦痕が残る。第V層の出土である。

同図7は口頸部が曲線的に外反するもので、器厚は7ミリ前後を測る。器色は茶褐色で、焼成は良好である。石英を多量含み、黒雲母も散見される。器面調整は撫で手法。口頸部に叉状工具による点刻文を鋸歯状に配するもので、頸部以下の文様は不明である。点刻文は前記の同図6と同様刺突手法によるが、点刻文は「ハ」の字状を呈する。丸味を帯びた口唇にも同種の点刻文を施文する。施文はいずれも密である。第V層の出土。

同図8は口縁部の推定復元を試みたもので、口径推算8.5センチの小型である。短頸の壺形に近い器形で、口縁は軽く外反する。頸部はしまり、胴部へ脹らみながら移行する。胴上部に最大径のくるタイプとみられる。器厚は6ミリ前後。器色は暗褐色で、焼成は良好である。多量の石英のほか黒雲母を少量含む。

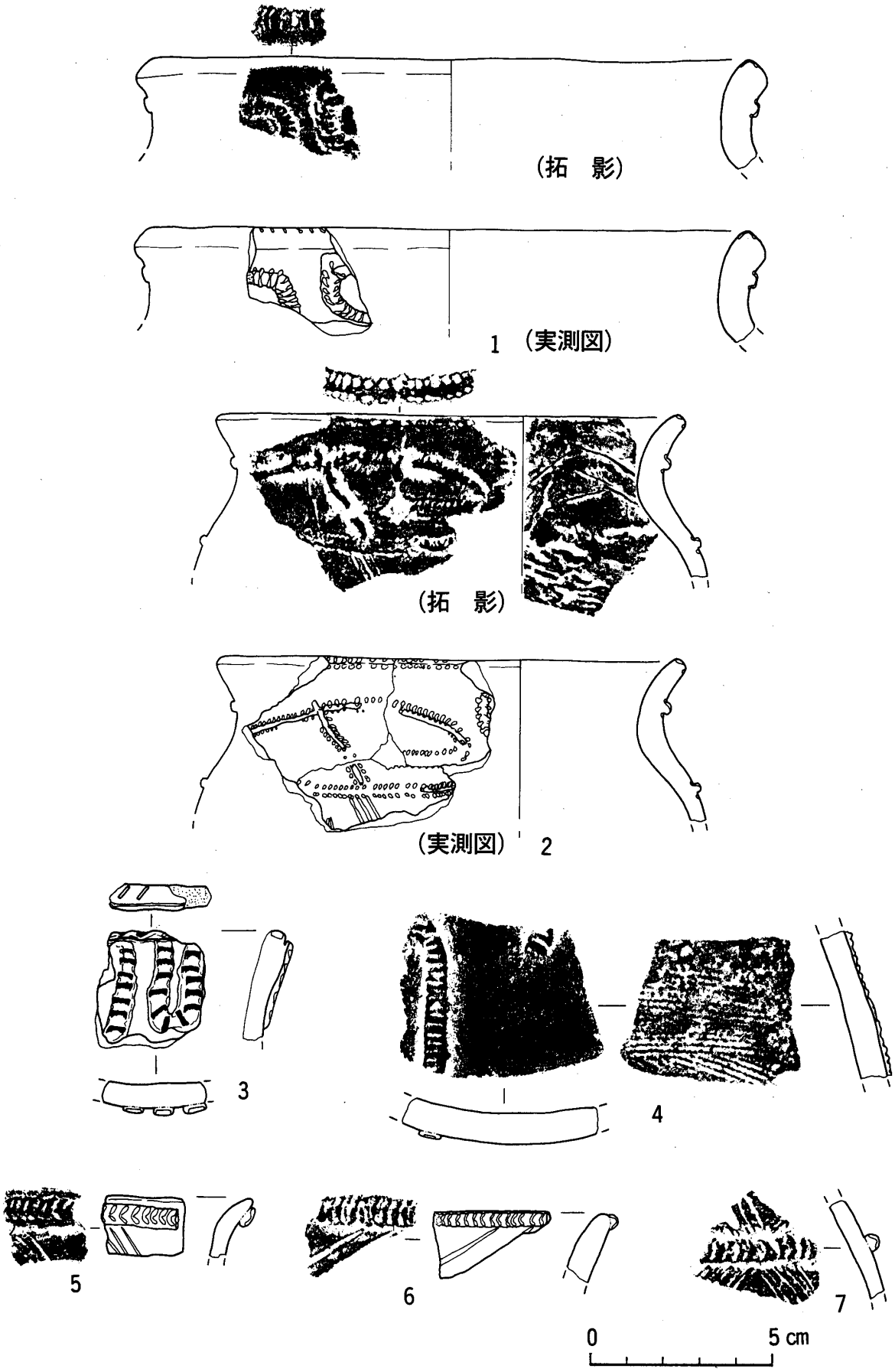
すべて微砂粒である。器面は丁寧に撫でられ、擦痕は見受けられない。頸中央部に横位の刻文を3条配するが、上位2組は叉状工具による点刻文で、「ハ」の字状を呈する。点刻文は刺突手法によっており、密である。下位の1条は棒状工具か前記叉状工具の一端を利用して施文したもので、施文は押し引き手法によっており連続的に施される。前記叉状工具の幅は約4ミリである。口縁内面の上端にも口唇に沿って点刻文が1組施される。文様は「ハ」の字状の刺突文で、半截竹管状工具によるものであろう。口唇部は破損し、文様の有無を確め得ない。第V層より検出。

第20図1～4の4点は特殊な曲凸帯によって文様を構成するもので、第5種に分類される。

同図1は口縁の外反する器形で、口縁上端は僅かに肥厚し、外面には不明瞭ながら稜が形成される。口径は推算17センチ。器厚は8ミリ前後あり、器色は茶褐色で、焼成は良好である。多量の石英のほか黒雲母もわずかながら認められ、粒子は比較的細かい。器面は丁寧な撫で仕上げで、擦痕は見受けられない。口頸部に曲凸帯を貼付するもので、2条認められるが、展開の詳細は不明である。凸帯の幅は4～6ミリで、厚さは約1.5ミリである。凸帯の断面形態は扁平な半円状である。凸帯上には先端の幅約4ミリの半截竹管状工具によって刺突文を密に刻む。刺突文は微細で、目立たない。同種の文様が口唇上にも施されているが、施文は浅い。凸帯以外の文様は見受けられない。第V層の出土である。

同図2は頸部がしまり、口縁は外反するもので、胴上部の脹るタイプであろう。口径は推算13センチ。器色は茶褐色で、焼成は良好である。器厚は5ミリ前後で薄く、石英を多量に含み、黒雲母も微量見受けられる。器面は比較的丁寧に撫でられているが、胴部内面には粗めの擦痕が残る。文様は頸部と胴部との境に横位の凸帯を1条繞らし、その上部、つまり口頸部には曲線と直線の凸帯を組み合わせた文様を配し、この文様は丸味のある「ヤ」の字状を呈する。破片右端には縦位の曲凸帯の一部が見受けられるが、全体の形状は不明である。凸帯は幅2ミリ前後、厚さは約2ミリの華奢なもので断面形は半円状か三角形を呈する。凸帯の両側縁には刺突文を密に刻むが、文様効果とともに凸帯を固定する役割も兼ねた施文であろう。凸帯が剝離した箇所は縁辺部の刺突文のみ残る。凸帯間は無文である。横位凸帯の下方（胴部）には3本を単位とする斜沈線が見受けられるが、逆「V」字文か「Y」字文かは不明。口唇は方形を呈し、叉状工具による刺突文が刻まれている。文様は口唇を食み出して、一部口縁外面にも及ぶ。第V層の出土。

同図3も口縁資料で、「く」の字形に屈折する例とみられる。器内面は剝げ、原形をとどめない。器色は茶褐色で、焼成は良好である。多量の石英のほか粒子の細かい黒雲母も散見される。器面調整は撫で手法である。文様は口縁外面に凸帯を貼付するもので、2箇所にみられる。右側のものは「U」の字状を呈し、左側のものは下端が欠け、原形を復元し得ないが、この凸帯の上下両端はカーブを描いた形跡を残しており、曲線文の一部である可能性が強い。凸帯の断面形は方形を呈し、幅は3～7ミリで厚さも一定しておらず（2～3ミリ）、雑な作りである。凸帯上には単篦による刻文が刻まれており、施文は上から下の方向である。口唇は雑だが、一応平坦に整形され、斜め方向の刻文が施され、施文は深い。刻文の長さは約5ミリで、凸帯上のものと一致する。また、口唇の外面に沿ってシャープ



第20図　神野Ｃ式土器（１～４）・面縄前庭式土器（５～７）

な沈線を横走させる。第Ⅴ層の出土。

同図4は口頸部を欠失する胴上部の資料である。器厚は8ミリ前後で、やや厚い。器色は茶褐色、焼成は良好である。多量の石英のほか黒雲母を微量含む。器面調整についてみると外面は丁寧な撫で仕上げであるが、内面は撫でが弱く、横位の条痕が残る。文様は凸帯文が胴上部に及ぶ類例の少ない資料である。凸帯には刻目が施されており、2箇所に凸帯が見受けられる。破片左方のものは上部で若干カーブを描くが、ほぼ縦位に垂下するもので、さらに下方に延びる。下限は不明。右方のものは下端部の資料で、左下がりに貼付され、刻目のひとつは凸帯の下端を越えて刻まれている。凸帯の幅は5ミリ前後であるが、中には約3ミリと細い箇所もある。厚さは1ミリ前後で、断面形は扁平な方形である。凸帯上の刻目は幅約4ミリの単篦によるもので、施文は密で深い。刻目凸帯以外の文様は見受けられない。第Ⅴ層の出土である。

以上、本区出土の神野C式について述べたが、次に簡単にまとめておきたい。

器形についてみると口頸部は曲線的に外反するものと「く」の字状に屈折するものがある。後者は現在のところ具志川式や面縄前庭式には見られず、神野C式特有のものと言える。

口頸部の文様についてみると第1種は1条の凸帯を有するもので、具志川式に比べると凸帯はやや下方に位置する。波状凸帯（第1種a）の場合、彎曲は緩やかで、波状の頂部は具志川式のように口唇に接することはない。

第2種の文様構成は面縄前庭式に近似するが、凸帯間の文様に差異が認められる。つまり、2条の凸帯間（頸部）を無文のまま放置するか、あるいは有文の場合、第19図3のように縦位の沈線文を配し、面縄前庭式の鋸歯文とは異なっている。

第3種は横位の凸帯文を3条有するものであるが、本区で確実なものは得られてない。しかし、先述したように第19図4・5の2点はその可能性があるものである。

第4種は凸帯の代わりに刻文を配するもので第19図6・7のように口頸部を鋸歯文で埋める構成は具志川C式の頸部無凸帯のグループ（註10）に例がある。しかし、本型式の鋸歯文は点刻文によっており、具志川C式のものは沈線文によるもので、文様要素に差異が認められる。

第5種に属するものは4点出土している。このグループの曲凸帯は口頸部を中心に展開するが、中には第20図4のように胴部に及ぶものもある。

神野C式は以上のように要約できるであろう。

③面縄前庭式

口頸部資料2点、頸部資料1点の計3点得られている。器種は深鉢形。器形は小破片のため詳細は不明だが、口縁部は本型式特有の外反を示す。

第20図5は器厚約5ミリの薄手で、焼成は良好である。器色は淡茶褐色。胎土混入物は石英・黒雲母などで後者は微細である。器面調整は丁寧な撫で手法で擦痕は残らない。口縁上端に水平凸帯を貼付する。凸帯の幅は6ミリ前後、厚さは約3ミリで、断面形は扁平な半円状である。凸帯上には半截竹管状工具による刺突文が施される。刺突文は弧状（図では「ハ」の字状にみえるが）を呈し、密で深い。同凸帯下の頸部には沈線による鋸歯文の一部が見受けられ、沈線はシャープで、3本確認できる。口唇部は丸く、無文である。第Ⅳ層の出土である。

同図6は第Ⅴ層の出土で、器厚は約7ミリ

を測り、器色は淡茶褐色で、焼成は良好である。石英や黒雲母を含み、後者は少量である。器面は丁寧な撫で仕上げである。口唇直下に凸帯を繞らし、一部は口唇に及ぶ。凸帯の幅は5ミリ前後、厚さは約3ミリで、断面形は半円状である。凸帯上には半截竹管状工具による刺突文を密に刻む。頸部には鋸歯文の一部である沈線が2条見受けられる。口唇は丸く、前記資料と同様無文である。

同図7は頸部資料で口縁部を欠く。頸胴部の境に水平凸帯を1条配する。凸帯の幅は約5ミリ、厚さは約4ミリで、断面は半円状である。凸帯上には半截竹管状工具による刺突文を密に刻む。凸帯上方の頸部には沈線による鋸歯文が配されており、沈線は4本1組である。凸帯下方の胴部には沈線群が左右に垂下しており、逆「V」字文を構成するものであろう。沈線は5本1組である。器面調整は撫で手法。器厚は5ミリ前後で比較的薄く、焼成は良好である。器色は淡茶褐色。胎土混入物は石英や黒雲母などで、両者とも量は多い。第V層の出土。

④面縄前庭式土器グループの胴部

65点の有文胴部資料が得られ、代表的なもの13点を第21図に示した。すべて小破片で、前述した3型式のうち、いずれに属するか摑めないため、一括して取り扱う。

文様はいずれも沈線を垂下させるもので、施文は一般に浅いが、同図4・6のように深いものもある。器面は丁寧な撫で仕上げで、擦痕の残存するものは少ないが、同図4・10の内面には横位を主体とした擦痕が比較的明瞭に残る。

器厚は同図6が最も薄く約4ミリ、最も厚いものは同図9の約6.5ミリで、5ミリ前後のものが多い。器色は茶褐色を基調とする。焼成は全般に良好で、同図10は堅緻である。胎土に石英を多量に含み、中には黒雲母を微量含むもの（同図3・13）もある。すべて第V層の出土である。

同図1は胴上部の資料で、破片右側に右傾の斜沈線が5本、下端には方向の異なるものが1本認められる。垂下する沈線群が途中で屈折する例であろう。

同図2も胴上部の資料と考えられるもので、左右からの沈線群が交叉し、「Y」字文あるいは「X」字文を構成するものであろう。左方の沈線群は4本1組である。

同図3・4は文様末端部で、胴下半部の資料である。前者は垂下する沈線の末端が平行に終わるものである。沈線は3本見受けられる。後者は末端部において「V」字状に収束するもので、2箇所にみられ、破片中央のものは右方のものに比べて上方に位置する。破片左端にも僅かに沈線が認められるが、末端部のものであろう。

同図5は2組の沈線群が交叉するもので、文様末端部の可能性がある。沈線は左右それぞれ3条認められる。

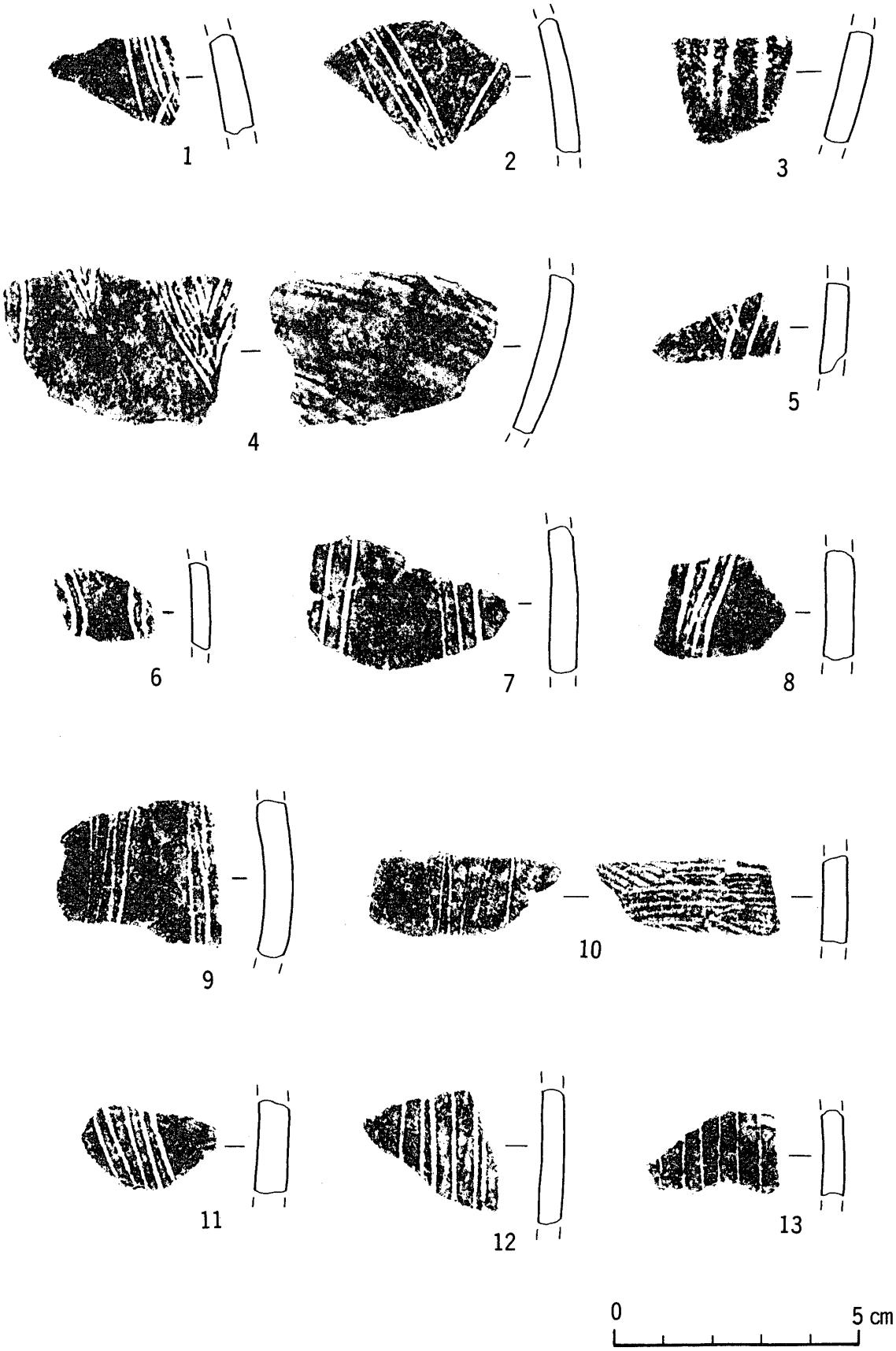
同図6は曲線を描く沈線群が2組見受けられるもので、沈線は各々2条確認できる。

同図7～13の7点は垂下状況の詳細が不明なもので、いずれも縦位あるいはやや斜めの方向に配されるものである。沈線の単位は3本（同図7～9）、5本（同図10・11）のものがあるが、中には同図12・13のように6本以上を単位とするものも認められる。

d）松山式土器

第V層より口縁部資料が1点（第22図1）検出された。

まず器種・器形についてみると深鉢形に属し、口縁は外反し、頸部はしまる。頸部の屈



第21図　面縄前庭式土器グループの胴部

曲は「く」の字状のやや角度のあるものである。口唇部は幅広く整形され、かつ外傾するため口縁部の断面形態は三角形を呈する。頸部の屈曲の状況から胴部は若干張るタイプかと推察される。器厚は頸部で約6ミリ、肥厚部で1センチ前後を測る。

胎土の混入物は石英を主体とし、少量の黒雲母を混ぜるが、粒子が細かく肉眼での観察は容易ではない。焼成は良好で堅緻。器色は外面が橙褐色、内面が赤褐色を呈する。

器面調整についてみると内外面とも横位の貝殻条痕によるが、外面は大分撫でられ平滑な面が多く、内面には明瞭に残る。

文様は口唇部と頸部に認められる。口唇部には数条1組の細沈線によって鋸歯文を描く。沈線の間隔は一定せず、施文はそれほど丁寧ではない。この文様は口唇部を囲繞するものと思われる。口唇部に鋸歯文を施す例は従来の資料になく、本標品が初例であろう。頸部の文様は明確さを欠くが、資料の左端に右傾の斜沈線が2本確認でき、口唇上の沈線に類似することから、鋸歯文の一部かと推察される。施文はいずれも鋭利な棒状工具を用いている。

頸部に施文する例は一湊松山遺跡（註11）で知られている。口径推算17.2センチ。

e）面縄東洞式土器

本区では2点（第22図2・3）検出され、3は第V層出土の口縁部、2はグリット西壁の崩壊砂中から検出された口縁下端部の資料である。

器種・器形

前記2点とも小破片であるが、口頸部の形状および大きさ等から深鉢形とみていいだろう。

同図2は肥厚帯下端部の資料で、同部の径は約12センチである。肥厚は微弱で、下端部の整形も雑である。胎土混入物は石英を主体とし、黒雲母も観察され、後者も比較的多い。粒子はいずれも微細である。

焼成は良く器色は内外面とも黄褐色を呈する。器厚は肥厚部で7～8ミリ、同直下は5ミリ前後を測る。

同図3は平口縁の資料と見られ、口径は推算32.8センチである。口縁部は緩やかな外反を示し、肥厚帯の幅は3.5センチ前後で肥厚は微弱である。口唇部は平坦に整形され、断面は方形を呈する。胴部は得られてないが、頸部の状況からすると胴上部が僅かに張るタイプとみられる。

胎土混入物は石英を主体とし、黒雲母も散見される。いずれも粒子は微細で、破損面や内面では容易に観察できる。

焼成は良く器色は茶褐色を呈する。器厚は肥厚部で6ミリ前後、頸部で4ミリ前後である。

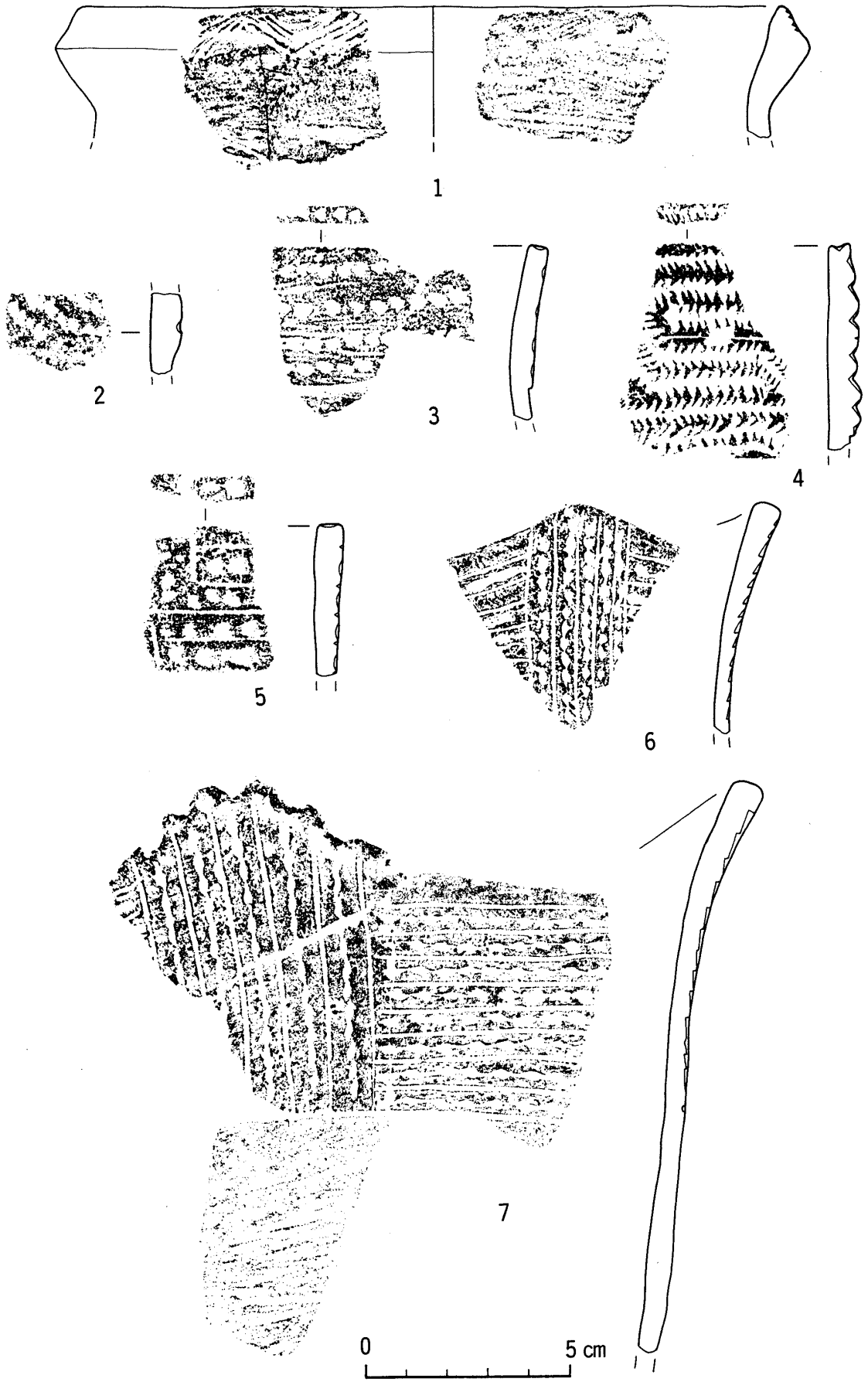
文様

器面調整についてみると2点とも擦痕を施したあと最終的に撫で調整を行うが、部分的に擦痕を残す箇所もある。同図3は文様帯と同部下方（頸部）に横位の擦痕を残すが、後者は不明瞭である。裏面の下端部では斜位の擦痕が僅かに確認できる。同図2は現存部に関する限り、擦痕は見受けられない。

本貝塚出土の面縄東洞式の文様は下記の3種に大別でき、本区出土の2点についてみると同図2が第1種、3が第2種に属する。

第1種　籠目文を構成するもの。

第2種　横位押し引き文を主体とするもの。



第22図　松山式土器（1）・面縄東洞式土器（2・3）・嘉徳Ⅰ式A土器（4～7）

第３種　その他。

２は肥厚部に右傾の連続刺突文が３条認められ、文様の特徴から籠目文を構成する資料かとみられる。施文具は先端が丸味を帯びる箆を使用し、押し引き手法によって施されるため施文部は凹線となる。凹線は浅く、その内部に残る施文手法から、左から右下方へ移動したことがわかる。肥厚部直下には文様は認められない。

３は口唇部および口縁外面の肥厚帯に文様が認められる。口縁外面では肥厚部を文様帯とし、同部に４列の三角形刺突文（爪形文）を横走させる。施文方向は左から右へ移動する列と、逆に右から左へ移動する列とがあり、交互に施文される。つまり、１・３列目が前者で、２・４列目が後者である。刺突文（爪形文）は浅めで全体的に孤立させる傾向があり、したがって同部は凹線とならない。口唇部にも口縁外面と同種の文様を左から右方へ施文する。

肥厚部直下（頸部）にも１条の縦位沈線が認められる。施文は浅く、文様とすべきか今のところ性格は不明。

ｆ）嘉徳Ｉ式Ａ土器

本区では第Ⅳ層および第Ｖ層で検出され、第22図４～７、第23図１～10、第24図１・２に示す16点のほか、小破片のため実測図を省略したものが４点あり、総数20点となる。そのうち、口縁部の資料は12点で、中には推定復元を試みたもの（第24図１）や、一部底部まで復元可能のもの（同図２）などが得られた。層位別の出土状況は第10表の通りである。

第10表　嘉徳Ｉ式Ａ土器の層位別出土状況

※（　）内は図示省略の数

種類／層	1種	2種	3種			4種				不明	計
			イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ	ニ		
Ⅰ											
Ⅱ											
Ⅲ											
Ⅳ	1	1				1				2(1)	5(1)
Ⅴ				1	1	2	1	3	1	6(3)	15(3)
Ⅵ											
崩壊											
計	1	1		1	1	3	1	3	1	8(4)	20(4)

器種・器形

器種は復元資料（第24図１・２）や、その他の口縁部破片から判断するとすべて深鉢形に属し、他の器種は見受けられない。

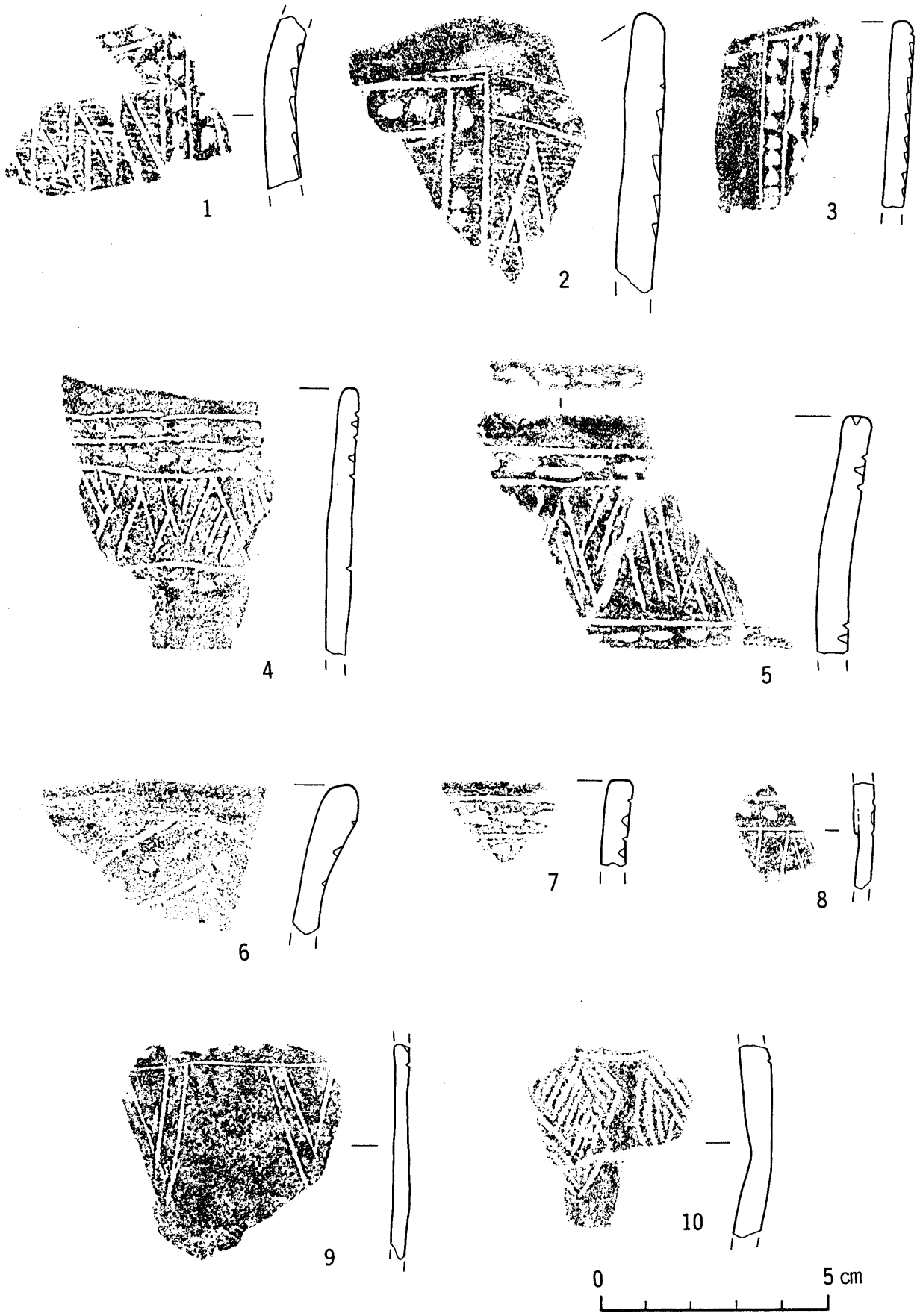
器形についてみると本区出土のものは次の２種に分けられる。

㋑　頸部がしまり、口縁部が外反するもの。
㋺　胴部から口縁部にかけてやや直線的に開くもの。

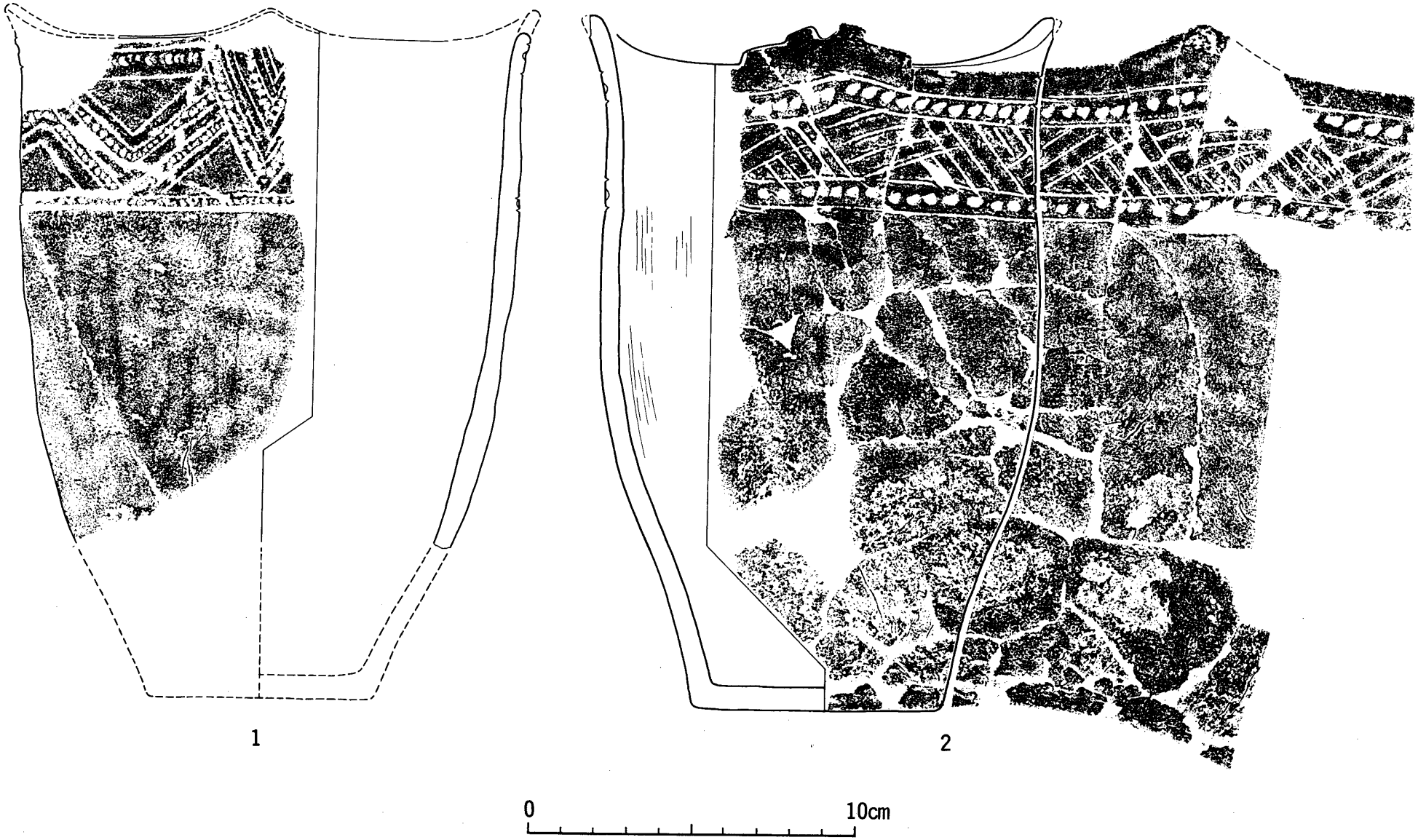
今回の資料についてみると、㋑に属するものは７点（第22図６・７、第23図１・５・６、第24図１・２）、㋺に属するとみられるものは５点（第22図４・５、第23図２・３・４）で、他は小破片のため形状が把握できない。

口縁部を肥厚させるものとそうでないものとがあり、前者の確実な資料は第22図４の１点のみで、肥厚帯の幅は５センチ弱である。同図７、第23図４・９、第24図１・２は後者に属し、他は小破片のため判別不能。

口縁部の形態はほとんど山形口縁で、明確に平口縁と断定できる資料は検出されていない。山形口縁の中には第23図２のように山形



第23図　嘉 徳 Ⅰ 式 A 土 器



第24図　嘉 徳 Ⅰ 式 A 土 器

頂部の正面観がシェブロン状の形態とは異なって、丸味を帯びるものや、第22図７や第24図２のように隆起部に数個の抉りを設けるものなどがある。抉りを有するものについてみると、第22図７は１個の隆起部に対して７個の抉りが認められ、抉りの正面観は半円ないし弧状を呈するが、左最下端のものは他に比べ浅い。第24図２は山形頂部に抉りを施し、裾部に段を設ける例である。抉りは３個で最頂部のものが「U」字状を呈するのに対し、左右のものは「L」字状の段を形成する。さらに本資料の場合、４個の山形突起が同形をなさず、対向する２個をペアとして、２組のうち１組は先述のように抉りを施しているが、他の１組には手を加えず、１個体においてそれぞれ異なる２種の形態を採用するという珍しい例である。

口唇部の断面形状をみると上端を平坦に成形し、方形状を呈するものが一般的といえるが、他に丸味を帯びるもの（第23図４・６、第24図１）もみられる。他方、第23図２のように山形隆起部のみを舌状につくり、他を平坦にする折衷形のものもある。

土器の上面観は復元資料の２点(第24図１・２)についてみると、山形隆起部においてコーナーをつくり、方形に近い円形となる。第22図６・７および第23図２にも同様の傾向がみられ、他の山形口縁も同種の形状をとるものと思われる。

底部は復元資料（第24図２）が平底であることや、従来の資料が平底であることから、平底とみてよい。また、復元資料について立ち上がり部の形状をみると、若干内彎状のカーブを描きながら胴上部に移行する。

サイズは第24図１が口径推算16.5センチ、器高約21.5センチ、底径推算７センチで、同図２は口径15センチ、器高21.5センチ、底径7.5センチ、両者とも嘉徳Ⅰ式A土器の中では中型のタイプに属する。

胎土混入物を観察すると一般に粒子は細かく石英を主体としているが、ほかに黒雲母や稀に２～３ミリ大の泥岩粒（第22図７、第23図４）、チャート（第23図５）を混入するものも見受けられる。

器厚は第23図９のように４ミリ弱と極めて薄いものや、同図２のように１センチ前後を測る厚手のものもあるが、大抵は５～８ミリの範囲におさまるものである。

焼成はすべて良く堅緻で、特に脆弱なものは見受けられない。器色は茶褐色を基調とするが、中には部分的に煤けて黒ずんだものもみられる。

文様

まず、器面調整についてみると一般に擦痕を施したあとナデ消す手法を用いるが、部分的に擦痕を残すものもある。表面にみられるものは３点（第22図７、第23図１・２）で、文様帯の部分はナデが徹底し擦痕はわずかに残る程度であるが、第23図１は比較的明瞭に残る。いずれも横位の擦痕である。

胴部に観察できるものは第22図７の１例だけであるが、やや斜め方向の荒い擦痕である。しかし、胴部のナデは比較的良好である。裏面に認められるものは５点（第22図４・７、第23図１・５、第24図２）で、口縁内面に施すもの（第22図４・７、第23図１・５）や胴部に施すもの（第22図7 、第24図２）などがみられる。第23図５や第24図２は比較的明瞭で範囲も広いが、他は器面にわずかに残る程度で、その意味ではナデが徹底しているとみてよい。裏面の擦痕の方向をみると横位に施すもの（第22図４・７、第23図５）のほか、縦位のもの（第24図２）も認められ、他方縦

位と斜位の擦痕を施す例（第23図１）も見受けられる。

第11表　嘉徳Ｉ式Ａ土器　擦痕の残存状況

種類 / 擦痕の有無	1種	2種	3種			4種				不明	計
			イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ	ニ		
両面有				1		1					2
両面無		1			1	1	1	1	1	4	10
外面のみ有						1					1
内面のみ有	1							2			3
計	1	1		1	1	3	1	3	1	4	16

施文部位は口縁部、口頸部および胴上部に限られるが、口唇部や胴上部を無文とする例も少なくない。施文具は２種認められ、棒状工具と先端が三角形あるいは若干、丸味を帯びた篦状工具を使用する。

文様は他の発掘区出土のものも含め、下記の４種に分類することができる。

第１種

面縄東洞式の押し引き文を主体とするが、部分的に沈線を加えるもの。

第２種

第１文様帯に数条の平行沈線を施し、沈線間を三角形刺突文で飾るもので、横位文様を主体とするが、部分的にステップ文を加えることを原則とする。第２文様帯は沈線による鋸歯文を基本とし、沈線間に三角形刺突文を加えるものもある。

第３種

本型式の盛期の一つを示すとみられるもので、第１文様帯は横位文様を主体とするが、山形口縁下で縦位文様を加えるものを本項にまとめた。第２文様帯には複数の沈線による鋸歯文を施す場合もある。

第４種

前項の第３種が簡略化を進めたもので、本型式の主要文様（沈線＋三角形刺突文）が部分的に残存するものである。つまり、主要文様が山形突起下や第１文様帯の上下の部分にのみ施文され、他を別の文様で飾るか、あるいは無文空白のまま放置するか、本型式の終末期を代表するものと考えられる。第２文様帯は複数の沈線による鋸歯文や網代状の文様、あるいは平行沈線を三角形に配し、その後沈線間を三角形刺突文で埋めるものなどがある。

本区の資料の中で第１種に属するものは第22図４の１点である。文様は先端が三角形の施文具により刺突（爪形）文を横位に連続的に押し引きするもので、途中でステップ状に折れまがる箇所も見受けられる。刺突文は力強く左から右の方向へ施され、緻密で施文部は凹線となる。連続刺突文によってつくられる凹線と凹線の間には、稀にシャープな沈線を加えるが、まだ文様区画文としての性格を帯びるに至ってない。口唇部にも口縁外面と同種の連続刺突文が施され、施文は左から右の方向へ移動している。口唇上の施文部も浅い凹線となる。

本資料は押し引き文を主体とするところから面縄東洞式の範疇に含めることもできるが、部分的に沈線を加える点で異なっており、嘉徳Ｉ式Ａ土器の初期の資料とみなすことが可能かと考える。第Ⅳ層出土。

第２種の明確なものはないが、同図５はこれに分類できる資料かと考えられる。

第Ⅳ層出土の口縁部資料で、外面と口唇部に施文する。外面の文様は横位を基本とし、何段かに区分するが、部分的に縦位の短沈線

を交え、ステップ状の文様をつくり出す。沈線間には先端がやや丸味を帯びる箆によって三角形刺突文を施す。口唇部にも口縁外面と同種の刺突文を左から右の方向に施文する。文様は全体的に浅く、不明瞭である。

第3種に分類しうる資料は2点(第22図6・7)で、いずれも第V層の出土である。第1文様帯は文様の種類あるいは簡略化の程度により、次の3種に細分される。

㋑第1文様帯にステップ文を部分的に加えるもので、前項第2種の文様形態を僅かに残すものである。山形突起下には縦位文様を施す。

㋺第1文様帯は山形突起下に縦位文を施し、その左右に横位文を配するが、前項㋑と違ってステップ文は施されない。また、縦位文が山形突起下から外れる場合もある。

㋩第1文様帯の文様は前項㋺に類似するが、横位文様を一つおきに間引きするもので簡略化した文様となる。

本区では㋺に属するものが1点(第22図7)、㋩に属するものが1点(同図6)得られた。㋑に相当する資料は得られていない。

同図7は前述のように山形隆起部に抉りを設ける例である。施文は口縁外面のみに限られ、口唇部や胴上部は無文である。口縁外面の文様は縦位文と横位文からなり、山形直下には前者を、他の部分には後者を配する。いずれの場合にも複数の平行沈線によって区画され、その内部を三角形刺突文で埋めるが、縦位と横位とでは沈線の数や沈線の間隔が異なり、後者の方が密である。施文順序は山形直下の縦位文を施したあと横位文を施文しており、施文方向についてみると前者は上から下方へ、後者は左から右方へ移動する。本資料では縦位文の左方は破損のため文様が確認できないが、右側と同様の展開とみてよいだろう。全体的に文様は規格的で、整然としている。

同図6も7と同じように主要文様を縦位と横位に展開させるものであるが、横位文様の場合、三角形刺突文を間引きする点で7と異なる。縦位文様は山形隆起部の直下に施され、6条の平行沈線からなり、沈線間を三角形刺突文で埋める。横位文様は縦位文様の左右に展開するが、本資料では一部が認められるだけで、下半部の詳細は不明である。施文順序は横位沈線によって縦位文を切る箇所が認められることから縦位文を先に施したことがわかる。三角形刺突文は縦位の場合、下から上にやや深めに刻みながら移動するが、横位のものは左から右方へ浅く押し引きされ、不明瞭である。本資料の場合、横位刺突文の間引きは必ずしも一段ごしとは限らず、2段ごしに行う箇所も認められるが、いずれにせよ間引きすることによって文様の簡略化を行っている。

第4種に属するものは8点得られており、本型式において最も多く出土したサブタイプである。主要文様以外の文様は沈線を主体とするもの、あるいは無文部を増幅させるものなど、数種のバラエティがみられる。したがって第1文様帯の文様を次の4種に細分した。

㋑第1文様帯のうち山形突起下と同文様帯の上下端に主要文様を施し、他を別の文様で埋めるもの。

㋺第1文様帯のうち山形突起下にのみ主要文様を縦位に配し、他を別の文様で飾るもの。

㈩第１文様帯の上下端の部分にのみ主要文様を施し、中央部を別の文様で飾るもの。

㈡第１文様帯に部分的に主要文様を施すもので、他の部分に装飾を加えず、無文部を作り出すもの。

以上の４種であるが、㈠は他の発掘区においては検出例がなく、今回新しく設けた項である。

㈠に属するものは第23図１・２、第24図１に示す３点で、そのうち前者の２点は文様帯の下端部を欠損するが、同部にも上部文様と同種のものを配するとみてよい。また、第24図１の場合、後述のように例外的な文様構図を採用しているが、巨視的には本項に分類できるものである。

さて、文様についてみると山形直下の場合、数条の主要文様（沈線＋三角形刺突文）を縦走させるのが一般的であるが、例外として第24図１のように逆三角形文を施すものもあり、本標品の場合、沈線内部も同種の文様で充塡する。本標品は文様帯上下端にも主要文様を横走させ、両者の間（頸部）を鋸歯文で飾るが、鋸歯文も沈線＋三角形刺突文を採用しており、本標品は単一文様要素による文様構成ということになる。施文の先後関係についてみると、最初に山形直下の逆三角形文を描いたあと、文様帯上下端の主要文様を施し、最後に中段の鋸歯文を施している。

文様帯上下の主要文様（沈線＋三角形刺突文）は１条を通例とするが（第23図２、第24図１）、複数施す例（第23図１）もみられる。縦位文についても１組の例（第23図２）や複数のもの（同図１）などが見受けられる。また、主要文様の縦位文と横位文の関係についてみると、縦位文が先で横位文は後に描いている。縦位の刺突文は上から下へ、横位のものは左から右へ移動しながら施文するが、第24図１の逆三角形文の内部刺突文は下から上の方向である。

次に文様帯の中間部を飾る文様についてみると、第23図１・２は沈線によって縦長の鋸歯文を施すが、第24図１のように複数の沈線＋三角形刺突文によって鋸歯文を描くものもある。第23図１・２の鋸歯文は区画内の文様として最後に描かれている（同図２の左端の破損面に沈線残存）。第24図１については前述の通りである。

３点とも沈線はシャープで、刺突文は第24図１のように若干小型のものや、第23図２のように多少幅のあるものまでみられ、施文手法についてみると、第24図１のように連続施文のものと、第23図１・２のように孤立的に施す例などがある。第23図１は第IV層、他の２点は第Ｖ層の出土である。

㈡に属するものは第23図３の１点で、第Ｖ層からの出土である。本標品は山形隆起部の直下に縦位文様が３条認められ、同文様の上端に横位の沈線を１本施し、同部以外では口唇に沿って三角形刺突文を１列配するが、沈線は加えていない。本品の下端破損部には僅かに刺突文が認められ、口縁上端と同種の文様を配していたことがわかる。上下端の刺突文間、つまり文様帯の中段の部分には装飾を加えず無文空白のまま放置する。このことから、文様の簡略化が進行した資料と解することができる。なお、類似の資料が隣接のＡ－１区においても検出されており（註12）、同一個体の可能性もある。口唇部は無文。

㈠に属するものは第23図４・５、第24図２の３点で、いずれも第Ｖ層からの出土である。

第23図５や第24図２は文様帯上下端に主要文様（沈線＋三角形刺突文）を１組ずつ横走

させるが、第23図4は上端に2組配し、さらに文様帯の上下の枠外にも刺突文を部分的に加えている。上記3点とも文様帯の中段には数条1組の平行沈線により鋸歯文を描く。いずれも口頸部の文様は三段の文様帯で構成され、上下端に同種の文様を配するという点では伊波式の文様構図と一致する。

施文順序についてみると、3点とも上下端の文様から施し、そのあとに中段の文様を描いている。沈線はシャープで鮮明である。刺突文はいずれも三角形あるいは爪形の形態をとるが、第23図4・5の工具は先端がやや鋭角であるのに対し、第24図2は丸味を帯びている。上記3点とも施文は左から右の方向である。口唇部に施文するのは第23図5のみで、三角形刺突文を左から右の方向へ施している。胴上部に施文する例は得られていない。ただ、第23図5は第1文様帯の下端で破損しているため、第2文様帯の有無は確かめ得ない。なお、本標品の山形突起下の文様は不明であるが、もし山形突起下にも主要文様を施していたとすれば、サブタイプの㋑に分類される。

㋺に属するものは第23図6に示す1点で、第Ⅴ層出土の口縁部資料である。外面の文様は主要文様（沈線＋三角形刺突文）を波状に配する例で、下位の沈線は頂部でほぼ直角に折れるが、上位のものは緩やかな曲線を描く。沈線間の刺突文は小型で、頂部を境に左右の施文方向が異なる。本標品は主要文様を波状に配する点に特色があり、例外的な施文に属する。沈線の間隔がやや広く、他方無文部も目立つ。口唇部は無文。

細分不能の嘉徳Ⅰ式A土器

本項には小破片のため文様構成が把握できず、そのため細分不能のもの（第23図7～10）をまとめる。

同図7は口縁部資料で外面に本型式の主要文様である沈線＋三角形刺突（爪形）文を横位に施し、2条まで数えられるが最終的に何条施文したかは不明である。㋑か㋩のいずれかの資料だろう。施文は深く鮮明で、口唇部は無文。第Ⅴ層の出土。

同図8は主要文様を横位に施す例で1条認められる。その下方に右傾と左傾の斜沈線がそれぞれ2本認められ、鋸歯文か羽状文に属するものであろう。施文はやや浅めであるが明瞭である。これも㋑か㋩の資料であろう。第Ⅳ層の出土。

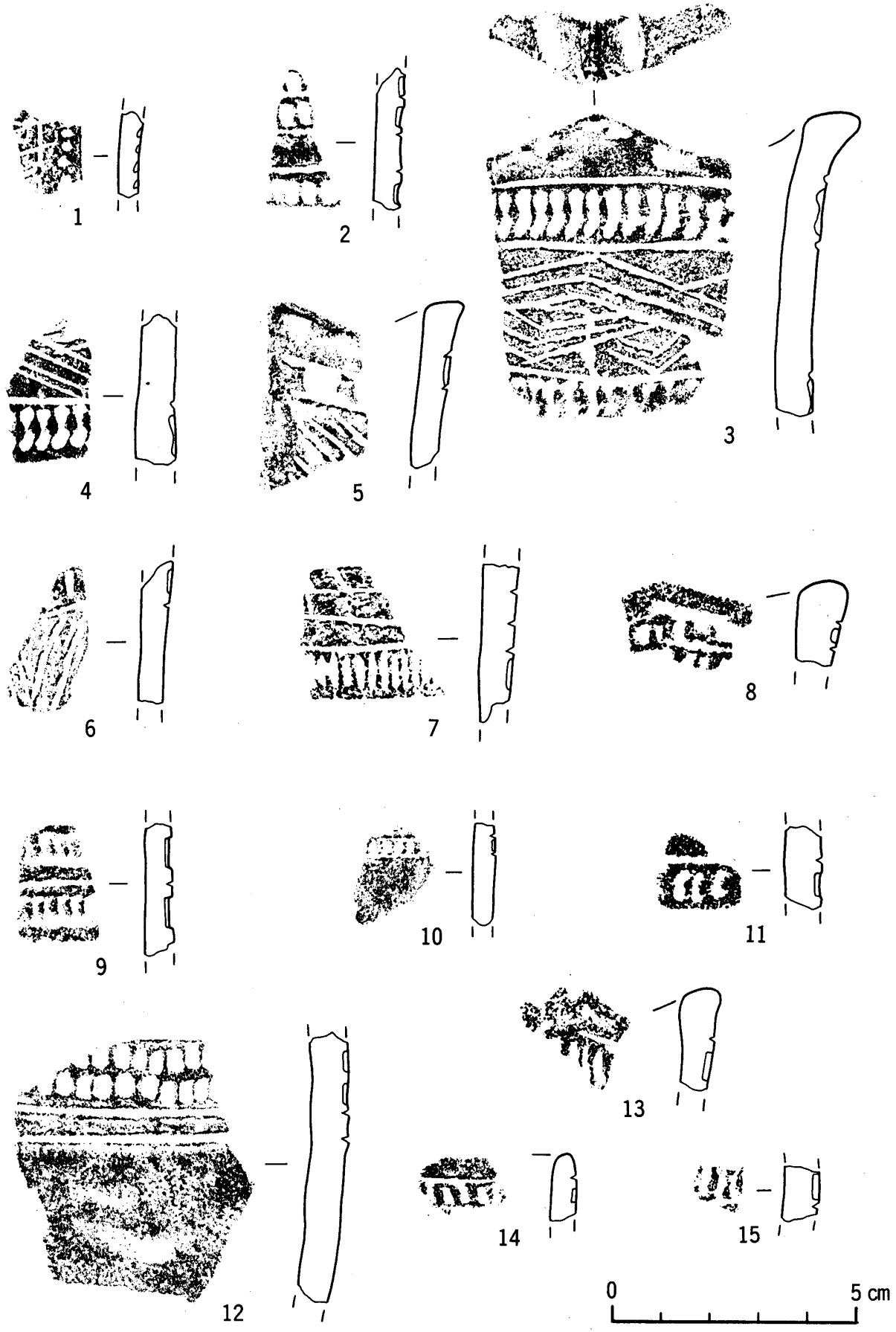
第2文様帯の資料は2点である。

同図9は第2文様帯に逆三角形文を配する例で、2本の平行沈線で描かれるが、施文は連続せず孤立的に配置される。文様は沈線の切り合い状況から左傾のものを先に描いたことがわかる。なお、第2文様帯の逆三角形文は第1文様帯の横位沈線のあとに描いている。破片の上端では破損面に沿って三角形刺突文が確認でき、それからすると本資料も㋑か㋩に属するものである。第Ⅴ層の出土。

同図10は斜沈線を組み合わせ「L」字状あるいはその他の区画をつくり、その内部を2～3条の三角形（爪形）刺突文で埋める。刺突文は超小型で連続的に施されるが、施文は浅く同部は凹線とはならない。本標品の上端には横位の沈線が1本認められる。文様自体はやや規格的で緻密であるが、区画外は無文空白部をつくる。類似の資料が隣接のA－1区でも1点検出されており（註13）、それからすると本資料も上位に沈線＋三角形刺突文を横走させていた可能性が強い。第Ⅴ層の出土。

g）嘉徳Ⅰ式B土器

第Ⅳ層から8点、第Ⅴ層から7点の計15点検出された。他の発掘区に比べると出土量は



第25図　嘉 徳 Ⅰ 式 B 土 器

若干多い。完形品はなくすべて小破片で、15点のうち5点は口縁部（第25図3・5・8・13・14)、他は頸部あるいは頸胴部の資料である。層位別の出土状況は第12表の通りである。

第12表　嘉徳Ⅰ式B土器の層位別出土状況

種類／層	1種	2種	3種	不明	特殊	計
Ⅰ						
Ⅱ						
Ⅲ						
Ⅳ			3	5		8
Ⅴ		1	2	3	1	7
Ⅵ						
崩壊						
計		1	5	8	1	15

器種・器形

口縁部資料で判断すると深鉢形に限られるようである。器形を明示しうる資料はないが、同図3の1点は口縁部の形状を知りうるもので、山形突起部で僅かに外反する。頸部のしまりはみられず、したがってやや直線的に開く器形である。同図5の口縁資料もこの種の器形であろう。

本型式の口縁形態には山形口縁と平口縁があり、本区出土の5点の口縁資料のうち、4点（同図3・5・8・13）は前者に属するが、他の1点（同図14）は判別不能である。山形口縁の場合、隆起部でコーナーをつくっており、器形の上面観は嘉徳Ⅰ式A土器や嘉徳Ⅱ式土器などのように円味のある方形を呈するものと考える。また、なかには同図3・13のように隆起頂部の両側に刻みを施す例もみられ、類例は本貝塚B－3区（註14）や、奄美大島の嘉徳遺跡(註15)、長浜金久第Ⅱ遺跡(註16）などでも発見されている。刻みは上記2点とも2箇所に施され、同図3の場合、薄く削り取られたような状況を呈しているのに対し、13は縦に深く抉られている。刻み部の形状はいずれも「V」字状を呈する。

口径の推算可能な資料は同図3の1点だけで、約14.8センチである。

底部の資料は得られてないが、平底とみてよいだろう。

混入物は石英を主体に黒雲母を加えるのが一般的で、混入量は前者が多い。また、黒雲母を含まず泥岩粒、長石を混入するもの（同図1)などもみられる。粒子は概して細かい。しかし、同図1の泥岩粒には2ミリを超すものも僅かながら見受けられる。

器厚は6ミリ前後が一般的であるが、8ミリ以上のやや厚手のものも4点（同図3・4・8・11）得られている。焼成は普通か、やや良好の部類に属する。器色は褐色を基調とするが、中には同図7・12のように表面は赤褐色、裏面は褐色と表裏で異なるものもみられる。

文様

器面調整は撫で仕上げを行うものが一般的で、一部に擦痕が残るものもみられる。表面についてみると、文様帯の部分は普通撫でが徹底しているが、同図7のように僅かに擦痕の認められるものもあり、斜めの方向である。胴部に残るものは同図12の1点で、資料の右端部に斜位のものがかすかに見受けられる。裏面で擦痕が観察できるものは同図7・12・13の3点で、7・13は横位のものが僅かに認められ、12は縦・横・斜め3方向のものが確認でき、前者に比べ明瞭である。

施文具は単篦工具、半截竹管状工具、叉状工具の3種が認められ、単篦工具はさらに先端が方形のものと若干丸味を帯びるものの2種に分かれる。これらのうち最も多いのが単

篦工具で11点（同図1・2・5・6～12・14）、半截竹管状工具と叉状工具はそれぞれ2点で、前者が同図13・15、後者が同図3・4である。

本型式の施文部位は口唇部、口頸部、胴上部の3箇所であるが、本区出土のものは口頸部に施文する例に限られ、口唇部あるいは胴上部に施すものは得られてない。

文様についてみると本貝塚出土の嘉徳Ⅰ式B土器は、次の3種に分類可能である。

第1種

第1文様帯に主要文様（沈線＋弧文）を横位に数段配するもので第2文様帯を沈線による鋸歯文で飾る。

第2種

主要文様を1段ないしは数段ごとに間引きし、間引きした部分にステップ文を加えるもので、第2文様帯の複数の沈線による鋸歯文を施す場合もある。

第3種

第1文様帯のうち、中段を鋸歯文あるいはステップ文などで飾り、同部の上下に主要文様の沈線＋弧文を配するものである。

本区では第1種に属する確実な資料は得られていない。

第2種も確実なものはないが、同図2はその可能性のあるものである。頸部の破片で、文様は横位方向に施文され、5本の平行沈線間には単篦による横位の押し引き文を施文するが、無文部も1段見受けられる。押し引き文に使用される単篦の幅は約4ミリで、施文は左から右へ移動している。沈線はシャープであるが、上下端の沈線は破損面に沿っていて不明瞭。類例を参考にすると、本標品の中段の無文部にはステップ文を施す可能性も考えられる。第Ⅴ層の出土である。

第3種に分類できるものは5点（同図3～7）得られており、他の種類に比べると出土量は若干多い。

同図3・4は同一個体の破片と思われるもので、3は口縁部、4は第1文様帯下端（頸部）の資料である。文様は3段の横位文からなり、前項嘉徳Ⅰ式A土器の第4種㊁の文様構成に類似する。文様帯の上下端には沈線十弧文の同一文様を配し、両者の中間部を目の粗い籠目文で飾る。弧文は叉状工具を使用しており、施文は深めで、したがって点刻文とならず弧文の形をとるが、叉状工具を使用しているために上下両端は深く突き刺さる。弧文上下に施される横位沈線文は浅めで、両者の間隔は1センチ前後である。下段の沈線＋弧文は施文が浅めで文様は全体的に不明瞭。中段の籠目文はシャープな沈線で描かれ、施文は左から右へ移動している。同図4も同様の文様構図をとるが、沈線＋弧文部の施文は浅く、弧文はむしろ点刻文類似の文様となる。ただし、上位の斜沈線群はシャープである。3・4とも第Ⅳ層の出土である。

同図5は山形口縁の右半部の資料で、文様は外面のみに施される。横位の平行沈線間に爪形状の弧文を配し、その下方に数本の斜沈線が見受けられるものの、構図ははっきりしない。横位文（沈線＋弧文）についてみると、一部剝離した部分もあるが、沈線を引いたあとに弧文を施している。弧文は左から右方向へ施文され、その間隔は約5ミリである。沈線は下方の斜沈線を含め、深くシャープである。口唇上は無文。本標品の左端は山形頂部直下で破損しており、同部が角張っていることから上面観における同部の形状は「く」の字形に近い屈曲を示す例であろう。第Ⅳ層出

土。

同図6は頸中央部の資料で上部に本型式特有の沈線＋弧文が1条認められ、口唇に平行に施文されるものと考える。沈線の間隔は約7ミリで、弧文に使用する施文具の幅は約5ミリである。同文様の下は方向の異なる複数の斜沈線で飾られ、籠目文か鋸歯文に属する文様を描くものであろう。施文は全体的に明瞭で、沈線はシャープである。弧文はおそらく左から右へ描かれ、下方の斜沈線も同様であろう。本標品は文様・胎土などの特徴から同図5と同一個体の可能性もある。第V層の出土である。

同図7も頸部の資料である。主要文様（沈線＋刻文）は横位に施され、現資料では1組認められる。同文様は沈線の間隔が1センチ前後あり、内部の刻文は先端の幅が約6ミリの単篦工具を使用し、文様自体は繊細で緻密である。この文様の上方には横位沈線と斜沈線を組み合わせた文様を施すが、全体的構図は不明。施文順序は横位沈線が先で、斜沈線は後である。沈線はいずれも深くシャープである。第V層出土。

分類不能の資料

同図8～15の8点は小破片の為、前記4種のいずれに属するか判別の困難なものである。

同図8・9は主要文様が2組認められるもので、8は山形口縁、9は頸部の資料。いずれも第IV層の出土である。文様は2点とも横位に施され、沈線間に単篦による押し引き文を配する。単篦は方形を呈し、先端の幅は8が約4ミリ、9が約6ミリで、施文はいずれも左から右方へ移動しており、9は比較的浅めで小刻みに施される。横位沈線の間隔は8が5～6ミリで、9は約12ミリあり、若干幅広く区画される。沈線はいずれもシャープである。主要文様が2段認められることから、両者とも上記の第1種か第2種のいずれかに属する可能性が強い。

同図10・11は主要文様が横位に1組認められ、その上部は若干の無文部があって別の文様を形成するらしいことから、前述の第2種か第3種のいずれかに属するものだろう。同図10の主要文様（沈線＋押し引き文）は沈線の間隔が3ミリ前後の小型のもので、沈線はシャープだが、内部の押し引き文は浅めの施文である。同図11の沈線もシャープであるが、施文が深いためそのぶん太く見える。沈線の間隔は約1センチで、内部の押し引き文はやや弧状を呈し、先端の幅が約6ミリの単篦を使用している。施文は深い。施文の方向は10・11の両者とも左から右の方向である。10は第IV層、11は第V層の出土。

同図12は頸胴部の資料である。主要文様は幅約15ミリの沈線間に刻み文を2列配する特異な施文例である。刻文は弧状を呈し、個別的に施されるが、間隔は一定せず若干規則性に欠ける。施文具は単篦を使用し、施文は左から右方向へ移動している。沈線＋刻文の下方にはさらに横位沈線を1本加える。沈線はいずれも鋭利な工具を用いて深めに施文するため、拓影では深く見える。文様は全体的に明瞭である。第IV層の出土。

同図13～15の3点は主要文様が僅かに認められるもので、13・14は口縁部、15は頸部の資料である。文様はいずれも横位方向で、沈線の間隔は14が約5ミリ、15は約8ミリであるが、13は破損のため下位沈線が認められず、計測不能。しかし、刺突文の幅から推して1センチ前後かと思われる。沈線は3点ともシャープである。沈線内部の刺突文についてみると、13・15は弧状を呈し6ミリ前後の幅を有するのに対し、14は直線的で幅も3ミリと前者に

比べ小さい。刺突文はいずれも深めに施文されており、文様は明瞭である。13・14の口唇上は無文であるが、13は前述のように山形隆起部の両側に深い刻みを施す資料である。13・14は第Ⅴ層、15は第Ⅳ層の出土である。

特異な施文例

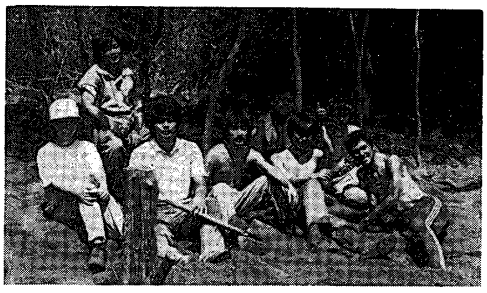
同図1は破片の上下関係の把握しにくい資料である。文様からすると沈線＋刺突文の上方に斜沈線を配するタイプ、つまり文様が水平方向に展開する通常のパターンが考えられる。しかし、本標品の有する器形（彎曲の度合など）からすると、沈線＋刺突文は横位でなく、縦位となり前記パターンから外れる。いずれが正しいか現資料から明瞭な基準が得られないので、今回は例外として取扱うことにする。沈線も刺突文も全般的に繊細である。沈線の切り合い状況から施文順序の把握できる資料である。第Ⅴ層の出土。

h）嘉徳Ⅱ式土器

本区では第Ⅳ層から7点、第Ⅴ層から8点出土したほか、崩壊砂中からも2点検出され、総数17点得られた（第26図1～10、第27図1～6）。上記両層はいずれも縄文後期の層である。

今回得られた資料はすべて小破片であるが、口縁部の資料も13点含まれ、中には推定復元の可能なものも1点得られている（第26図1）。

本型式の層位別出土状況は第13表の通りである。



Aトレンチ埋め戻し終了後のスナップ

第13表　嘉徳Ⅱ式土器の層位別出土状況

種類／層序	1種		2種			3種			4種	不明	計
	イ	ロ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ			
Ⅰ											
Ⅱ											
Ⅲ											
Ⅳ	1	1					2			3	7
Ⅴ	4	1					1		1	1	8
Ⅵ											
崩壊							1			1	2
計	5	2					4		1	5	17

器種・器形

器種を推定しうる口縁資料から判断すると深鉢形に限られ、他の器種は含まれていない。

器形についてみると本区出土のものは下記の2種に細分される。

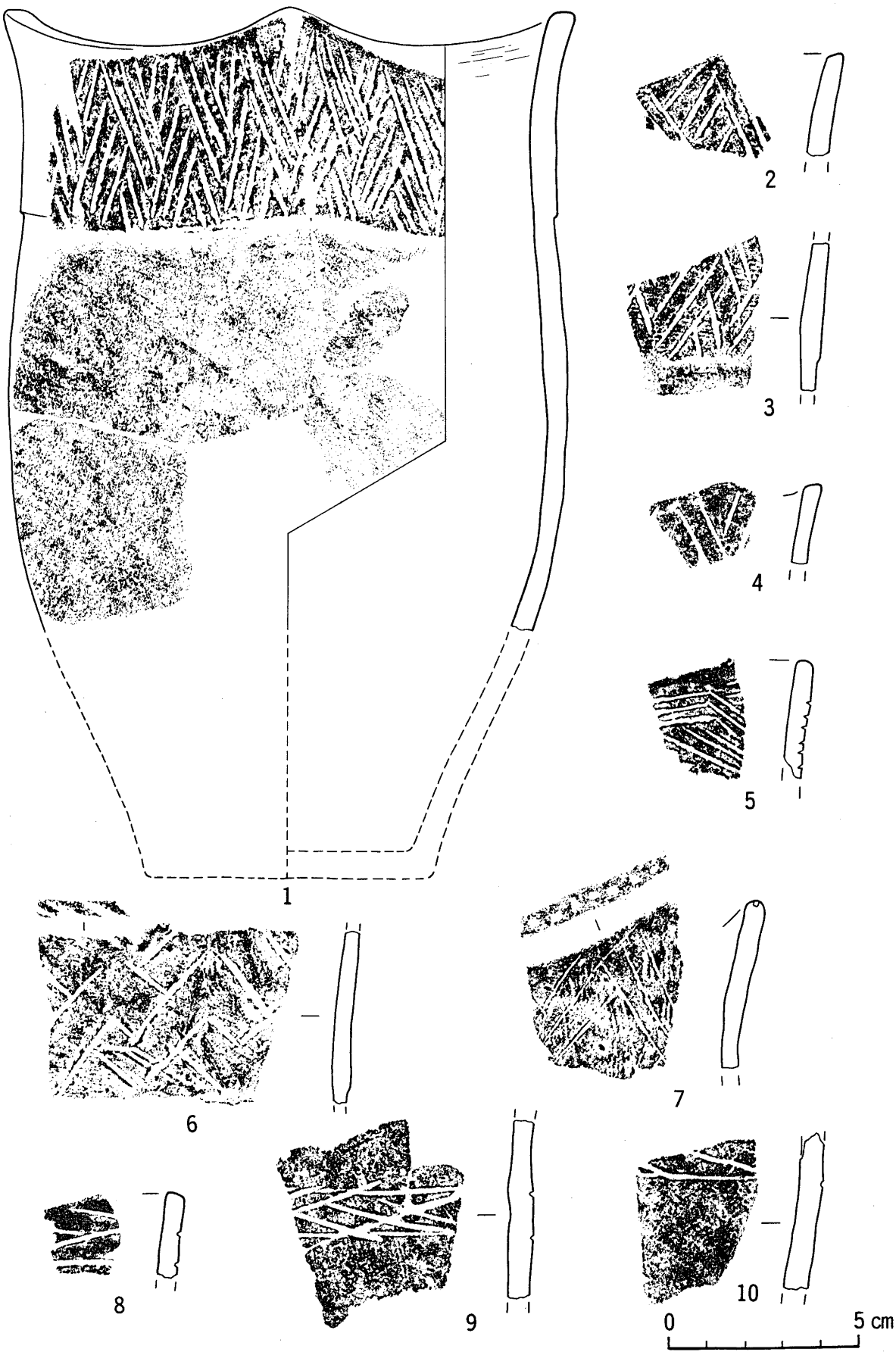
㋑　頸部が若干しまり、口縁部が僅かに外反するもの。

㋺　胴部から口縁にかけてやや直線的に開くもの。

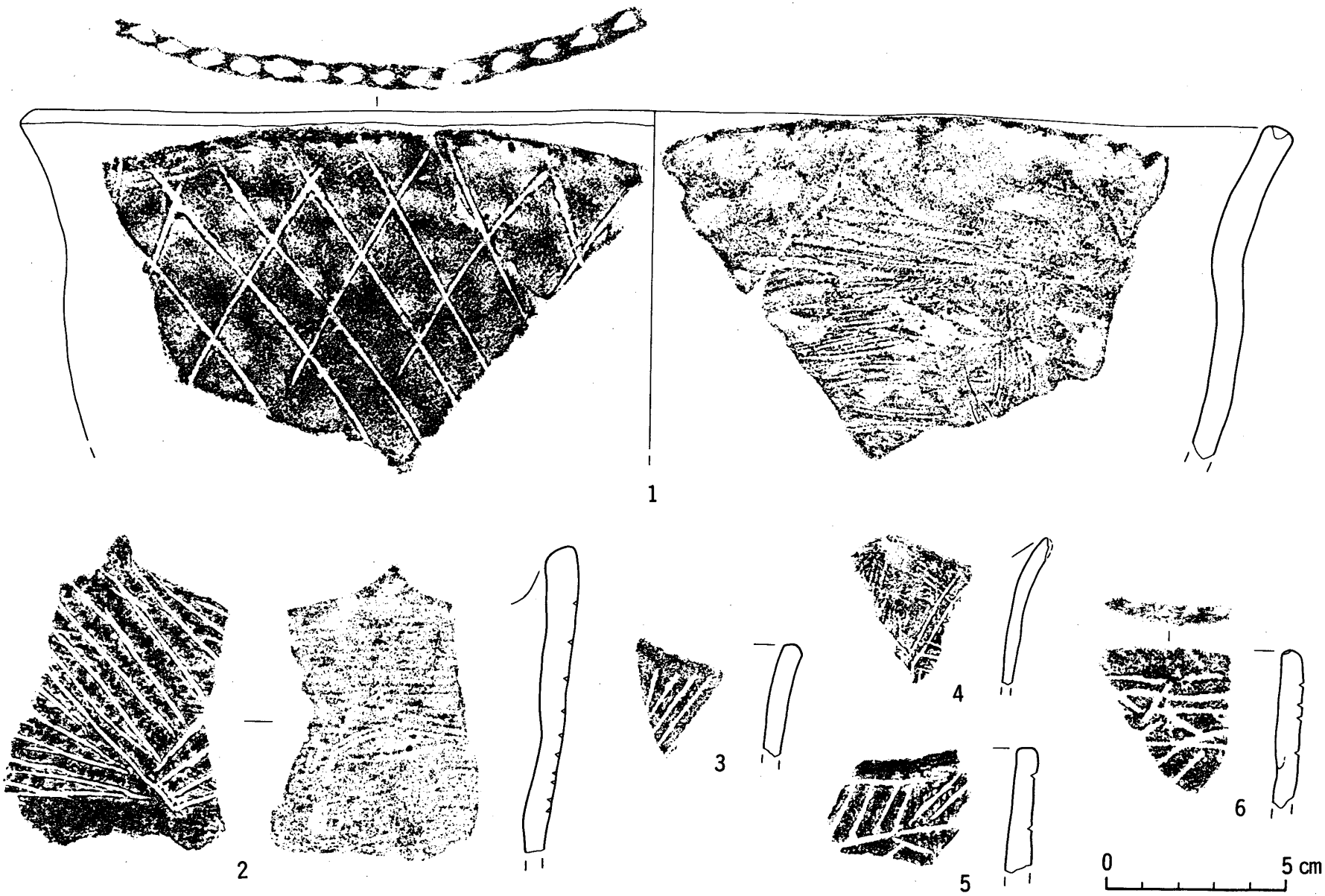
㋑に分類される資料は第26図1・7、第27図1・4の4点で、㋺に属する確実なものは第27図2の1点だけである。他の資料は小破片の為判別し難いが、そのうち山形口縁の場合は㋑に含まれる可能性が強い。

口縁部の形態は山形口縁が支配的で、確実に平口縁と判断できる資料は第27図1の1点のみである。

山形口縁についてみると隆起部の正面観がシェブロン状を呈するものが一般的といえるが、中には山形頂部を強調し、突起状の形態をとるもの（第27図2）もある。また、破損



第26図　嘉 徳 II 式 土 器



第27図　嘉 徳 II 式 土 器

のため隆起部の形状は把握できないが、山形裾部に段を設ける例もみられる（第26図６）。

口縁部には外面が肥厚するものとしないものとがあり、前者に含まれるものが３点（第26図１・３・６）、後者が４点（第26図９・10、第27図１・２）得られた。肥厚しないもののうち、第26図９・10の２点は同一個体とみられる資料である。肥厚するもの３点についてみると、第26図１は肥厚帯の下端が明瞭で比較的丁寧に形成されるのに対し、同図３・６の２点は同部が押しつぶされて、肥厚は甚だ不明瞭である。いずれも肥厚は微弱で、上記３点とも肥厚帯の上下の幅は４～５センチである。

土器の上面観についてみると、第27図１の平口縁土器は円形であるが、第26図１の山形口縁土器では山形頂部がコーナーを形成し、やや方形に近い形となる。他の山形口縁の資料も第26図１のような形状が推定される。

底部については確実な資料は得られてないが、従来の資料から平底とみてよい。

本型式のサイズについてみると復元資料第26図１は口径推算15センチ、器高推定22.5センチで、本貝塚出土の嘉徳II式の中では中型に属するが、口縁部の復元を試みた第27図１は口径が推算35.4センチもあり、大型のグループに属する。

胎土の混入物を観察すると石英を主体に黒雲母を混ぜるが、他に泥岩粒を含むもの（第26図３、第27図６）も見受けられる。黒雲母の量は石英に及ばないが、泥岩粒に比べると目立つ存在である。粒子は石英、黒雲母が比較的微細であるのに対し、泥岩粒の場合は２ミリ大のものも見受けられる。

器厚は５～６ミリのものが一般的である。第26図６と第27図４の２点は約４ミリで他の資料に比べると若干薄手である。

焼成は良く、特に脆弱なものは見受けられない。器色は茶褐色を基調とするが、中には暗褐色を呈するものや、部分的に煤けて黒ずんだものもある。また、第27図２・５のように表面は暗褐色で、裏面は赤褐色と表裏で異なる色調を採るものもある。

文様

器面調整は擦痕を施したあと最終的に撫で消す手法を用いるが、擦痕が消えきらず部分的に残るものもみられる。また、第27図２の口縁資料は一次調整で貝殻の腹縁部を使用しており、内外面に条痕が認められる。外面の条痕は文様帯内に認められるが、撫では比較的よく、その為条痕は不明瞭である。内面も撫で調整を行うが、撫では弱く条痕は明瞭に残る。両面とも条痕は横位方向である。

前述の擦痕を残すものについてみると、内外面とも認められるものは１点（第26図６）で、両面とも部分的に僅かに残る程度である。

外面だけに残るものは４点（第26図３・４・７、第27図４）で、いずれも文様帯内に部分的に認められる。第26図４の擦痕は繊細で観察しにくいが、他は比較的明瞭である。擦痕の方向は第26図３・４が横位で、同図７は縦位、第27図４は斜位である。

内面のみに残るものは３点（第26図１、第27図１・５）である。第26図１は口縁上端部に横位方向のものが僅かに認められるだけで、頸部以下は完全に消えきっている。第27図１は内面の頸下半部に明瞭で範囲も広いが、口縁上端では認められず、同部ではむしろ指頭押圧による凹凸が顕著である。擦痕は水平方向を主体としているが、一部に縦位もみられる。また本標品は頸部付近において粘土帯を積み上げる際の接合痕も明瞭である。同図５は口縁内面において縦位の擦痕が認められる

が、部分的で不明瞭である。

口唇上の施文には先端が三角形の箆（第27図１・６）や、方形状の工具を用いる例（第26図７）がみられ、口縁外面の文様はいずれも単箆工具によって描かれているが、箆の先端は鋭く尖ったものとやや丸味をおびたものの２種が認められる。

本型式の施文部位は口唇部、口頸部および胴上部であるが、本区では胴上部に施文する例は検出されていない。

さて文様であるが、外面の文様は口頸部の第１文様帯と胴上部の第２文様帯に区分できる。しかし、先述のように本区では後者の資料は得られていない。

文様は他の発掘区のものを含めると次の４種に分類される。

第１種

第１文様帯に籠目状文を配置するもので、第２文様帯を菱形状文で飾るか、さもなければ無文のもの。

第２種

第１文様帯に鋸歯文を密に施すもので、第２文様帯には先端を下に向けた逆三角形文を施文し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、第２文様帯を欠くものもある。

第３種

羽状文または有軸羽状文で第１文様帯を飾るもので、第２文様帯には逆三角形文を施文し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、まったく施文しない例もある。

第４種

第１文様帯に斜沈線を用いて格子状文を描くもので、第１文様帯は資料がなく現在のところ不明。

第１種に属する資料は７点得られた（第26図１～７）。これらはさらに次の２種に細分される。

㋑　規格的な籠目文。

㋺　変形した籠目文。

本区出土の７点のうち、㋑に属するものは第26図１～５の５点で、１・３は先述のように口縁部が僅かに肥厚し同部を文様帯とするが、他の３点については肥厚部の有無は不明である。

本区の資料はすべて２～４本を単位とする沈線を籠目状に配するもので、同図５は横位沈線を屈折させる箇所もみられ、他の４点とは若干趣を異にする。

沈線はいずれも深くシャープで文様は鮮明である。沈線の間隔は４～６ミリが一般的であるが、同図５のように若干狭いものもみられる。施文順序の窺える１・３についてみると、３センチ前後の斜沈線を籠目状に配したあと空白部分を１～２センチの短沈線で埋める。沈線の切り合い関係から施文は全体的に左から右方へ移動したことがわかる。他の３点については施文の順序や移動方向は把握できないが、１・３と同様の施文手法が想定される。口唇部を有する資料についてみると、今のところ同部はすべて無文である。同図５は第Ⅳ層出土、他の４点（同図１～４）はすべて第Ⅴ層の出土である。

㋺に分類しうる資料は同図６・７の２点である。

同図６は口縁部の資料で口唇部および外面

の肥厚部に施文するが、胴上部における施文の有無は不明である。単沈線による施文を基本とし、簡略化の進行した変形タイプとみることができる。沈線の間隔は1センチ前後である。沈線はシャープで深く施文され、文様は明瞭である。口唇部には斜めの刻文を施す。刻文は深くシャープで器表面に達する箇所もみられる。第V層出土。

同図7も山形口縁の資料で右半部を欠く。文様は口唇部と口縁外面に認められるが、胴上部は不明。口縁外面では3本単位の斜沈線により籠目状文を描くが、無文空白の部分も目立つ。これも同図6と同様、簡略化の進行したタイプとみることができる。斜沈線は基本的に左傾のものから描くようで、一部右傾のものを施したあと左傾の沈線で補う箇所も見受けられる。文様自体はシャープで明瞭である。口唇部には先端が方形を呈する単篦工具によって小型の刺突文が施される。刺突文は孤立的に施され、左から右の方向へ移動している。第IV層の出土である。

第2種に属する資料は得られていない。

第3種に属するものは第IV層から2点、第V層から1点、崩壊砂から1点の計4点である。

本貝塚のものはさらに次の3種に細分できる。

㋑ 上段に羽状文を配し、下段には別の文様を配するもの。

㋺ 横位に羽状文だけを施すもの。

㋩ 有軸羽状文またはその変形に分類できるもの。

本区出土の4点についてみると、文様、胎土などの特徴からすべて同一個体とみられ、上記㋺に分類されるものである。これらのうち、崩壊砂中から検出された1点は微細なため、実測図は割愛した。

第26図8は口縁部、同図9・10は頸胴部の資料で、これらを一括して捉えると、文様は上・中・下の3段で構成され、口縁の上端部と頸部の下端に同種の文様を配し、両者の中間部（頸部）を無文にする例であろう。上下段の文様はそれぞれ2本の平行沈線を横位に施したあと、その内部に斜沈線を交互に配するものだが、規則性に欠けむしろ変形羽状文とすべきかもしれない。内部の羽状文は横位沈線を切って外へ食み出すものもみられる。施文方向は左から右である。文様は全体的に鮮明で口唇部は無文であるが、類似の資料が隣接のA－1・3区でそれぞれ1点検出されており(註17)、そのうちA－3区の口縁資料は山形隆起部にのみ刻文を施すもので、本区出土のものもその可能性が考えられる。8・9は第IV層、10は第V層の出土である。

第4種に属するものは1点得られた（第27図1）。

口縁部の資料で一部図上復元を試みた。施文部位は口唇部と口縁外面で、口唇部には大型の三角形刺突文が孤立的に左から右の方向へ施され、施文は深く明瞭である。口縁外面の文様は斜沈線の組み合わせによって斜格子文を描くが、左傾の沈線は右傾のものに比べ短かく、間隔も広い。施文の方向は右から左へ移動しており、沈線の切り合い関係からすると、左傾のものを先に描き、次に右傾のものを描く。沈線は深く鮮明である。第V層の出土。

第27図2～6の5点は細分不能の資料で、個別に記述する。

同図2は山形頂部が隆起する口縁資料で、

口唇上は無文である。口縁外面の文様は右傾と左傾の斜沈線を組み合わせる文様だが、鋸歯文になるのか折帯文の内部を埋める文様となるのか現資料では不明。交差する部分は認められない。文様は棒状工具によるもので、深く鮮明である。第IV層の出土。

同図3は口縁破片で山形隆起部に移行する部分である。口唇上は無文。外面には左傾の4条の平行沈線と、それと方向を異にする沈線が2条認められる。おそらく、前記の第1種か第2種の資料であろう。沈線は深くシャープであるが、左右両端のものは破損面に沿って拓影では明瞭でない。施文具は先端の鋭利な工具を使用し、施文方向は上から下である。第V層出土。

同図4は山形口縁の資料で、文様は沈線文で構成される。山形直下に2条の平行沈線を「V」字状に配し、その右方には数条の横位沈線が僅かに認められる。左方は破損のため確認できないが、右側と同様の展開とみられる。また、本標品の下端にも縦位沈線の一部が認められるが、何条施文したかは不明である。2条1組の「V」字文は上位ものが左傾の沈線を先に施すのに対し、下位のものは右傾のものを先に描いている。「V」字文を描いたあと横位文、次に縦位文を施している。施文具は先端の鋭い工具を使用しており、文様自体は深く、かつシャープで鮮明である。口唇部は無文である。第IV層出土。

同図5も山形口縁の資料で、隆起部に移行する部分である。文様は外面のみに施され、少なくとも2つの文様帯が認められる。上位の文様帯は2本の平行沈線の内部を左傾の短沈線で埋めるもので、横位沈線の間隔は1.5センチ前後である。同文様の下方には第2文様帯があり、右傾と左傾の短沈線を用いて鋸歯状の文様を描く。施文の順序についてみると、第1文様帯は横位の平行沈線を施したあと、その内部を斜沈線で埋め、次に下方の鋸歯文を描いている。沈線は棒状工具を用いて施すが、線はやや太めである。第IV層出土。

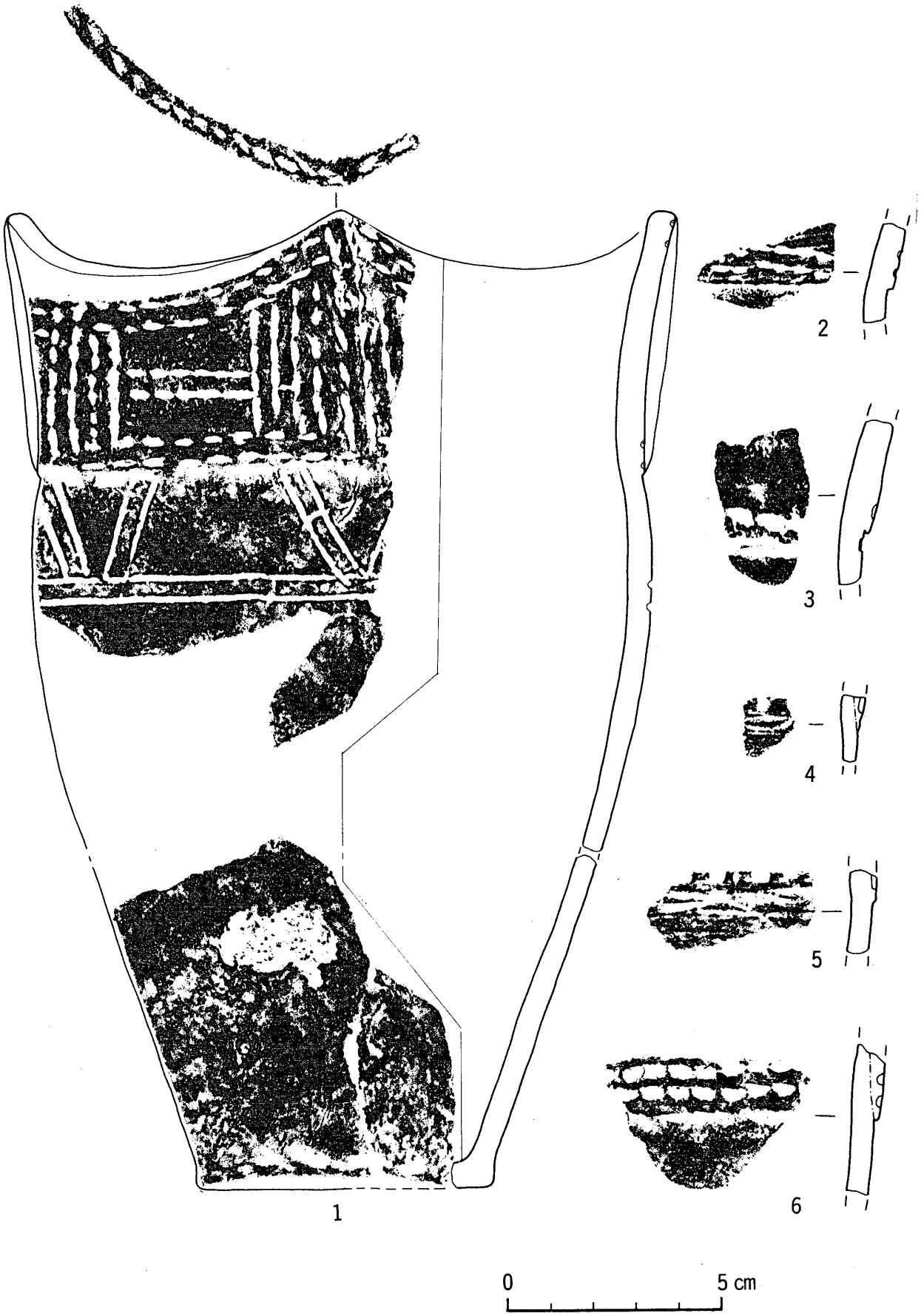
同図6は崩壊砂中から検出された口縁部資料で、文様は外面と口唇部に施される。外面の文様は横位の沈線と斜めの短沈線を組み合わせるもので、一種複雑な文様をつくる。横位の沈線は4本認められるが、間隔は区々である。斜沈線は右傾と左傾があり、横位文様と交差するものや、横位文内部に施されるものなどがある。施文順序は横位の沈線を施したあと斜沈線を加えている。不規則な文様で全体的に雑な感じを受ける。口唇部には単篦による刺突文が孤立的に施される。施文は浅く、不鮮明で消えかかった箇所もみられる。

i）神野D式土器

伊波式土器の祖型のひとつと考えられるもので、口縁部を肥厚させるところに大きな特徴があり、新型式に属する。本区では6点(第28図1～6）得られた。完形土器はないが、1点（同図1）は推定復元が可能である。同図3・4・6は第IV層、同図1・2・5は第V層の出土である。

器種・器形

現在のところ壺形は確認されておらず、採集資料はすべて深鉢形である。器形は復元を試みた同図1についてみると、口縁部が外反し、頸部でしまり、胴上部がわずかに脹らみ平底となる器形で、径の最大は口縁部上端にある。口縁には4個の山形突起を配し、同部の平面形は「く」の字状に屈折して、上面観は4つの弧を合わせたような方形を呈する。口唇部は平坦に整形される。肥厚帯の幅は5～6センチで、同部の成形には粘土を貼付す



第28図　神 野 D 式 土 器

る手法が用いられる。底部は立ち上がり部分がわずかにくびれ胴部へストレートに開いてゆくタイプである。同図1は本型式の標準的器形とみられ、本区出土の他の口縁資料もこれに準ずるものと推察されるが、同図4・6の頸部は屈曲が弱く、直線的に開く可能性もある。肥厚帯下端の整形についてみると明瞭な段を形成するもの（同図1～3・5・6）、肥厚が微弱で段の不明瞭なもの（同図4）とがある。同図2は肥厚部下端の整形が規格的なものである。

サイズの推定可能なものは同図1だけで、口径は約16センチ、器高は推算22センチで、南島の土器の中では中型のものである。器厚は5ミリ前後のものが多く、最も薄いものは同図4の3.5ミリ前後で、特に厚いものはない。肥厚部の厚さは6ミリ前後が一般的で、最も厚いものは同図6の約7ミリ、最も薄いものは同図4の約5ミリである。

器色は茶褐色のものが多く、中には暗褐色のものもあるが、同図1の場合、部分的に煤けて黒味を帯びる箇所もみられる。焼成は全体的に良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は全資料に含有され、黒雲母に比して混入量も多い。黒雲母を含むものは同図1・2・6である。

文様

器面調整は最終的に撫で手法を用いるが、部分的に擦痕が残る場合もある。擦痕は内外両面に認められるけれども、不明瞭で観察しにくい。擦痕の方向は横位を主とし、斜位あるいは縦位の箇所も見受けられる。同図4・5の擦痕は比較的粗く、条痕に近い。

施文部位は口縁部肥厚帯と口唇部であるが、稀に胴上部に及ぶもの（同図1・3）も見受けられる。

口唇部の文様は同部欠失のものが多く、詳細は不明だが、同図1についてみると三角(爪)形刺突文が口唇全体に施され、施文は比較的深く、密である。施文は左から右の方向である。

口縁部文様に使用される施文具は叉状工具（同図1・2）、先端が尖り気味の単篦工具(同図3・6)、先端が方形の単篦工具（同図4・5）などが認められる。本型式の口縁部文様は基本的に伊波式の構図と一致する。つまり、口縁部肥厚帯を上・中・下の3段に区分し、上段と下段に同種の横位文様を配し、中段を別の文様で飾るか、さもなければ、無文とする。同図1は前者の例で、同図3は後者の例である。肥厚帯内の上・下段の文様は叉状工具による場合と単篦による場合がある。前者による場合、上下の2点が対となり、孤立的に施されるものを「点刻文」、連続的に押し引きされるものを「連点文」と呼んでいる（註18)。同図1・2は叉状工具、他は単篦工具による施文である。叉状工具による2点1組の文様が2組配される場合と1組配される場合がある。前者は伊波式に特徴的な文様で、本型式に採用されることもあるが、本区では今のところ確実な例がない。後者は神野E式の文様パターンであり、同図1・2は本型式に採用された例で、対の文様を1組配する。

本区資料のうち文様帯全体が確認できるのは同図1のみで、文様は口縁部肥厚帯の第1文様帯と胴上部の第2文様帯からなる。第1文様帯は上・中・下の3段からなり、山形突起下に1条の縦位突帯を貼付する。縦位突帯は肥厚帯内に限られ、横断面は三角形を呈し、下方の胴部に及ばない。第1文様帯の上段と下段に叉状工具による連点文を横位に1条配する。連点文は荻堂式などの典型的なものに比べると点の連結が弱く、点刻文になる箇所

も見受けられる。施文は左から右の方向である。

中段の文様は連点文を縦位と横位に配するもので、縦位文は山形突起下および突起間の中央部に施される。突起下の縦位文は5組からなり、1組は前述した縦位突帯上に、他はその左右にそれぞれ2組配される。中央部の縦位文も2組である。したがって、突起下の縦位突帯文によって区分される一区画内の縦位連点文は2組を基本とするとみてよいであろう。中央の縦位連点文の左右には、それぞれ1条の横位連点文を施す。肥厚帯内部の施文順序は、まず上・下段の横位文を描き、次に中段の縦位文、最後に中央部の横位文を描く。

胴上部の第2文様帯は肥厚帯内の縦位連点文と対応させる形で同文様下に「V」字文を描く。「V」字文は平行沈線によって構成されるものである。この「V」字文の下端に1条の横位平行沈線文を囲繞させる。施文順序は横位平行沈線文を施した後、「V」字文を施す。どちらも叉状工具による施文である。

同図2～6は口縁部肥厚帯下部を含む資料である。

同図2は叉状工具による連点文が1条配されるもので、同文様上方はおそらく無文であろう。施文は左から右への方向である。

同図3は肥厚帯（第1文様帯）下段に横位の三角形刺突文、肥厚帯直下（第2文様帯）に横位押し引き文を各々1条配する。いずれも先端の尖った工具によるが、前者は辛うじて三角形の形が残り、後者は押し引きが強いため不明瞭な文様となる。施文は両者とも左から右の方向である。

同図4・5は肥厚帯（第1文様帯）下段に方形刺突文を施すが、上部欠損のため刺突文は1組なのか2組なのか詳細は不明。施文は左から右の方向である。

同図6は横位の三角形刺突文が2条認められる。単箆使用のため上下の三角形刺突文は完全な対とはならず、点刻文類似の文様となる。施文は深く明瞭で、施文は右から左へ移行する。

j）神野E式土器

伊波式土器の祖型のひとつと考えられるもので、新型式に属し、本誌前号で「神野E式土器」と仮称したものである。

本区では8点検出された。後述のように文様に特徴があるが、小破片のため前項の神野D式に分類すべきか判別が困難なもの（第29図3・4）もある。

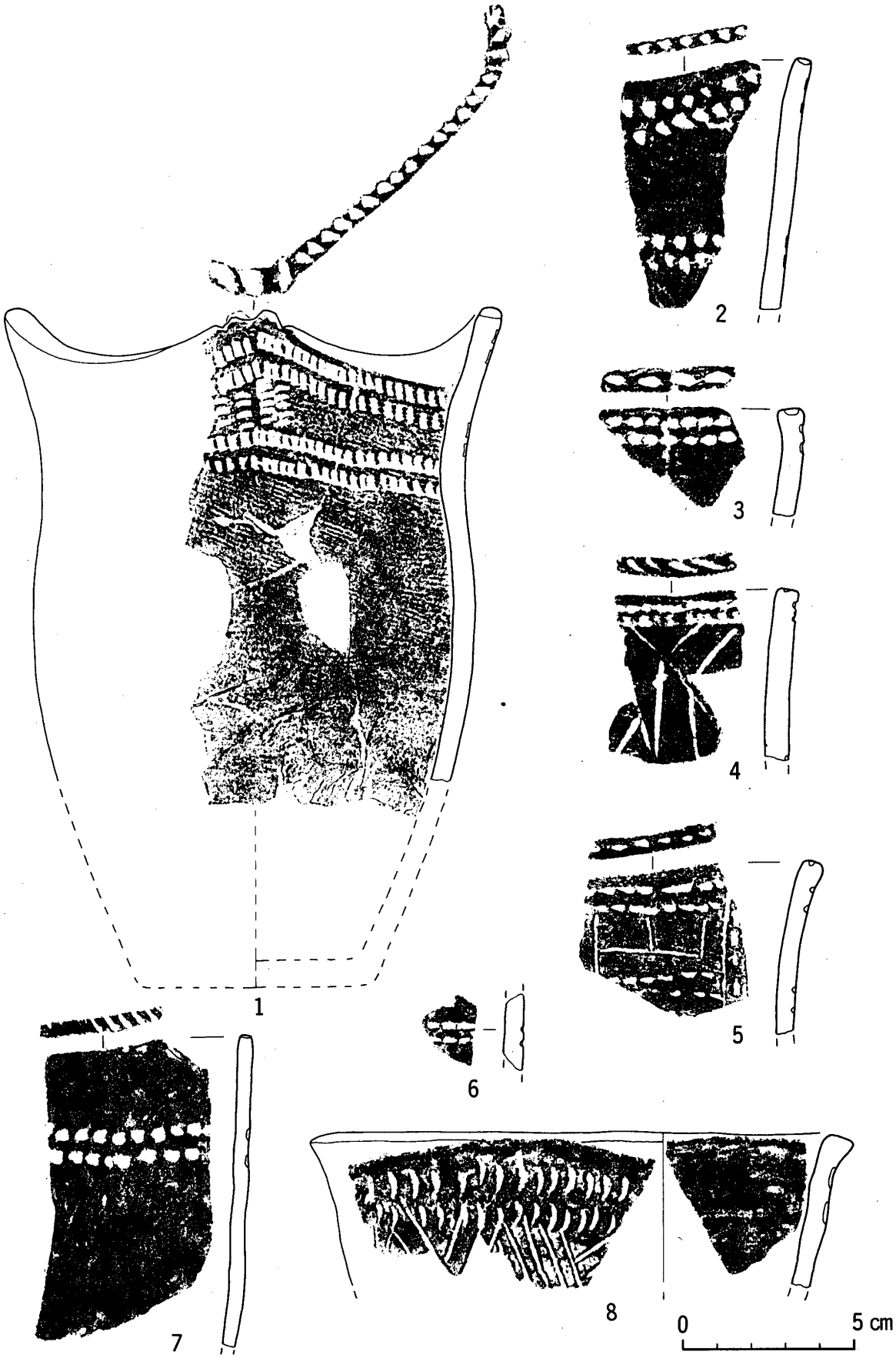
同図4は第IV層下部と第V層上部出土のものを接合したもので、両層の時期関係に示唆を与えるものである。同図8は壁面崩壊砂より得られたため出土層は特定できない。他はすべて第V層の出土である。

器種・器形

採集資料はすべて深鉢形に属する。

器形は第29図1のように口縁部がゆるやかに外反し、頸部が若干しまり、胴部がわずかに脹らむ器形と同図7のようにやや直線的に開く器形が認められる。底部は類例を参考にすると平底である。口縁形態はほとんどが山形口縁であるが、同図8は円周の4分の1に近い資料であり、平口縁の可能性が強い。

山形口縁の場合、4個の山形突起を有し、同部でコーナーをつくり、そのため、上面観は4つの弧を合わせたような方形となる。山形口縁はシェブロン状の大型の山を形成する。同図1は山形頂部に抉りを設けるもので、1個体に2種の抉りを持つ特殊の例である。つまり、山形頂部に抉りを1個設ける場合と3



第29図　神 野 E 式 土 器

個設けるものがあり、相対する山形は同一の形態をとり、左右と異なる。この種の異形の山形を組み合わせるものが、ほかに1例本区で出土（第24図2）している。

本型式のサイズについてみると、同図1は器高が推定19センチ、口径約15センチ。同図8は口径約16センチで、いずれも、中型のサイズに属し、他の大部分の資料もこれに準ずるものと思われる。器厚は5～6ミリのものが多く、最も薄いものは同図7で、約4ミリ、最も厚いものは同図4で、約7ミリを測る。

焼成は一般に良好。器色は茶褐色(同図1・4・5・7）あるいは橙褐色（同図2・3・6・8）を呈する。同図5は外面、同図7は内外両面の一部が煤けて黒ずんでいる。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は後者に比して混入量が多い。石英は全資料に観察され、黒雲母は同図1・5～7の4点に認められる。

文様

器面調整は最終的には撫で手法を用いるが、部分的に擦痕が残るもの（第29図1～5・7・8）もある。擦痕の残る例についてみると、外面に顕著で、内面はきわめて微弱である。擦痕の方向は外面では主に横方向で、内面では横・斜め・縦など種々認められる。同図1の場合、頸部から胴下半部にかけて広範囲に施されているが、内面はほとんど撫で消され、観察できない。

施文具は叉状工具(同図6)、半截竹管状工具（同図4・8)、単篦工具（同図1～3・5・7）の3種があり、単篦には先端が尖るもの（同図2・3・5・7）と方形のもの（同図1）がある。

施文部位は口唇部と口頸部で、前者の場合、無文のもの（同図8）もある。口唇部の文様は三角形刺突文（同図1～3・5）・短沈線文（同図4）・刻目文（同図7）の3種があり、施文はいずれも深く、明瞭である。

口頸部の文様は上・中・下の3段で構成され、口頸部上段と下段に同一文様を配し、中段は無文のものと数種の文様で飾るものがある。文様構成は伊波式土器と一致するが、伊波式土器の場合、口頸部上段と下段に2点1組あるいは2線1組の文様を2組配するのを原則とするが、本型式の場合、1組配する点に特徴がある。

口頸部の文様は次の3種に大別される。

第1種　口頸部中段を無文空白とするもの。

第2種　口頸部中段を数種の文様で埋めるもの。

第3種　口頸部上段の文様を省略したもの。

本区では第3種は検出されてない。

第1種

第29図2は口頸部上段と下段に先端の尖った工具を用いて三角形刺突文を2条施す。施文は浅く、文様は不明瞭。施文方向は左から右である。口頸部中段は比較的広く、上下の間隔は3.5センチ前後である。口唇部にも同種の三角形刺突文を施文する。

同図3は口頸部上段のみの例で、先端の尖った工具により三角形刺突文を2条施す。施文は丁寧で、一見、ペアに見えるが完全に対になりきらないところもある。施文は深く明瞭である。下端を欠くが、口頸部下段にも同種の文様を施文するものであろう。口唇部の三角形刺突文は外面のものより大きく、施文も深めである。本標品は下端を欠くが、もし、

肥厚口縁であれば、前記したように神野D式に分類されるものである。

第2種

4点（第29図1・4・5・8）得られ、うち2点は全貌の窺えるものである。

同図1は方形刺突文を口頸部上段と下段にそれぞれ2条施す。刺突文は密で、個々の文様の下端を押し引き気味に施文するため、刺突文間の無文部は疑凸帯となって、一見、盛り上ってみえる。施文順序は左から右である。中段は基調としては無文であるが、部分的（最小限）に施文を行う。施文部は山形突起下に限られるが、全突起下に施文するわけではなく、山形頂部が3個の抉りを持つものの下方のみが対象となっている。文様は上下段と同様の方形刺突文で、縦位に4条施され、施文は上から下の方向である。

同図4は口頸部上段に半截竹管状工具により横位押し引き文を1条施す。施文は深く、同部は凹線となる。工具の先端は斉一でなく、中央部に刺状の突起が残り、そのため、押し引き文内部に列点状の押点ができる。施文方向は左から右である。下段にも同種の押し引き文が1条配されていたと思われる。中段には方向の異なる沈線を組み合わせながら文様を描くが、一定の形をとらず任意的である。施文は右から左へ移行している。沈線は上段の押し引き文を切っており、押し引き文の後に施文したことがわかる。口唇部には短沈線が斜めに施されているが、沈線の長さは区々（5～8ミリ）である。本標品は山形口縁の左側の資料である。

同図5も山形突起左辺の資料で、突起下では三角形刺突文と沈線を組み合わせた縦位文が1条認められる。この種の組み合わせは嘉徳Ⅰ式A土器に通ずるものである。縦位文は口頸部上段から下段に跨っており、文様帯を区画する性格を帯びている。口頸部上段と下段には三角形刺突文が横位に2条施され、一見、叉状工具による点刻文のように見えるが、単篦によるため上下の点は対になりきらない。中段には沈線による「山」の字状の文様を施す。施文順序は縦位区画文の後、上下の横位刺突文を施している。口唇部にも口縁部と同種の三角形刺突文を施す。

同図8は口頸部上段に弧文を2条横位に施すもので、下段にも同種の文様を配することはA－3区出土の類例（同一個体）よりみて確言できる（註19）。中段の文様は数条1組の沈線による組帯文であるが、割付けが雑で、整然とした組帯文になっていない。沈線は弧文を切っており、施文順序が判明する資料である。また、組帯文は左から右へ移動しながら施文している。口唇部は無文で、平坦に整形され、そのため、粘土が外面に僅かに食み出している。

変形文様

同図7は山形突起左辺の資料で、頸中央部に横位の三角形刺突文を2条配する。口頸部上段と下段の文様は略され、したがって、厳密な意味では本型式から外れるものである。上下2列の刺突文は単篦によるため完全に対になりきらない。三角形刺突文の先端は丸味を帯び、施文は深めである。口唇部には刻目文を施すが、施文後、同部を篦で撫で押した形跡がある。

種不明

第29図6は小破片のため文様の細分が不能のものである。叉状工具による連点文が1条施されており、施文方向は左から右である。上下の空白から口頸部下段の資料と思われ、

本型式に属することは間違いないが、前記第1・2種のいずれに属するか不明のものである。

k）伊波式土器

伊波貝塚出土の土器を標式とするもので(註20)、本区では13点得られた。第30図1は復元可能なもの、他はすべて小破片である。中には、神野D式と区別が困難なものもあるが、とりあえず、本項に含めることにする。

第30図5・6・9・12は第IV層、同図1・4・7・8・10・11は第V層の出土である。同図2・3・13は壁面崩壊砂より検出され、出土層の特定は困難。

器種・器形

口縁破片からすると器種はすべて深鉢形である。

器形は第30図1にみられるように、口縁部は外反し、頸部はしまり、胴中央部が若干脹る、平底の器形で、口縁は4個の山形突起を有する。上面観は山形突起部でコーナーをつくるため、丸味を帯びた方形を呈する。平口縁の明確な資料は得られてない。

サイズは同図1についてみると、器高が約17センチ、口径が推算16.5センチで、中型のものである。器厚は6ミリ前後のものが一般的で、同図2は最も薄く約5ミリ、同図13は最も厚く約8ミリである。

器色は暗褐色で、焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は全資料に、黒雲母は同図1・4・7の3点に認められる。

文様

器面調整は最終的に撫で手法を採用するが、部分的に擦痕を内外両面に残すものが多い。ほとんどの資料は横方向の擦痕である。同図1についてみると、口頸部文様帯では横方向、胴部では縦方向、内面は全体的に横方向であるが、部分的に斜め方向となる箇所もある。本標品の擦痕は内外両面とも粗く、顕著である。

施文部位は口唇部と口頸部である。口唇部は無文のもの（同図2・5・7～11）もあるが、本型式の場合、必ずしも口唇全体に施文するとは限らないので、中には部分的に施文するものもあったかと思う。

口唇部の文様は刺突文（同図1・4）と刻目文（同図6）の2種があり、前者の施文具は先端が尖るもの（同図1）と棒状工具（同図4）が認められる。いずれも施文は深い。施文範囲は同図1についてみると、口唇部全体が対象となっている。

伊波式土器の口頸部の文様は一般に3段構成である。口頸部上段と下段に普通同一文様を配し、その場合、叉状工具による2点1組の点刻文を2条施す例が最も多い。中段は無文空白の場合と数種の文様で飾る場合がある。

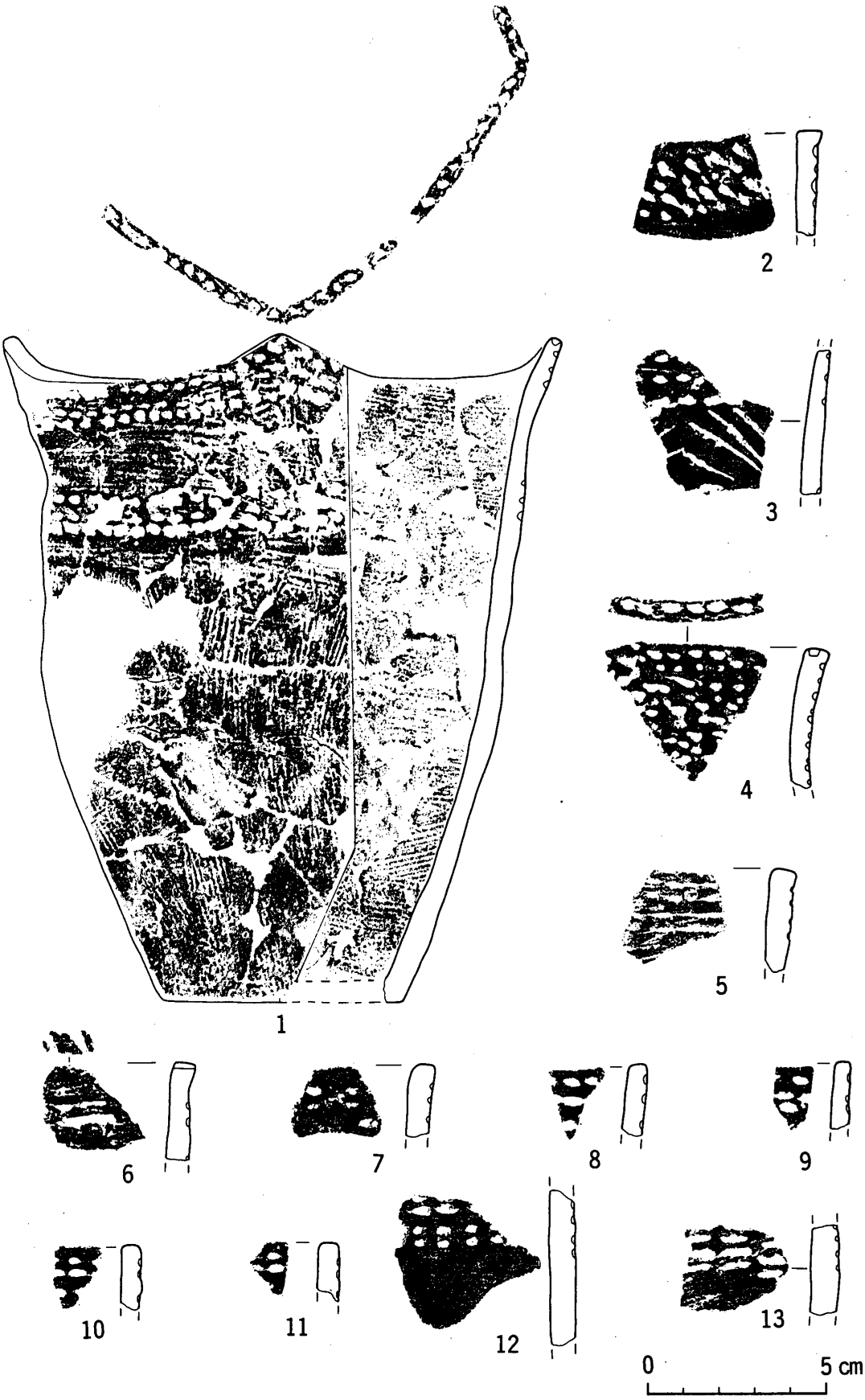
文様上の特徴から本型式は次の3種に分類されている（註21)。

第1種　口頸部上段と下段に2点あるいは2線1組の点刻文・連点文・沈線文などを2組施し、中段を無文空白とするもの。

第2種　口頸部中段を数種の文様で埋めるもの。

第3種　変形文様を施すもの。

本区では文様の判別可能なものは4点（第30図1～4）で、他は小破片のため不明であ



第30図　伊　波　式　土　器

る。第３種は得られてない。

第１種に属するものは同図１・２の２点である。

同図１は口頸部上段と下段に叉状工具による２点１組の点刻文をそれぞれ１条、その直下に三角形刺突文を１条施す。一見、三叉工具による施文にみえる。点刻文は引きが弱く刺突的である。中段は無文で、その幅は2.5センチ前後である。

同図２は上段に叉状工具による２点１組の点刻文を２条施文するものだが、他と異なる施文手法を用いている。つまり、先端の幅約９ミリのやや幅広の叉状工具を用いて施文するけれども、上段の点刻文の間に下段の点刻文の上列を挿入しているのである。つまり、１・３列の太目の点刻文と２・４列の小型の点刻文は同一工具によるものである。施文は雑で、余程注意しないと単篦工具施文と間違える可能性もある。点刻文は刺突手法を採用しており、刺突は右から左の方向で行いながら、施文は左から右へ移動している。下段にも同一文様が配されていたであろう。中段はわずかに無文部が窺え、第１種に含めてよいと思われる。本標品は山形頂部左辺の資料である。

第２種に属するものは同図３で、現存の文様からすると、上段と下段に叉状工具による２点１組の点刻文を２条施す例であろう。点刻文は刺突手法によるもので、右から左の方へ突き刺している。中段には沈線による鋸歯文を施し、施文は右から左へ移行している。

同図４は口縁資料で、叉状工具による２点１組の点刻文が５条認められる。上段と下段に点刻文を施す例であろうけれども両者が連続的に施文されたために融合してしまい、上・中・下段の区別がつかなくなった例と解することもできる。施文は雑で規則性に欠ける。施文は刺突から引く手法に変わっており、その点では典型的な伊波式に近づいている。施文は左から右の方へ移動している。この一例は第２種の変形文とみることが可能かと思う。

同図５～11は上段の文様部分を残すものである。

同図５は叉状工具による連点文と平行沈線を併用する珍らしい例で、上方に連点文、下方に沈線文をそれぞれ１条配する。施文方向は左から右で、全体的に浅い。山形頂部右辺の部分である。

同図６は２線１組の沈線を横位に２条施す例とみられる、典型的な伊波式に分類してよかろう。沈線の長さは２センチ前後で、施文は深く鮮明である。

同図７～11も２点１組の点刻文を２条施文する例とみられるが、同図８は単篦工具、他は叉状工具を用いる。同図８・９の２点の施文には引く手法が認められるが、他は刺突による点刻文である。

同図12・13は下段文様の資料で、いずれも、叉状工具による２点１組の点刻文が２条認められる。同図12は刺突手法による点刻文、同図13は典型的な点刻文である。

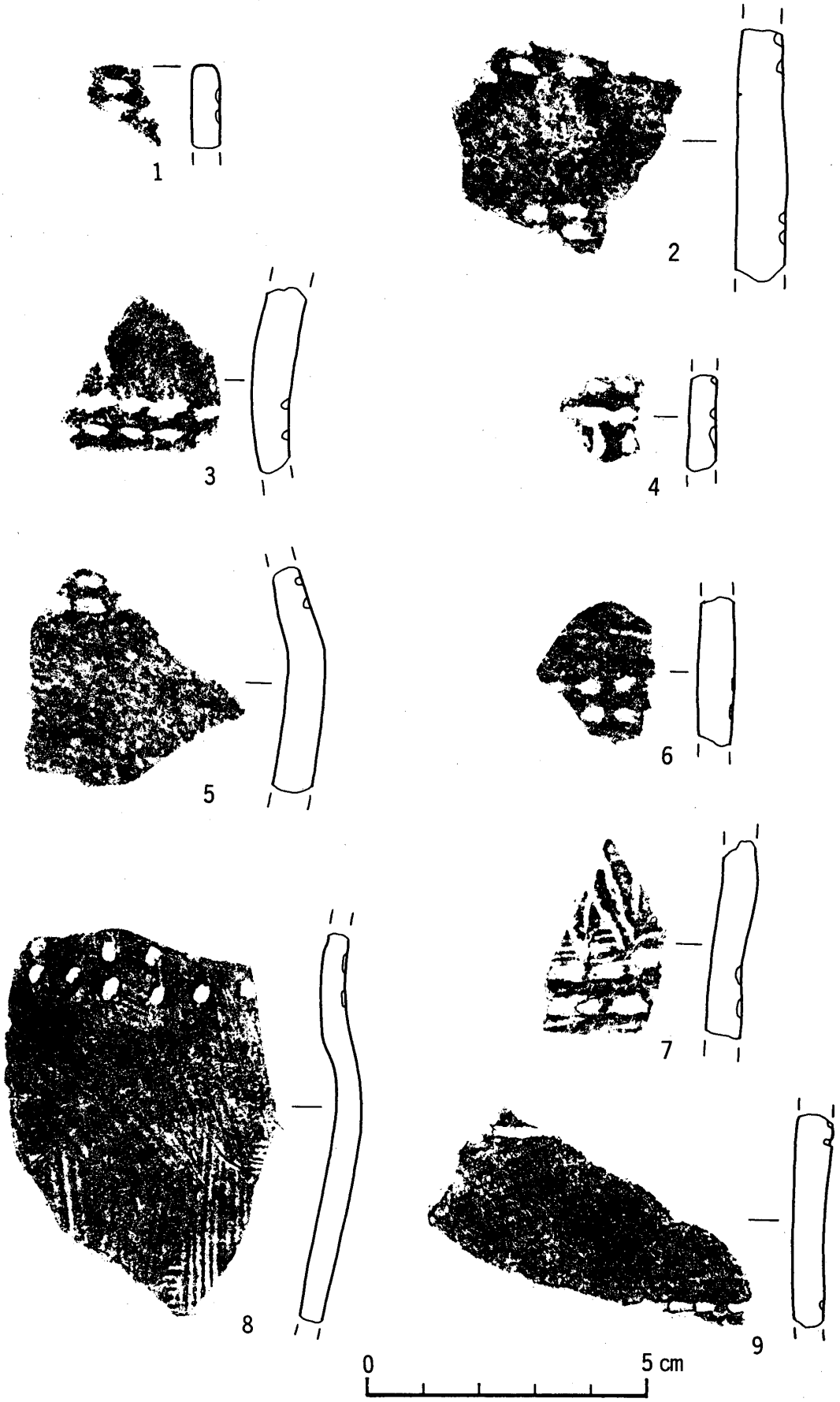
Ｉ）伊波系土器

伊波式およびその先行型式（神野Ｄ式・神野Ｅ式）のうち、いずれの型式に分類すべきか判別不能の小破片を本項にまとめた。９点得られ、そのうち第31図１・２・５は第Ⅳ層、同図４・６～８は第Ⅴ層、同図３・９は壁面崩壊砂の出土で、産出層は不明である。

器種・器形

いずれも深鉢形の資料とみられる。

上記のように小破片のため器形の全体像はつかめないが、第31図５・８の２点は頸下部



第31図　伊　波　系　土　器

から胴上部の形状が窺える資料で、両者とも頸部がしまり、胴上部が若干脹る器形である。同図5は頸部のしまりが若干強く、したがって、胴上部の屈曲も他に比して強い。同図8は内面の頸胴部の境には不明瞭ながら稜が認められる。

器厚は最も厚いものが同図2の約8ミリ、最も薄いものが同図1の約5ミリで、6～7ミリのものが一般的である。器色は茶褐色で、同図2・4～8は部分的に煤が付着し黒味を帯びる。焼成は良好。

胎土混入物は石英・黒雲母などで、石英は全標品に認められ、混入量は後者に比して多い。黒雲母は同図2・8・9に含まれる。

文様

器面調整は最終的に撫で手法が用いられるが、擦痕の残るケースもある。第31図7は内外両面に横位の擦痕が残り、外面のものは粗く明瞭である。同図8は外面の下部に縦位の粗い擦痕、上部に細い斜位の擦痕を施すもので、擦痕の著しい例である。内面は撫でられ、擦痕は残らない。同図9は外面に横位の擦痕が不明瞭ながら残るものの、内面は完全に消されている。

次に口頸部の文様についてみると、同図1～5は叉状工具による点刻文を配するもので、刺突後、引く手法を用いるが、いずれも引きが弱く、したがって、伊波式などの典型的な点刻文より若干短かい。

同図1は口縁資料で、口唇に沿って点刻文が1条認められる。口唇上は無文である。

同図2は口頸部上段と下段に横位の点刻文がそれぞれ1条認められ、中段を無文とするもので、同部の上下の幅は約2.5センチである。

同図3は横位点刻文が1条認められ、点刻文は「ハ」の字状を呈する。破片左端にも同種の点刻文が縦位に施されており、中段に縦位文を配する例とみられる。施文順序は横位点刻文が先である。

同図4は破片上方に横位点刻文、下方に縦位点刻文を配するもので、施文具の先端はやや尖り、三角形刺突文に類する。

同図5は口頸部下段の文様を含む資料で、横位点刻文が1条見受けられる。

以上の横位文は左から右の方向で描かれ、縦位文の施文は上から下への方向である。

同図6～8は口頸部下段を含む資料で、疑似点刻文がそれぞれ1組見受けられる。点刻文は引く手法を用いるもの、刺突の手法を用いるものなどが認められる。疑似点刻文は単篦工具によって描かれるため、上下の点は対になるところとならないところがある。

同図6の刺突文は先端の尖った篦を用いて描かれるが、施文は浅く不明瞭。破片上方の状況から中段を無文空白とする例であろう。

同図7の疑似点刻文は施文の最も雑な例である。破片上方の中段の文様は方向の異なる斜沈線を組み合わせるもので、鋸歯文か組帯文のいずれかであろう。斜沈線についてみると中央部の左傾のものをその左右の右傾のものが切っており、施文順序を窺うことができる。沈線はシャープである。

同図8の刺突文は先端の丸い篦によるもので、右から左へ突き刺す手法を採る。上下の刺突文は完全な対にはなりきらないが、ペアの意識をみることができる。

同図9は口頸部上段と下段に文様の一部が残っており、上段のものは点刻文に類似するが、下段のものは押し引き手法を用いており、連点文とみてよかろう。施文は左から右の方向である。本資料も中段の上下の幅を知りうる例で、幅は約3センチあり、同部は無文である。

m）有文土器（型式不明）

有文土器のうち、型式分類不能のものを本項にまとめる。次の2種に大別される。

(イ) 既報の諸型式とは異なる文様

(ロ) 複数の型式にみられる文様

まず、(イ)からみていくことにする。第32図1・2の2点である。

同図1は深鉢形で推定復元を試みた。口縁は外反し、頸部は若干しまり、胴部中央がやや脹らむ、いわゆる朝顔形に属し、伊波系土器に通ずる器形である。底部は平底が想定され、口径は胴部の最大径より若干大きくなる。口縁形態は平口縁で、上面観は円形である。口唇部は平坦である。

サイズは口径が約15センチ、器高は推算20センチで、中型に属する。器厚は6ミリ前後、器色は茶褐色で、煤の付着によって黒味を帯びる部分が内外両面に見受けられる。焼成は良好で、胎土混入物は石英・黒雲母などが認められ、後者は少量である。

器面調整は撫で手法により、擦痕はほとんど見受けられない。

文様は口縁部に三角形刺突文を横位に3条施すが、上下の間隔は一定せず、施文は雑である。また、刺突文も水平というよりは軽い波状を呈し、特に下段のものは上部の2条より粗雑で、中段のものとの間隔は狭い箇所で約1センチ、広い箇所では約2センチを測る。刺突文はやや密で、左から右へ押し引き手法によって施すが、断続する部分も見受けられる。口唇部にも同種の刺突文を左から右方向に施す。施文は密である。第V層下部の出土である。

本標品は文様の性格からすると面縄東洞式土器の系統に属するが、簡略化が進んでおり、同型式の終末期のものとみることもできる。他方、刺突文が上・中・下の3段で構成される点は伊波式土器に通ずる特徴であり（器形も山形口縁でない点を除けば伊波式に類似）。同型式との関係も問題になろう。以上のように本土器は両型式の特徴を備えており、中間的な特殊な土器である。

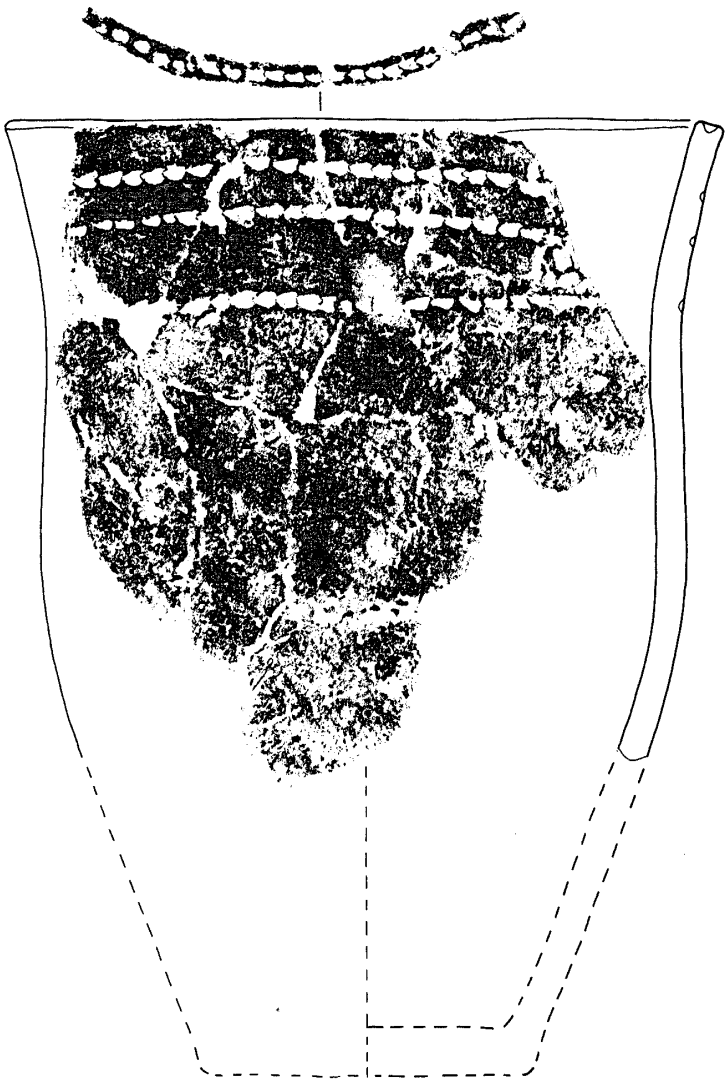
同図2も深鉢形で、口縁部は外反し、頸のしまりは他に比べ強い。破片下方の状況からすると、胴部の脹らむ器形であろう。口縁形態は平口縁であるが、口唇部の刺突文がやや強めに施文されたために外観は微弱な波状を呈する。口径は約14センチで、中型のサイズに属し、器厚は比較的薄く5ミリ前後である。器色は茶褐色であるが、煤が付着し、黒味を帯びる箇所が内外両面に見受けられる。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は混入量が多く、肉眼でも観察は容易である。焼成は良好。

器面調整は最終的に撫で手法が採用され、外面には斜め方向の擦痕が不明瞭ながら残るが、内面は撫で消され、残らない。

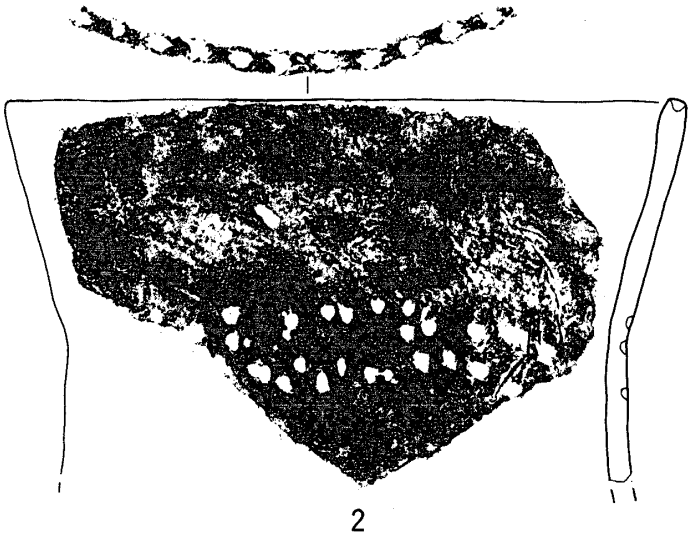
施文部位は頸部と口唇部である。外面の場合、普通、口頸部が施文の対象となるが、本例は頸部のみを対象とする珍しいケースである。頸部の文様は三角形刺突文（ただし先端は丸味を帯びる）を水平方向に配するが、施文は雑で、規格性がない。施文は左から右の方向である。口唇部にも同種の三角形刺突文をほぼ等間隔（1センチ前後）に施すが、前述したように刺突が深いため刺突文と同数の凹部ができ、外観は波状を呈する。第V層の下部の出土である。

次に(ロ)のグループについて記す。

破片にみられる文様は次の4つに分類される。



1



2

0　　10cm

第32図　有文土器（型式不明）

①沈線文のみのもの

②刻文のみのもの

③刻文＋沈線文

④肥厚口縁土器

①沈線文のみのもの

121点得られ、比較的大きな破片18点(第33図１～12、第34図１～６）を図示した。第33図11、第34図３・５は第Ⅳ層、第33図１・２・４～６・８～10・12、第34図１・２・４・６は第Ｖ層の出土である。第33図３・７は崩壊砂より検出。

器種は深鉢形とみられるものだけである。器形を示しうる資料は少なく、口頸部の破片についてみると、第34図１の口縁は若干外反し、胴上部がわずかに脹らむ。第33図１・９は口縁上端がわずかに外反する。その他の資料は小破片のため不明だが、第33図２・10は直口の可能性も考えられる。第33図11は頸部の資料で、口縁は外反するようである。第33図４・５は口頸部が微弱に肥厚する例である。

サイズは第34図１が口径約９センチで、小型に属する。他方、胴上部の径の推算が可能なものもあり、第33図６は約12センチ、同図７は約15センチ、第34図２・３は約10センチ、同図５は約14センチである。器厚をみると最も薄いものは第33図４の約4.5ミリ、最も厚いものは第33図８の10ミリ前後で、６ミリ前後のものが多い。

器色は茶褐色を基調とし、中には外面に煤が付着し、黒味を帯びるもの（第34図２・４・８）もある。焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、一般に前者の混入量は多い。石英は全資料に、黒雲母は第33図８、第34図５・６の３点を除いた資料にみられる。

器面調整は撫で仕上げであるが、擦痕を残すものもわずかながら見受けられる。第33図１の外面の擦痕は粗く、むしろ条痕に近い。施文方向は斜めである。内面のものは横位で細い。第34図３・５・６は内面に縦位あるいは横位の擦痕が残るが、外面は丁寧に撫でられており、擦痕は見受けられない。

文様はほとんどが口頸部（第１文様帯）の文様であるが、中には胴上部（第２文様帯）に属するものも見受けられる。

第33図１～８は口頸部資料で、籠目状文に属する。嘉徳Ⅰ式あるいは同Ⅱ式の資料であろう。

同図１は沈線間の無文部が目立つもので、沈線はやや太めである。口唇上に方形状施文具による押し引き文を左から右へ配する。

同図２は２条を単位とする沈線でもって籠目状文を描く。沈線はシャープである。口唇部は無文。

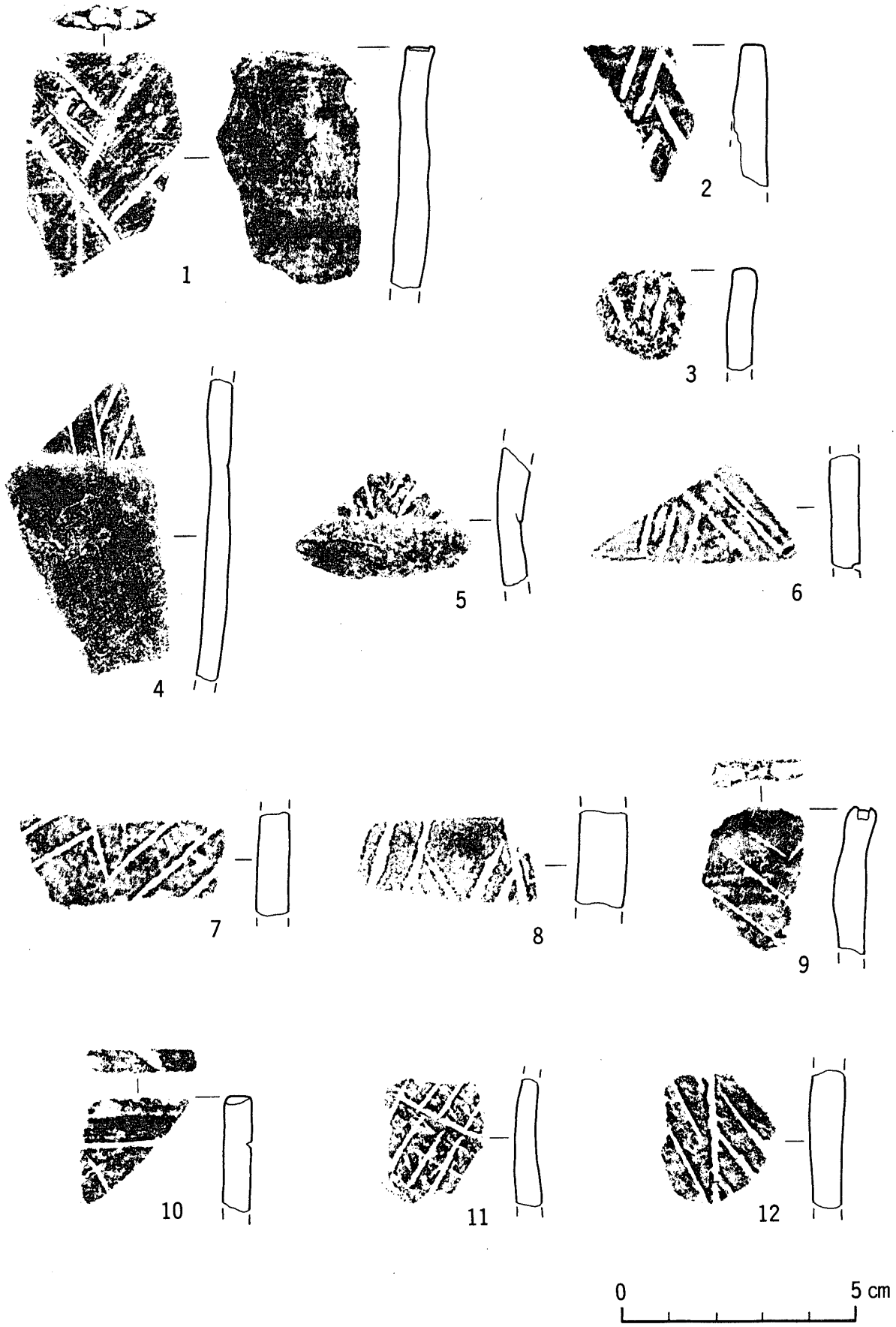
同図３も２条１組の沈線を単位とするもので、沈線は浅くやや不明瞭。口唇部は無文である。

同図４は肥厚する文様帯に右傾と左傾の沈線を配するもので、同方向の沈線は各々２条確認できる。

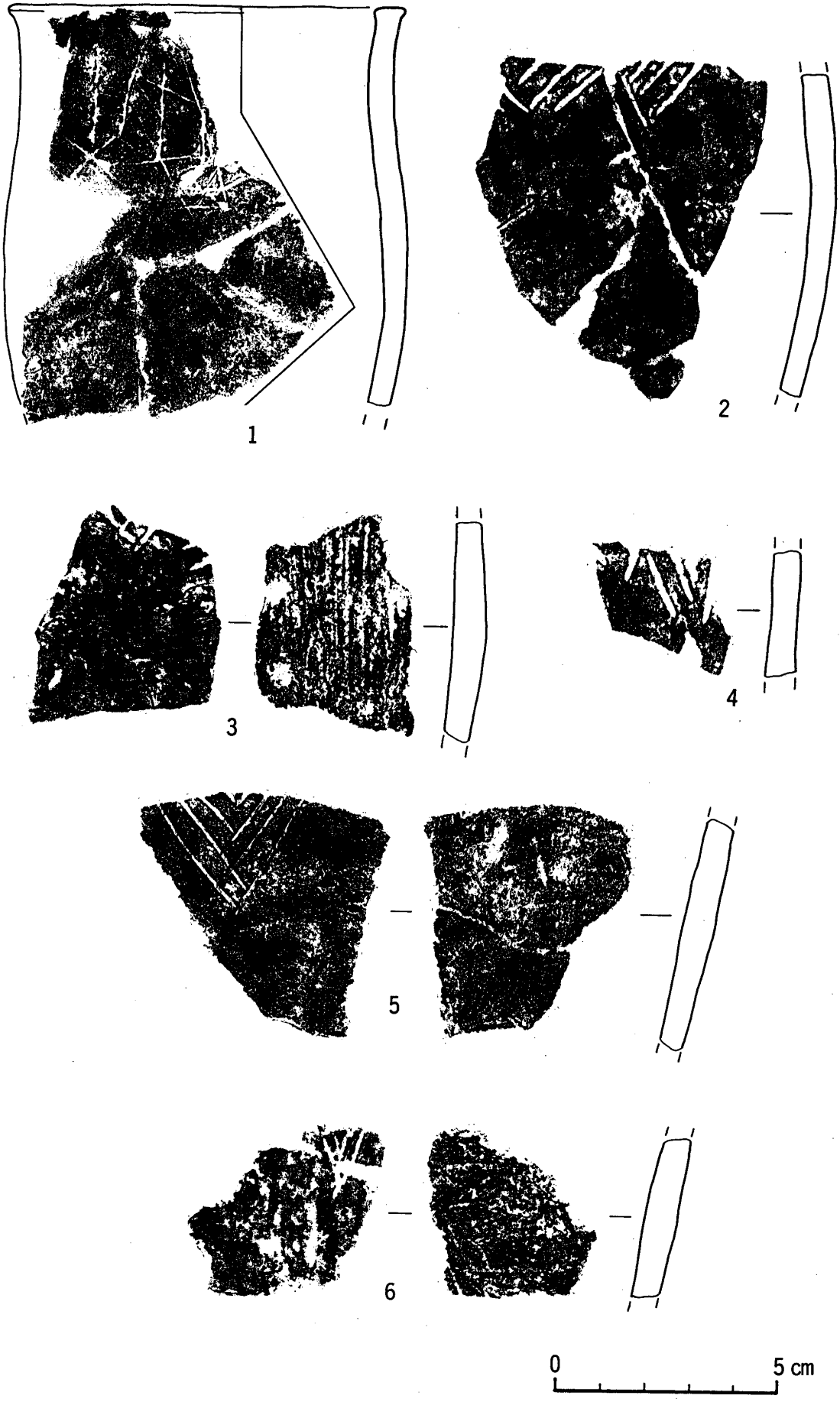
同図５は上記４と同様、文様帯の肥厚するもので、右傾と左傾の沈線が各々３条認められる。

同図６は右傾と左傾の沈線がみられるが、いずれも３条を単位とする。左傾のものは短く（１センチ前後)、右傾のものは長く（現存部の長さは約２センチ)、傾斜もゆるやかである。沈線はいずれもシャープである。破片下端には横位沈線がみられるが、同部より破損しており拓影には現われない。

同図７は破片中央に右傾の沈線、その両側



第33図　有文土器（型式不明）



第34図　有文土器（型式不明）

に左傾の沈線を配するもので、沈線は浅く不明瞭である。

同図8は左傾と右傾の沈線を交互に配するもので、沈線は各々2条見受けられる。

同図9は「V」字文を縦位に配するもので、「V」字文の大きさは異なる。沈線はいずれもシャープである。口唇部には先端が方形をなす施文具で押し引き文を施す。施文は深く凹線となり、凹線両縁の粘土が文様の一部を覆う。施文方向は左から右である。嘉徳II式であろう。

同図10は口唇直下に1条の横位沈線、その下方に「X」字状に斜沈線の交叉する文様の一部が残っており、口唇部には三角形刺突文を1センチ前後の間隔で施す。

同図11は頸部資料で、斜沈線を組み合わせ斜格子様の文様効果をだす。施文順序の判明する資料である。

同図12は縦位沈線と斜沈線を組み合わせるもので、全体の構図は不明。沈線はシャープである。

第34図1は不規則な縦位沈線を施すもので、下端の交わる箇所もある。本標品は縦位沈線を施した後、浅めの細沈線を奔放に施しており、方向性が認められず、文様というより傷痕のような印象を与える。施文が浅いため目立たない。

同図2～6は第2文様帯の資料と目されるものである。

同図2～4は鋸歯状の文様を施すもので、嘉徳I式・同II式などにみられる文様である。文様は左傾と右傾の沈線を組み合わせており、2条または3条を単位とするようである。沈線はシャープで明瞭である。

同図5・6は逆三角形文を配するもので、嘉徳I式・同II式第2文様帯にみられる文様に類似するが、6の場合、面縄前庭式のグループの胴部文様の可能性も考えられる。同図5の沈線はシャープで4本を単位とする。同図6の沈線は施文が浅く不明瞭である。

②刻文のみのもの

55点検出され、比較的良好な資料18点（第35図1～18）を図示した。器種は壺形と目されるものが2点（同図1・2）、他はすべて深鉢形である。同図14・18は第IV層、同図1～7・9～13・15・16の14点は第V層の出土である。同図8・17は壁面崩壊砂より得られたものである。

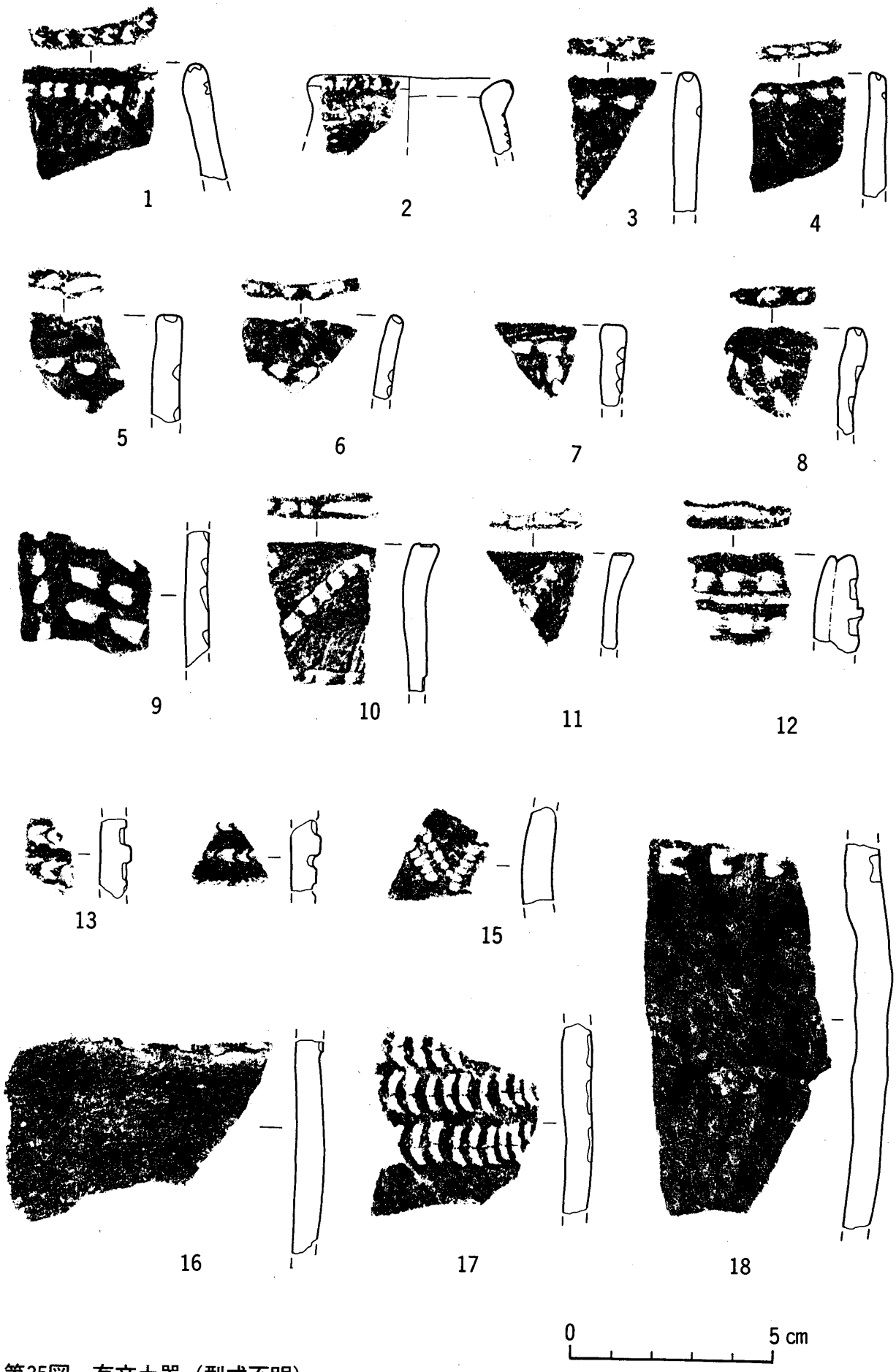
まず、壺形からみていくことにする。

第35図1は山形口縁の資料だが、完形時における山形突起の数は不明である。口唇部は丸味を帯びる。口径は推算6センチで、器厚は6ミリ前後である。器色は明るい褐色で、焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、石英を多量混入する。器面調整は撫で手法で、擦痕は残らない。文様は口唇部に沿って刻文が1条認められる。施文具は幅約3ミリの半截竹管状工具で、施文方向は左から右の方向である。口唇部にも同種の刻文が施され、施文はいずれも深く明瞭である。

同図2は口縁上端が「く」の字状に屈曲するもので、口径は約5センチである。器厚は4ミリ前後で、口唇部は肥厚する。幅広の口唇は沖縄の室川式土器に通ずるものがある。器色は茶褐色で、内面には煤が付着する。焼成は良好。胎土混入物として石英を多量に混入する。口唇部外縁に半截竹管状工具による刻文を密に施すが、施文は浅く不明瞭である。頸部外面にも同種の刻文を縦位に施すが全景は不明。

次に深鉢形について記述する。

器形は小破片のため詳細は不明で、口縁部上端がわずかに外反するもの（第35図8・10・



第35図　有文土器（型式不明）

11）と同部が直線的に開くもの（同図３～５・７）などがみられる。口唇部の断面形態は平坦なものが多い。同図12は尖り気味の口唇部に粘土帯を貼付したもので、接合部の上端は図のように溝状となる。口縁形態は確実の資料は少なく、詳細は不明だが、同図４は山形突起左辺の資料である。器厚は５～６ミリのものが多く、最も厚いものは同図12の約11ミリ、最も薄いものは同図11の約４ミリである。器色は茶褐色あるいは黄褐色を呈するものが多い。中には外面に煤が付着し、部分的に黒味を帯びるもの（同図３・17）も見受けられる。焼成は一般に良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、石英は全資料に、黒雲母は同図７・15・16の３点を除く資料に認められる。

器面調整は最終的に撫で手法を採用し、擦痕の残るケースは少ない。

施文具は先端が三角形のように尖るもの（同図３～９）、先端が丸味を帯びるもの（同図13～15）、先端が方形のもの（同図10～12）、半截竹管状工具（同図17・18）等がある。

同図３～６は横位の三角形刺突文を施すもので、同図３・４は口唇直下に１条配し、下方は無文である。同図５・６は口唇下約１センチの箇所に施し、破片下端部でも同種の刺突文がわずかに窺える。口唇部の文様はいずれも外面と同種の刺突文である。

同図７は三角形刺突文を「T」字状に配する。口唇部は無文である。

同図８は三角形刺突文を斜位に配する例で、破片の中央に右傾のものが２条、左端には左傾のものの一部が窺える。口唇部にも同種の刺突文を施す。

同図９は三角形刺突文が縦位に１条、横位に３条認められ、刺突文は比較的大型である。頸部資料で縦位文に沿って器体は屈折しており、山形突起直下のものであろう。

同図10～15は押し引き文を施文するものである。

同図10・11は同一個体で方形押し引き文を施文する。口縁上方のものは斜行文で、その直下のものは横位文である。施文方向は横位文の場合左から右で、斜行文の場合は２種見受けられ、同図10は右上がり、同図11は左下がりの方向である。口唇部にも同種の押し引き文を施すが、施文は口縁外面と同様弱い。

同図12は方形の押し引き文を横位に施すもので２条認められる。押し引き文は深く、内部には過擦痕が残る。口唇部は無文。本標品は粘土帯を貼付することから肥厚口縁とみられ、沖縄の大山期のカヤウチバンタ式に類するものであろう。

同図13・14は横位の押し引き文が認められるもので、施文は深く凹線となる。施文具は基本的には三角形刺突文に使用されるものであるが、先端は若干丸味を帯びる。面縄東洞式の可能性が強い。

同図15は小型の押し引き文を鋸歯状に配するもので、破片左方の例からすると２条を単位とするものであろう。施文具の先端は若干丸い。頸下部の資料である。

同図16～18は文様帯下部の資料である。

同図16は文様帯が肥厚するもので、肥厚部下端に刻文を横位に施している。施文具の先端は方形とみられる。

同図17は弧文を密に施すもので、横位に３条認められる。施文具の先端は分岐する。胴部は無文であろう。

同図18は半截竹管状工具による刻文が１条認められる。施文は深く明瞭で、沖縄の大山式に近似する。

③刻文＋沈線文

18点検出され、比較的大型の破片10点（第36図１～10）を図示した。同図３・７は第IV層、同図１・２・４・６・８～10は第Ｖ層の出土である。同図５は壁面崩壊砂の出土。

採集資料の器種はすべて深鉢形と思われる。

同図１は山形頂部の資料で、同部は多少角張る。器厚は薄く４ミリ前後である。器色は茶褐色。焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者も目立つ。器面は比較的良く撫でられ、擦痕は残らない。文様は山形突起下に縦位の刺突文が３条認められ、その右側に２本１組の沈線によって鋸歯文を描く。破片下端には横位の刺突文の一部が見受けられる。刺突文は先端の丸い単篦によるもので、施文は雑である。口唇部には刻目文を斜めに施す。本標品の文様構図は伊波式のものに近似し、同型式に近い時期のものであろう。

同図２は直口口縁で、口唇部は平坦に整形され、粘土がわずかに外面へ食み出し、幅広となる。器厚は4.5ミリ前後。器色は茶褐色である。焼成は良好で、胎土混入物は微細な石英・黒雲母などで、後者も目立つ。内外両面には横位の擦痕が不明瞭ながら残る。文様は口縁上方に斜沈線、下方に横位の刺突文がみられる。口唇部の文様は方形刺突文である。

同図３は山形突起左辺部の資料である。内面は剝離しており、器厚は不明である。器色は暗褐色、焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者も目立つ。外面の文様は口唇に沿って方形の押し引き文を配し、下方に横位の沈線を施すが、沈線に沿って破損しているため拓影には現われない。口唇部にも同種の押し引き文を施す。

同図４～９の６点は頸下部の資料である。器厚は５～６ミリのものが多い。同図９は最も厚く約８ミリである。特に薄いものはない。器色は茶褐色を基調とし、同図８は内外両面に煤が付着し黒味を帯びる。焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、石英は全標品に、黒雲母は同図４～６・８にみられる。

器面調整は撫で手法を採用するが、擦痕の残るもの（同図９）もある。文様は沈線文と刺突文によるもので、沈線文は方向の異なる斜沈線を組み合わせ、組帯文・籠目状文などを構成する。沈線文の直下には刺突文を横位に配する。刺突文は三角形刺突文の場合（同図４～６）が多く、同図７は棒状工具によるもので、小型である。同図８・９の２点は刺突文の部分で破損しており、詳細は不明。

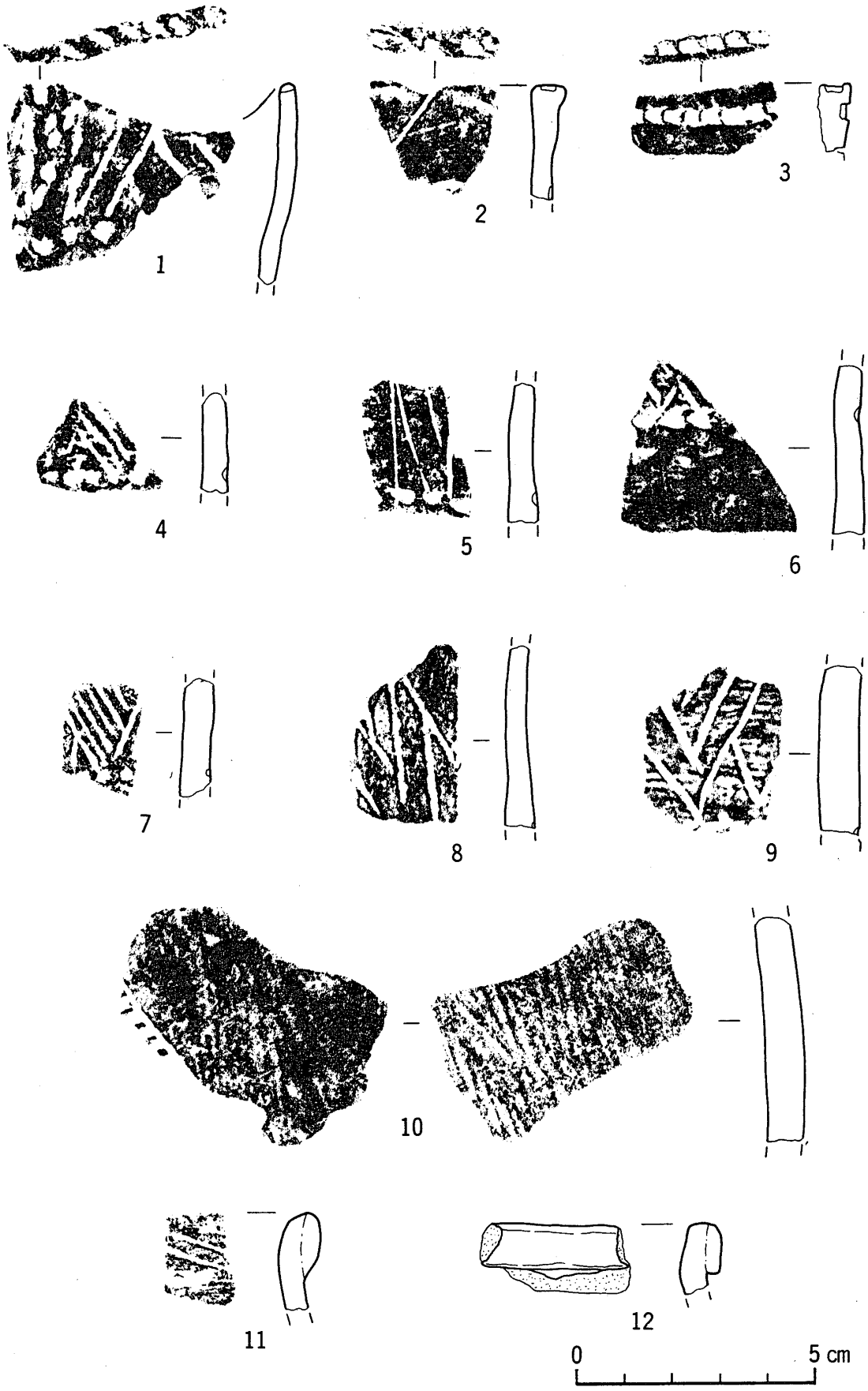
以上の文様は伊波式土器や嘉徳Ｉ式・同II式などにみられる文様である。

同図10は胴部の資料である。器厚は８ミリ前後で厚手である。器色は茶褐色で、焼成は良好。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は粗いものも見受けられるが、後者は微細である。外面は撫で調整を行うが、不明瞭ながら擦痕が残る。内面は縦位の条痕が見受けられるが、撫でられ、したがって不明瞭である。破片上端には粘土帯の接合痕が残っている。文様は破片左端にわずかに見受けられる。斜沈線に沿って刻文を連続的に配するもので、施文順序は刻文が先である。刻文は深く、沈線文は浅い。刻文の幅約４ミリである。

本標品は具志川Ｂ式（註22）の胴部文様にも類するが、嘉徳Ｉ式の第２文様帯の文様にも類例はあり（註23）、いずれに分類すべきか判断に苦しむが、器壁が若干厚く、かつ条痕を有する点を考慮すると、上記両型式のうち古い方に近い資料ではなかろうか。

④肥厚口縁土器

第36図11・12は口縁上端に粘土を貼付し、



第36図　有文土器（型式不明）

肥厚させるものである。

同図11は軽く外反する器形で、器厚は5ミリ前後。器色は茶褐色で、焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者は微細である。器面は撫で調整を行っており、擦痕はごく一部に残る。文様は肥厚部に右傾の斜沈線を施す。沈線はほぼ等間隔で、シャープである。肥厚帯下の頸部は無文であろう。肥厚帯は幅約1.3センチ、厚さは3ミリ前後で、断面形はかまぼこ状に丸味を帯びる。

本標品は仲泊式土器に近似し、浦添貝塚(註24)・具志川島遺跡群（註25)・津堅島キガ浜貝塚（註26）の資料に類する。第IV層の出土である。

同図12も口縁が軽く外反するものである。器厚は約5ミリ。器色は茶褐色で、焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、後者も比較的多い。口縁上端に幅約1センチ、厚さ約3ミリの凸帯を貼付し、口縁を肥厚させる。肥厚部は無文で、断面形は方形に近い。器面調整は撫で手法によるもので、比較的丁寧で、擦痕は残らない。第V層の出土である。

n）無文口縁

口唇部を有する口縁破片のうち、内外面に文様が施されてないものを無文口縁として本項にまとめた。ただし、口唇部のみ施文するものがあり、これをaとし、全く施文しないものをbとした。両者を合わせると49点の出土である。

①無文口縁a

9点検出され、比較的大きな資料6点（第37図1～6）を図示した。すべて第V層の出土である。

器種はいずれも深鉢形と考えられるもので、壺形は得られてない。

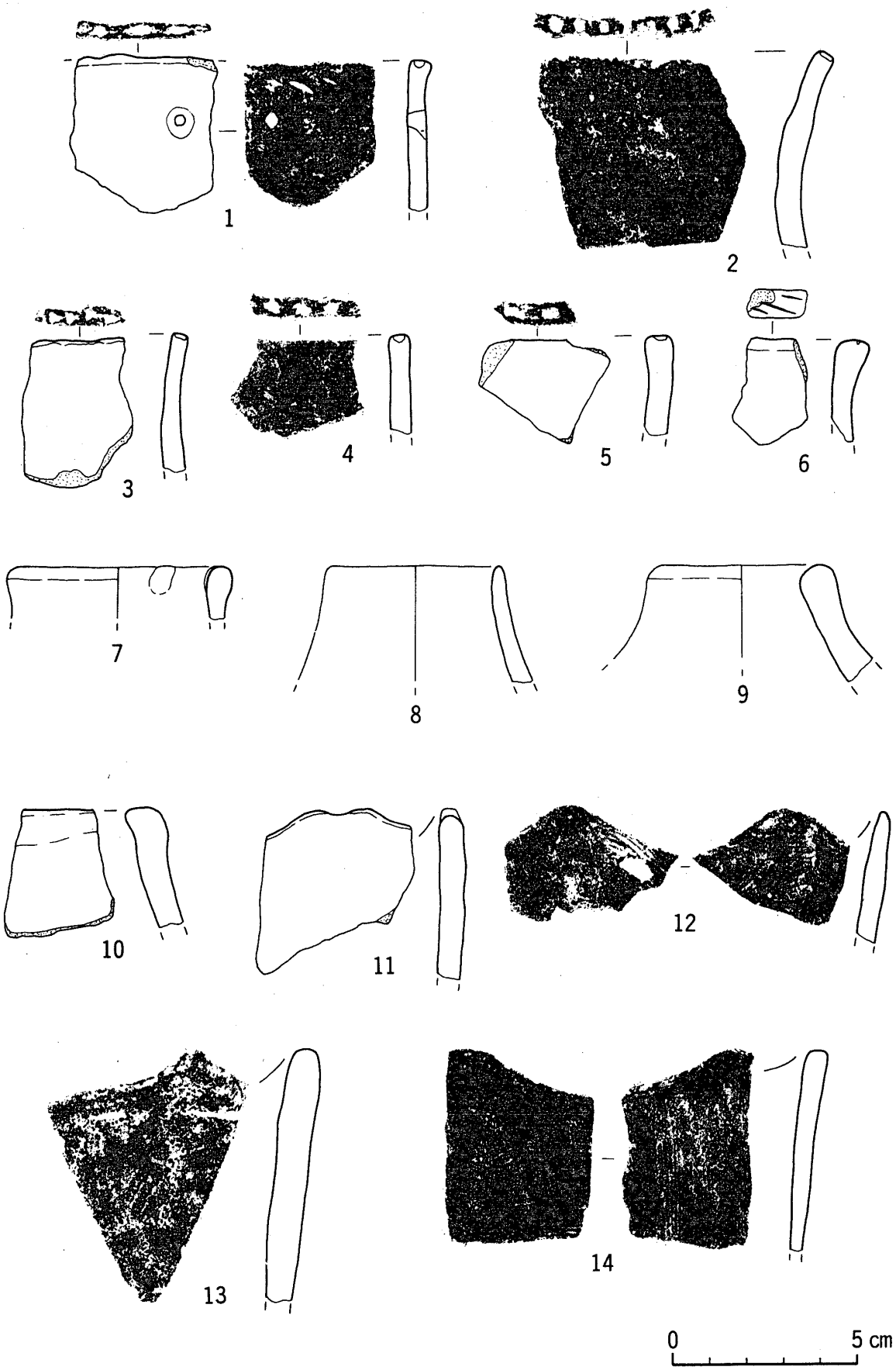
器形については全形の窺えるものはないが、口縁部についてみると、直口状のもの（同図1・4)、外反するもの（同図2・3・6）キャリパー状のもの（同図5）等がある。口縁形態は平口縁かと考えられるものを含むが、明確な資料は得られてない。

同図1は口縁上端をわずかに外反させるが、口頸部全体は直口に近い。口唇部は平坦に整形される。器色は茶褐色。焼成は良好。器厚は約5ミリで薄手に属する。胎土混入物は石英のほか長石も認められ、黒雲母も多い。

器面調整についてみると、内面に縦位の擦痕が不明瞭ながら残る程度で、比較的良く撫でられている。口唇部には刺突文が施され、先端の尖る工具を用いている。施文は深く、間隔は0.2～1.0センチで、一定しない。施文方向は外面を手前にすれば右から左の方向である。内面の口唇直下には6ミリ前後の刺突文様の列点が4個1列に並んでいるが、おそらく偶然の傷痕であろう。破片右方には直径3ミリの孔を穿っており、口唇下約1.5センチに位置する。穿孔は焼成後になされ、外面からのみ行っている。

同図2は口縁が頸部から大きく外反するもので、口唇部はやや丸味を帯びる。器色は茶褐色で、内面は煤けて黒ずんでいる部分もある。焼成は良好。口唇下2センチの箇所に粘土の接合部があり、そこを境として上方が薄く(約6ミリ)、下方がわずかに厚く(約7ミリ)なっている。前記接合部は外面では判別できないが、内面では逆「く」の字状の屈曲を示し、整形上の変化をみせる。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は後者よりも量的に多い。

器面調整は撫で仕上げで、擦痕はほとんど見られない。口唇部には刻文をほぼ等間隔(6ミリ前後）に施す。刻文は幅3ミリ前後の単篦によるもので刻文の内部は微弱な凹凸を呈



第37図　無 文 口 縁 土 器

しており、施文具は先端のささくれた状態のものを使用している。

同図3は口縁部が微弱な外反を示すもので、口唇部は平坦に整形される。器色は内外面とも茶褐色である。焼成は良好で、器厚は薄く約4ミリである。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は後者に比べて混入量は多い。

器面は撫で調整を行い、内外面とも良く撫でられている。口唇部に三角形刺突文を施す。施文は深めで、かつ密である。

同図4は直口とみられるものである。器色は茶褐色で、内面には黒味を帯びる箇所もある。焼成は良好。器厚は約5.5ミリである。胎土混入物は石英・黒雲母などで、両者とも混入量は少ない。

器面調整は撫で手法で、擦痕がかすかに残る程度で、撫では良好。文様は口唇部に三角形刺突文を施す。施文は深く、そのため口唇部は凹凸となる。

同図5は口縁上端部が微弱な内彎を示すもので、ややキャリパー形に近い。口唇部は平坦である。器色は茶褐色だが、煤けて全体的に黒ずんでいる。焼成は良好。器厚は約6.5ミリ、胎土混入物は石英・黒雲母などで、両者とも比較的多量に含まれる。

器面は撫で調整で、両面とも丁寧に仕上げるが、内面には横位擦痕がわずかに残る。口唇部の文様は押し引き文で、左から右へ施文する。施文具の先端は方形である。

同図6は口縁部が外反する器形で、口縁上端をわずかに肥厚させる。器色は茶褐色で、内面は煤が付着し黒味を帯びる。器厚は6ミリ前後。焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで前者は後者に比べ量も多く、粒子も粗い（径1ミリ前後）。

器面調整は撫で手法で、丁寧に仕上げ擦痕はほとんど残らない。口唇部の文様はシャープな斜沈線で、3本見受けられる。

②無文口縁b

40点出土し、うち16点（第37図7～14・第38図1～8）を図示した。器種は壺形と深鉢形の2種が認められ、前者は4点で、他は深鉢形である。まず、壺形から述べることにする。

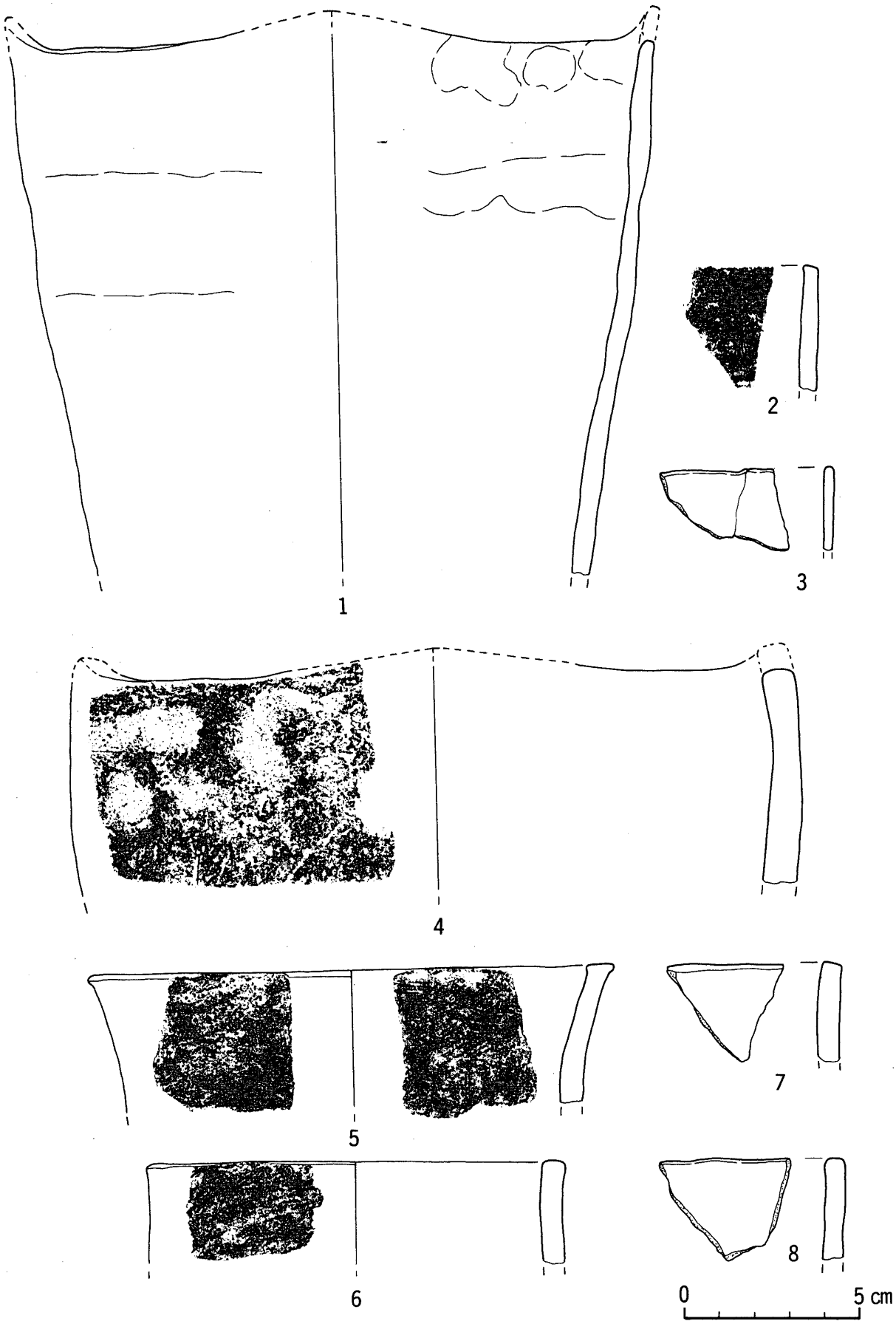
壺形（第37図7～10）

第37図7は口径約6センチ、口縁上端をわずかに肥厚させ、口唇部は丸味を帯びる。頸部以下の形状は破損のため不明。器色は茶褐色で、焼成は他に比べ若干脆弱である。器厚は5ミリ前後。胎土混入物は石英で混入量は多い。器面は撫でにより仕上げ、擦痕は認められない。口縁内面の上端には粘土粒があるが、不充分な整形によるものであろう。第V層の出土。

同図8は口径約5センチ、ほっそりした器形で、口唇部は尖り気味である。器色は茶褐色。焼成は良好である。器厚は5ミリ前後で、薄手に属し、胎土混入物は石英・黒雲母などであるが、後者はきわめて少ない。器面調整は撫で手法を採用し、丁寧で擦痕は残らない。第V層の出土である。

同図9は肩の張る器形とみられるもので、口唇部は若干肥厚し丸い。器形は荻堂期の壺形に近似する。器色は黄褐色。焼成は良好である。器厚は9ミリ前後と厚手である。胎土混入物は石英・黒雲母などで、前者は粒子も粗く（径2ミリ前後）、混入量も多い。口径は約5センチ。器面調整は撫で手法で、擦痕は残らないが、内面は凹凸がみられ、雑である。第IV層の出土。

同図10は口縁上端がわずかに内彎するもので、平坦の口唇部は内面へわずかに突出する。



第38図　無 文 口 縁 土 器

口縁上端は若干肥厚する。現破片の形状から類推すると肩部から口縁にかけてすぼまる器形で、これも荻堂期のものに類似する。口径の推算は不能。器色は茶褐色で焼成は良好である。胎土混入物は石英・黒雲母などで両者とも混入量は多いが、特に石英は顕著で粒子も粗い(径2ミリ前後)。器面は撫でによって丁寧に仕上げられている。第IV層の出土である。

深鉢形（第37図11～14、第38図1～8）

器形は比較的大型の第38図1についてみると、胴部から口縁部へ直線的に開く器形である。第37図13・14は第38図1に準ずるが、第38図4は内彎し、同図5は外反する。他は小破片のため形状を把握し得ない。口縁形態は山形が一般的であったと考えられ、6点（第37図11～14、第38図1・4）得られた。平口縁の確実なものは採集されていない。山形口縁の突起はシェブロン状（第37図13・14)、頂部が丸くなるもの（第37図12)、「M」字状のもの（第37図11）などが認められる。第38図1・4は山形頂部を欠き、したがって、同部の形状は不明。

器色は茶褐色を基調とするが、煤けて黒味を帯びるもの（第38図1・2・4）もみられる。焼成は一般に良好で、特に第37図12は堅緻である。

口径は第38図1が約18センチ、同図4が約20センチ、同図5が約15センチ、同図6が約12センチで、大型と中型のものが認められる。器厚は6ミリ前後のものが一般的で、第38図3は最も薄く約3ミリ、同図4は最も厚く約10ミリを測る。

胎土混入物は石英・黒雲母などで石英は全資料に、黒雲母は第37図12・第38図6を除く他の資料にみられる。混入量は一般的に石英が多く、黒雲母は散見される程度である。第37図14は特に石英の量が顕著である。

器面調整は撫で手法で、一般によく撫でられている。しかし、中には擦痕の残るもの(第37図12・14、第38図2・5・6）もある。第37図12は内面に幅約1センチの木理条痕様の過擦痕が横位に施される。同図14は外面に横位の擦痕が、内面に縦位のものが比較的明瞭にみられる。第38図2・5は内外両面に、同図6は外面のみに横位の擦痕を残すが、いずれも不明瞭である。

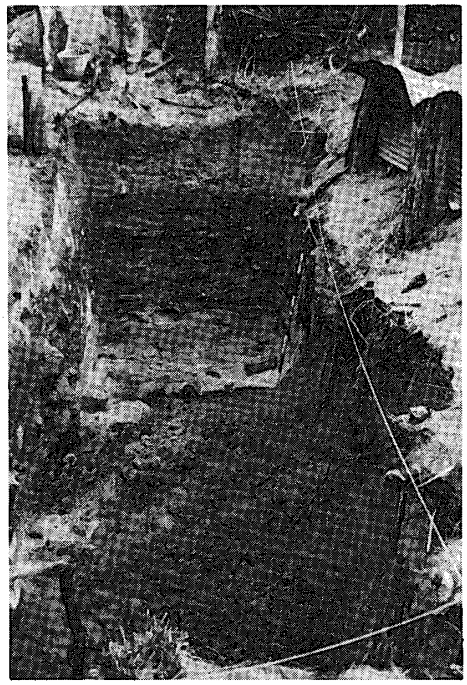
第37図12・13は第IV層、他は第V層の出土である。

o）底部

本区では復元資料（第24図2、第28図1、第30図1）を除く52点の底部が検出され、うち48点を図示した。

器形的にみると平底が支配的で、尖底は僅か2点である。層位別の出土状況は第14表の通りである。

以下、平底、尖底の順に記述する。



A－2区西壁の崩壊状況

第14表　底部の層位別出土状況

※（　）内は実測図省略の数

種類 ＼ 層序	平底					不明	尖底	計
	A		B		C			
	イ	ロ	イ	ロ				
I								
II								
III								
IV	3		3	1	2	4 (1)		13(1)
V	1	2	4	5	11	8 (3)	1	32(3)
VI								
崩　壊	2		2			2	1	7
計	6	2	9	6	13	14(4)	2	52(4)

平底

平底は立ち上がりの形状により、概ね下記の３種に分類できる。分類不能の資料は不明として扱った。

A：立ち上がりの部分が外彎状に脹らむもの。

B：立ち上がりの部分が胴部へ直線的に開くもの。

C：立ち上がりの部分が内彎状のカーブを描くもの。

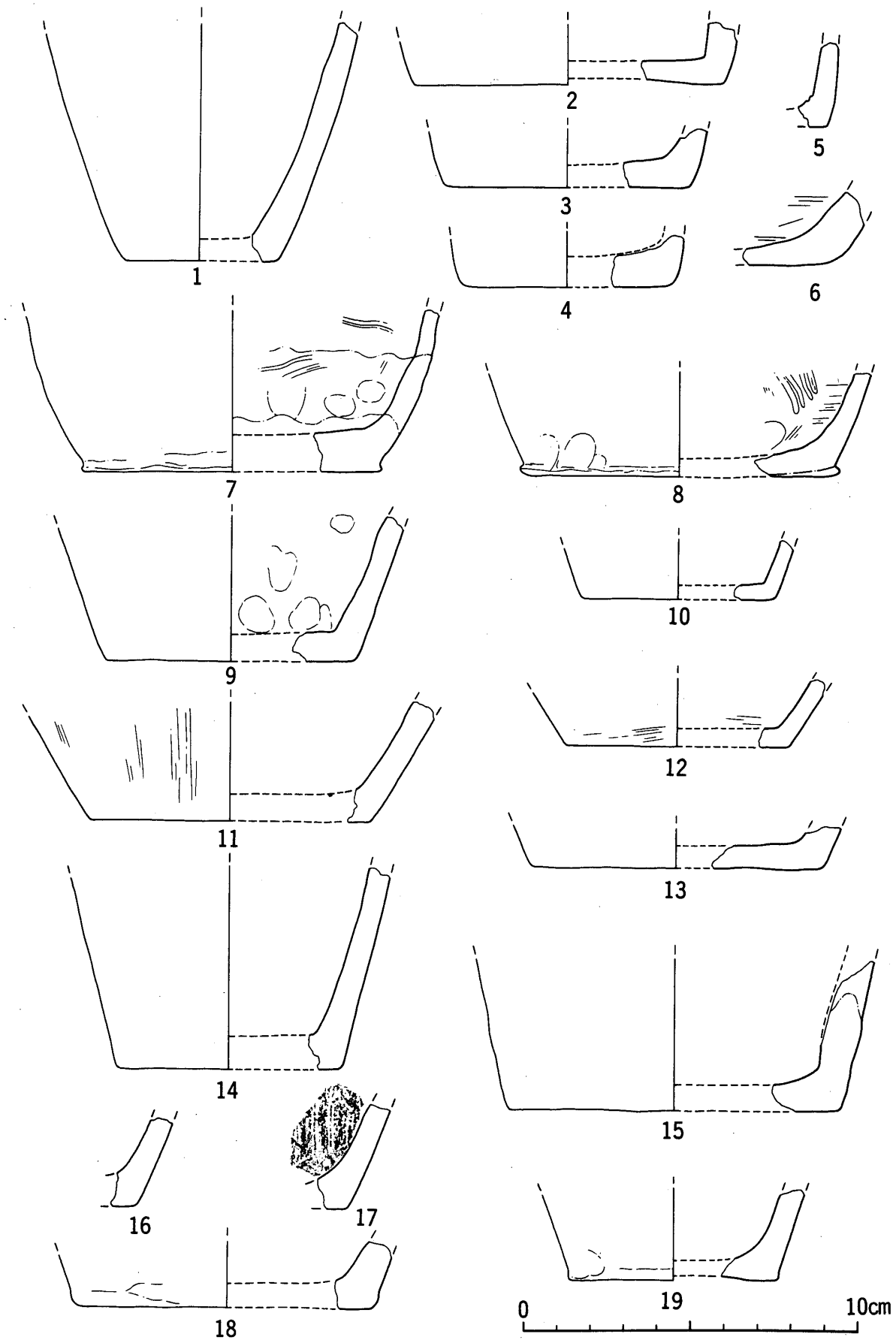
Aに属するものは８点得られているが、B・Cに比較すると出土量は少ない。Aはさらに二つのグループに細分できる。㋑底面からすぐに外彎状に脹らむものと、㋺下端部で若干くびれ、それから外彎状に脹らむものの２種である。

㋑に含めうるものは６点（第39図１～６）で、第Ⅳ層より３点、第Ⅴ層より１点、他の２点は崩壊した土砂の中から検出された。これらのうち底径の推算可能な資料は４点で、最大は同図２の約9.2センチ、最小は同図１の約4.5センチである。他の２点は７センチ前後。底部の厚さは同図４が最も厚く、内器面が若干剝離しているものの約10ミリを測る。他は６～９ミリである。同図６は底部が薄い（６ミリ前後）のに対し、器壁は倍近く（約11ミリ）の厚さを有しており、その点他と異っている。同図５も器壁の最下部はやや直立気味だが、部分的なものかあるいは周囲全体に及ぶ意図的なものか、資料が小破片の為判断できない。

器面は撫で調整によって仕上げをするが、同図６の場合には内面に粗い擦痕が残っている。

胎土混入物は石英を主体に黒雲母を混ぜるのが一般的であるが、後者を含まず微細な石英を多量混入するもの（同図６）もある。

焼成は良く、器色は茶褐色を基調とするが、中には内面が橙褐色を呈するもの（同図１・２）や、煤けて黒ずんだもの（同図５）、内外



第39図　底　　部

面とも灰褐色を呈するもの（同図４）なども見受けられる。

㋺に属する資料は２点（第39図７・８）で、いずれも第Ⅴ層からの出土である。２点とも立ち上がりの状況が明瞭で前項㋑のどの資料よりも外彎が顕著である。両者とも底面が僅かに食み出す程度で、断面の観察からすると８の場合は薄い粘土紐を貼りつけることによって張り出しをつくっている。底径は７が推算９センチ、８が約9.6センチで、比較的大型に属する。

器厚についてみると、７は底部が12ミリ前後と厚く、立ち上がりの部分は８ミリ前後であるが、胴上部へ漸減する。８は底部が８ミリ前後、立ち上がりの部分は７ミリ前後である。胎土混入物は多量の石英のほか、微量の黒雲母を混ぜる。焼成はいずれも良好で堅緻。

器面は撫でによって仕上げるが、内面においては両者とも横位の擦痕がかすかに残り、８では箆による縦位の調整痕も観察できる。また、７の内面には粘土帯の接合部を認めることができる。器色は茶褐色を基調とするが、７の内面は橙褐色に近い。

Ｂに属するものは15点で、立ち上がり下端部の状況によって２種に細分される。㋑底面からすぐ直線的に開くものと、㋺下端部で若干くびれ、それから直線的に開く器形である。

㋑に含まれる資料は第Ⅳ層から３点、第Ⅴ層から４点、崩壊した土砂から２点の計９点（第39図９～17）である。

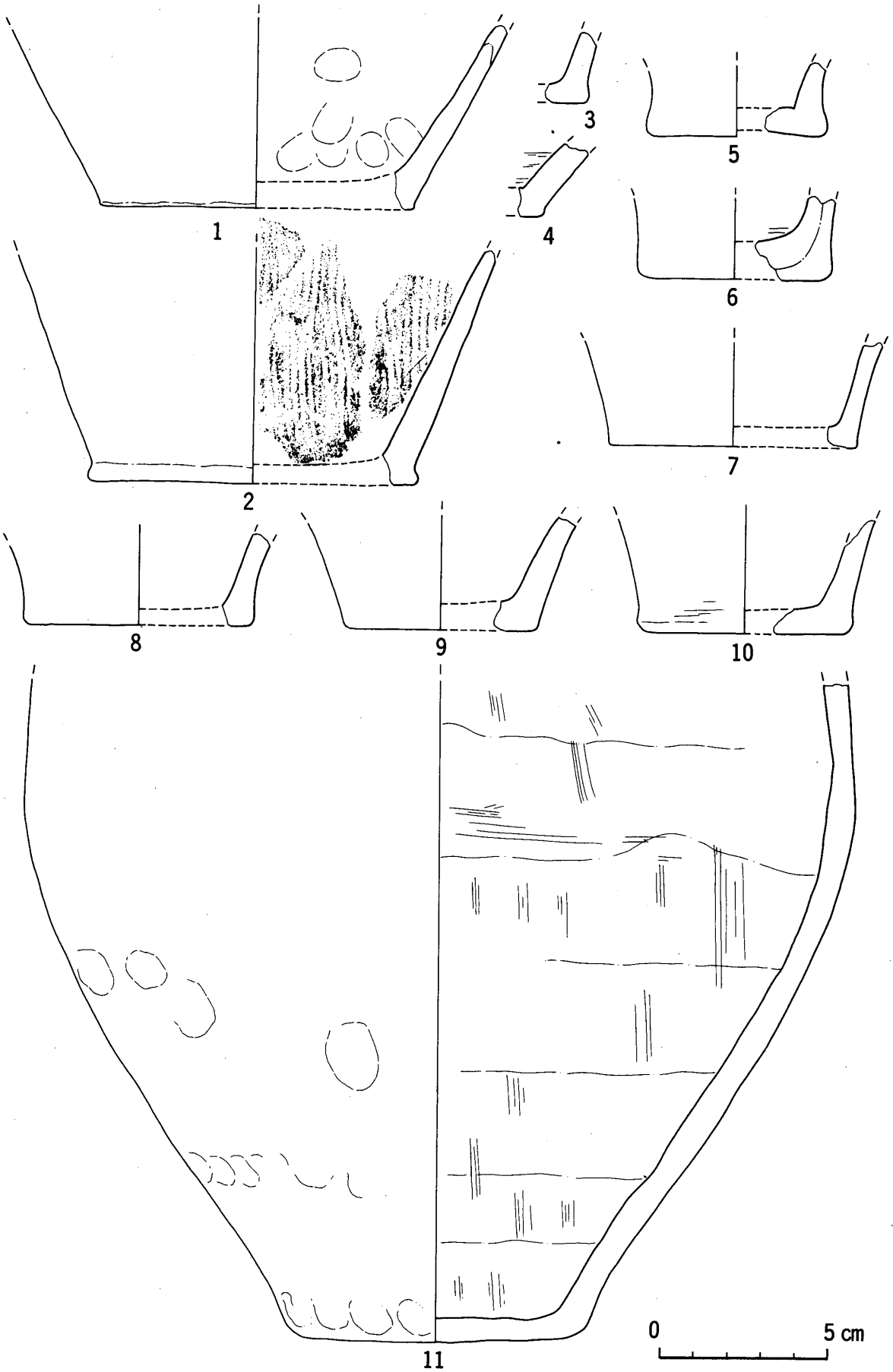
立ち上がりの開き具合は70～80度が一般的であるが、同図11・12は開きが約60度と比較的大きい。底径の推算可能なもの７点についてみると７～９センチのものが多い。しかし、中には10センチ前後を測る大型のもの（同図15）もある。器厚は底部、立ち上がり部ともに７～９ミリが一般的で、薄手のものでは５ミリ前後（同図10）のものもみられる。胎土混入物は石英を主体に黒雲母を少量混ぜるが、同図11は後者を含まず、泥岩粒を混入している。一般に粒子は細かい。ただし、同図15は比較的粗い石英を含んでいる。

器面調整についてみると、擦痕の認められるものが３点（同図11・12・17）で、11は立ち上がり部の外面に縦方向のもの、12は内外両面に横方向のもの、17は内面に縦方向のものが観察でき、12・17の場合は比較的明瞭である。他の資料については内面に指圧痕の認められるもの（同図９）や、混入物が露出して器肌が若干荒れたもの（同図15）などがある。

焼成は良く特に脆弱なものは見当たらない。器色は茶褐色を基調とするが、同図15のように内面が橙褐色を呈するもの、煤けて黒ずんでいるもの（同図17）などもみられる。

㋺に分類できるものは第Ⅳ層より１点（第39図18）、第Ⅴ層より５点（第39図19、第40図１～４）の計６点である。これらの中で下端部のくびれが明瞭なものは第40図２のみで、他の５点は不明瞭である。底径の推算可能な資料は第39図18・19、第40図１・２の４点で、前者からそれぞれ約9.8センチ、約6.4センチ、約9.4センチ、約10.4センチとなっており、第39図19以外の３点は大型の部類に属し、前記19は伊波式の底径に近い。検出された６点はいずれも中央部が欠け周辺部のみの資料であり、同部で厚さを測ると大体６～10ミリである。また、立ち上がりの部分については６点とも７～９ミリで、特に厚手、薄手のものは見当たらない。

胎土混入物は石英を主体とし、それに黒雲母を少量混ぜるが、逆に微細な黒雲母を多量混入し、石英が僅少のもの（第40図１）や、



第40図　底　　部

石英のみ多量混入するもの（同図４）、石英・黒雲母に泥岩粒の粗粒を加えるもの（第39図19）などもみられる。

器面は最終的に撫でによるが、第40図２の内面には縦方向の条痕が明瞭に認められ、同図４には横位の擦痕が僅かに残っている。また、同図１は外面が比較的丁寧に調整されているのに対し、内面では指頭痕も認められる。

焼成は一般に良好で、中でも第40図１は胎土も緻密で極めて堅緻である。しかし、第39図18、第40図４は若干焼きが弱く、器面がくずれやすい。

器色は茶褐色を基調とするが、中には第39図19のように内面が煤けて暗褐色を呈するものもみられる。

Ｃに属する資料は第Ⅳ層から２点、第Ｖ層から11点の計13点（第40図５～11、第41図１～６）出土したが、前記Ａ・Ｂのように下端部でくびれるものはなく、底面から直ぐ内彎状に立ち上がるもののみである。ほとんどのものが緩やかな内彎を示すが、第40図５の１点は内彎の著しい例で、同資料の底部は若干上げ底気味になっている。また、同図11は一部胴上部まで接合可能のもので、底部から緩やかなカーブを描きながら胴部へ移行し、胴部の最大径が上位にくる器形を示す。サイズは底径が９センチで胴の最大径は24.6センチである。他の資料についてみると底径の推算可能なものは９点で、多くは５～８センチ内に含まれるが、第41図３は約4.2センチを測り、本区資料の中で最小のものである。

底部の厚さは８ミリ前後のものが一般的で、第40図６は13ミリあり、立ち上がり部も９ミリあって、本区資料の中では最も厚く、二枚の粘土を貼り合わせた痕跡が断面において明瞭に観察される。第41図３は底部、立ち上がり部ともに４ミリで薄手である。

胎土には石英多量のほか、黒雲母を混ぜるものが多いが、第41図４のように石英のみのものや、同図２のように石英・黒雲母のほかに２～３ミリ大の泥岩粒を少量含むものもみられる。一般に粒子は細かい。

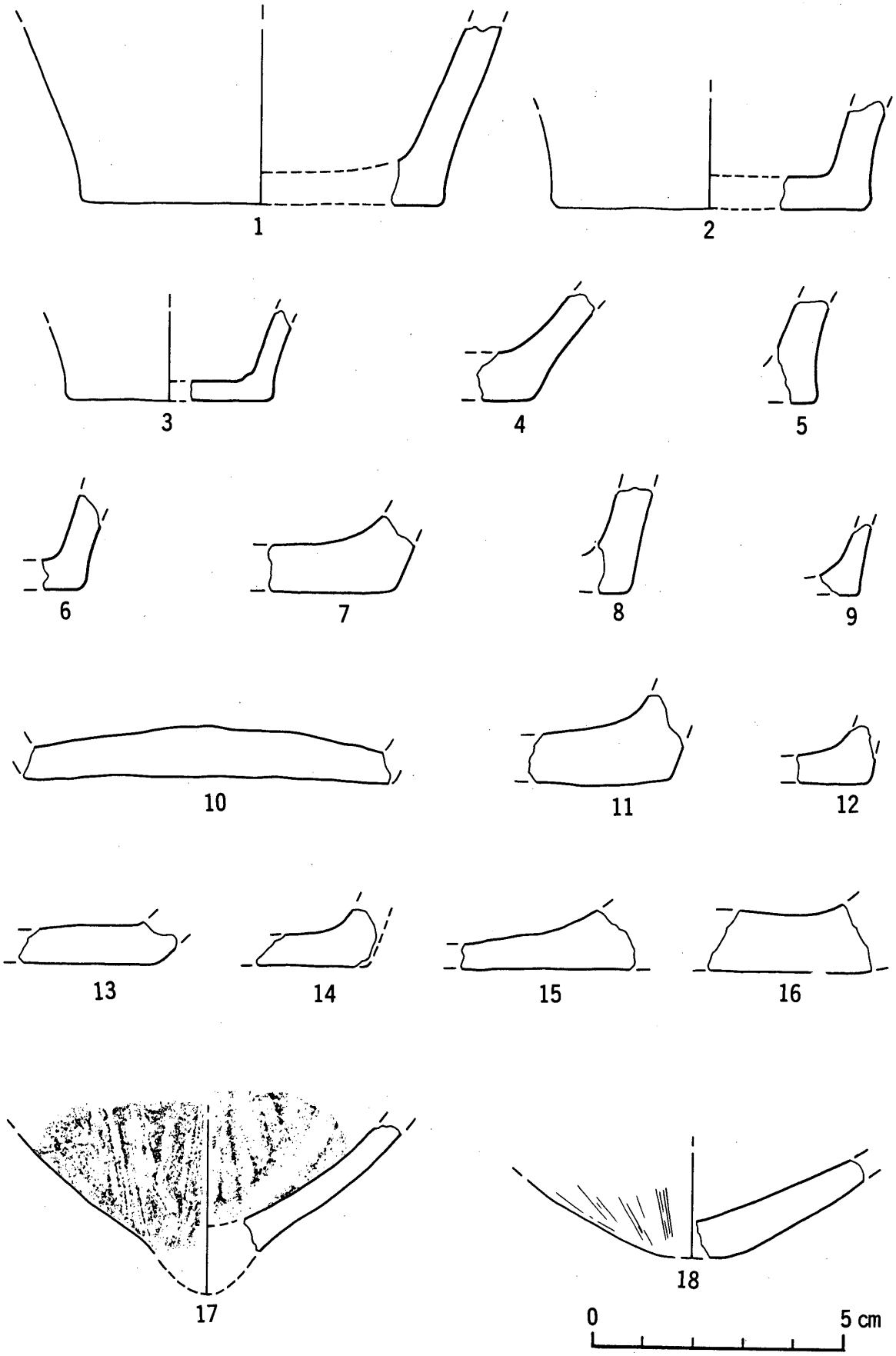
器面は最終的に撫でによって仕上げるが、擦痕を残すものが３点（第40図６・10・11）含まれている。６は内面のコーナー部に不明瞭ながら横位の擦痕が観察でき、10は外面において僅かに認められるが部分的で、他は入念な撫で調整が行われている。11は内面のほぼ全域に細かい擦痕が観察できる。胴の最大径の部分では１センチ強の幅で横方向のものが、同部以下では縦位のものが残っている。胴の最大径の上位には縦と斜めの擦痕が認められるが、部分的である。さらに本標品は内面において輪積み痕が明瞭で、それからすると、粘土帯は３～４センチの幅で積み上げられたことがわかる。

焼成はすべて良好で、器色は内外面とも茶褐色のものが多いが、第41図４のように橙褐色を呈するもの、あるいは同図５のように外面は茶褐色だが、内面は橙褐色のものもみられる。

種不明

不明として扱ったものは14点で、うち10点（第41図７～16）を図示した。

７は立ち上がりの部分が僅かに残るもので、前述のＢ種㋑の可能性が強い。比較的厚手で底部の厚さは約10ミリを測る。胎土混入物は石英を主体とし、他に黒雲母を混ぜる。器面調整は撫でによるものと思われるが、小破片の為確言はできない。焼成は良く、器面は橙褐色を呈する。ただし、外面は石灰分が付着し灰褐色である。第Ｖ層の出土。



第41図　底　　部

8・9はC種に含まれる可能性の強いもので、8は第Ⅳ層、9は第Ⅴ層の出土。9は薄手の土器で現存部の器厚は立ち上がり部分で4ミリ弱、8は同部で約7ミリである。8は石英を主体に黒雲母を少量混ぜるが、9は石英・黒雲母がほぼ同量である。器面調整は撫でによるものと思われ、両者とも擦痕等は認められない。焼成は良く、器色は8が茶褐色、9が橙褐色を呈する。

10は底部のみが円盤状に残るもので、底径は約7.5センチを測る。断面形は縁辺から中央へ次第に厚くなり、内面は緩やかな凸面をつくる。器厚は側縁部で6ミリ前後、中央部で約12ミリである。

他の資料についてみると底部の厚さは6～7ミリのものが多いが、同図11・16のように11ミリ前後の厚手のものもある。胎土混入物は石英のみを混入するもの（12・13・16）や、石英を主体に黒雲母を少量混ぜるもの（10・11・14・15）などがあり、一般に粒子は細かいが、15に3ミリ大の石英も認められる。器面調整はすべて撫で仕上げによるもので擦痕は観察できない。焼成は一般に良く、10などは堅緻であるが、13は他に比べ、若干器面の保持が悪い。器色は14・15が暗褐色を呈するほかはほとんどが茶褐色である。11・13は第Ⅳ層、12・14・15は第Ⅴ層、10・16は崩壊砂からの出土である。

尖底

第41図17・18の2点で前者は第Ⅴ層、後者は崩壊した土砂の中から検出された。いずれも底部を欠損し、立ち上がり部のみの資料であるが、17の場合は外面の下端部が若干反ることから、乳房状の尖底が推察される。器厚は2点とも5～6ミリである。胎土には多量の石英を混入しており、粒子も細かい。

器面調整についてみると、17は外面に縦位の擦痕、内面には箆による調整痕が顕著である。また、18の外面にも縦位の擦痕が見受けられるが、前者ほど明瞭でない。焼成は2点とも良好で17は茶褐色、18は橙褐色を呈する。

以上のような特徴および出土層位から両者とも面縄前庭式土器の底部の可能性が強い。

註

1．高宮廣衛・下地傑・安里和美・大城広江「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その1）　－Aトレンチ－」　『沖国大考古』第7号　沖縄国際大学文学部考古学研究室　1985　29頁第15図1

2．永井昌文・三島格　「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」　『考古学雑誌』第50巻第2号　1965（昭和40年）　日本考古学会編　55頁第5図

3．安里嗣淳・中村愿・佐野一・上村俊雄・大城逸朗・当間一郎　『具志川島遺跡群第一次発掘調査報告書』伊是名村文化財調査報告書　第1集　沖縄県伊是名村教育委員会　1977　56頁第25図

4．岸本義彦・島袋洋・盛本勲・古川博恭・加藤祐三・小田一幸・川島由次・村岡誠「野国貝塚群B地点発掘調査報告」『野国』沖縄県文化財調査報告書第57集　沖縄県教育委員会　1984　141頁第59図2

5．高宮廣衛・安里嗣淳　「具志川式土器」—沖縄考古学会9月定例研究発表会要旨—　『南島考古』第10号　沖縄考古学会　1986年6月

6 a．註1に同じ。

b．高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・仲村ゆりか・山内盛尚　「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その2）—Bトレンチ—」『沖国大考古』第8号　沖縄国際大学文

学部考古学研究室　1985
7．河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号　鹿児島県考古学会　1974
8．註6ｂに同じ。
9．註6ｂに同じ。
10．註5　29頁第6図1・2
11．出口浩・繁昌正幸　「鹿児島県急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」　『一湊松山遺跡』　上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書　上屋久町教育委員会　1981年3月　51頁下段・左
12．註1　48頁第21図8
13．註1　48頁第21図12
14．註6ｂ　64頁第30図4
15．河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡隆夫　大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査「嘉徳遺跡」　『鹿児島考古』第10号　鹿児島県考古学会　1974年12月　61頁図版第13上2・下5
16．弥栄久志・青崎和憲・小片丘彦・分部哲秋・松下孝幸・松元光春・四宮明彦・行田義三　「新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書」　『長浜金久遺跡』　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(22)　鹿児島県教育委員会　1985年3月　107頁第74図・108頁75図468
17．註1　52頁第22図12・125頁第51図1
18．高宮廣衛　「伊波式土器と荻堂式土器」『日本民族文化とその周辺』考古篇　国分直一博士古稀記念論集　国分直一博士古稀記念論集編纂委員会　1980
19．註1　131頁第54図5
20．多和田真淳　「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』1956年版　琉球政府文化財保護委員会　1956
21．註1に同じ。
22．註5　25頁第3図1～8
23．註1　48頁第21図7・15
24．新田重清　「浦添貝塚調査概報」　『南島考古』第1号　沖縄考古学会　1970　12頁第4図10
25．註3　36頁第18図4～6
26．金武正紀・比嘉春美　『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告』　沖縄県教育委員会　1978年3月　第25図5

V　おわりに

今回報告のA－2区はAトレンチの中央区で、第VI層まで掘り下げたが、前述のように壁面の崩壊が甚だしく、それ以下の試掘を断念した。

本区の第I～III層も隣接のA－1、A－3区同様、無遺物層で、第IV・V層が遺物包含層である。第VI層は再び無遺物層となるが、同層上面で前述のように神野B式類似土器(第17図3）を1点得た。上記の層相からも察せられるように今回報告の人工遺物はほとんどが第IV・V層の出土であり、両層とも縄文後期の層である。

本区でも遺構は見受けられなかった。出土人工遺物は骨製品・貝製品・石器・土器の4種である。

石器は種類・量ともに少なく、石斧・凹石・円形石器・砥石・石皿・スクレイパー・サンゴ加工品等が9点得られただけである。以上の出土品のうち特に注意を引くのはチャート製のスクレイパーで、縦型の剝片を利用した

特異な形態を有し、この種の製品は従来南島では知られていない。他方、サンゴ片を利用した製品は途中で穿孔を放棄した未製品であるが、縄文後期の南島に散見される有孔装身具の未製品であろう。石製品は石斧・スクレイパーなど実用品が主で、装飾品とみられるものは前記サンゴ片を利用した未製品の1点だけである。

骨製品は比較的多く、29点得られた。用途の上からは実用的なものと装飾的なものに大別され、そのほか用途不明のもの3点ある。実用とみなされるものは骨銛・骨針・粗製尖頭器等の3種5点で、他は装身具類にまとめられるが、後者は21点もあり、前者の約4倍の出土である。素材はジュゴンの肋骨のほか魚骨・イノシシの四肢骨・サメの歯骨や椎骨そして鳥骨も数点みられた。A－2区のみで出土し、本貝塚の他の発掘区で出土しなかったものに骨銛や有孔のサメ歯製品のほか、第8図12の指輪状製品、同図15の鳥骨製品などがある。

貝製品は252点得られ、土器には及ばないものの、石器や骨製品の出土量に比べると桁違いに多い。矢張り海に囲まれた環境に由来するものであろう。

貝製品の種類および出土量は第5表の通りで、実用的なものと装飾的なものに大別され、後者は前者の約8倍の出土量である。貝という素材の性質に基づくものであろう。製品の大部分は南島に一般的にみられるものである。三角形の有孔製品のうち縁辺に刃部をもつものを鏃とし、刃の認められないものは装身具とした。サメの歯を模した貝製品(第14図11)は類例の少ない資料であり、今回貴重な1点を追加することができた。量的に最も多いのはイモガイ製のビーズで、今回200点余の出土をみた。また、本貝塚の他の発掘区で出土のなかったものに第16図1や7の製品がある。

土器は13型式得られた。第VI層以下の発掘が困難となったために、古い型式、例えば他の発掘区の下層で検出された室川下層式土器や神野A式土器などは得られなかったが、隣接の発掘区の状況から、本区でも下層の調査を実施すれば得られるであろう。したがって現資料における最古の型式は**神野B式土器**である。この土器は今回、口縁部が2点得られた。すべて深鉢形である。

神野B式類似土器としたのは、新型式に属するとみられるが、南島における出土量は不顕著で、数遺跡で少量出土しているに過ぎない。この土器は器形に特徴があり、最大径が口縁部ではなく、胴部にある点で、神野B式土器に通ずるものがあるが、後者とは形態が異なり、これに含めることはできない。したがって、神野B式類似土器としたが、前述のように出土量がきわめて少なく、散発的な存在であるので、様子が判明するまで、前記の仮称を用いることにする。本区では第VI層上面で1点検出され、神野B式より下位で発見されたが、隣接の発掘区では神野B式はさらに下層で出土しており、本土器は神野B式に後続する型式であろう。今後、面縄前庭式の古い段階に位置づけられる具志川式土器との関係を検討してみる必要があるように思う。器種は深鉢形である。

面縄前庭式土器のグループを以前は様式の概念でまとめようと考えたが、誤解を招くおそれがあり、今回はグループの名の下に一括した。具志川式・神野C式・面縄前庭式土器に大別され、3型式とも出土したが、**具志川式**は小破片が5点出土しただけで細分不能のものが多い。**神野C式**は以上の中では最も多く16点検出された。本型式は口頸部の文様によって5種に細分されるが、今回、そのうち

第３種（３条の凸帯を貼付するもの）は確実なものが得られておらず、可能性のあるものが２点出土しただけである。本型式の前記５種の口頸部文様は具志川式あるいは面縄前庭式に分類できないものを一括してあるので、前回も指摘したように将来は複数の型式に細分される可能性もある。

面縄前庭式は口頸部の小破片が３点得られた。器種・文様とも従来の範疇を出ない。上記３型式とも器種はほとんどが深鉢形だが、具志川式には壺形の可能性のあるものが１点含まれている。

松山式土器は深鉢形の口縁破片が第Ⅴ層より１点得られた。口唇部に鋸歯文を施すもので、従来の文様とは異なっている。

面縄東洞式土器も少なく、深鉢形の口頸部破片が２点出土しただけである。その中の１点は口径が32.8センチもあり、南島の土器としては大型に属する。文様は従来の範疇を出ない。

嘉徳Ⅰ式Ａ土器は20点余の出土をみた。器種の判明するものはすべて深鉢形である。山形口縁にはシェブロン状のほか、丸味を帯びたものも１点得られた。また、山形頂部の形態はすべて（４個）が同形ではなく、相対する２個のみ同形、つまり相対する２個の頂部には抉りを施すものと施さないものがあり、２種の異なる形態を併用する珍しいものも見受けられる。本型式の文様は４種に細分される。本区ではそのうち第２種の明確なものは出土していない。また第４種の第１文様帯の文様は従来３種に細分されていたが、今回新しい資料が得られ、１種を追加して４種とした。第23図１・２と第24図１に示すもので、第１文様帯のうち山形突起下と同文様帯の上下両端に主要文様（沈線＋三角形刺突文）を施すもので、他を別の文様で飾る。出土量は少なく、今回３点得られた。

嘉徳Ⅰ式Ｂ土器も出土量(15点)は少なかったが、他の発掘区に比べると若干多い。器種・器形・文様等従来の範疇のものである。文様は３種に分類されるが、破片が小さく過半数は分類不能で、判明するものについてみると、第２種とみられるものが１点、第３種が５点である。

嘉徳Ⅱ式土器は破片が17点検出された。器種の判明するものはすべて深鉢形である。文様は１～４種に細分され、第１種が７点、第３種が４点、第４種が１点、不明５点で、第２種は出土がなかった。

神野Ｄ式土器は深鉢形の破片が６点検出された。本型式は口縁部を肥厚させるところに特徴がある。普通、口縁部の肥厚帯が文様帯となるが、今回は肥厚帯直下の胴上部に施文（第２文様帯）する例が検出され、本型式の性格がまた一段と明らかになった。第28図１がそれで、第２文様帯を有する例は嘉徳Ⅰ式や同Ⅱ式に認められ、伊波式には認められないから、古い要素とみることができる。この観点から第28図１の土器は本型式の中でも古式のタイプではなかろうか。

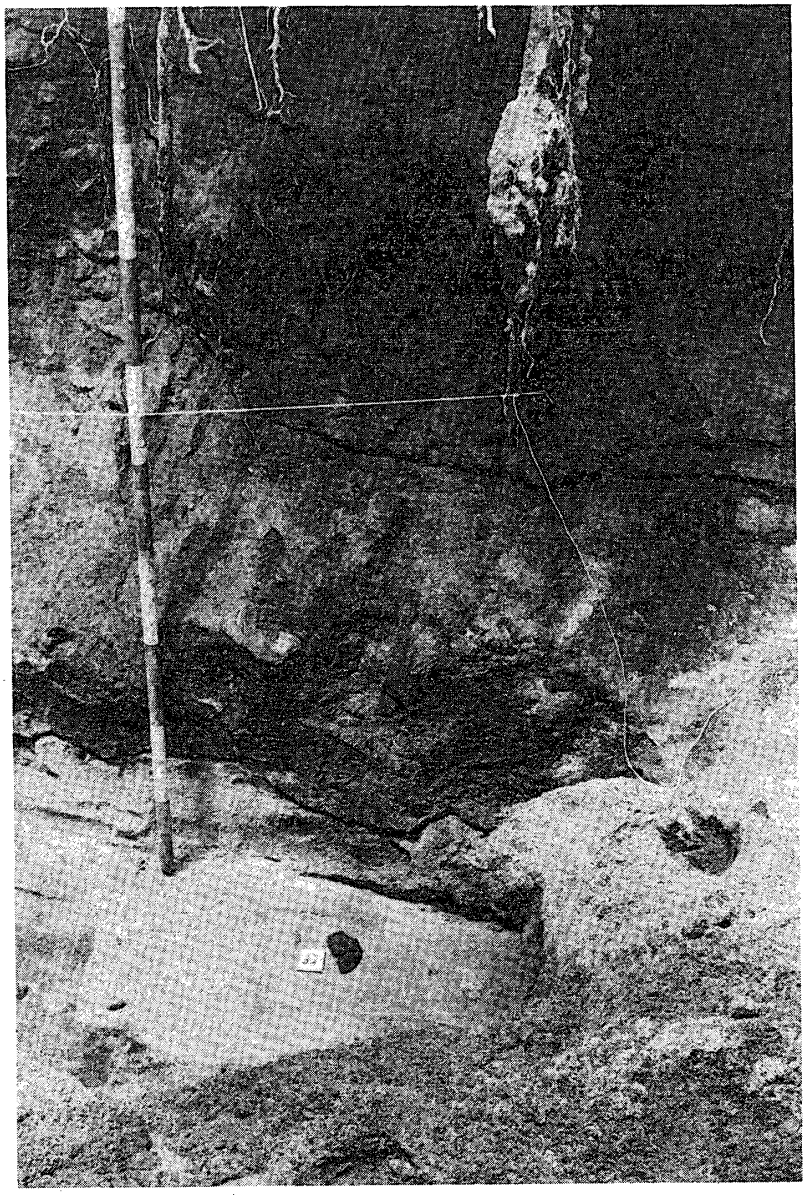
神野Ｅ式土器は８点得られ、器種の判明するものはすべて深鉢形である。通常は山形口縁の土器であるが、平口縁の可能性のあるものも１点得られた。また、シェブロン状の山形突起がすべて（４個）同形ではなく、相対する２個の突起にのみ同数の抉りを刻むという特殊の整形もみられる。この種の例外的な整形法は前述の嘉徳Ⅰ式Ａ土器にも１例認められた。本型式は２条１組の点刻文を１組施すところに特徴があるが、点刻文が伊波式と異なり刺突手法を用いる傾向がつよい。

伊波式土器は破片が13点得られ、器種の判明するものはすべて深鉢形である。文様は従

来の範疇を出ず、点刻文は伊波式的な特徴も若干見受けられるが、概して刺突手法による施文が目立つ。この刺突手法による点刻文を時期差によるものとみるか、地域差とみるか、今後の研究課題の一つである。点刻文のほかには連点文や2条1組の沈線文も僅かながら見受けられた。

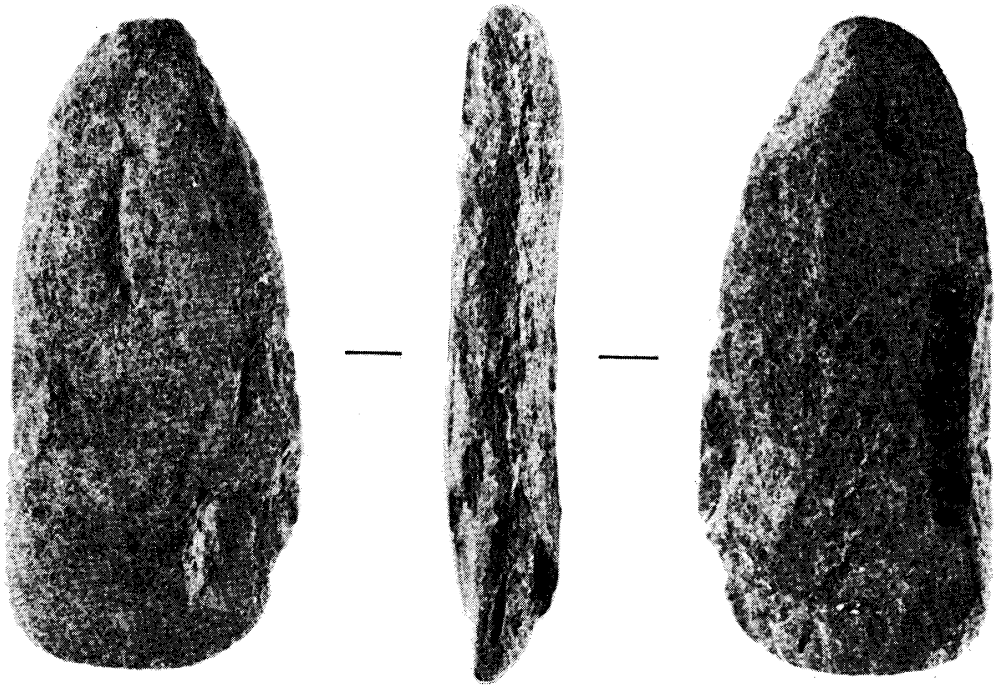
以上、A－2区の人工遺物の概要を記したが、貝製品・骨製品・石器などでは本貝塚の他の発掘区では得られなかった製品も若干検出され、資料を追加することができた。また、土器についていえば嘉徳Ⅰ式A土器の第4種や神野D式で新資料を追加することができ、沖永良部島における縄文前～後期の内容解明にささやかな貢献をすることができた。

本貝塚については本報告を含め、これまで3冊の報告書を刊行したが、内容については不備な点も多く、その他お気付きの点などご教示いただければ幸いである。

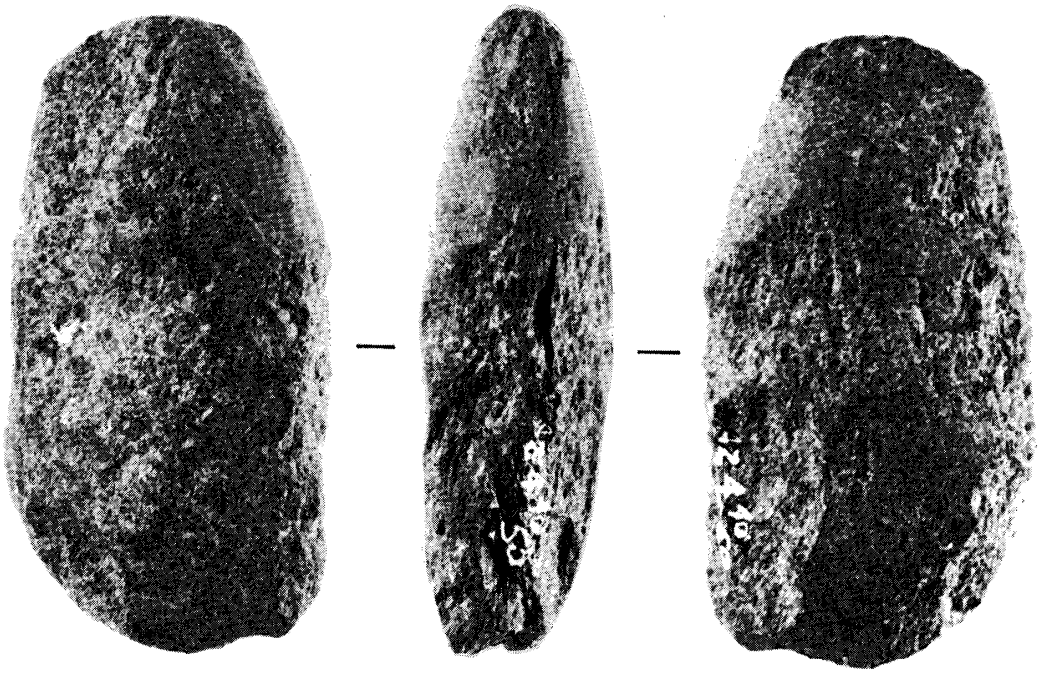


A－2区西壁および神野B式類似土器の出土状況

図　　版



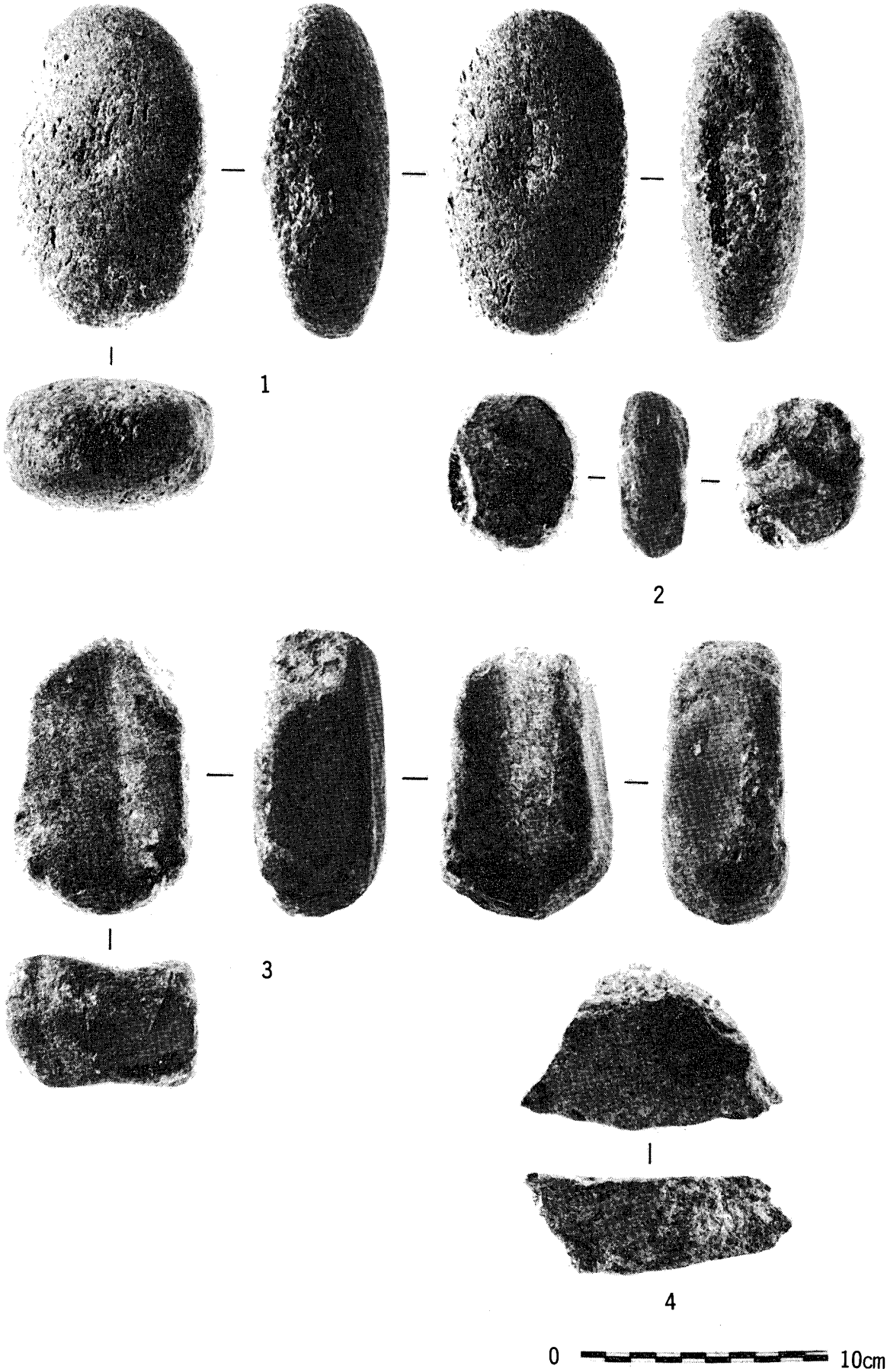
1



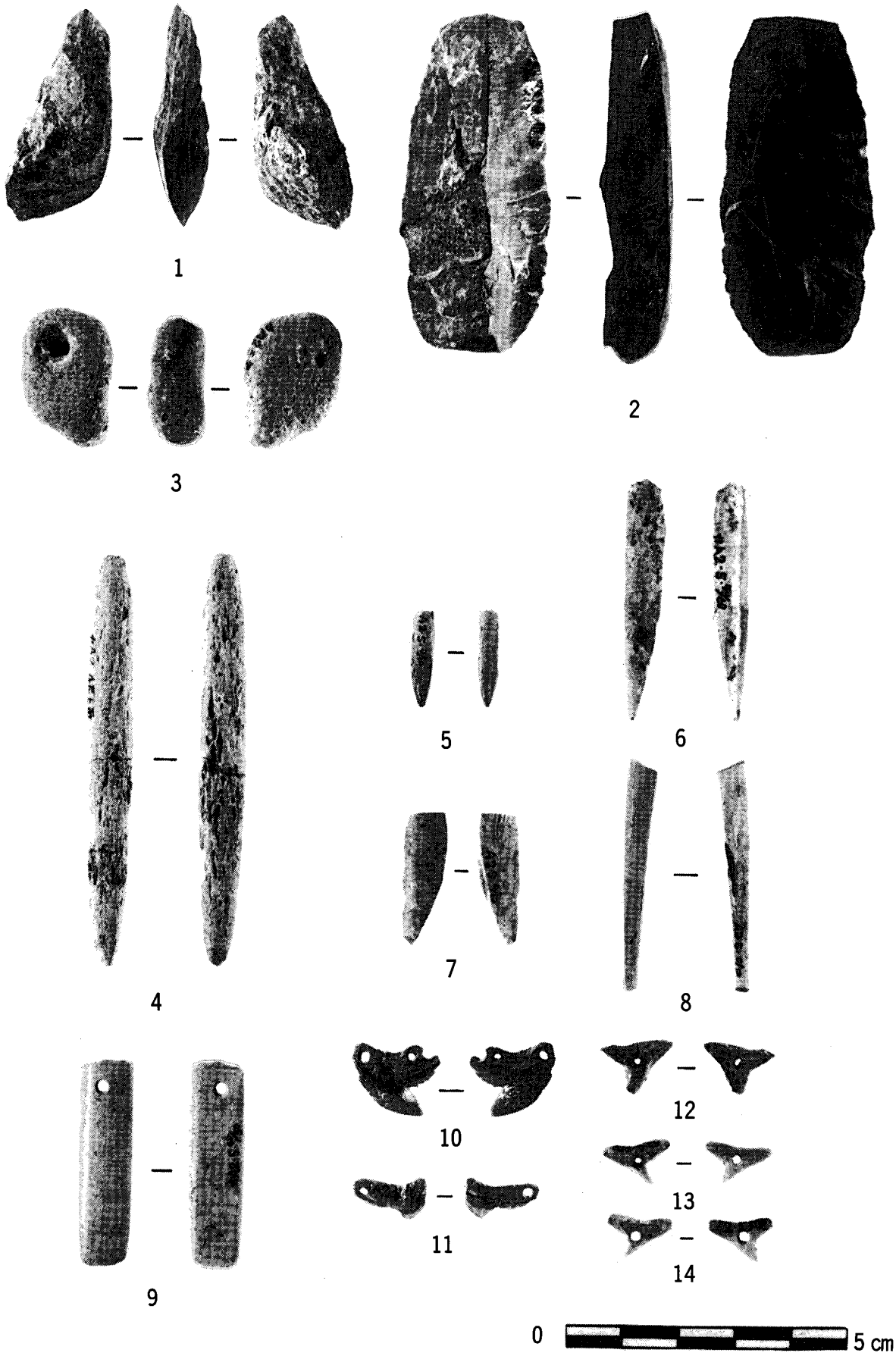
2

0 5 cm

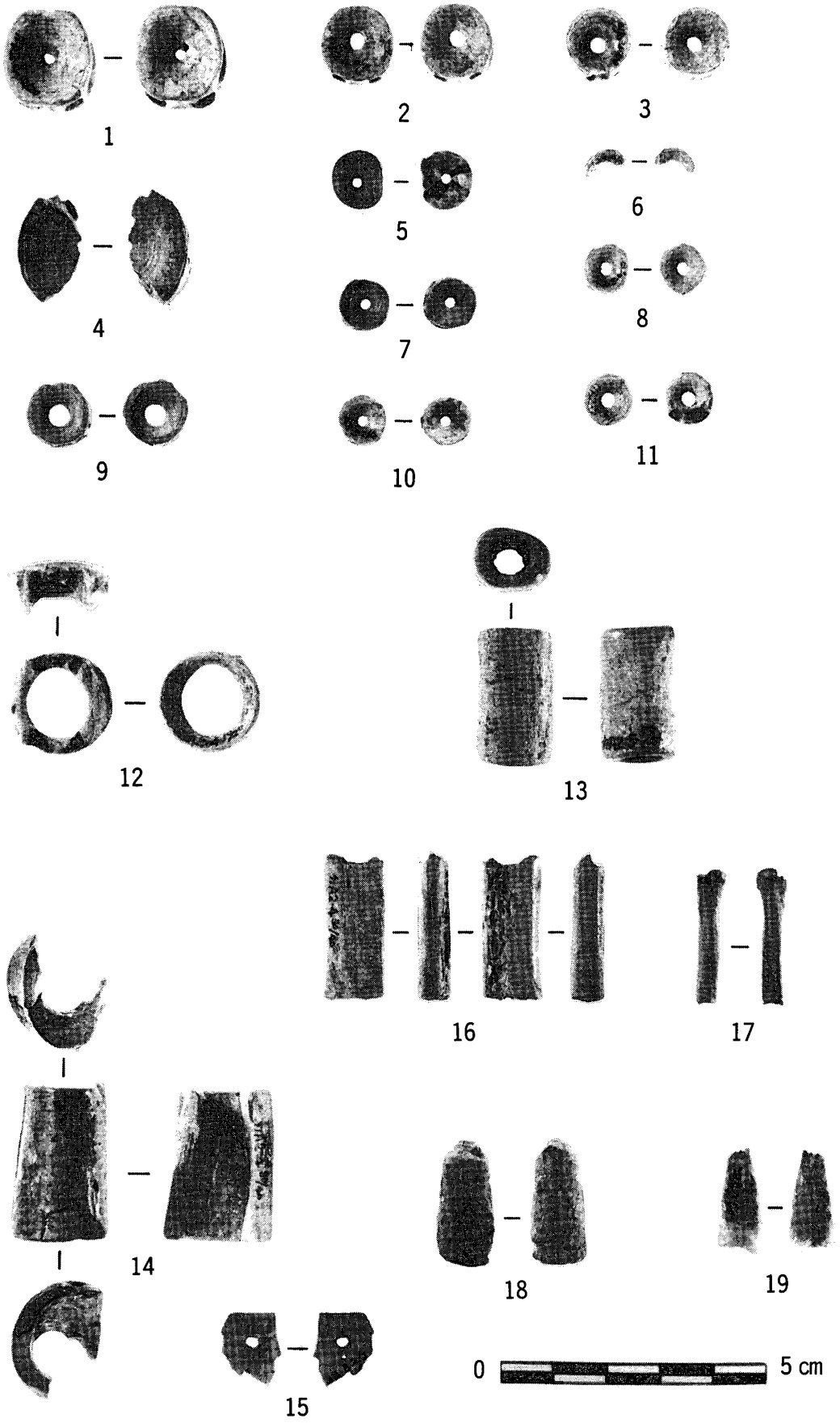
図版1　石　　器



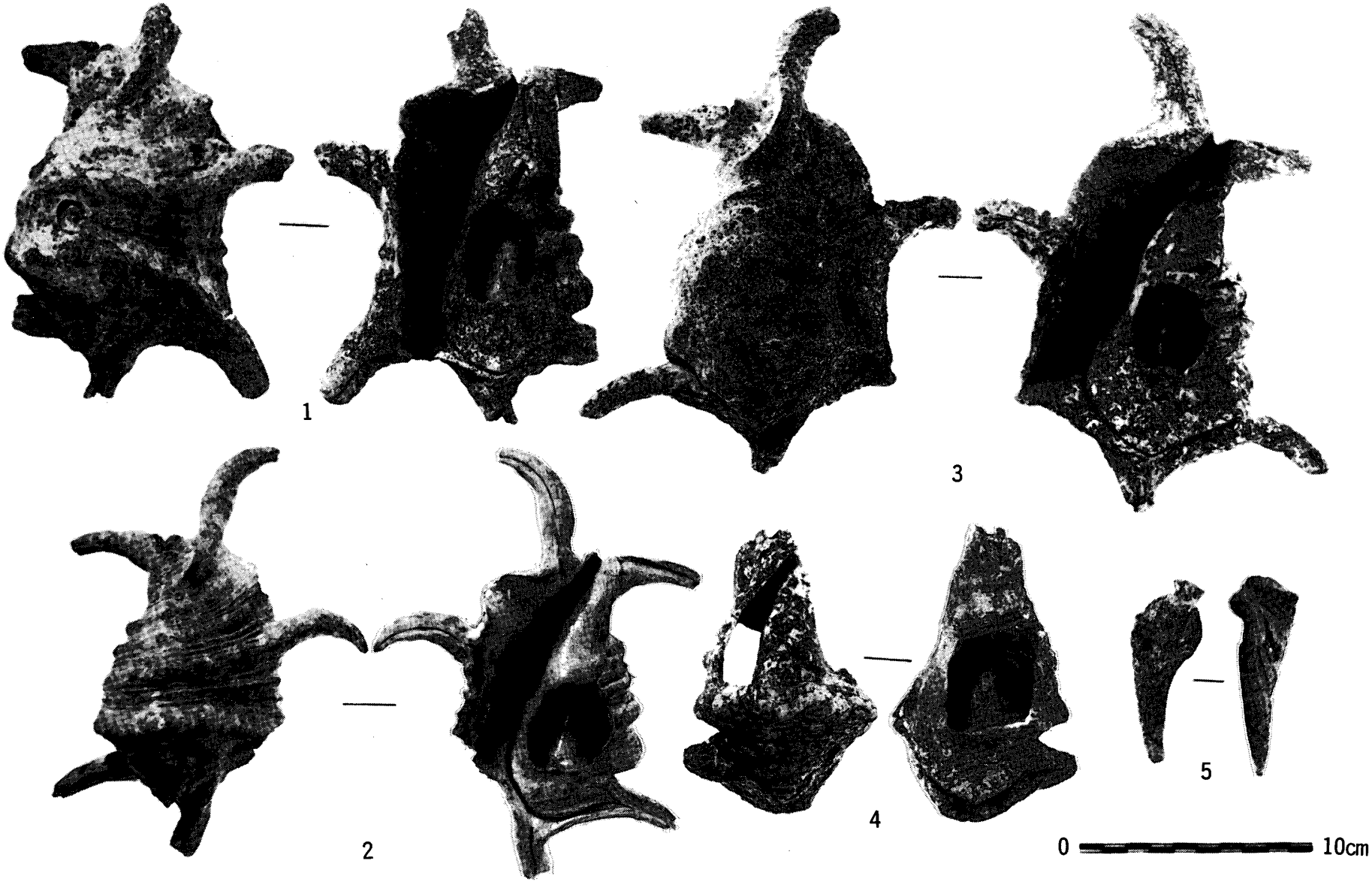
図版2　石　　器



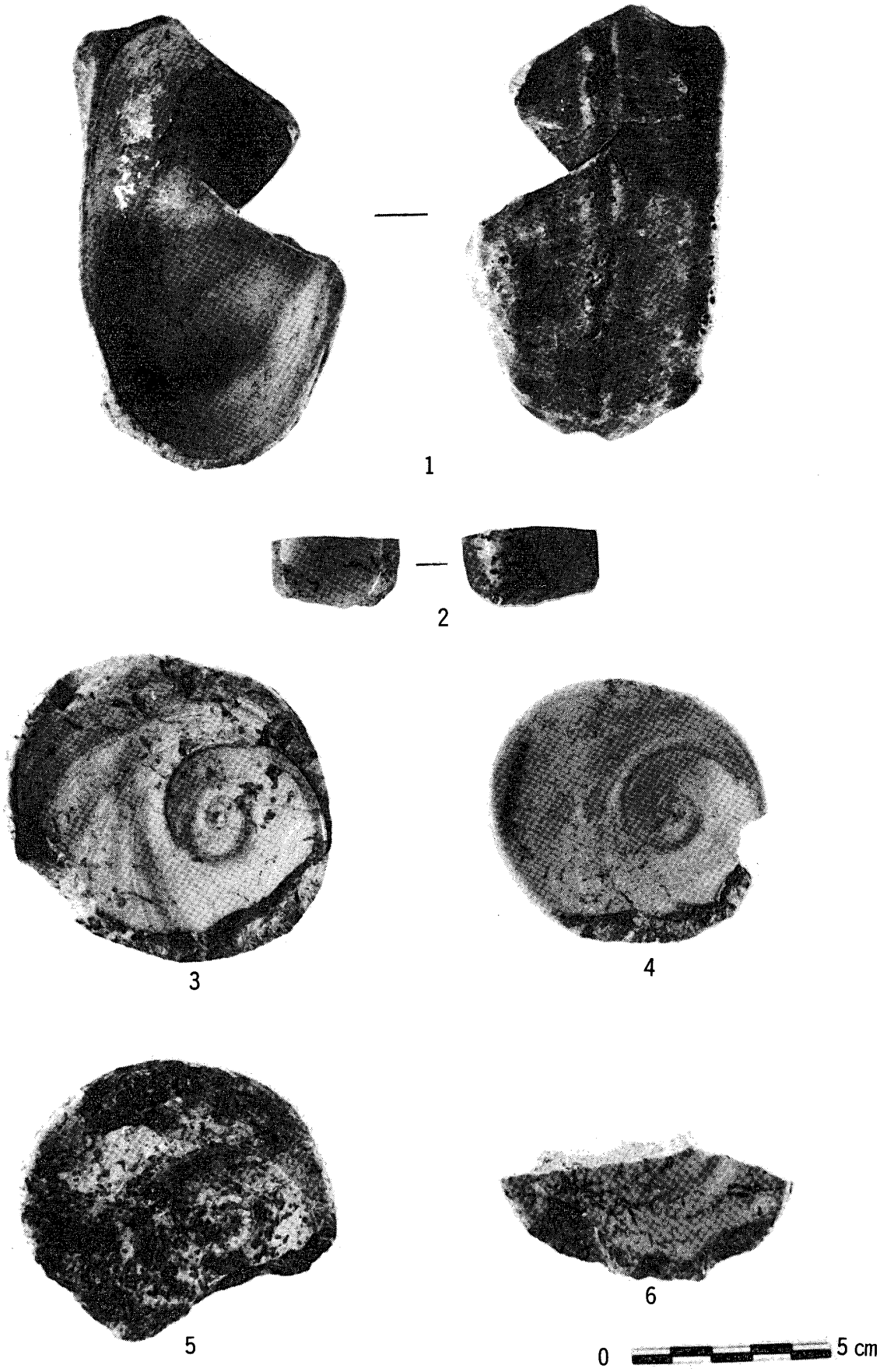
図版3　石器（1～3）・骨製品（4～14）



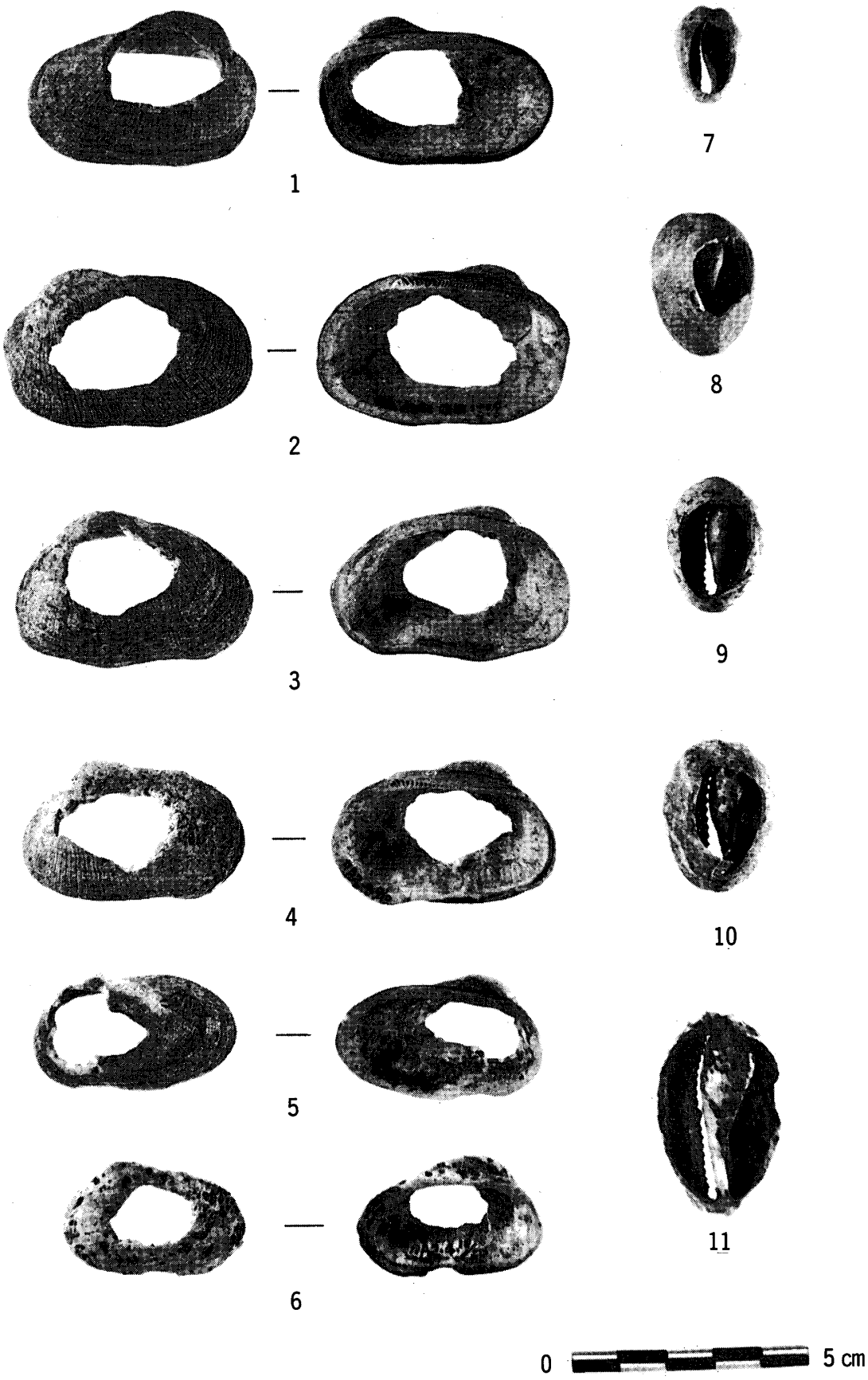
図版４　骨製品（１～18）・人の歯（19）



図版5　貝　製　品

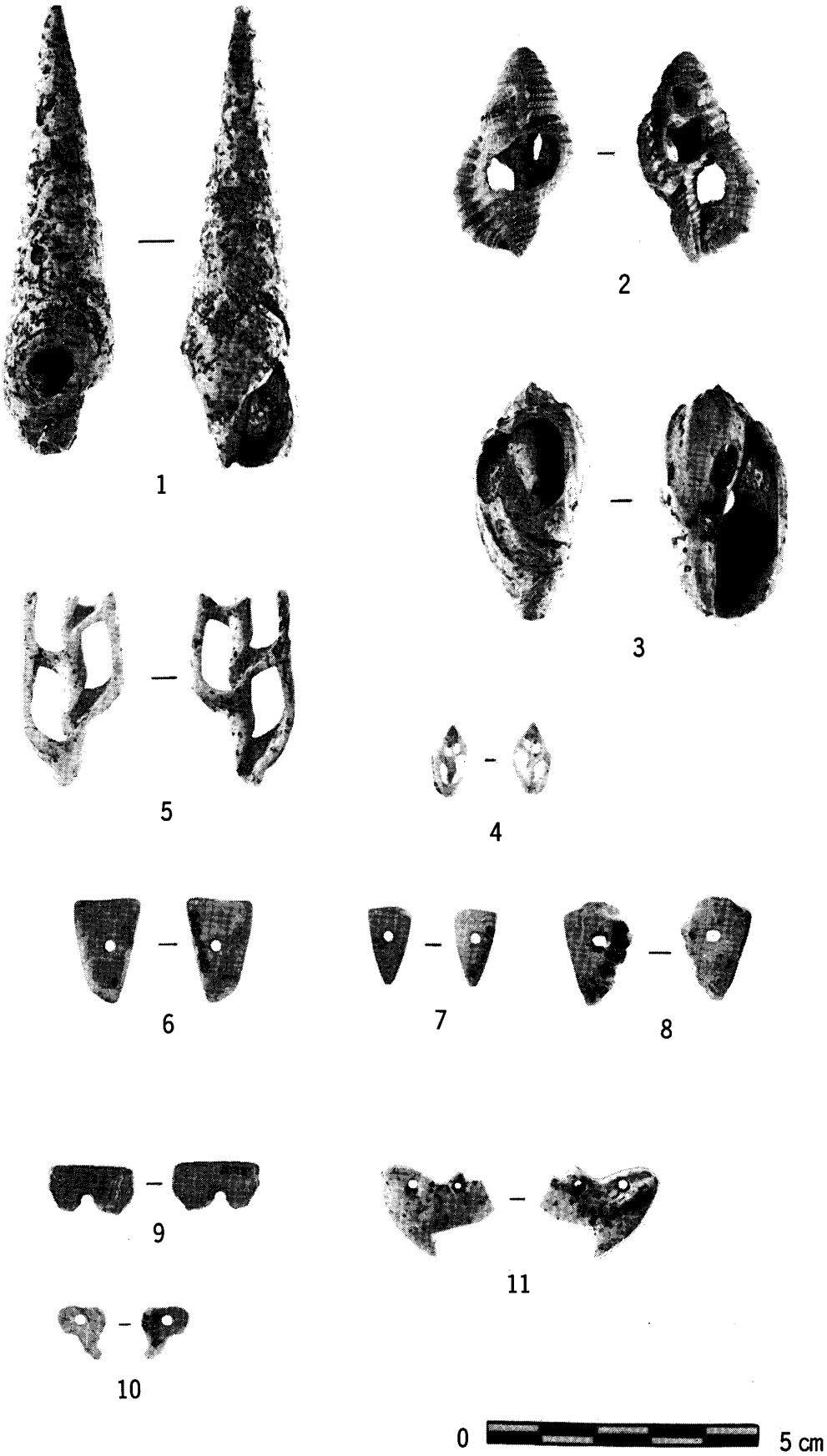


図版6　貝　製　品

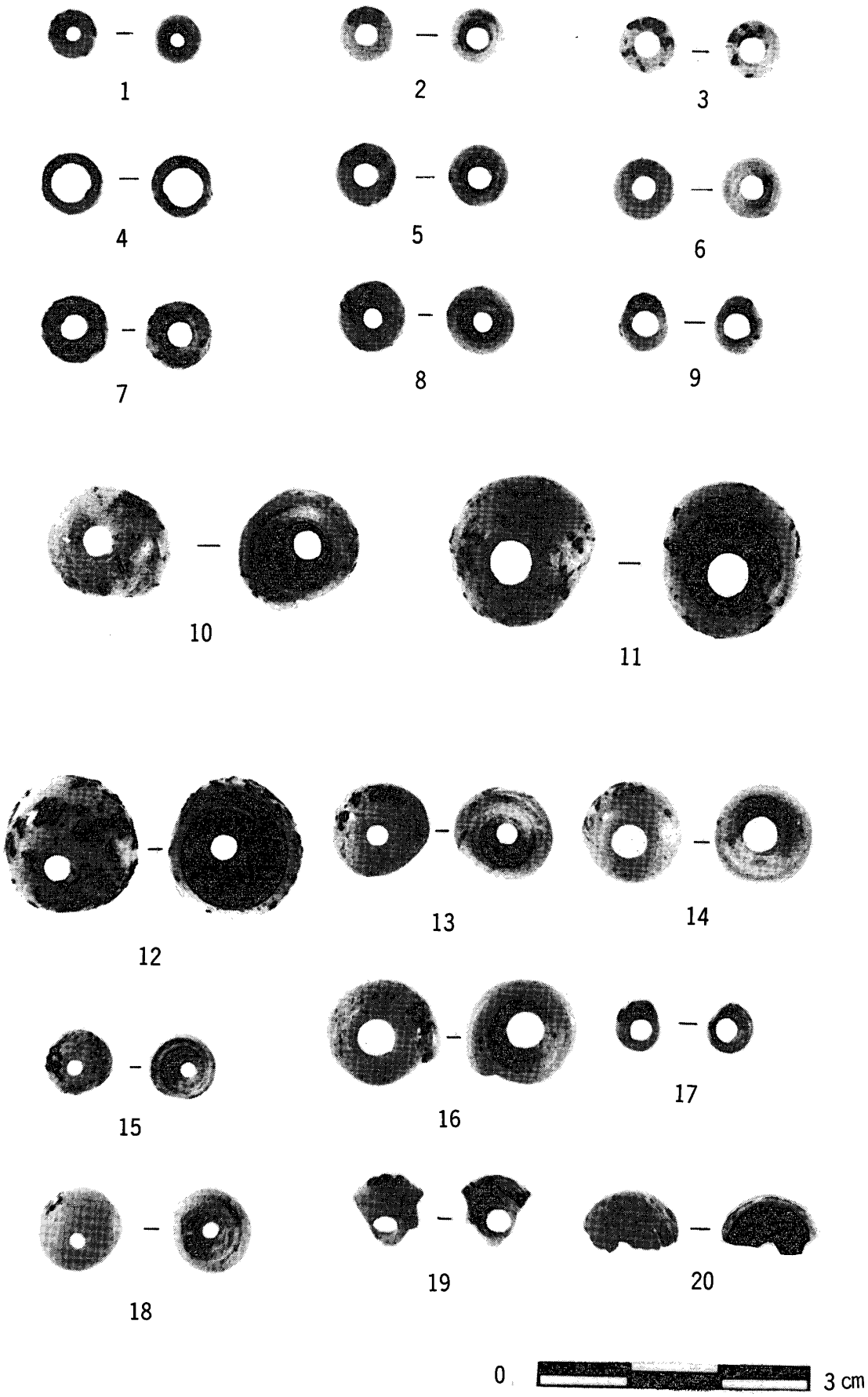


図版7　貝　製　品

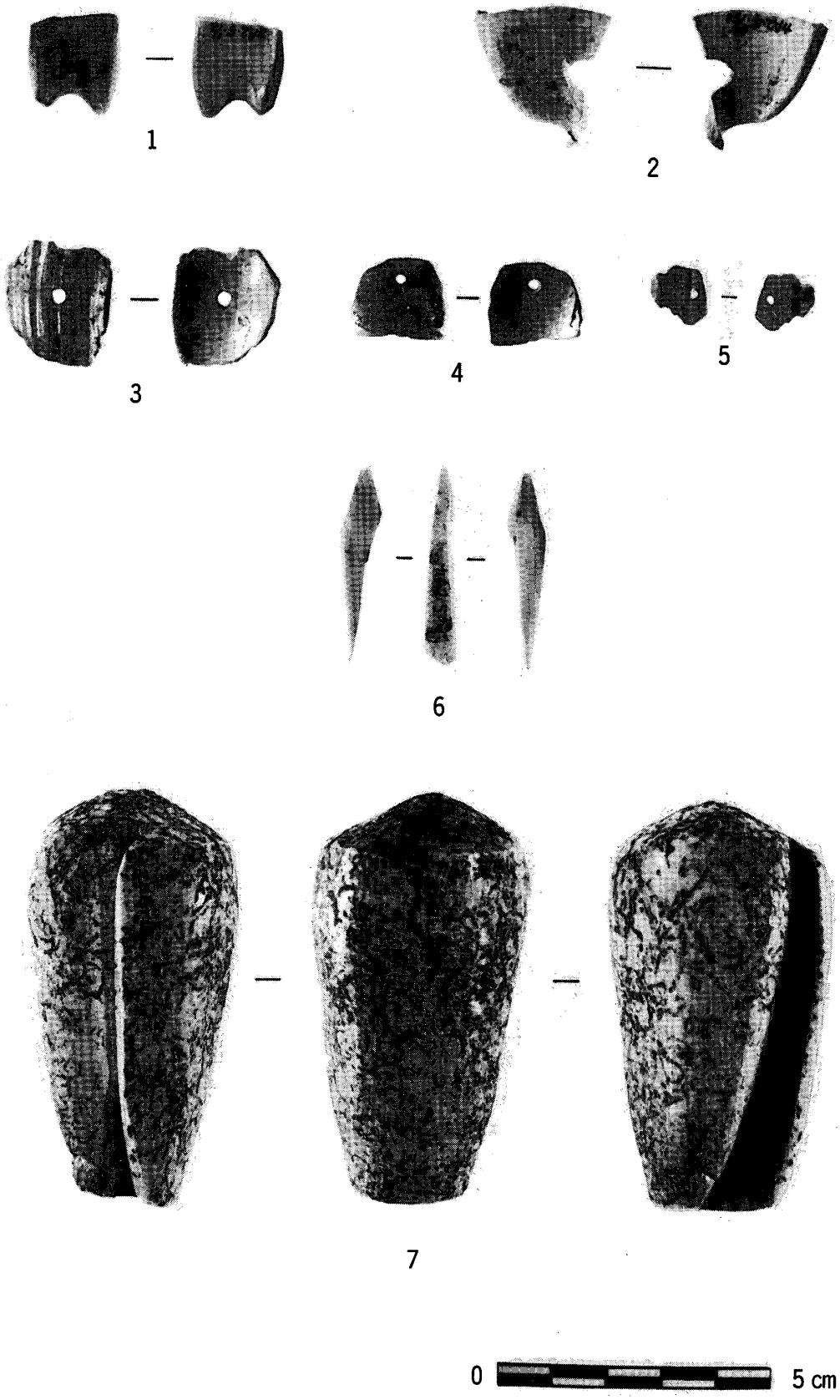
図版8　貝　製　品



図版9　貝　製　品

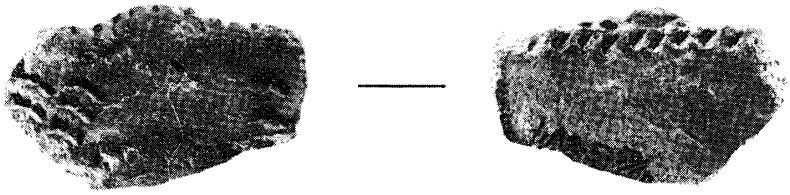


図版10　貝　製　品



図版11　貝　製　品

1

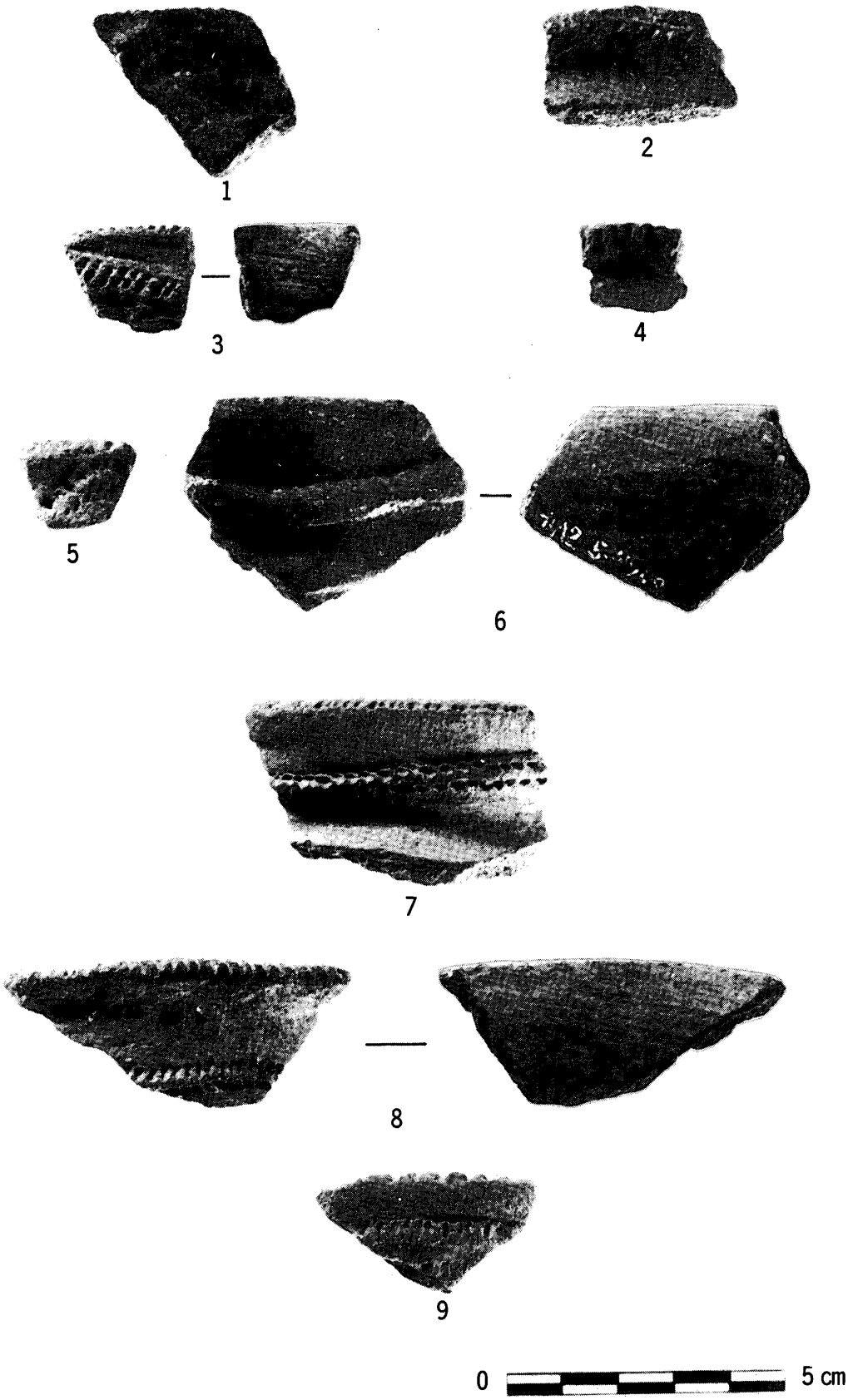


2

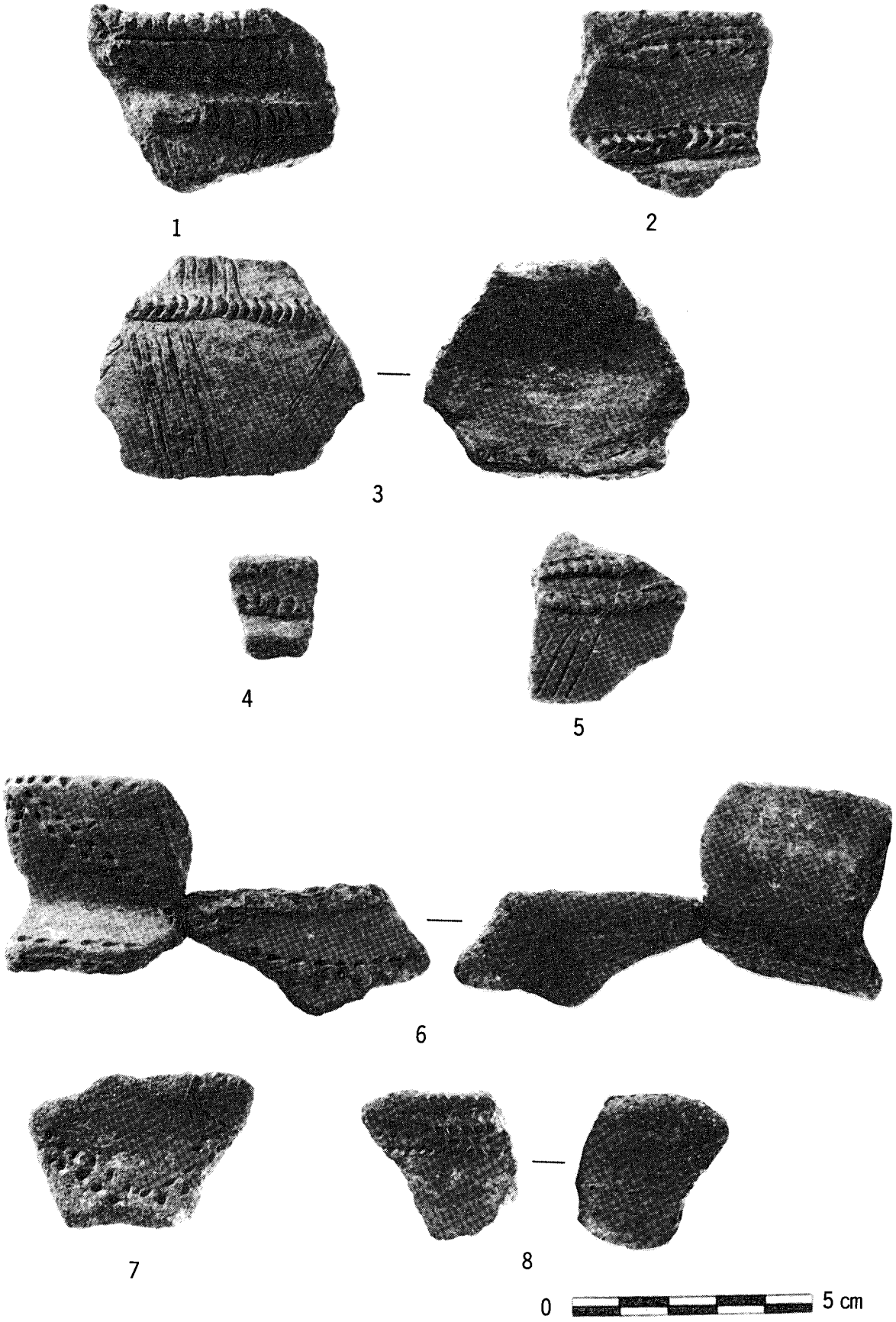
3

0 5 cm

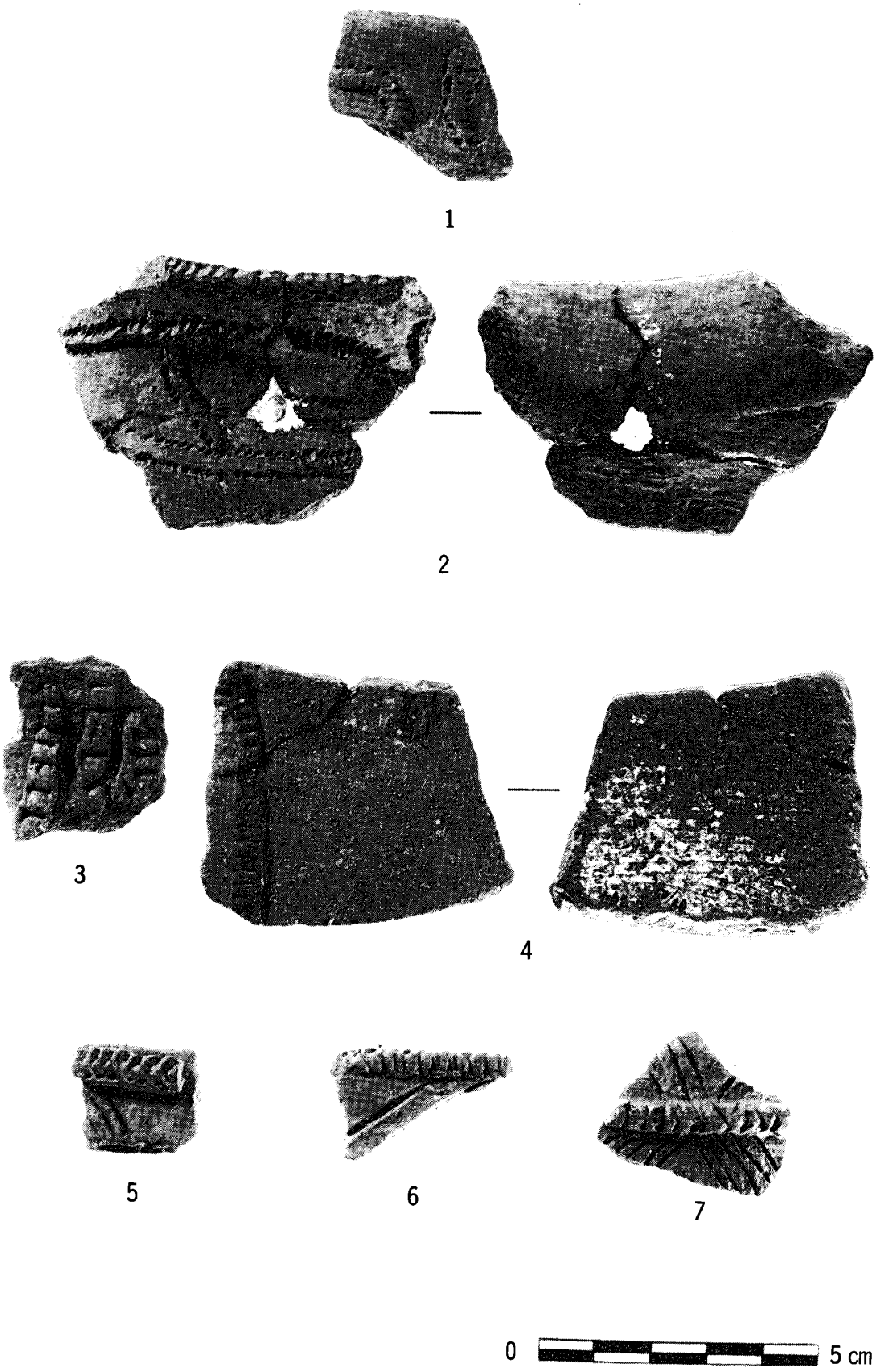
図版12　神野Ｂ式土器（１・２）、神野Ｂ式類似土器（３）



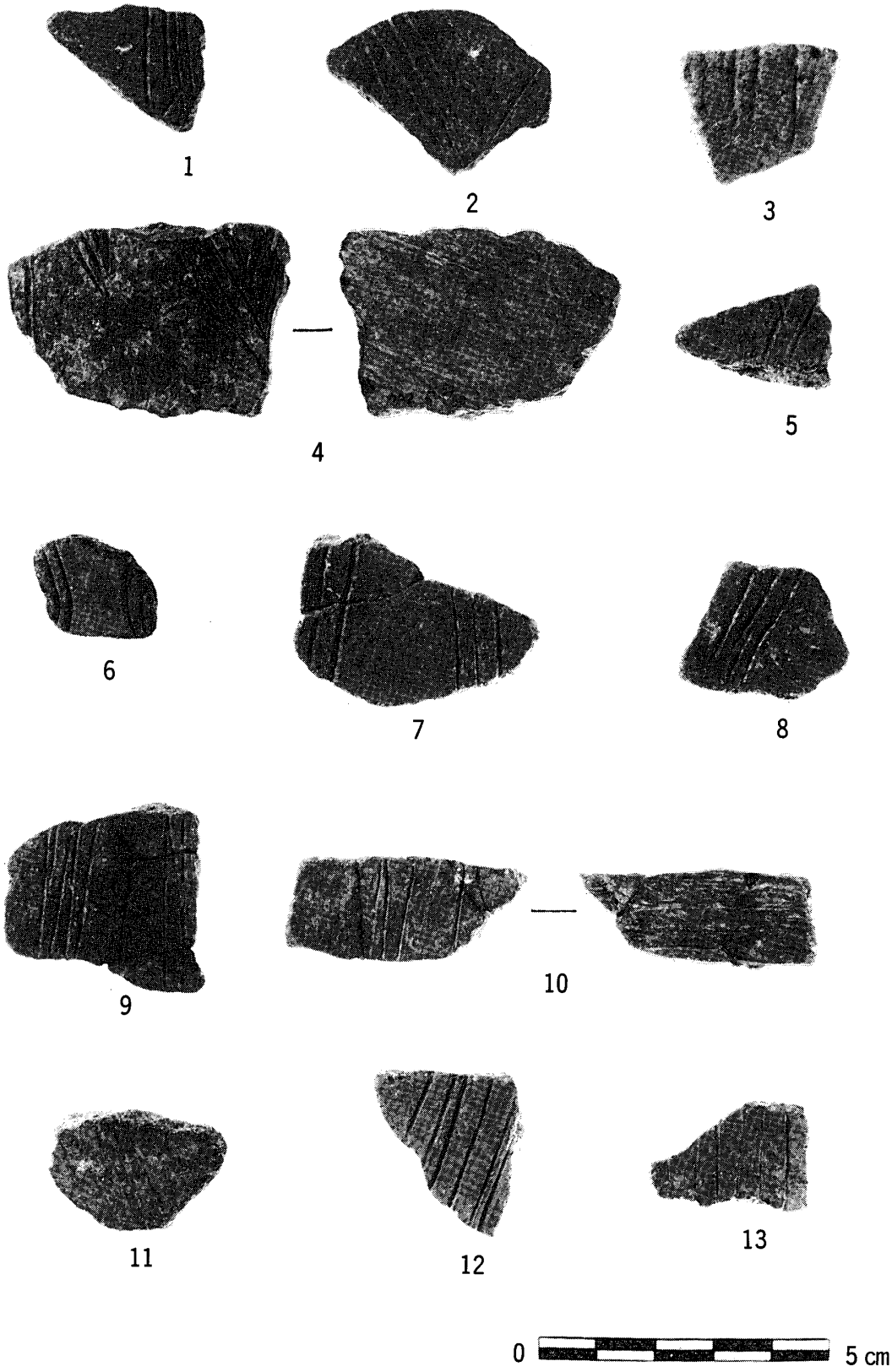
図版13　具志川式土器（1～5）、神野C式土器（6～9）



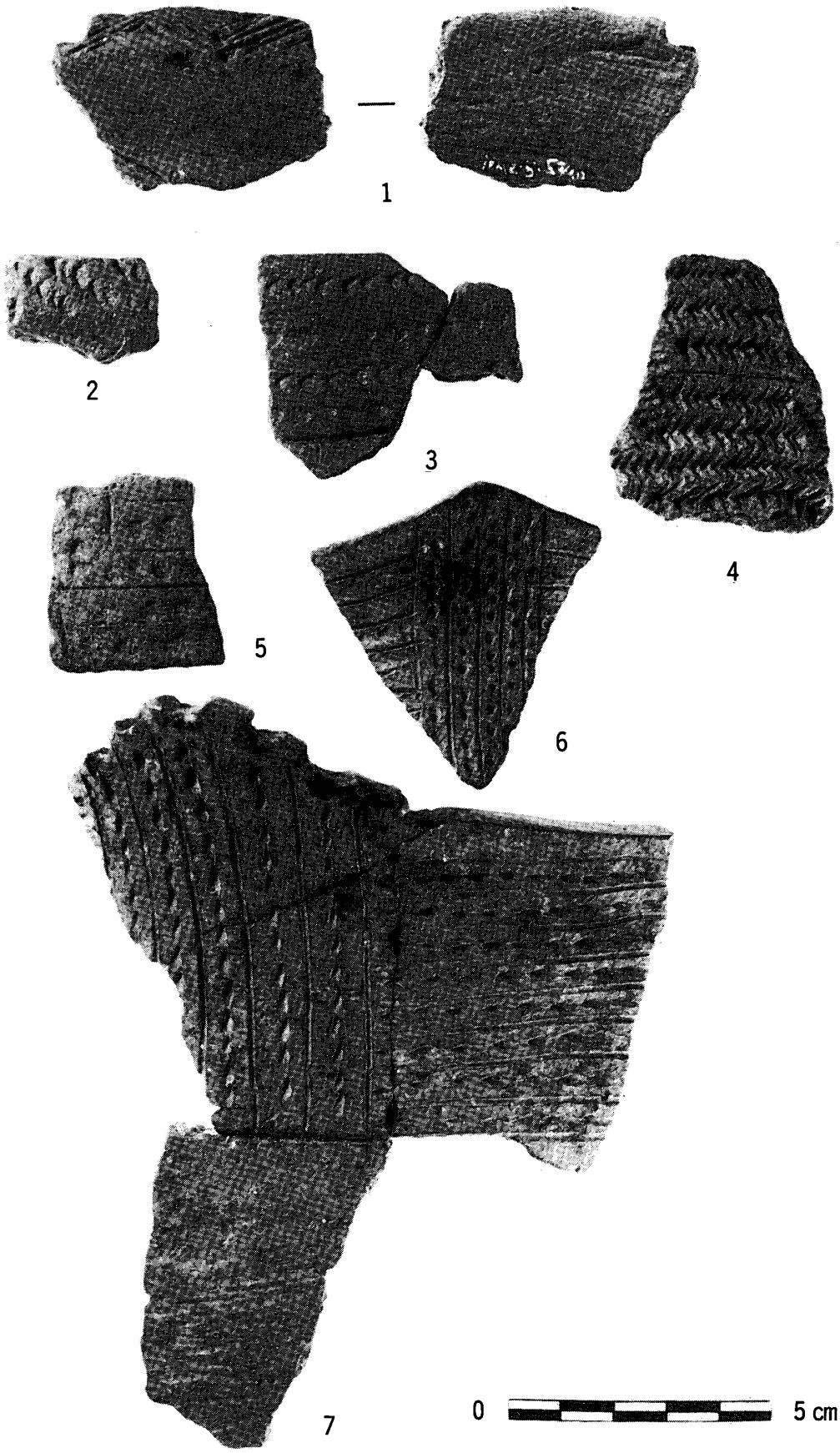
図版14　神　野　C　式　土　器



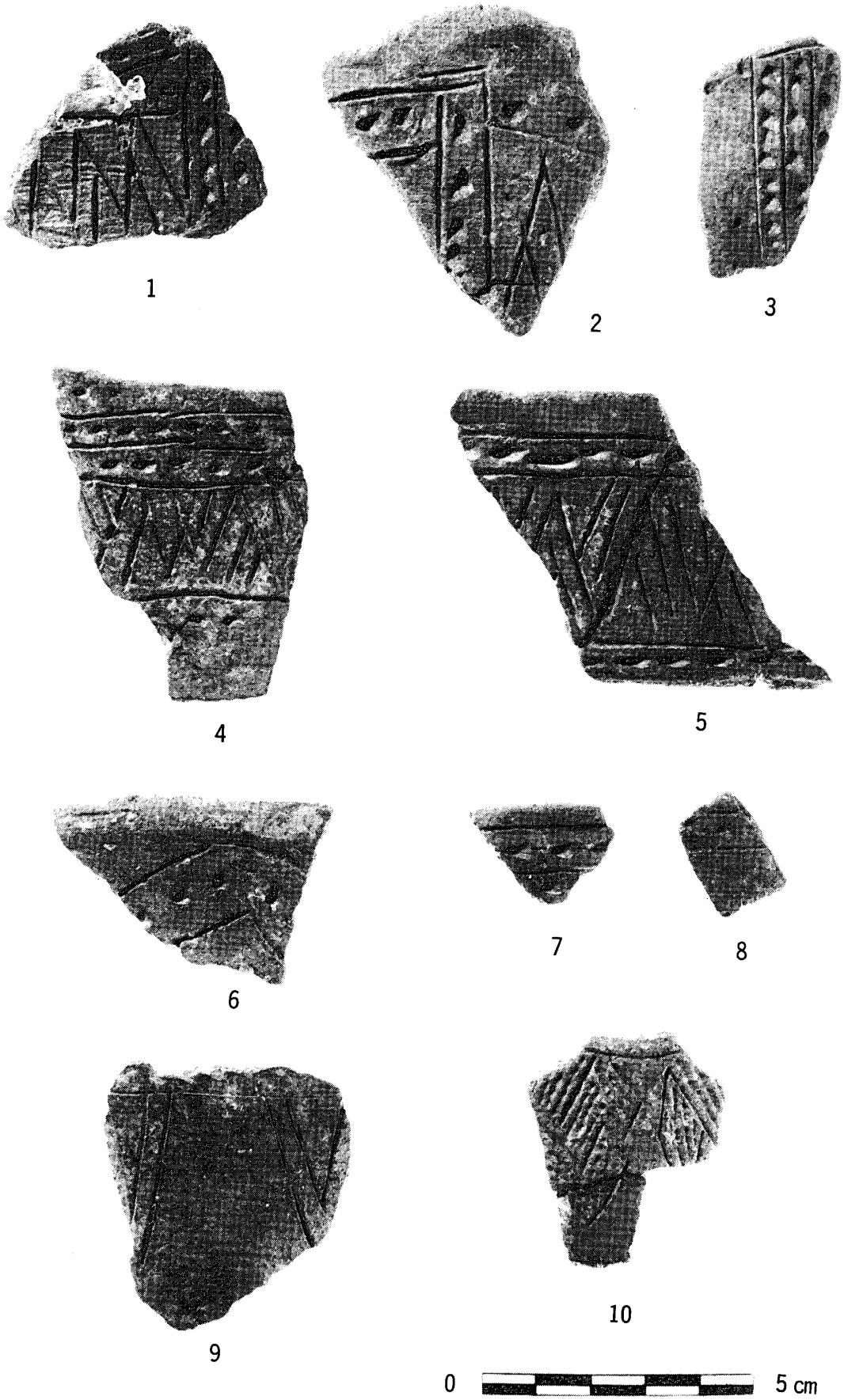
図版15　神野C式土器（1～4）、面縄前庭式土器（5～7）



図版16　面縄前庭式土器グループの胴部



図版17　松山式土器（1）、面縄東洞式土器（2・3）、嘉徳Ⅰ式A土器（4～7）



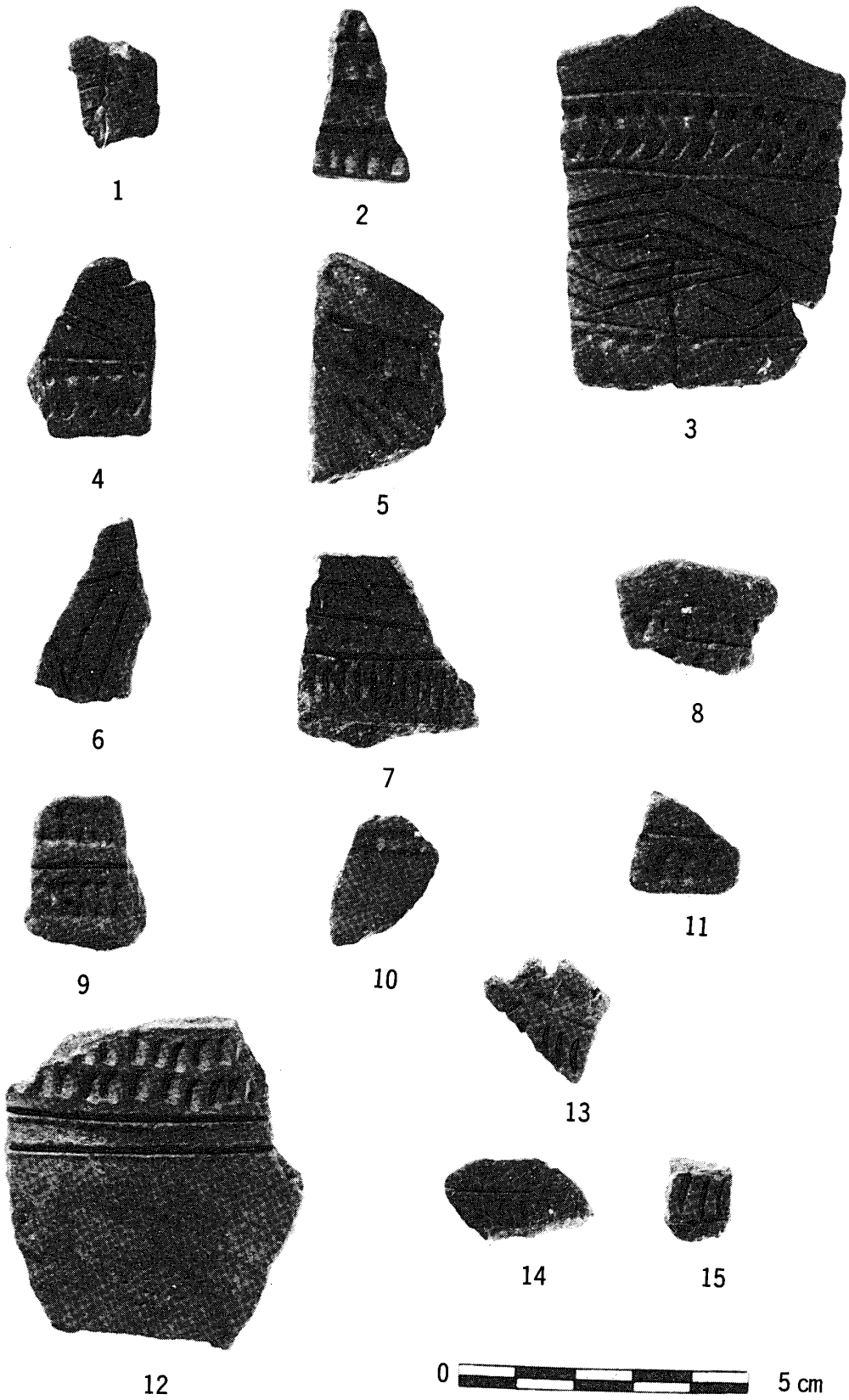
図版18　嘉 徳 Ⅰ 式 A 土 器

1

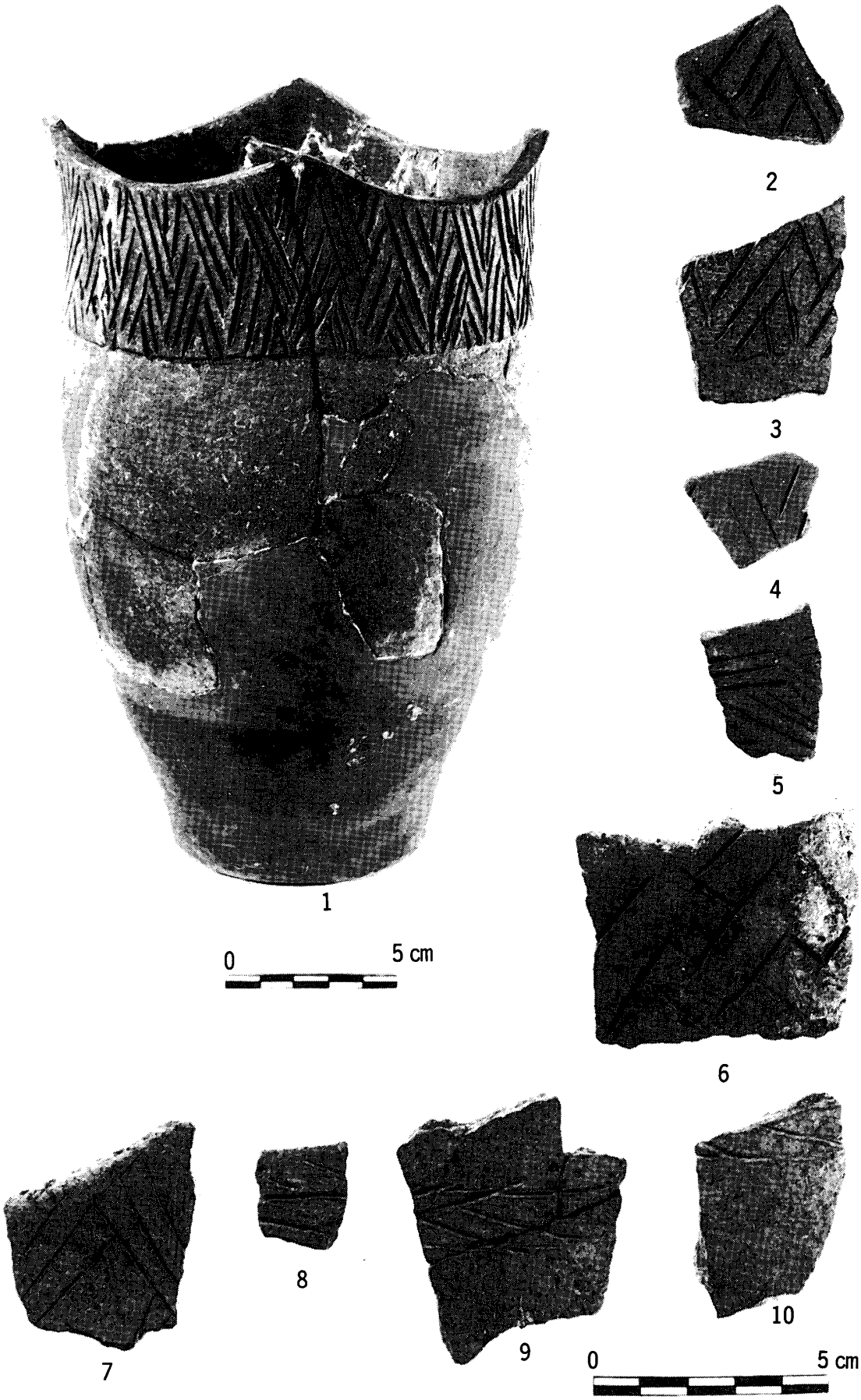
2

0 5 cm

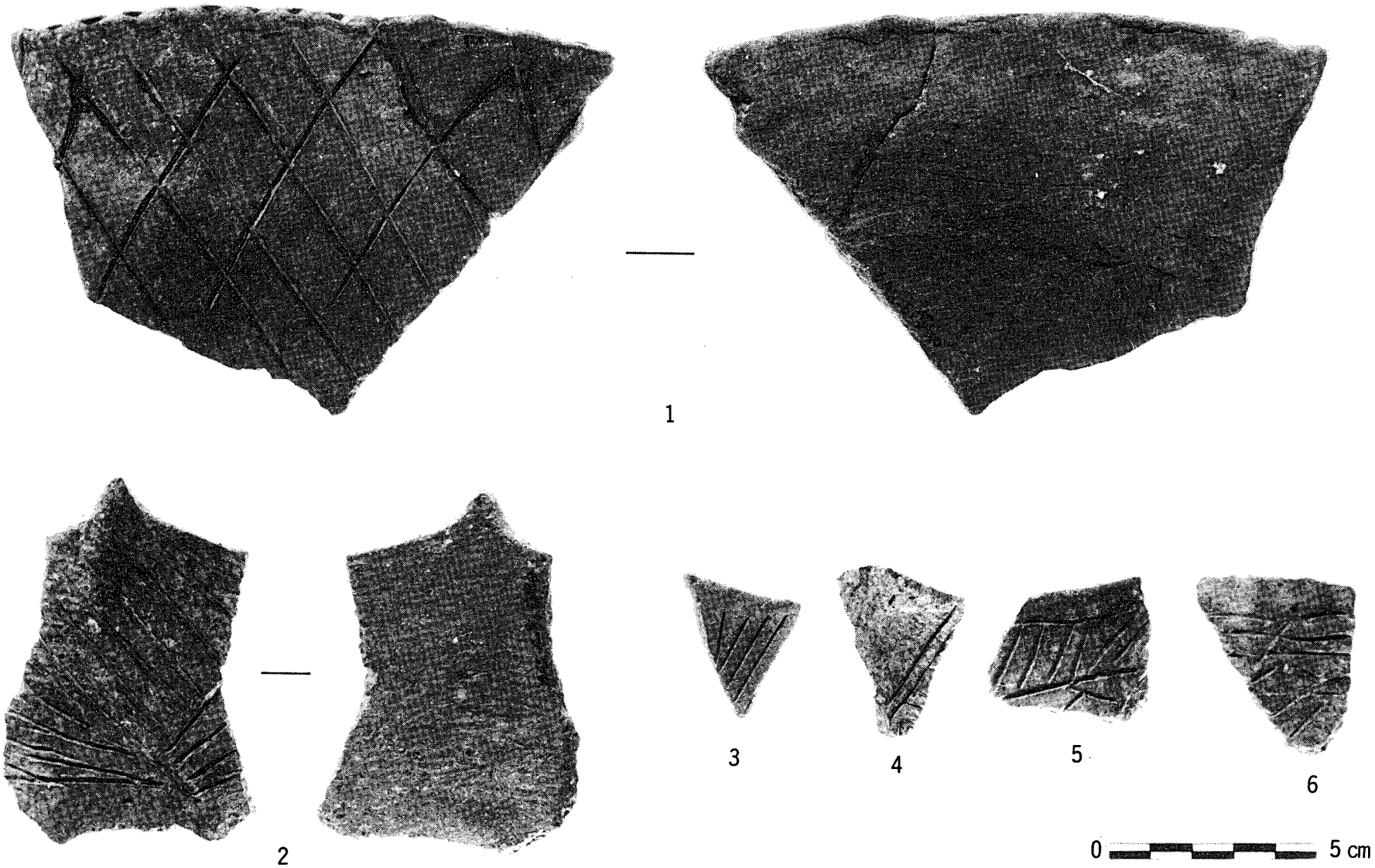
図版19 嘉 徳 I 式 A 土 器



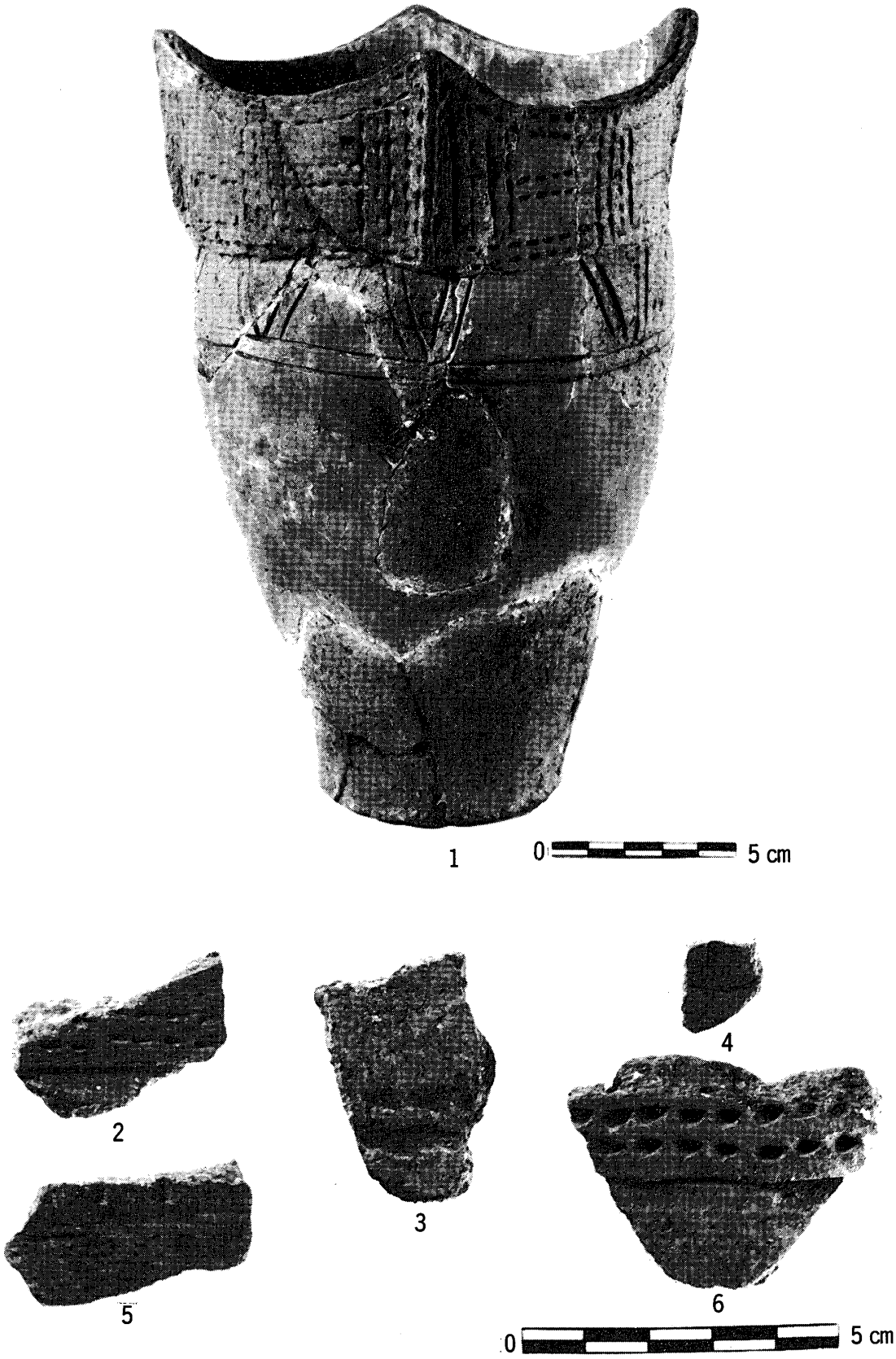
図版20　嘉 徳 Ⅰ 式 B 土 器



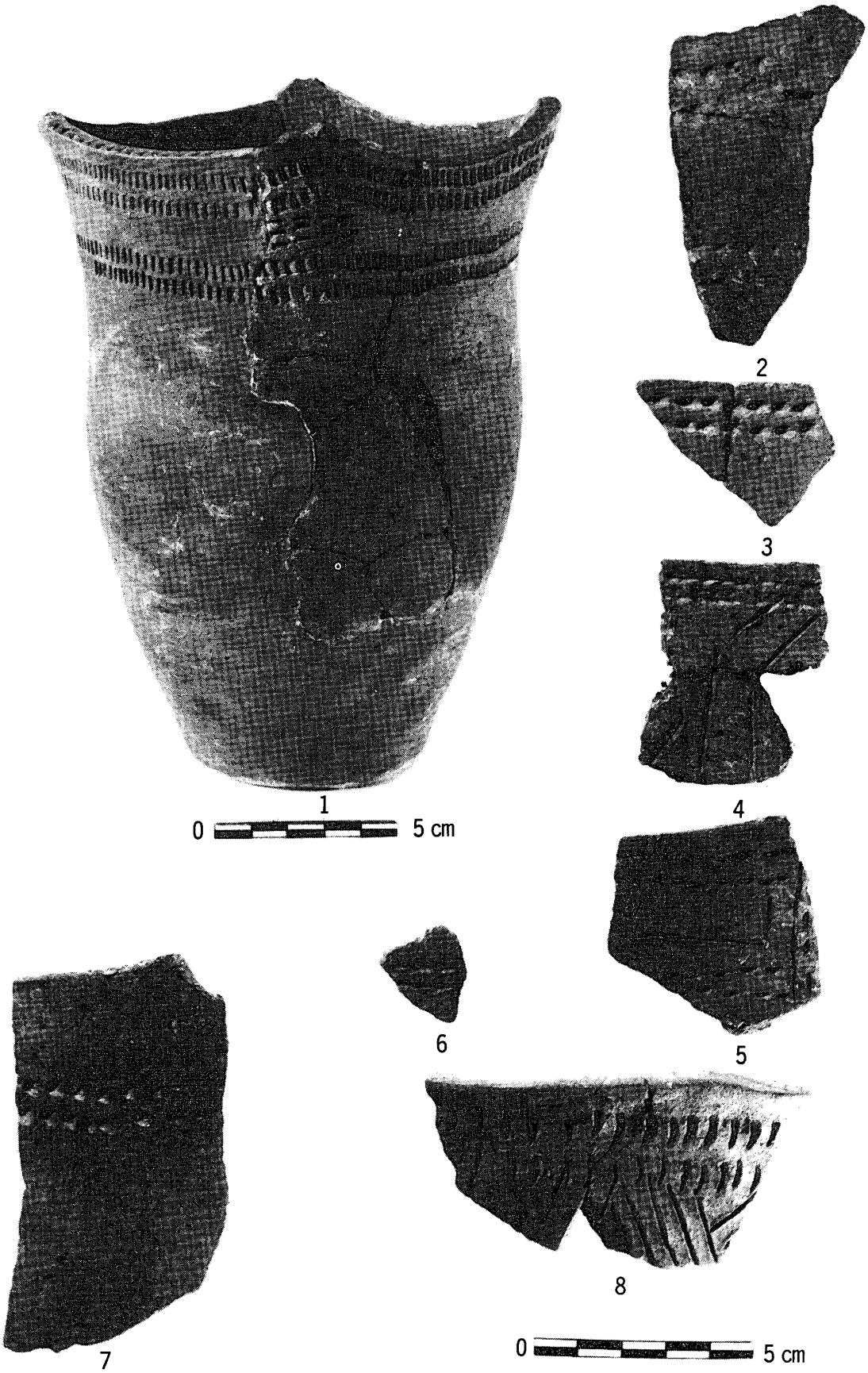
図版21　嘉 徳 II 式 土 器



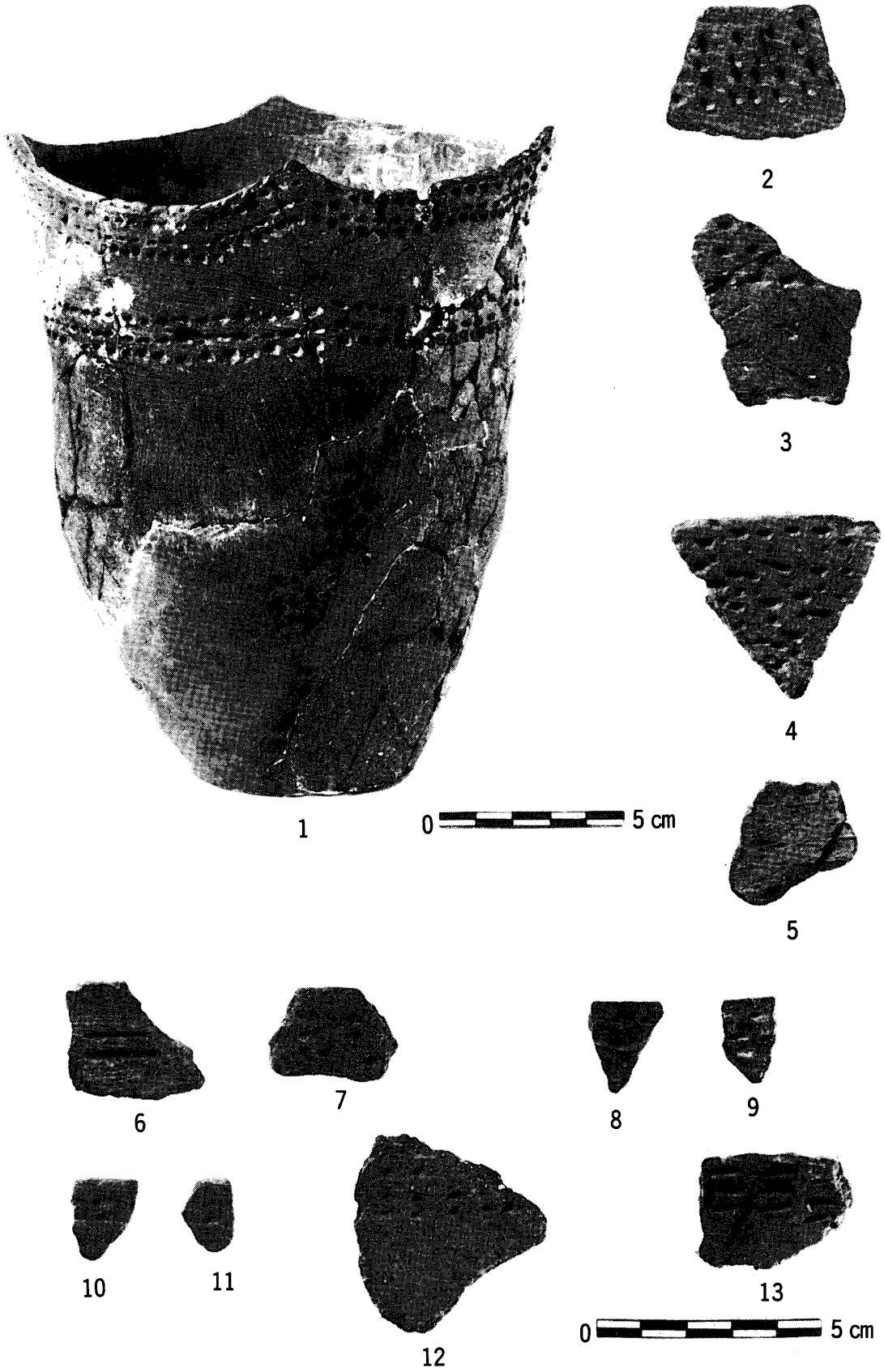
図版22　嘉 徳 II 式 土 器



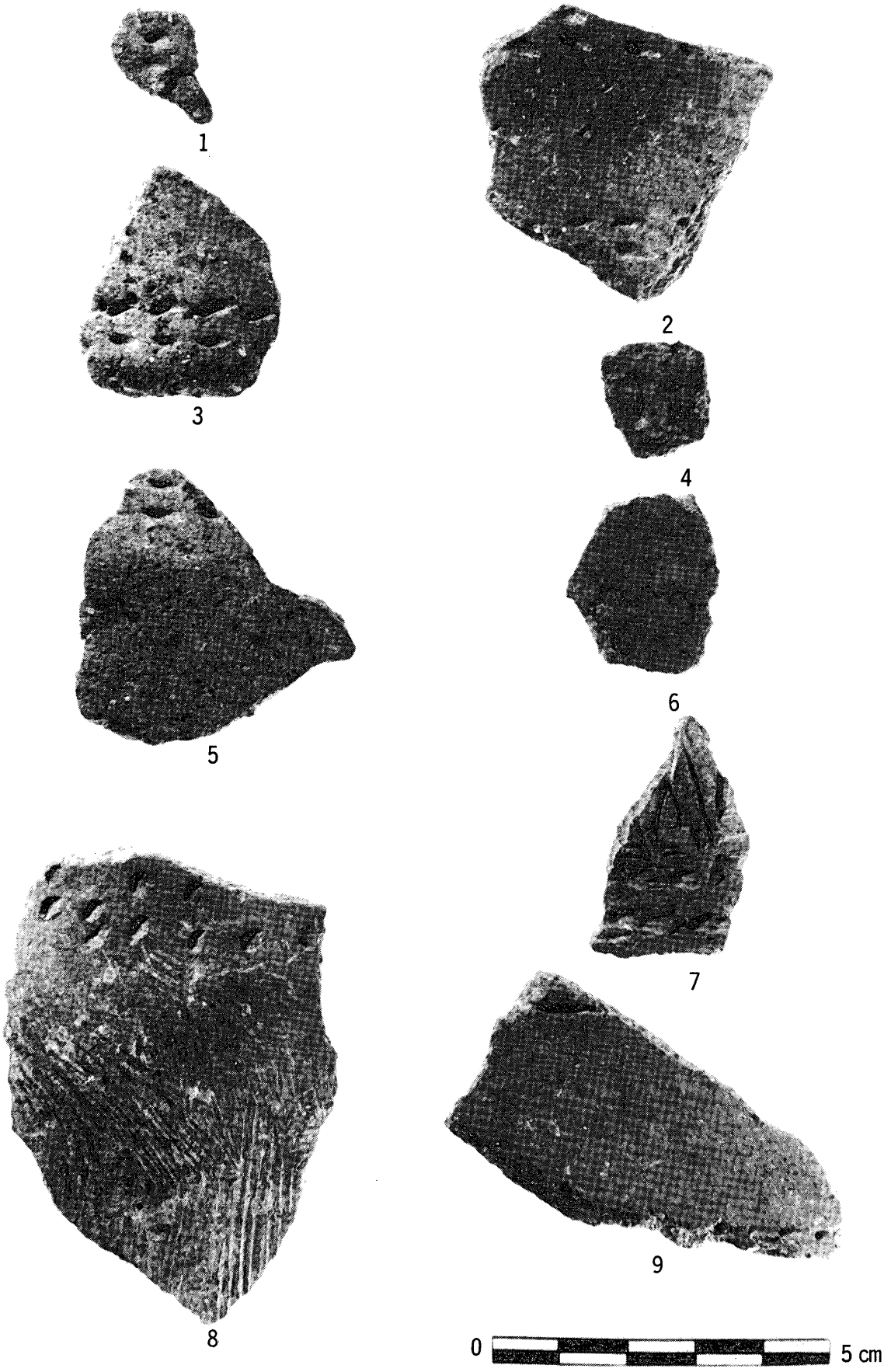
図版23　神　野　D　式　土　器



図版24　神　野　E　式　土　器

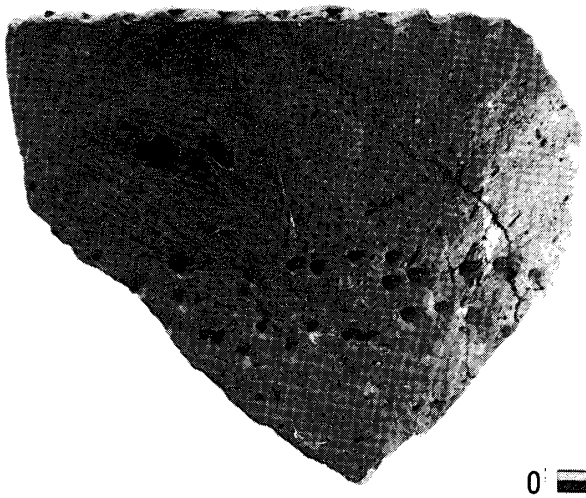


図版25　伊　波　式　土　器



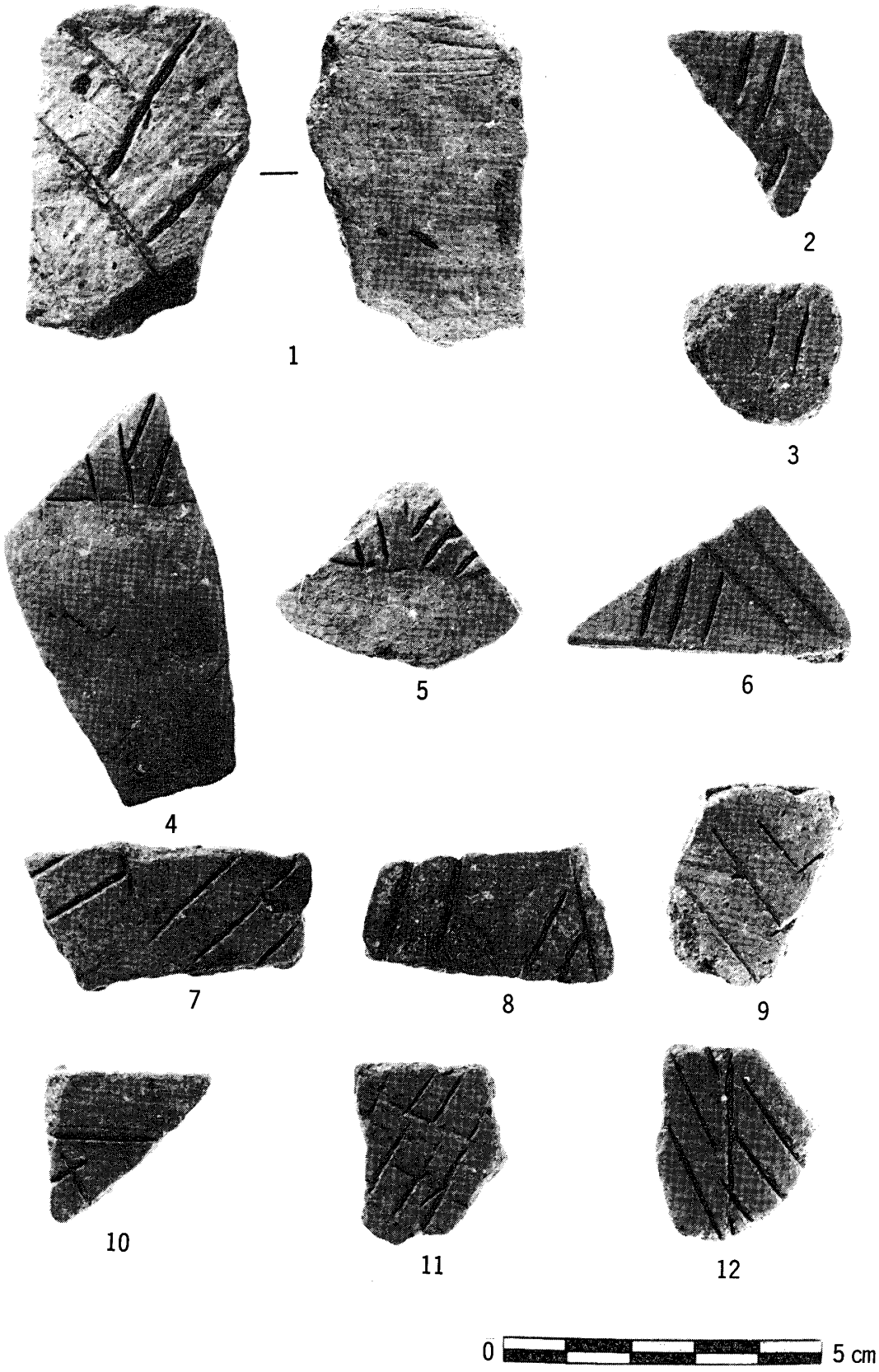
図版26　伊　波　系　土　器

1　0 5 cm



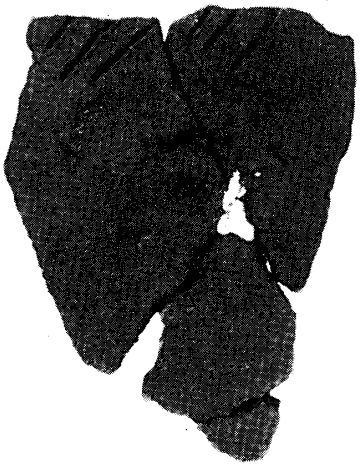
2　0 5 cm

図版27　有文土器（型式不明）

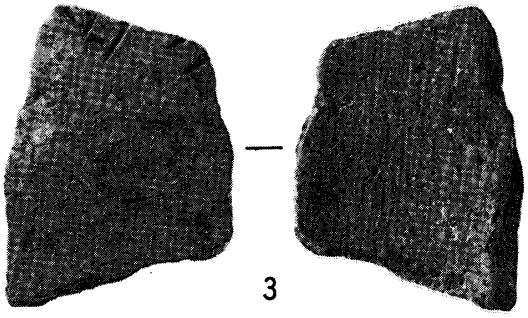


図版28　有文土器（型式不明）

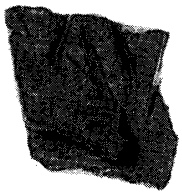
1



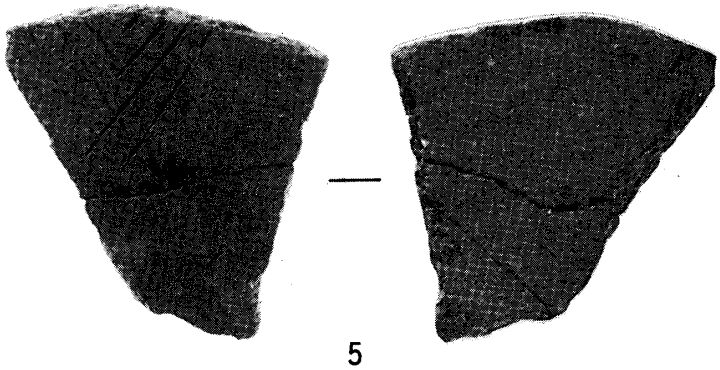
2



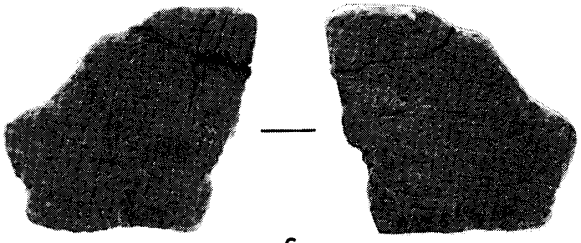
3



4



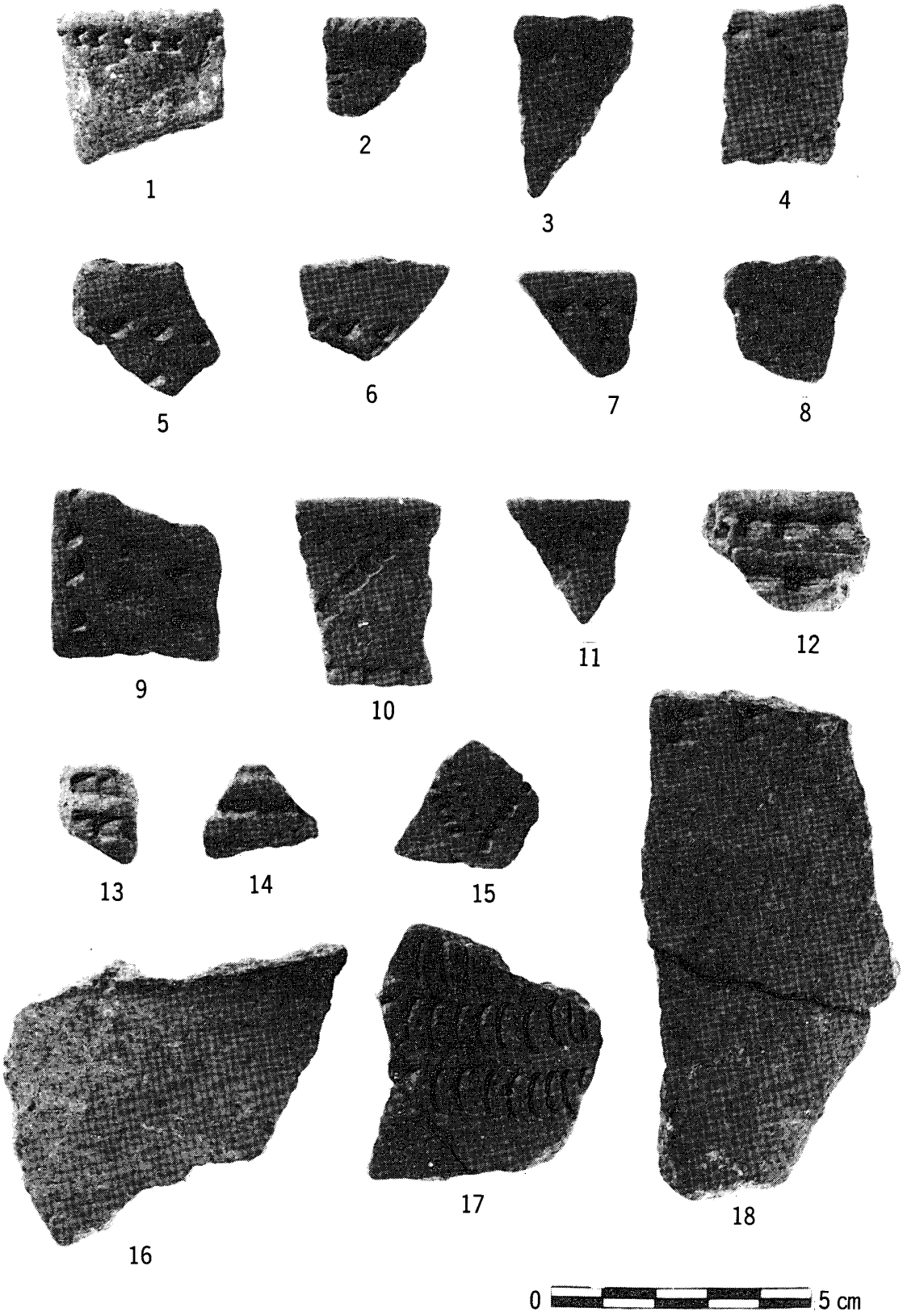
5



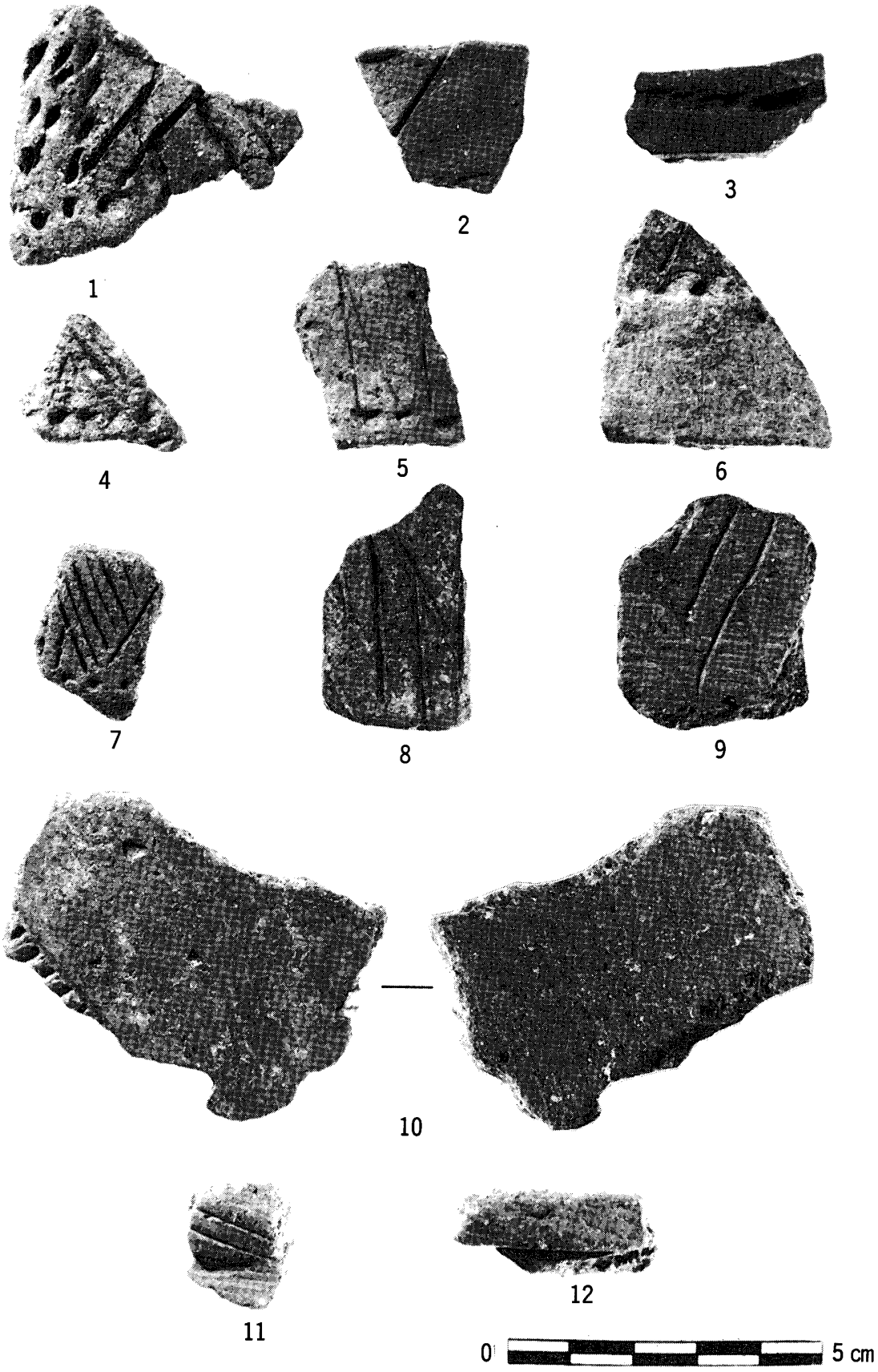
6

0 5 cm

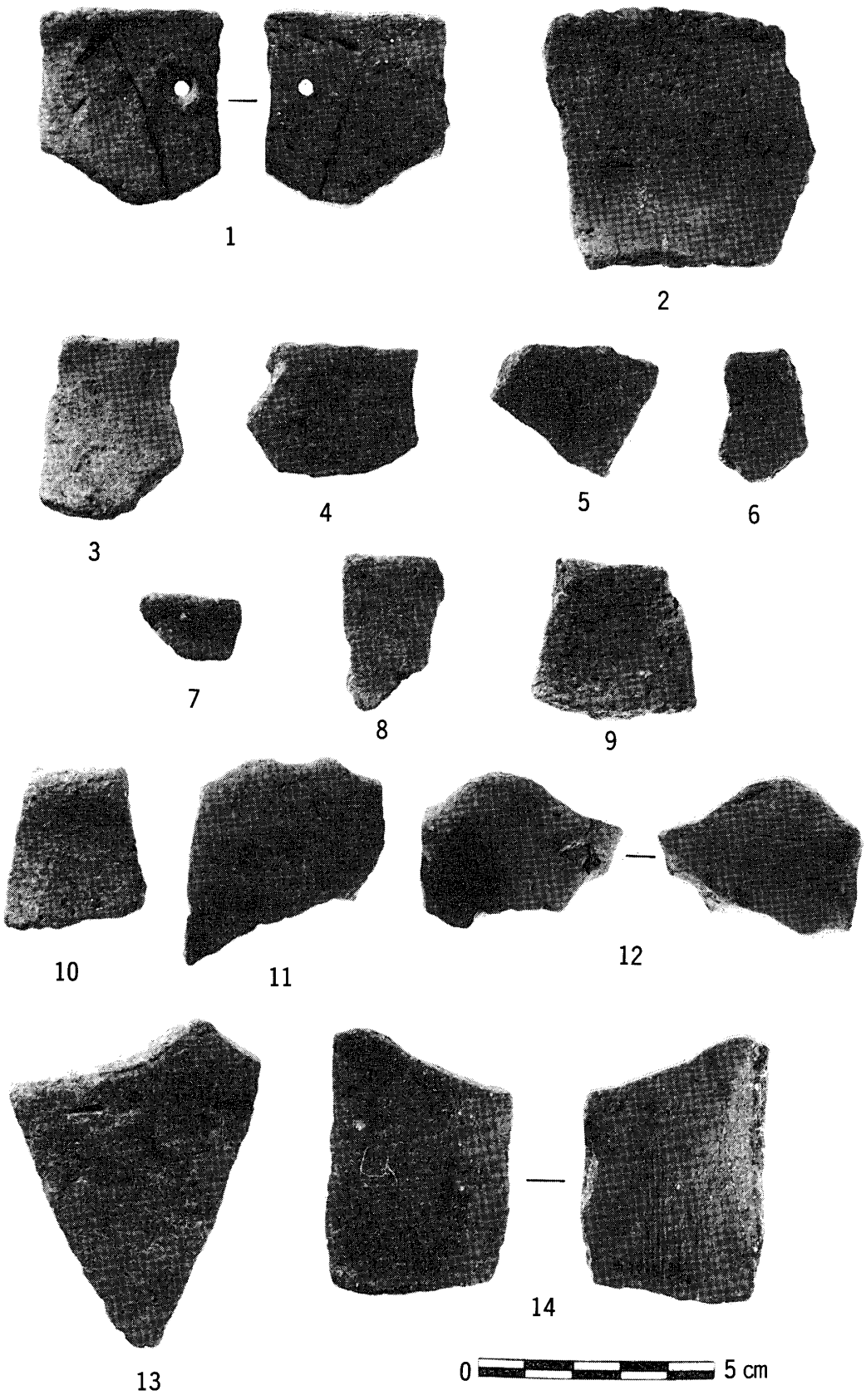
図版29　有文土器（型式不明）



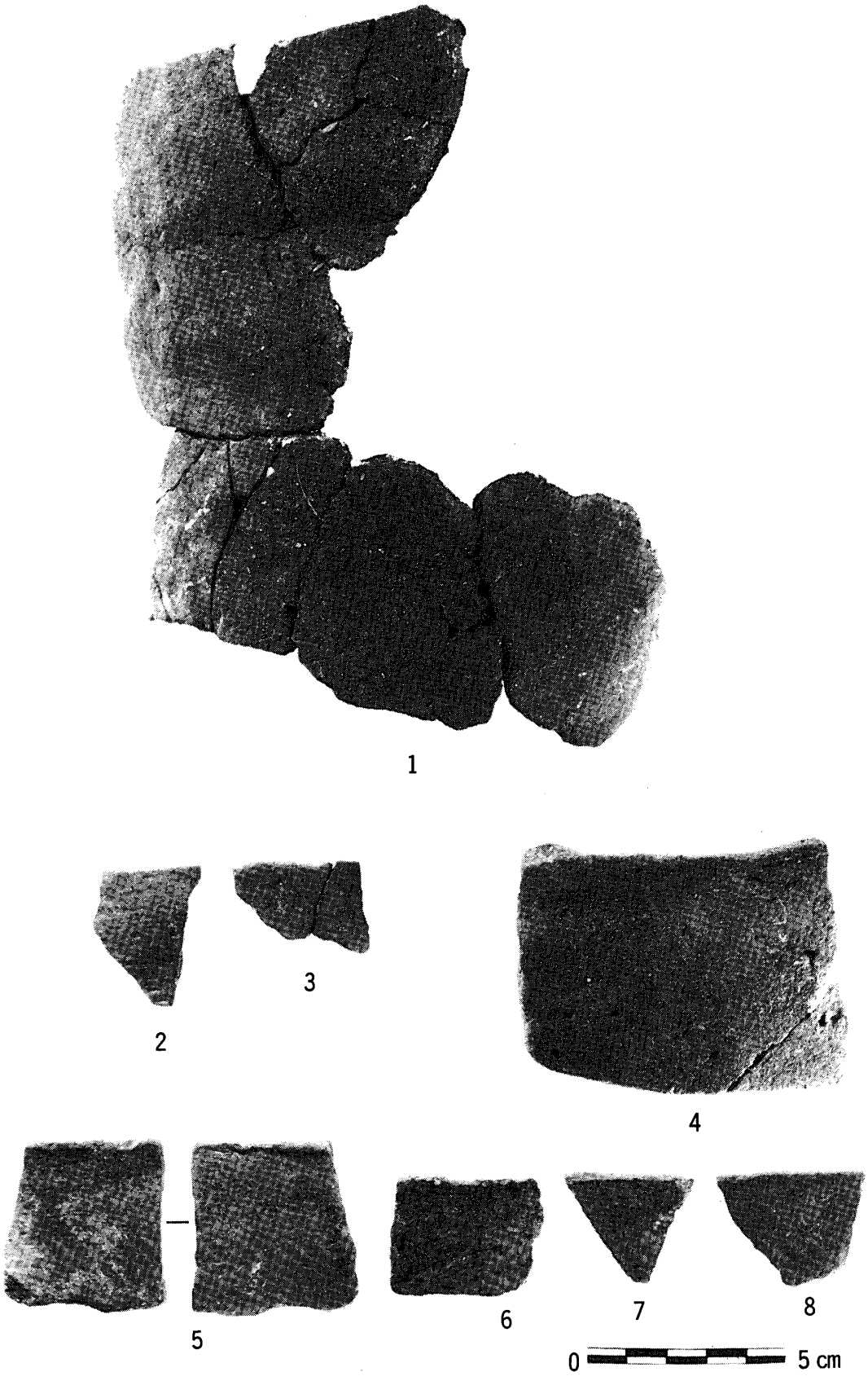
図版30　有文土器（型式不明）



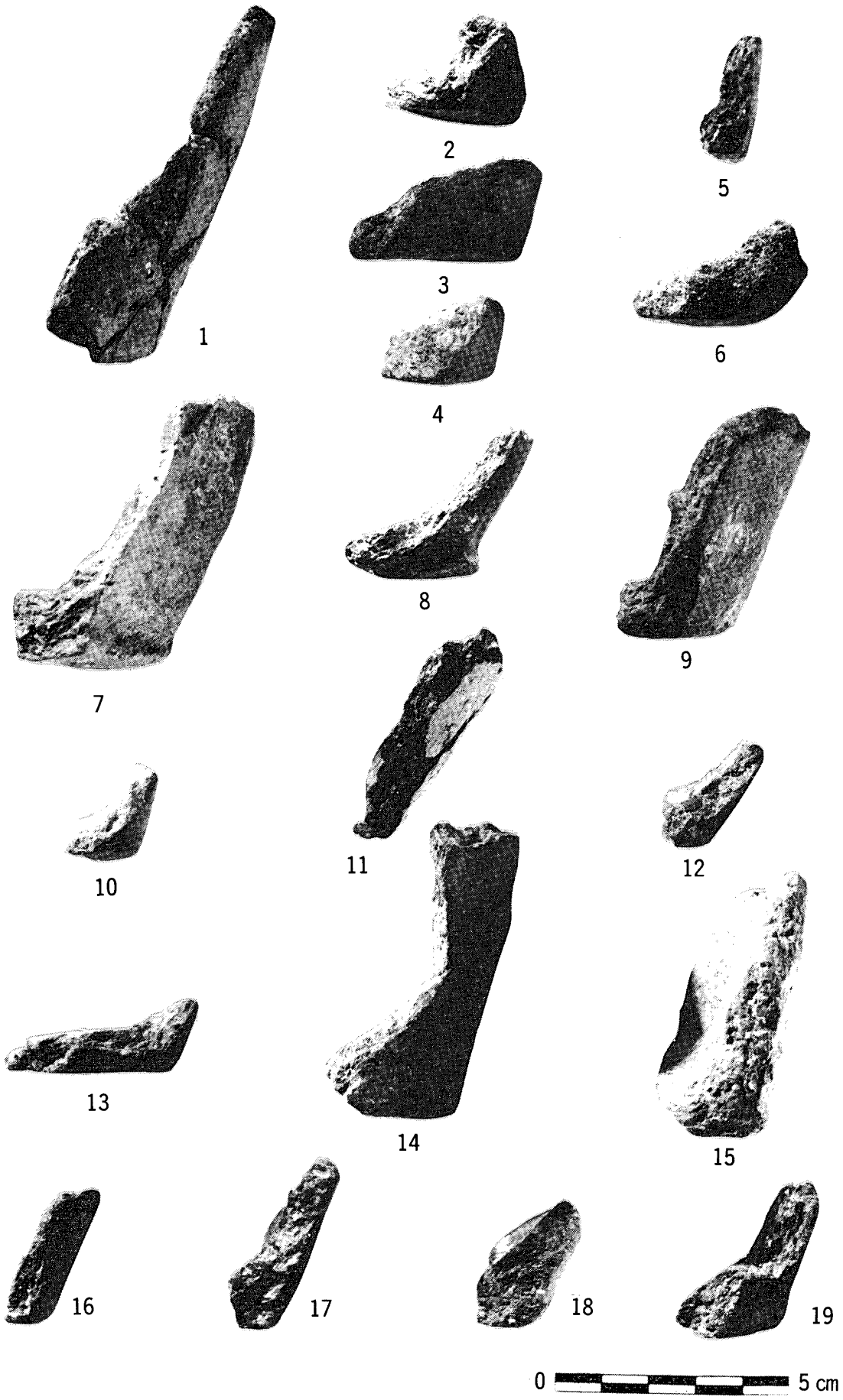
図版31　有文土器（型式不明）



図版32　無 文 口 縁 土 器

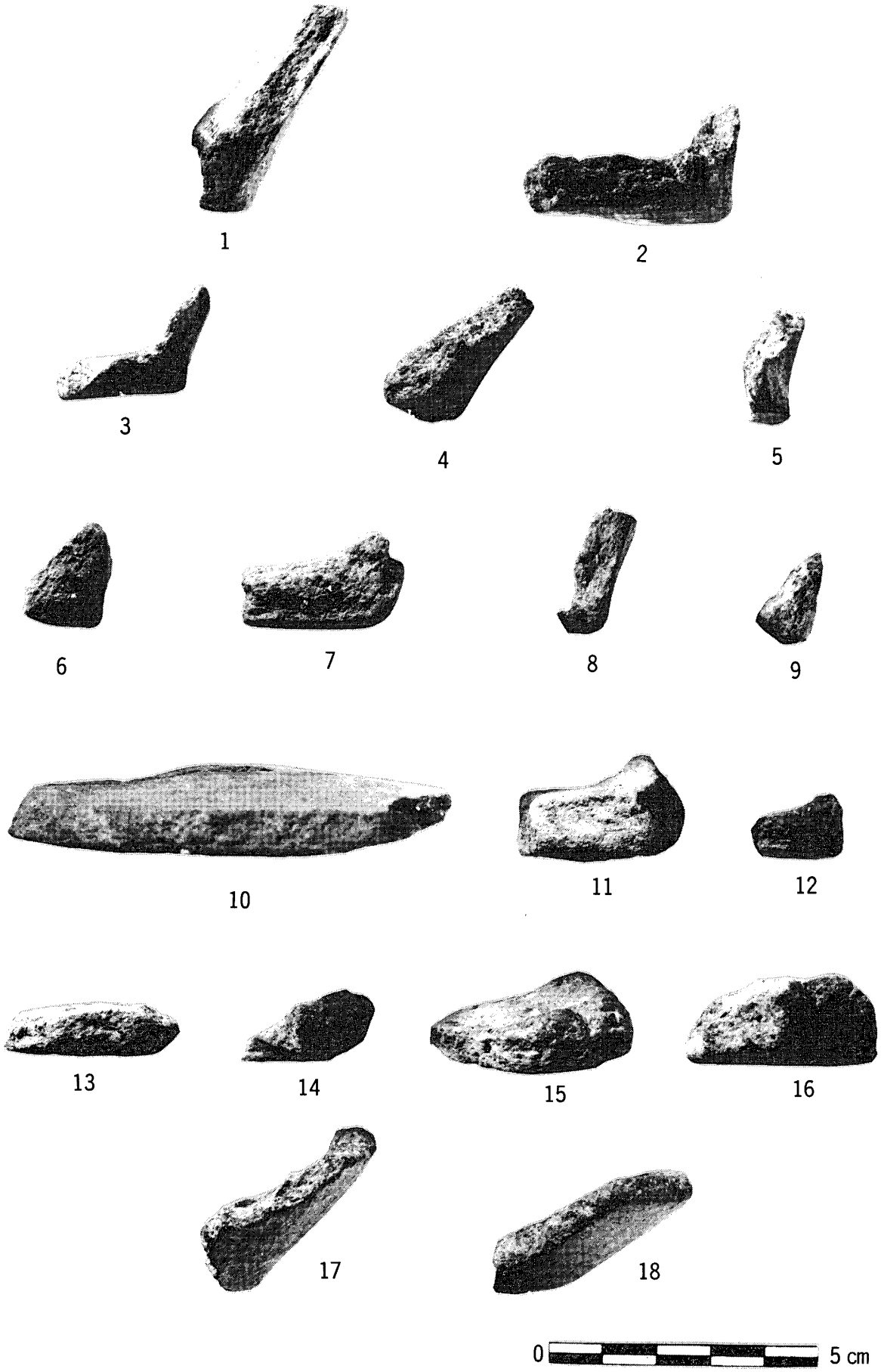


図版33　無 文 口 縁 土 器



図版34　底　　部

図版35　底　　部



図版36　底　　部